

京免・竹ノ下遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集

1 9 8 2

津山市教育委員会

きょう めん たけ した
京免・竹ノ下遺跡

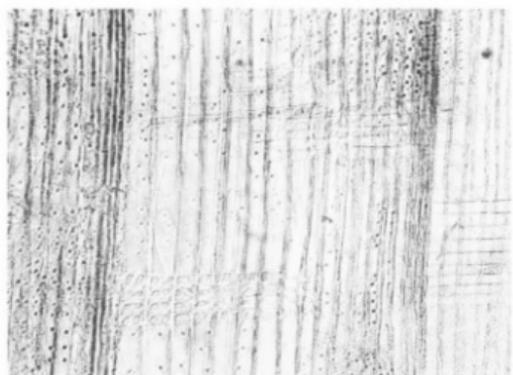
津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集

津山市沼土地区画整理事業に伴う
弥生時代集落址発掘調査報告書

1 9 8 2

津山市教育委員会

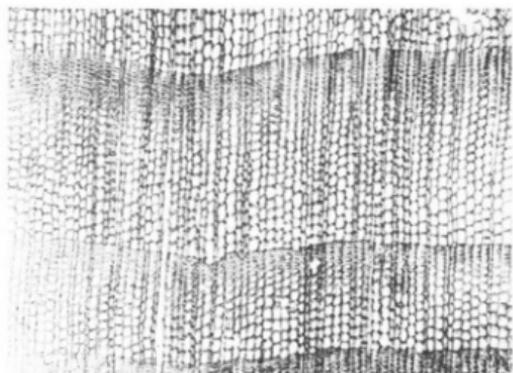




径断面 約80倍



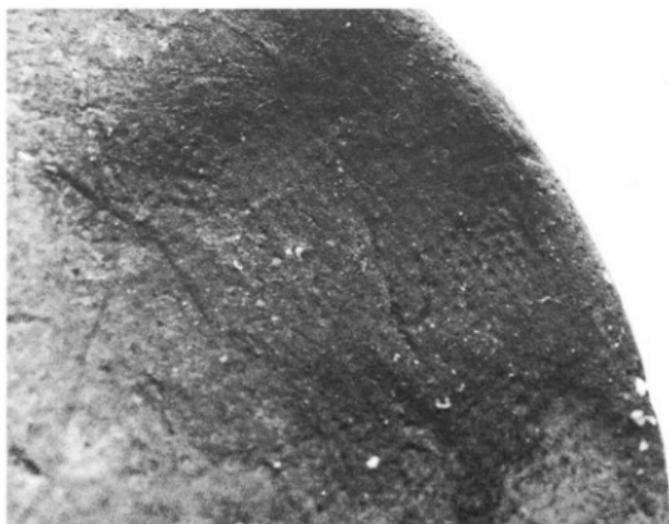
接線断面 約80倍



横断面 約10倍

京免遺跡12区SG91遺存木棺材
顕微鏡写真（撮影 松谷曉子）
棺材 コウヤマキ

布目圧痕のある土器
京免5区SK59出土
蓋形土器内面



序 文

津山市は、岡山県三大河川吉井川中流域に開けた山間盆地に位置し、肥沃な土地柄は古くからすぐれた文化を育んできた。奈良時代には、備前より分国された美作国国府が総社の地におかれ、近世には、森忠政が津山城を築城し、永く岡山県北の政治、経済の中心を占めてきた。

古くは、旧石器、縄文人の生活痕跡も知られるが、確実な祖先の足跡が印されるのは弥生時代前期以降である。農耕社会のたくましい発展を告げるように、市内各所には、弥生時代以降の遺跡がおびただしく分布しており、文化財の保護保存には特に慎重に対処してきた。

ところで、近年津山においても急速に各種の開発事業がおこされ、無秩序なもので日だってきた。本市では、こういった事態に対処するため、区画整理を推進し計画的な町づくりを進めているが、その一環として、昭和50年より沼地区について土地の区画整理事業を実施することになった。

しかし、当該地には遺跡地図記載の弥生式七器散布地2か所が含まれていたため津山市教育委員会ではそのうち、11haの地域を対象に遺跡の確認調査を実施した。この結果、4haを上まわる部分に、主として弥生時代の遺構が確認されたのである。

協議の結果、極力地下遺構に影響の出ないよう工事計画に変更を加え、破壊が避けがたい区画街路部分について昭和53年度から55年度にかけ発掘調査を実施した。

発掘調査により、さまざまな遺構が発見され貴重な資料となったが、特に弥生後期の平地環濠集落の存在が明らかとなったことは重要な成果といえよう。

発掘調査及び報告書の作成にあたっては、沼土地区画整理組合、岡山県教育委員会、津山市都市計画課のみなさまをはじめ、実に多くの方々から有形・無形の御援助、御指導をいただいた。水筆ながら、ここに深く感謝の意を表したい。

昭和57年3月

津山市教育委員会

教育長 福 島 祐 一

例 言

1. 本書は、岡山県津山市沼における土地区画整理事業の実施に伴い、昭和52年11月から55年2月まで津山市教育委員会が実施した弥生時代集落址、京免遺跡、竹ノ下遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査地区の地番は、岡山県津山市沼字京免35番地他19筆、同字山根154番地他2筆である。
2. 発掘調査ならびに報告書作成に要した諸経費はすべて、津山市沼土地区画整理組合の負担によった他、発掘調査の実施にあたっては、田口大二組合長以下同組合の方々の全面的な協力を得た。深く感謝の意を表したい。
3. 本書の執筆と編集は中山俊紀が担当したが、執筆にあたっては安川豊史、行田裕美、奥和之の他、多くの方々の御教示をいただいた。
4. 遺跡の実測図は、京免遺跡を中山、奥、竹ノ下遺跡を中山、行田が主となり作成し、安川国貞主也、近藤正友、森潤、松本真澄、光延福造、森広琢之、種貞淳介の協力を得た。
5. 遺構図版は、京免遺跡1～5区、竹ノ下1区を中山、奥、以下中山が作成した。遺物の実測製図は、中山が担当した。難解な原稿の浄書は、飯田和江にお願した。
6. 本書に使用した時期区分は、弥生時代中期M、弥生時代後期Lとし、MⅡ（中期中葉）は唐古第3様式期、MⅢ（中期後葉）は同第4様式期、LⅠ（後期前葉）は大田十二社1～2式期、LⅡ（後期中葉）は同3式、LⅢ（後期後葉）は同4～5式期に大抵ね対応する。
7. 本書で使用した遺構の略称は、SH：竪穴住居址、SD：溝、SB：掘立柱建物、SK：土城、SG：土壇墓、SX：土器溜及び不明遺構である。
8. 京免遺跡、竹ノ下遺跡における種子分析を岡山大学笠原安夫に、京免遺跡木棺墓SG91遺残の木棺材の材質鑑定を東京大学の松谷暁子に実施していただき、それぞれ報告をいただいた。また航空写真の撮影にあたっては、中国電力所岡田文治の協力を得た。深く感謝の意を示したい。
9. 本書に使用したレベル高は、すべて海拔絶対高である。方位は京免遺跡は磁北方位を用いていたが、誤差が大きくすべて国土座標第5座標系の真北に統一した。竹ノ下遺跡の方位は磁北である。なお磁針方位は西偏約6°40'である。
10. 本書では、原則としてすべての敬称を省略した。御海容いただきたい。
11. 出土遺物、図面は津山市二宮の埋蔵文化財整理事務所に保管している。

本 文 目 次

第1章	はじめに	頁
	1 発掘調査にいたるまで	1
	2 発掘調査の組織	2
	3 遺跡の立地と環境	3
第2章	発掘調査の概要	
	1 確認調査	6
	2 発掘調査の経過	12
	3 遺跡の概要	14
第3章	京免遺跡の調査	
	1 各調査区の概要	
	① 1区・2区・3区の概要	17
	② 4区・5区の概要	48
	③ 6区・7区の概要	54
	④ 8区・9区の概要	64
	⑤ 9区・10区の概要	84
	⑥ 11区・12区の概要	90
	2 京免古墳の調査	99
	3 弥生前期の土器及び石器	
	① 弥生前期の土器	102
	② 京免遺跡出土の石器	103
第4章	竹ノ下遺跡の調査	
	1 遺構の概要	107
	① 1区検出の溝	109
	② 住 居 址	111
	③ 貯蔵穴及び長方形土壇	125
	④ 墓 址	128
	2 竹ノ下遺跡2区出土の弥生式土器と石器	
	① 竹ノ下遺跡2区出土の弥生式土器	134
	② 竹ノ下遺跡出土の石器	135
第5章	概括と問題点	
	① 弥生式土器	137
	② 溝の分類と機能	137
	③ 住居の復元	138
	④ 集落の変遷	138
	⑤ 概 括	139

挿 図 目 次

		頁
Fig. 1.	京免遺跡、竹ノ下遺跡位置図	1
Fig. 2.	京免遺跡、竹ノ下遺跡周辺の発掘調査された弥生遺跡	5
Fig. 3.	京免遺跡、竹ノ下遺跡位置図 (縮尺 1:12,000)	5
Fig. 4.	京免遺跡確認調査地区剖面図 (縮尺1:3,000)	7
Fig. 5.	竹ノ下遺跡確認調査地区剖面図 (縮尺1:3,000)	8
Fig. 6.	京免遺跡竹ノ下遺跡確認調査出土土器片分布表	9
Fig. 7.	京免遺跡推定範囲及び発掘区域 (縮尺1:2,500)	10
Fig. 8.	竹ノ下遺跡推定範囲及び発掘区域 (縮尺1:2,000)	11
Fig. 9.	京免遺跡確認調査80検出の溝 (縮尺 1:60)	12
Fig. 10.	京免遺跡 1・2・3区遺構配置図 (縮尺1:400)	18
Fig. 11.	S D 7 平面図・断面図 (縮尺 1:60)	21
Fig. 12.	1区S H 2 平面図・断面図 (縮尺 1:40)	22
Fig. 13.	1区環濠S D 4 平面図・断面図 (縮尺 1:60)	23
Fig. 14.	2区環濠S D 4 平面図・断面図 (縮尺 1:60)	24
Fig. 15.	環濠S D 4 下層遺物出土状況 (縮尺1:60)	25
Fig. 16.	京免遺跡 3区平面図 (縮尺1:100)	26
Fig. 17.	S H 13 模式図 (縮尺1:100)	27
Fig. 18.	京免遺跡 3区平面図 (縮尺1:100)	28
Fig. 19.	京免遺跡 3区平面図 (縮尺1:100)	29
Fig. 20.	京免遺跡 3区平面図 (縮尺1:100)	30
Fig. 21.	S H 134 平面図・断面図 (縮尺 1:60)	31
Fig. 22.	S H 133 号住居址 平面図・断面図 (縮尺 1:40)	32
Fig. 23.	京免遺跡S D 4 出土の土器 1 (縮尺 1:4)	34
Fig. 24.	京免遺跡S D 4 出土の土器 2 (縮尺 1:4)	35
Fig. 25.	京免遺跡S D 4 出土の土器 3 (縮尺 1:4)	36
Fig. 26.	京免遺跡 1～3区出土の土器 1 (縮尺 1:4)	38
Fig. 27.	京免遺跡 1～3区出土の土器 2 (縮尺 1:4)	40
Fig. 28.	京免遺跡 1～3区出土の土器 3 (縮尺 1:4)	41
Fig. 29.	京免遺跡 1～3区出土の土器 4 (縮尺 1:4)	43
Fig. 30.	京免遺跡 1～3区出土の土器 5 (縮尺 1:4)	44
Fig. 31.	京免遺跡 1～3区出土の土器 6 (縮尺 1:4)	47
Fig. 32.	京免遺跡 4・5区遺構配置図 (縮尺1:400)	49
Fig. 33.	京免遺跡 4区平面図 (縮尺1:100)	50
Fig. 34.	京免遺跡 5区平面図 (縮尺1:100)	51
Fig. 35.	5区S K 59 平面図・断面図 (縮尺 1:30)	52
Fig. 36.	京免遺跡 4・5区出土の土器 (縮尺 1:4)	53
Fig. 37.	京免遺跡 6・7区遺構配置図 (縮尺1:400)	55

Fig. 38.	京免遺跡6区平面図(縮尺1:100)	56
Fig. 39.	6区SX149平面図・断面図(縮尺1:30)	57
Fig. 40.	京免遺跡7区正面図・断面図(縮尺1:100)	58
Fig. 41.	6区出土の土器(縮尺1:4)	60
Fig. 42.	6区SX159平面図・断面図(縮尺1:20)	61
Fig. 43.	6区土器溜出土の土器1(縮尺1:4)	62
Fig. 44.	6区土器溜出土の土器2(縮尺1:4)	63
Fig. 45.	京免遺跡8・9区遺構配置図(縮尺1:400)	65
Fig. 46.	8区SD170平面図・断面図(縮尺1:60)	66
Fig. 47.	SK167平面図・断面図(縮尺1:30)	67
Fig. 48.	京免遺跡9区平面図(縮尺1:100)	68
Fig. 49.	京免遺跡9区平面図(縮尺1:100)	69
Fig. 50.	9区SK199a平面図・断面図(縮尺1:30)	70
Fig. 51.	SD187平面図・断面図(縮尺1:40)	70
Fig. 52.	9区平面図(縮尺1:60)	71
Fig. 53.	9区SK186b平面図・断面図(縮尺1:30)	72
Fig. 54.	SH199平面図・断面図(縮尺1:60)	73
Fig. 55.	SH199遺物出土地点位置図	74
Fig. 56.	SH199床面出土の土器1(縮尺1:4)	75
Fig. 57.	SH199床面出土の土器2(縮尺1:4)	76
Fig. 58.	SH199住居下層溝1(縮尺1:40)	77
Fig. 59.	9区SD170平面図・断面図(縮尺1:60)	78
Fig. 60.	9区SD170土堤状遺構断面図(縮尺1:60)	78
Fig. 61.	京免遺跡SD170出土の土器(縮尺1:4)	79
Fig. 62.	京免遺跡8区出土の土器(縮尺1:4)	80
Fig. 63.	京免遺跡9区出土の土器1(縮尺1:4)	82
Fig. 64.	京免遺跡9区出土の土器2(縮尺1:4)	83
Fig. 65.	京免遺跡9区・10区遺構配置図(縮尺1:400)	85
Fig. 66.	京免遺跡9区平面図(縮尺1:80)	86
Fig. 67.	京免10区平面図(縮尺1:100)	87
Fig. 68.	京免遺跡10区平面図(縮尺1:100)	88
Fig. 69.	SK301平面図・断面図(縮尺1:40)	89
Fig. 70.	SK301出土の土器(縮尺1:3)	89
Fig. 71.	11区・12区遺構配置図(縮尺1:400)	91
Fig. 72.	京免遺跡11区平面図(縮尺1:100)	92
Fig. 73.	SH230平面図・断面図(縮尺1:60)	93
Fig. 74.	木棺墓SG91・SG92平面図・断面図(縮尺1:20)	95
Fig. 75.	SG95出土の管玉(縮尺1:1)	96
Fig. 76.	木棺墓SG93・SG94平面図・断面図(縮尺1:20)	97

Fig. 77.	木棺墓 S G 95・S G 96 平面図・断面図 (縮尺 1:20)	98
Fig. 78.	京免古墳外形図 (縮尺 1:100)	99
Fig. 79.	京免古墳石室 1 平面図・断面図 (縮尺 1:25)	100
Fig. 80.	京免古墳石室 2 平面図・断面図 (縮尺 1:25)	101
Fig. 81.	京免遺跡出土の前期の土器 (縮尺 1:4)	102
Fig. 82.	京免遺跡出土の石器 1 (縮尺 1:2)	104
Fig. 83.	京免遺跡出土の石器 2 (縮尺 1:2)	105
Fig. 84.	京免遺跡出土の石器 3 (縮尺 1:1.5)	106
Fig. 85.	竹ノ下遺跡 2 区遺構全体図 (縮尺 1:300)	108
Fig. 86.	竹ノ下遺跡溝 1 出土の土器 (縮尺 1:6)	109
Fig. 87.	竹ノ下遺跡 1 区溝 1 平面図・断面図 (縮尺上 1:200、下 1:40)	110
Fig. 88.	竹ノ下遺跡 1 号住居址平面図・断面図 (縮尺 1:80)	111
Fig. 89.	竹ノ下遺跡 1 号住居址出土の土器 (縮尺 1:4)	112
Fig. 90.	竹ノ下遺跡 2 号住居址平面図・断面図 (縮尺 1:80)	113
Fig. 91.	竹ノ下遺跡 2 号住居址出土の土器 (縮尺 1:4)	114
Fig. 92.	竹ノ下遺跡 3 号住居址平面図・断面図 (縮尺 1:80)	115
Fig. 93.	3 号住居址出土の土器 (縮尺 1:4)	115
Fig. 94.	竹ノ下遺跡 4 号住居址平面図 (縮尺 1:80)	116
Fig. 95.	竹ノ下遺跡 4 号住居址出土の土器 (縮尺 1:4)	117
Fig. 96.	竹ノ下遺跡 5 号住居址平面図・断面図 (縮尺 1:80)	118
Fig. 97.	竹ノ下遺跡 5 号住居址出土の土器 (縮尺 1:4)	118
Fig. 98.	7 号住居址東ピット土器出土状況 (縮尺 1:20)	118
Fig. 99.	竹ノ下遺跡 7 号住居址平面図・断面図 (縮尺 1:80)	119
Fig. 100.	竹ノ下遺跡 7 号住居址出土の土器 (縮尺 1:4)	120
Fig. 101.	竹ノ下遺跡 8 号住居址平面図・断面図 (縮尺 1:80)	121
Fig. 102.	竹ノ下遺跡 9 号住居址平面図・断面図 (縮尺 1:80)	122
Fig. 103.	竹ノ下遺跡 9 号住居址出土の土器 (縮尺 1:4)	123
Fig. 104.	長方形竪穴住居遺構? 1 平面図・断面図 (縮尺 1:80)	123
Fig. 105.	竹ノ下遺跡 10 号・11 号住居址平面図・断面図 (縮尺 1:80)	124
Fig. 106.	竹ノ下遺跡袋状貯蔵穴平面図・断面図 (縮尺 1:80)	125
Fig. 107.	長方形土壇 4 平面図・断面図 (縮尺 1:40)	126
Fig. 108.	竹ノ下遺跡長方形土壇 1・2・3 平面図・断面図 (縮尺 1:40)	127
Fig. 109.	竹ノ下遺跡木棺墓平面図・断面図 (縮尺 1:30)	129
Fig. 110.	竹ノ下遺跡木棺墓平面図・断面図 (縮尺 1:30)	130
Fig. 111.	竹ノ下遺跡木棺墓平面図・断面図 (縮尺 1:30)	131
Fig. 112.	竹ノ下遺跡木棺墓出土の土器 (縮尺 1:4)	132
Fig. 113.	竹ノ下遺跡土壇墓 S G 20・21 平面図・断面図 (縮尺 1:30)	133
Fig. 114.	竹ノ下遺跡 2 区出土の土器 (縮尺 1:4)	134
Fig. 115.	京免遺跡第 1 区出土のスクレーパー形石器 (縮尺 1:2)	135

Fig. 116.	竹ノ下遺跡出土の石器 (縮尺 1 : 2)	136
Fig. 117.	住居復元図及び溝模式図	138
Fig. 118.	集落及び水田推定範囲模式図	139

表 目 次

表 1.	京免・竹ノ下遺跡発掘調査行程	14
表 2.	1区・2区・3区遺構一覧表	19
表 3.	4区・5区遺構一覧表	48
表 4.	6区・7区遺構一覧表	54
表 5.	8区・9区遺構一覧表	64
表 6.	9区・10区遺構一覧表	84
表 7.	11区・12区遺構一覧表	90
表 8.	竹ノ下遺跡住居址一覧表	107
表 9.	木棺主軸方位及び長辺規模	132
表 10.	写真図版挿図対象表	142

写 真 図 版 目 次

巻首図版1	京免12区SG91
巻首図版2	SG91遺残木棺材顕微鏡写真及びSK59出土布目瓦俵土器
PL 1	1・2・京免遺跡 (南から)
PL 2	京免遺跡1・2区SD4 (南から)
PL 3	1. 京免遺跡2区SD4上層土器廃棄状況 (東から) 2. 2区SD4 (西から) 3. 1区SD4土層 (北から)
PL 4	1. 京免遺跡9区SD170 (西から) 2. 9区SD170掘状遺構断面 (北から)
PL 5	京免遺跡3区 (南から)
PL 6	1. 京免遺跡3区SH13、SD30・31 (南から) 2. 3区SD100、101、102、103、104 (北から) 3. 3区SH37、SD108、109 (北から)
PL 7	1. 京免遺跡5区 (南から) 2. 6区 (北から) 3. 7区 (西から) 4. 8区 (西から)
PL 8	京免遺跡9区 (南から) 京免遺跡9区南端 (北から)
PL 9	1. 京免遺跡9区 (北から) 2. 3. 9区SH199 (南から)
PL 10	京免遺跡9区SH199土器出土状況
PL 11	1. 京免遺跡11区 (西から) 2. 12区SH230 (北西から)
PL 12	1. 京免遺跡5区SK59 (西から) 2. 京免遺跡6区SX159 (南から) 3. 京免遺跡6区SX149 (西から)
PL 13	1. 京免遺跡3区SH134と外周溝群 (南から) 2. 10区SH88、SB

- 300 (東から) 3. 7区SH72 (西から) 4. 9区SD 187 (西から)
5. 11区SH 200 (南から) 6. 9区前期ピット
- PL14 1. 京免遺跡12区木棺墓群 (南から) 2. 12区SG93 (東から)
- PL15 1. 京免遺跡12区SG91縦断面 (南から) 2. SG91縦断面 (北から)
3. SG91横断面 (西から)
- PL16 1. 京免遺跡12区SG92縦断面、小口板及び底板痕跡、2. 12区SG94
横断面、側板及び底板痕跡、3. 12区SG93 (東南から) 4. 12区SG
95・96 (南から)
- PL17 京免古墳
- PL18 竹ノ下遺跡1区V字溝
- PL19 竹ノ下遺跡2区全景 (南から)
- PL20 竹ノ下遺跡1号住居址 (西から) 2号住居址 (南西から)
- PL21 竹ノ下遺跡2号住居址ベッド状遺構、3号住居址 (西から) 4号住居址
(南から)
- PL22 竹ノ下遺跡7号住居址 (南西から) 8・10・11号住居址 (南西から)
9号住居址 (西から)
- PL23 竹ノ下遺跡木棺墓群 (南西から) 木棺墓群 (南西から) SG23 (東か
ら)
- PL24 竹ノ下遺跡SG23 (西から) SG14 (西から) SG7 (北から)
柱穴内土器出土状況 (東から)
- PL25 弥生時代前期及び中期土器
- PL26 SX159出土の土器
- PL27 SH199出土の土器
- PL28 弥生時代後期の土器
- PL29 弥生時代後期の土器及び土器細部
- PL30 京免、竹ノ下遺跡出土の石器

第1章 はじめに

1 発掘調査に至るまで

津山市街地拡張の波は、ここ十数年来市街地北方へと急速に展開してきたが、計画性に乏しいものも多く、現在交通上あるいは防災上種々の支障をきたしている場合も少なくない。

宅地化の波が、やがて沼地区に及ぼうという気配が濃厚となってきた昭和40年代後半から、津山市の都市計画課の指導の下に、地元有志は、沼地内の農地所有者（203人）によって組合を設置し、面積42.6haの土地について区画整理を実施する計画をあたためてきた。

昭和48年12月25日には、幹線道路の施行が都市計画事業の一環として国、県、市の補助事業として実施されることが決定し、昭和51年度から工事が施行されることとなった。

昭和49年6月には、都市計画課から同事業の施行について教育委員会に協議があったが、該当地域には岡山県遺跡地図第1分冊（昭和48年版）記載の沼I遺跡（弥生式土器散布地）、沼H遺跡（弥生式土器散布地）の二遺跡が存在しており、このため工事の実施に先だち確認調査が必要である旨申し入れをおこなった。

昭和50年3月、確認調査に先だち実体不明である両対象地域一帯の分布調査を文化係職員でおこなった結果、広い範囲にわたって、ごく微量であるが弥生式土器片、須恵器片の散布を認めた。この遺物の散布状況と対象地域の微地形を考え合わせると、約110,000㎡の範囲が確認調査の対象となるべきものであると判断された。

この分布調査の結果をもとに、昭和50年9月まで、都市計画課、区画整理組合、教育委員会の三者で協議を重ね、同年秋の稲の取り入れ作業終了後、遺跡の範囲と性格を把握するための確認調査を実施し、その結果をまけてさらに遺跡の取り扱いについて協議することで合意した。

確認調査の結果（後述）、対象



Fig. 1. 京免遺跡、竹ノ下遺跡位置図

地域 110,000㎡のうち約43,000㎡について確実に遺跡の広がりが見えられた。

遺跡地図記載のとおり、北方のI遺跡と、南のH遺跡は紫保井川で分断され、確認調査の結果もまったく別個の遺跡と考えられたので、仮称である両遺跡名に対しそれぞれ小字名をとってI遺跡は京免遺跡、H遺跡は竹ノ下遺跡と命名した。

確認調査の結果をもとに、岡山市教育委員会、津山市都市計画課、沼土地区画整理組合、津山市教育委員会で協議を重ねた結果、宅地化部分については、区画整理以降も当面水田として残すもので、遺跡内の区画街路面の計画高を上げて、極力全搬に地下遺構に支障のないように工事計画を練り直し、全面的に土の入れ替えをおこなう区画街路部分について昭和52年11月21日から昭和54年10月31日の間に事前発掘調査を実施することとなった。

2 発掘調査の組織

調査主体 津山市教育委員会

調査責任者 木村岩治→福島祐一（津山市教育委員会教育長）

調査担当 津山市教育委員会社会教育課

事務担当 光岡飴郎→谷名通良→須江尚志（社会教育課長）、杉山紀子

発掘担当 中山俊紀、行田裕美、奥 和之、国貞忠也、近藤正友、森 潤、
松本真澄

整理担当 中山俊紀、奥 和之、日笠月子、原口しげの

調査協力者

安東多一郎、河井朝子、河井孝止、河井洋、河井扶美子、北原晴子、北原文子
北原義雄、甲本教子、清水道子、住田富佐子、田口敏子、竹内悦子、竹内忠、
日笠あさ代、前原寿、松永猪之七（以上地元協力者）、島崎東（皇学館大学学生）
森広琢之（東海大学学生）、光延稲造（立正大学学生）、菅木美智子（橘女子大学生）
種貞淳介（九州大学学生）、安藤直美、西井悦子、日笠あゆみ、山本優美子（美作女
子大学学生）

調査及び報告書の作成にあたっては、下記の他多くのかたがた及び諸機関に御協力、御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

浅野克己、阿部義平、稲田孝司、植田荘介、岡田文治、小野 昭、笠原安夫、金子拓男、
鎌木義昌、神原英朗、近藤義郎、清水芳裕、高橋 護、土居 徹、春成秀爾、藤田憲司、
松谷暎子、水内昌義、宗森英之、岡山市教育委員会文化課、兵庫県教育委員会文化課、
愛知県教育委員会文化課、滋賀県教育委員会文化課、名古屋市教育委員会見晴台遺跡調査団。

3 遺跡の立地と環境

津山市は、中国山地に発し南流して瀬戸内海に流れ込む岡山県三大河川の一つ吉井川中流域に位置し、四周を山で囲まれた盆地地形を呈す。

水田の開けた平地部での海拔高は、100～130mで、夏期は盆地特有のうだるような暑さがつき、冬期は、日本海側の鳥取、島根の気候条件に似て雪の日も多く厳寒の日が続く。

古くから交通の要衝として奈良時代には国府が置かれ、近世には津山城が築城されて、美作の政治的経済的中心をになってきた。農業以外とりたてて産業の発達をみなかったが、商業基地として商業活動は近年まで活発であった。現在の人口は、約8万3千人である。

京免遺跡、竹ノ下遺跡は、津山市街地北方2kmに位置し、吉井川の一支流宮川左岸の段丘上に存在する。一帯は水田地帯で、右岸の総社、上河原、小原、山北にかけてはかつて条里制の条坊の跡がよく残されていた。

京免遺跡からは、国府のおかれていた総社の高台がまじかに見られ、さらに西方には前漢鏡片を出土した大土壙墓群下道山遺跡、権現山遺跡、また多数の袋状貯蔵穴の存在が確認された弥生後期の集落址内山遺跡等が所在する神楽尾山一帯を望むことができる。

京免遺跡の北方及び東方には、鳥趾状に何条にも延び広がった低丘陵がつつき、丘陵間の谷には棚田がよく発達している。

これらの丘陵上には、弥生時代の集落址が点々と残されており、東方500mには沼遺跡、沼E遺跡、東方1kmには野介代遺跡、2.5kmの地点には押入西遺跡がある。また北方400mには大田十二社遺跡、同じく2kmには紫保井遺跡があり、これら以外にも弥生式土器の散布地が点々と知られている。

しかし、今まで発掘調査されてきたものはすべて丘陵上のもので、平地部にある京免、竹ノ下遺跡の調査は、新たにこういった遺跡に光をあてる点で重要なものであった。

文献	近藤義郎 渋谷泰彦編『津山弥生住居址群の研究』津山市津山郷土館	1957年			
	近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究第6巻1号』	1959年			
	御船恭平「美作における弥生時代の墳墓について」『古代学研究21.22合併号』	古代学研究会	1959年		
	河本清「津山市桃山作陽高等学校 弥生時代貯蔵穴群」『古代古編第5巻』	1963年			
	近藤義郎・春成秀麗「岡山県津山市上原遺跡」『日本考古学年報19』	1966年			
	今井亮「原始古代」『津山市史第1巻』津山市	1972年			
	橋本悠司・下沢公明・井上弘・柳瀬昭彦「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会	1973年			
	栗野克己・山崎康平「二宮大成遺跡」	『	6』	+	1973年
	河本清・橋本悠司「野介代遺跡」	『	3』	+	1973年
	河本清・橋本悠司・下沢公明・柳瀬昭彦「天神原遺跡」	『	7』	+	1975年
	栗野克己・岡本寛久「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17』岡山県教育委員会	1977年			

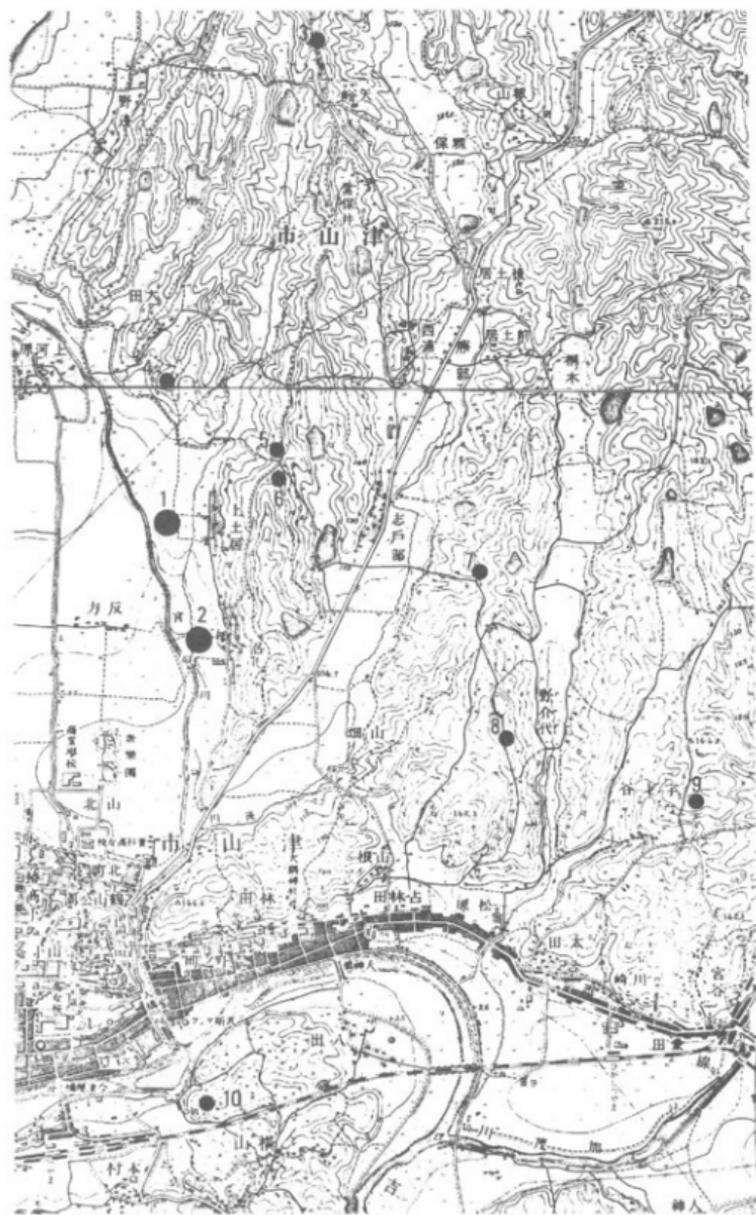


Fig. 2. 京免遺跡、竹ノ下遺跡周辺の発掘調査された弥生遺跡

- | | | | |
|----------|------------|----------|----------|
| 1. 京免遺跡 | 4. 大田十二社遺跡 | 7. 地京遺跡 | 10. 桃山遺跡 |
| 2. 竹ノ下遺跡 | 5. 沼藏跡 | 8. 野介代遺跡 | |
| 3. 紫保井遺跡 | 6. 沼巨遺跡 | 9. 押入西遺跡 | |

0 2KM
 国土院昭和28年発行1/25000地形図
 津山東部及び概



Fig. 3. 京免遺跡、竹ノ下遺跡位置圖 (縮尺 1:12,000)

- | | | |
|---------------------------------------|----------|---------|
| 河本清・柳瀬昭彦 「沼E遺跡」 『岡山県埋蔵文化財報告9』 | 岡山県教育委員会 | 1978年 |
| 高畑知功・二宮治夫 「二宮遺跡」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』 | ＊ | 1979年 |
| 中山俊紀・行田裕美 「沼E遺跡Ⅱ」 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集』 | 津山市教育委員会 | 1981年 |
| 安川豊史 「東蔵坊遺跡B地区」 | ＊ 第9集 | ＊ 1981年 |
| 河本清・中山俊紀・安川豊史 「大田十二社遺跡」 | ＊ 第10集 | ＊ 1981年 |
| 行田裕美 | | |

第2章 発掘調査の概要

1 確認調査

遺物の表面採集の結果、広範囲に遺跡が広がるという推測はついたものの、遺跡の性格、正確な範囲についてはほとんど不明という他なかった。

このため、地形と遺物の散布状況から推定した両遺跡合わせて約11haの範囲に、20mのグリッドを設定して、各区原則として東北隅で、1.5m角の坪掘りをおこない遺跡の性格と範囲を確認する手段とした。

確認調査は、昭和50年11月10日から12月20日までおこなったが、すでに造成されている箇所、区画整理について未解決な問題を残している部分については実施を見合わせた。

このため、坪掘りをおこないえた箇所は、京免遺跡で112ヶ所約252㎡、竹ノ下遺跡で65ヶ所約146㎡であるが、遺跡の全体を推測するには十分な量であると思われた。

京免遺跡

京免遺跡の遺構面は、ほぼ平坦で南に行くに従わずかに下降している。推定範囲の中央部やや東よりに南北に走る農道以東は一段落ち窪んでおり、遺構の存在は確認できなかったが基盤層は東へ傾斜して紫保井川へと至る。

農道以西の土層層序はほぼ一定しており、薄く広がる黄褐色の酸化鉄層を中間におく新旧耕土層を取り除くと黒色土面があらわれ、この面には奈良時代ないしは平安時代の須恵器片、土師器片の散布が認められた。この黒色土層（第3層）中には、弥生式土器が包含されており、この黒色土層下位には灰白色の砂をまじえた黒色土層が広がる（4層）。3層と4層の境は、かならずしも明確ではなく、一線を引くことの困難な箇所もあったが、4層は無遺物層で、自然層であるとみられた。

水田造成による削平の激しい箇所では、3層及び4層は取り除かれており、耕土を取り除くと黄褐色の地山面が露呈し、遺構内にはのみ黒色土が残存していた。

農道以東でも、第3層、4層が確認されず、新旧耕土層下にはふ厚い青灰色粘土層が堆積しており、地点によりやや様相を異にするが黄褐色の地山面に至る。この青灰色粘土層にも、弥生式土器片や須恵器片が微量発見されたが細片が多く2次的な流れこみによるものと思われた。

坪掘りにより確認された遺構は、溝状落ち込み（80、113、121、128、142）と柱穴（65、91、92、93、106、108、113、116、121、128、137、138、140、142、144、146）である。溝状落ち込み、113、121、128、142については、その位置と方向からみて^{※1}連のものと考えられた、また、80の溝（Fig. 9）については、掘り下げをおこなった。この結果、80の溝は、幅^{※2}1.2m深さ

※1 原則としてプランの検出にとどめ、掘り下げはしていない。

※2 環濠であるのちに確認された。



Fig. 4. 京免遺跡確認調査地区区画 (縮尺 1:3000)

0.5mの東西に走る溝で、弥生時代後期末に廃絶されたものであることが明確となった。

京免遺跡で確認された遺構の多くも、弥生時代のものであろうと思われた。

竹ノ下遺跡

対象地は、東から西へゆるやかに傾斜しており、このためか後世の土の移動が激しく、層序もまちまちで窪地とみられる地山の凹凸もあった。

耕土層下に、青灰色ないしは、暗灰色の粘土層が存在する場合が多く、この土の中に、須恵器ないしは土師器片、中世陶器片などがまばらに含まれていた。

削られるより、埋められることの方が多かったとみられる低位な部分、すなわち、25、95、96、102、103、109部分で、地山直上に黒色土が残存していた。

このうち25では、溝状の遺構が検出され、数片の弥生式土器が発見された。また、103、109でもこの黒色土中から若干の弥生式土器を発見した。

50、74、78、100、101では柱穴状の落ち込みが確認されたが、所属時期も不明で、必ずしも遺構と認定できるだけの根拠は乏しかった。

以上の所見をもとに、客観的な遺跡域の割り出しを図るため、弥生式土器と須恵器・土師器を二分して、各坪毎の出土点数をかぞえ上げその分布表を作成した。



Fig. 5. 竹ノ下遺跡確認調査地区別割 (縮尺 1:3000)

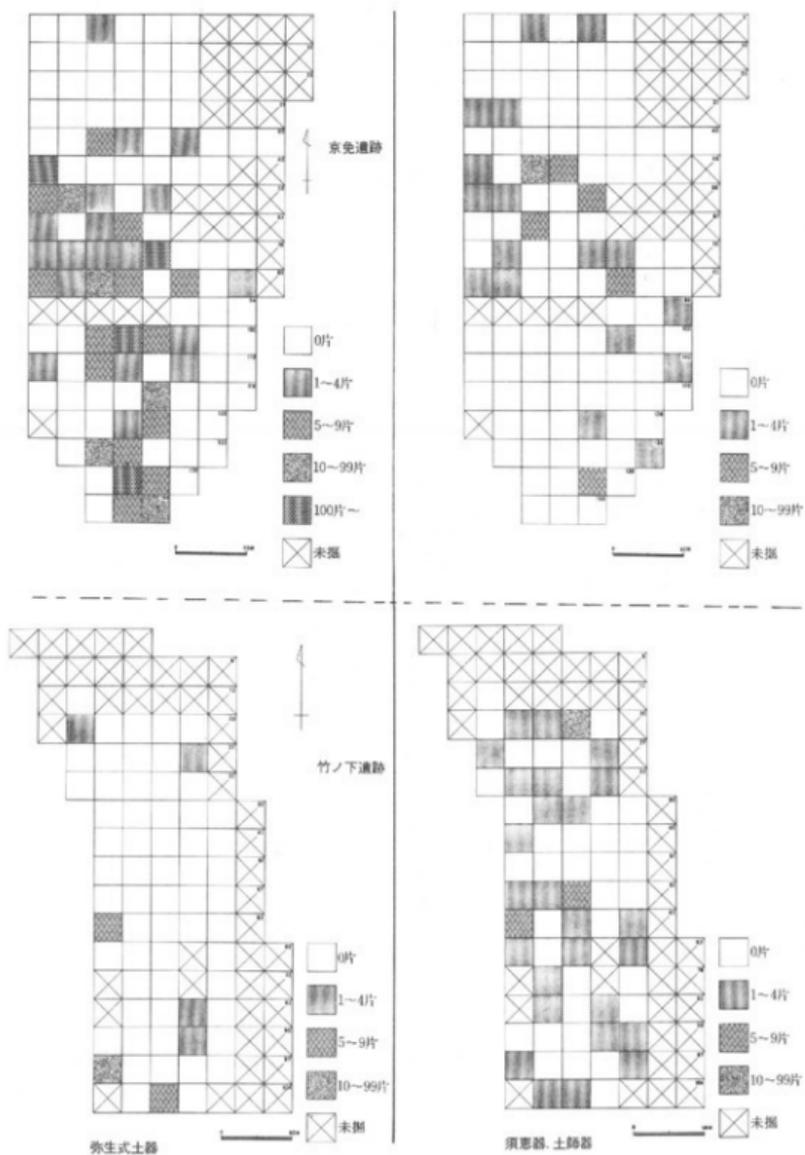


Fig. 6. 京免遺跡竹ノ下遺跡確認調査出土土器片分布表



Fig. 7. 京免遺跡推定範囲及び発掘区域 (1/2500)

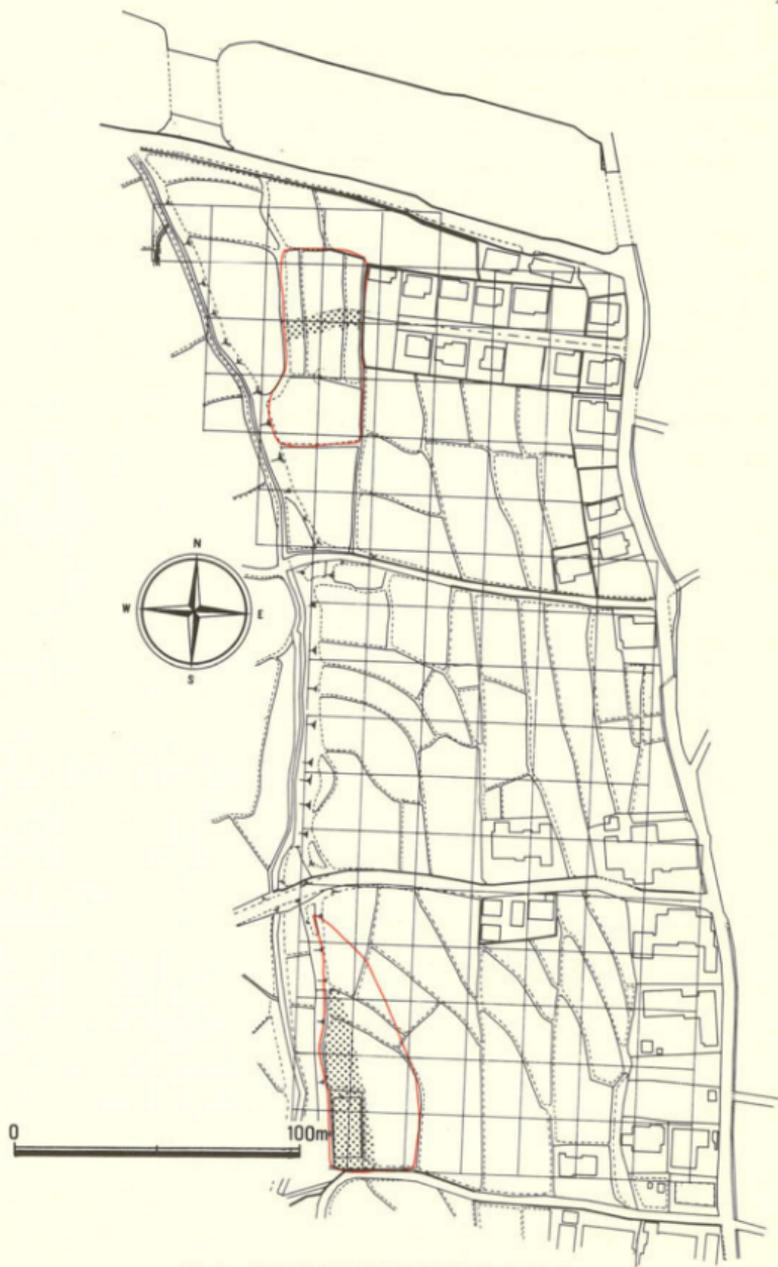


Fig. 8. 竹ノ下遺跡推定範囲及び発掘区域 (1/2000)

この結果、弥生時代の遺跡範囲については、京免遺跡は当初の推定範囲よりはさらに50~60 m 南へ広がることが考えられた。竹ノ下遺跡については、南北二ヶ所に限定されるという結果が得られた。

京免遺跡について見た場合、遺物の散布濃厚な地域と遺構の検出された部分とがほぼ一致しており、この範囲を実質的な遺跡範囲と考えて差しつかえないと考えられた。

須恵器、土師器の散布状況からみた遺跡範囲の推定はむづかしく、特に竹ノ下遺跡では後世の土の移動が激しい上に発見量も微量で限定困難であった。

京免遺跡についても、須恵器、土師器を手がかりにした範囲の推定状況はほぼ似たものであるが、巨視的にみて、それらは弥生式土器の散布範囲と一致するものと考えられた。

この結果得られた遺跡推定範囲は、Fig. 7.8 のとおりで、主として京免遺跡は弥生時代中期から後期の大規模な集落遺跡（約32,000㎡）、竹ノ下遺跡も弥生時代中期から後期の集落遺跡であることが予想された。

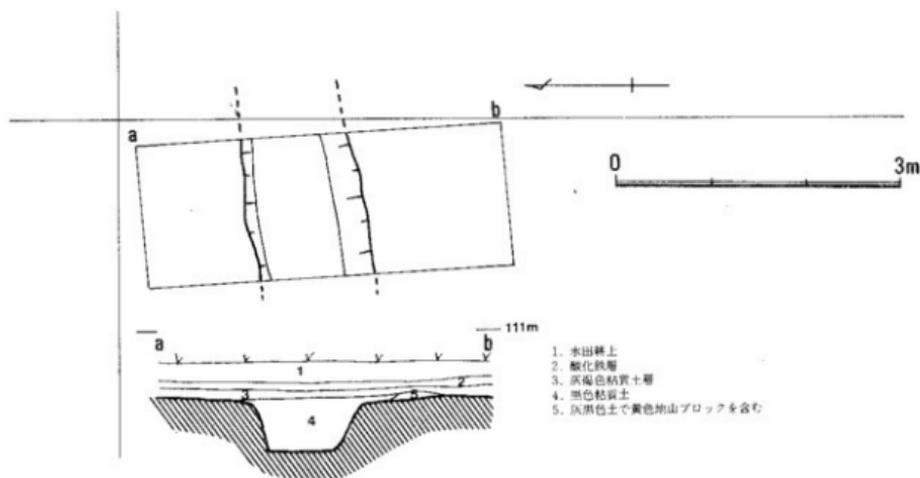


Fig. 9. 京免遺跡確認調査80検出の溝（縮尺 1 : 60）

2 調査の経過

区画整理事業の実施にともない道路用地として遺跡の破壊される部分のうち、幹線道路にかかる竹ノ下2区を除き、残り約5,600㎡の発掘調査の方法について昭和52年11月19日付で津山

市教育委員会と沼土地区画整理組合は覚え書きを交わし、同年11月21日より54年10月31日終了の予定で調査に着手した。竹ノ下2区については、後に別途協議してその取り扱いを決めることとした。

調査順位は、北から京免1区→12区、竹ノ下1区を予定していたが、工事の都合により竹ノ下1区からまず発掘調査に取りかかった。

竹ノ下1区は思いの他水田耕作に伴うと思われる削平を受けており、耕土を取り除くと黄褐色の地山土が露出し、発見されたのは幅1.8m 深さ1.5mのV字形に掘り込まれた溝のみであった。

竹ノ下1区発掘終了以降、予定通り京免1区から2区、3区へと表土剥ぎをおこなっていったが、冬期で侵水が激しく霜の降る日が多くて遺構検出作業は、難行をきわめた。このため、遺構をある程度破壊する恐れはあるものの発掘区両端に約30センチ幅の排水用の溝を掘り、電動ポンプによって常時浸水を汲み上げた。

結果として、この排水溝は遺構のあり方を確認する上で有効手段となった。

排水溝の土層断面の観察によると、新旧両耕土層を取り除くと露われる黒色土面よりほとんどの遺構が切り込まれている可能性はあるものの、断面観察によっても黒色土上面では遺構の判別が不可能に近いこと、4層の白色の砂まじりの自然層直上まで掘り下げればほとんどの遺構の輪郭がつかみえること。明確な黄褐色地山面まで下げるとほとんどの遺構が削り取られてしまうことなどがわかった。

このため、発掘の手順としては耕土層を取り除いたのちに黒色土層上面で遺構の検出を回り徐々に第4層直上まで薄く削り出してゆくということにした。

調査は、水田の作付けの障害にならないように進める計画のもとにおこなわれたが、第3区南半は特に遺構が密集しており、調査は難行した。一方、4月に至り作付けの期日がせまってきたためやむなく予定を変更し、てまどる3区南半の調査を一時中断して、5区の発掘を先行させこの部分について同年の作付けを可能にした。

3区、4区の調査が完了したのはようやく7月末でもはや稲の作付けができず地権者に多大な迷惑をかけた。

3区の調査の進行状況から考えて、稲の刈り取りから翌年の作付までの間のみ調査したのではとうてい全工程を予定通り終了しえないという反省から、6区、7区については、同年の作付けを断念してもらい、調査を続行した。同年9月末、6・7区の調査を終了したので、稲の刈り入れがおわるまで1区～3区の整理作業にあてた。

53年11月10日、稲の刈り取りが終了したので、8区～12区まで遺構の検出作業と併行して表土はぎをすませた。途中、国分寺跡の調査応援のため一時中断したが54年7月前半をもって京免遺跡の区画街路部分の調査は終了した。

その後の協議により、竹ノ下2区約800㎡の調査も継続して実施することが決められ、同年9月21日より発掘調査した。思いの外遺構が密集していたが、翌1月11日をもって竹ノ下2区の調査も終了した。

ところで、京免遺跡の南端に中世の積石塚らしきものが残っていたが、区面整理に伴い保存困難ということで、この積石塚も55年2月調査した。この結果、これは周圍を削り込まれた古墳の中心部分で、積石の多くは後世積み上げられたものとわかった。これに京免古墳という名称を付け、調査の全工程は終了した。

年次 調査区	50年		51年										52年										53年										54年										55年									
	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8				
確認調査	—																																																			
京免遺跡1区																																																				
+ 2区																																																				
+ 3区																																																				
+ 4区																																																				
+ 5区																																																				
+ 6区																																																				
+ 7区																																																				
+ 8区																																																				
+ 9区																																																				
+ 10区																																																				
+ 11区																																																				
+ 12区																																																				
竹ノ下遺跡1区																																																				
竹ノ下遺跡2区																																																				
京免古墳																																																				

表1. 京免、竹ノ下遺跡発掘調査行程

3 遺跡の概要

京免遺跡は、弥生時代中期以前と後期とは集落のあり方が大きく相異なる。この差をもっとも具体的に顕わしているのが後期の環濠の存在である。

環濠は、遺跡北端で微高地を切るように東進し、東部分は微高地辺を巡って南進し、やがて再び微高地を切るように西進して宮川の形成した崖部で途切れる。

楕円形の半弧を描く環濠は、長軸南北径200m、短軸東西径100mまで確認されているが、西半は宮川に削り取られているとみられ、環濠の本米の全体の形状及び環濠で囲まれていた実質的面積は不明である。

環濠内埋土下層には、各地点とも大田2式土器が多く発見され、上層にゆくに従い土器も新しいものへと推移し、最終的な埋没時点には大田5式土器が大量に廃棄されていることから、

この溝は、後期を通じ大概機能していたものとみられる。

住居址及びその付属施設等で後期に属するものは、そのほとんどが環濠内より発見されており、この環濠が集落を画するものであったことがわかる。

環濠内の各調査区で発見された遺構のあり方には、粗密の差が顕著にあらわれているが、これが直ちに本来のあり方でないことは注意しなければならない。というのは、遺構の発見が少ない部分はいずれも水田耕作に伴う削平の激しい部分で、黄褐色の地山が露呈している。丘陵上の遺跡とは異り、京茂遺跡では柱穴を除いてこの部分まで掘り込まれている遺構はほとんどなく、このために本来遺構が密に存在していても、すでに削り取られている可能性が大きい。

遺存状況の良好な部分から推測すると、本来環濠内には相当多数の建物が存在したことも考えられる。

今回の調査で確認された遺構は、大田2式前後のものが多く、この時期が環濠内集落の盛時であったことも考えられるが、そのことから逆に2式以降の建物が少なかったということ推測することは難しいだろう。その理由の一つは、環濠内に埋積している大量の土器は大田3式以降のものが大部分だからである。発掘調査の及んだ範囲は環濠で囲まれる面積のうち約10分の1にすぎず、大田3期以降の遺構の残りが悪いということも当然考えられる。

前期の土器片は、9区を中心に環濠内南より部分で比較的まとまって発見された以外、1区及び11区で少量発見された。いずれにしても、全体の遺物量は微量で小規模な集落の足跡をうかがうことができるのみである。

中期の集落範囲は、後期の環濠で囲われた部分よりも広く、約3万平方メートルの範囲に点々と遺構を残している。恐らくそれぞれ何単位かの群にまとまると思われるが、必ずしも同時存在を考えることはできない。

環濠南端より70～80m南で、中期後半から後期初頭のものであろうと考えられる木棺墓6基が発見された。地形が変形していることを考えれば、必ずしも全体像を推測できないが、小部分にかたまり、付近に広がっていかないとみられることからあまり墓数の多い墓地ではなかったとみられる。

竹ノ下遺跡は、北と南に大きく二分される。北部分の第1区では、区画街路幅7mのみ約20mにわたって発掘したが、確認された遺構は幅1.8m、深さ1.5mの南北に走るV字形溝一本のみである。確認調査の際約20m南で同様の溝の痕跡を認めており、かなり長く延びる溝の可能性はある。溝埋土には、遺物が少なかったが、溝底付近で、ほぼ完形に近い大型変形土器一点が置かれていたような状態で発見されており、溝の時期は、弥生時代中期半ばに遡るということが確められた。

南の第2区も、幅16mの幹線道路にかかる部分約800㎡を発掘したのみで、発掘区西半は宮川によって削り取られ、遺跡の全体像を知ることは困難であるが、狭い範囲にも遺構が密集し

ていることは確かである。

検出遺構は、弥生中期及び後期の竪穴式住居址12棟、土壌墓16基、長方形土壌4などがある。土壌墓のうち13基には、組合式木棺の小口板を立てる穴が備わり木棺を用いたことは明確で1基については小口穴をもたないが木棺を使用した可能性がある。その他舟底形の底をもつ長楕円形の土壌も2基あり、墓である可能性が強いので、土壌墓の中に含めている。

数基の土壌墓に、土器片が混入しているが、時期判定可能なものはすべて中期に層し、後期とみられる破片はない。

住居群に接する小規模な墓群の一例と考えられよう。

第3章 京免遺跡の調査

1 各調査区の概要

① 1区、2区、3区の概要

1、2、3区で検出された遺構は、環濠SD4、竪穴住居址、竪穴住居をめぐる住居外周溝その他の溝等である。遺構の所属時期は、大概ね弥生時代中期後半から後期にかけてのもので後期前半のものが数としてもっとも多い。SH2のみ柱の立ち腐れた跡に古式土師器とみられる小破片(Fig26-1)一点を包蔵しており、古墳時代初頭に位置する可能性がある。

SH1は、弥生時代中期後半の竪穴住居で、壁面の立ちあがり15cmを残し、幅20cmの壁体溝が巡っていた。床面のほとんどは、最近の野つばにより破壊されており、消失していた。

SB5は、建物を構成するとみられる柱三本のみを検出したもので、直径はいずれも35cm前後で深さも一定している。柱間は、260cmと180cmである。

SD7は、直線状に延びる幅60cm深さ30cm程度の溝である。高坏形土器、甕形土器各1点が出土しており中期後葉のものとみられる。

SH2は、竪穴住居址で、床面の一部を残し西部分の壁体溝の一部が確認された。一辺4.5m程度の隅丸方形ないしは方形プランで四本柱中央穴を伴うとみられ、3本の柱穴で柱痕跡が認められた。作業台とみられる上面平な石が残され、主柱から古式土師器1点が出土している。

SH3は、柱二本のみ検出したもので詳細不明であるが、柱間2.2mで竪穴住居の主柱と考えられる。

SB8は、2.9m×1.8mの1間×1間の掘立柱建物とみられるが、検出面から柱穴底まで10cm前後の浅いもので、時期も不明であるがSH2に先行すると考えられる。

SD4は、幅2～3mの集落を取り囲む環濠とみられ、検出面よりの深さは60～70cmと通常の環濠に較べ浅い。概略上、中、下層に埋積土は三区区分き、それぞれ、大田2式、3～4式5式土器を主体に包含している。環濠埋没時に相当する上層には、大量の5式土器が含まれ、2区での5式土器の廃絶状況は、環濠内から溝に押し出したような状況を示す。

SX9は、中期後葉の土器溜で、浅い溝状遺構に土器が落ち込んでいる可能性があるが必ずしも輪郭は明瞭ではなく、SD4の岸部分と切り合っている。

SD10・11は、環濠に流れ込む排水溝とみられ、SD10は浅く不明瞭であるが、SD11は、U字形溝で壁面は立ち上がり最深处で検出面よりの深さ40cmを計る。

3区は、京免遺跡でもっとも遺構の遺存状況の良い部分で、大まかに7群程度の住居群

遺構名	位置	遺構種別	時期	備	考
SH-1	1-23	竪穴住居址	MⅡ?	大平野ツガにより破壊、直径約5m程度の円形住居、中期1彩組片	
SH-2	1-10	*	TⅠ	1辺4.5m程度の隅丸方形ないしは方形住居	
SH-3	1-11	○?	?	二本の柱穴のみ、柱間2.2m	
SD-4	3-6, 6-7, 1-5, 7, 8	溝・溝	LⅠ~LⅡ	溝間2~3m、最上層大田2式土器多し	
SB-5	1-22~24	竪穴住居跡	?	二本の柱のみ、中期の可能性強い。柱間距離1.8~2.6m	
SB-6	1-20	瓦葺形竪穴? 住居外周溝?	?	竪穴のみ残存、接する柱穴に中期後葉の土器5片	
SD-7	1-13~14	溝	MⅡ	区画溝?	
SB-8	1-10	竪穴住居跡	?	柱間距離2.9×1.8m、SⅡ2に先行する	
SX-9	1-5	溝?	MⅡ	溝の輪郭は明確でなく土器部とした	
SD-10	1-6	溝	?	SⅡ4に流れ込む排水溝?	
SD-11	2-3	*	?	SⅡ4に流れ込む排水溝?	
SD-12	2-2	*	MⅡ	不整形の溝、竪穴跡上層はばり遺体残存	
SH-13	1-4	竪穴住居址	LⅠ	4本柱で直径5~6mの円形住居	
SK-14	3-2	土 層	?	芋州土層、自然作積による可能性强い	
SD-30	1-2	住居外周溝	LⅠ	SH-13に対応する	
SD-31	1-2	*	LⅠ		
SH-35	3-5	竪穴住居址?	?	SⅡ104を切る	
SH-36	3-7	*	?	4本柱、中央穴	
SH-37	3-12	*	LⅡ	大英銅器類群、扁平片瓦石斧、石鏡	
SB-100	3-4	溝	LⅠ	SⅡ30・SⅡ103を接続する溝	
SD-101	3-4	住居外周溝	?		
SD-102	3-3	*	MⅡ		
SD-103	3-6	*	LⅠ		
SD-104	3-5	溝	LⅠ	SⅡ135に先行する	
SK-105	3-4	段方形土塊?	LⅠ		
SD-106	3-9~10	住居外周溝	MⅡ~LⅠ	SⅡ103に接続か?	
SD-107	3-9~10	*	LⅠ	SⅡ103に接続か?	
SD-108	3-9	外周外周溝	LⅡ	SⅡ103に対応する、大田十二社2~3式土器を含む	
SD-109	3-11	*	LⅠ	SⅡ108を切っていると思われる	
SD-110	3-13	溝	LⅡ?	SⅡ108から出る排水溝?	
SD-111	3-13~14	住居外周溝	LⅠ		
SD-112	3-13~16	*	LⅠ	SⅡ113を切っている	
SD-113	3-15~16	*	LⅠ	SⅡ112、SⅡ114に切られている	
SD-114	3-16	*	LⅠ	SⅡ113を切り、SⅡ115に切られている	
SD-115	3-16	*	LⅠ	SⅡ116、SⅡ114を切る	
SD-116	3-16	*	LⅠ	SⅡ115に切られる	
SD-117	3-18	*	LⅠ	SⅡ116、SⅡ122に接続か	
SD-118	3-16	*	?		
SD-119 (SD-134)	3-18	溝	MⅡ	SⅡ134の北部分、SⅡ134と同一の溝	
SD-120	3-20	*	LⅠ?	SⅡ118と同一のもの?	
SD-121	3-20	住居外周溝	LⅠ	SⅡ134を切る	
SD-122	3-20	*	LⅠ		
SD-123	3-20	*	LⅠ	Fig. 29-29~31もSⅡ123に属すると考えられる	
SD-124	3-21	溝	LⅠ	大田1式土器を含む	
SD-125	3-19	住居外周溝	LⅠ	SⅡ132と同一のもの	
SD-126	3-19	*	LⅠ	SⅡ131と同一のもの	
SD-128	3-19	*	?		
SD-129	3-19	*	LⅠ	SⅡ122と同一のもの?	
SD-130	3-19	*	LⅠ	SⅡ121と同 1のもの、後期とみられる土器断片を含む	
SD-131	3-17	*	LⅠ	SⅡ126、SⅡ126と同一のもの、SⅡ136に切られる	
SD-132	3-18	*	LⅠ	SⅡ125と同一のもの	
SH-133	3-22	竪穴住居址	LⅠ	大田1式土器を層土に含む、直径5m前後の円形住居	
SH-134	3-13	*	LⅠ	1辺5.5m前後の隅丸方形住居、床面に建築材とみられる炭化材残存	
SD-135 (SD-137)	3-18, 3-19	溝	MⅡ	溝の遺構群中もっとも古い、SⅡ123との切合部で後期土器断片、扁平片瓦石斧	
SD-135	3-16	住居外周溝	LⅠ	SⅡ136とこれにSⅡ137につづく、SⅡ136に切られる	
SD-136	3-16	*	LⅠ	SⅡ137へつづく、SⅡ134、SⅡ135、SⅡ131を切る	
SD-137	3-17	*	LⅠ	SⅡ136、SⅡ137が重なった溝	
SD-138	3-15	溝	MⅡ		
SD-139	3-18	住居外周溝	LⅠ	SⅡ131と同一の溝	

表2. 1区、2区、3区遺構一覧表

時期: MⅡ-弥生時代中期後葉、LⅠ-弥生時代後期前期(大田十二社1~2式)、LⅡ-弥生時代後期中期(大田十二社3式)

LⅢ-弥生時代後期後葉(大田十二社4~5式)、TⅠ-古墳時代初期

※ 遺跡の年代の推定にあたっては出土土器を基準にしたが、大平の遺構は数片から10数片の上層片しか伴っておらず土器断片の分布と切合関係が必ずしも一致しないものもあり、探査型式にわたるもの、中間的な様相を示すものなどがあり、妥当な範囲に抑えられざるを得ないものとした。

が発見された。しかし、丘陵上のものとは異り、必ずしも竪穴住居そのものを押えることは容易でなく、住居のあり方は、住居外周溝と柱位置とから推測せざるを得ず、きわめて複雑な要相を呈する。

モデルに、SH13をあげて遺構のなりたちをまず説明しておきたい。(Fig. 17)

SH13は、四本柱で壁体溝2条の検出位置からみて一辺5~6mの円形ないし楕円形住居とみられる。壁体溝にそって内側に幅1m前後の土色の変化がみられ、ベット状遺構の存在が推測できるが痕跡にすぎない。SD31とSH13には切り合いがあり、SH13が先行する。壁体溝外方約2mの間隔をもって一巡するとみられるSD30は、SH13に付属するもので検出面で幅1m深さ20cm前後を残している。住居外周溝SD30は、住居を環状に取り囲むものとみられ、その直径は、約10メートルである。SD30中には、柱穴が数本規則的に並び、他の外周溝中では必ずしも明らかとならなかったが、住居の構造とかかわるものとしてこれら外周溝中の柱穴は注意を要する。なお、SH13の柱穴は、発掘区外に存在するはずの一柱を除いて、いずれも二度以上の柱の差しかえをした痕跡を残している。

その他、SD30に接続するSD100は、他の外周溝群と接続するための排水溝と考えられよう。

3区では、多数の外周溝、柱穴、その他の溝が複雑に検出されているが、基本的には、SH13にみられたものと同じ構造の重複とみられる。

SD101、SD102は、直径約10mの弧を描いてそれぞれSD107、SD106に接続するものと考えられる。SD101は西部へと溝底を深くしてゆき東部分は検出面と溝底の差がなく途絶えてしまう。検出面での溝幅最大長は55cmで、同深度8cmである。SD102は、幅60~90cmで、検出面からの深度約10cmである。SD103によって切られた部分の両端に、中期後葉の土器が比較的多く残されていた。(Fig. 27, 4~11)

SD106は、溝幅50~60cmで、検出面よりの深さ10~13cm。溝底は、西へと深くなっている。SD107の溝幅は、30~70cmで、深度10cmを残すのみである。やはり、西部分が深く、東端は痕跡程度である。この二重円の溝内区に、竪穴住居主柱の組みあいと考えられるSH35、SH36が認められるが、いずれの住居外周溝とも対になるものとはみえない。両住居外周溝に伴うとみられる住居の柱の組み合いについては不明である。

SH35は、本来4本柱の竪穴住居とみられ、今一本は調査区外にあると考えられる。いずれの柱掘方も通常より大きく、径60~70cmある。各柱穴とも、柱根痕跡をとどめ、その直径は20~25cmである。遺物の包含はないが、大田1~2式土器を含む幅40~70cm深さ約20cmの不整形の溝SD104を切っている。

SH36も、本来四本柱の竪穴住居とみられ、直径37cm深さ約20cmの二段に掘り込まれた円形の中央穴を備える。北よりの二柱穴間に、作業台とみられる50×30cm厚さ23cmの平石が残され

ていた。SH36に伴う遺物はない。

SD 103は、径約10mの住居外周溝東端を検出したもので、溝幅50~80cm、深さ約20cmである。検出部北端でSD 100と合し、SD 100はさらにSD 30に取り付く。SD 103、SD 100、SD 30とも大田2式の類似した椀形をもつ変形土器を出しており、共存した可能性が高い。一連の排水溝として機能していたとみてよいだろう。SD 103とSD 30のSD 100取り付け部の溝底レベルを比較すると数センチであるがSD 30の方が低い。SD 30は、北部よりSD 100取り付け部が約10cm溝底が深く先の想定に都合がよい。さらに、SD 10に水が流れ環濠に排水できれば好都合であるが、SD 10は時期不明で、溝底も、SD 30最深部より7~8cm高い。

この程度の高低差は度外視すべきかどうかは判断がつかないが、外周溝が最終的には環濠に排水されていたことは確実である。

SD 108も、住居外周溝で、東部分の半分強を検出した。溝幅30~60cm、深度10~22cmで、SD 109との切り合いがみられるが切合関係は不明である。SD 108に大田3式土器が含まれ、SD 109には大田2式のみしか確認されないの

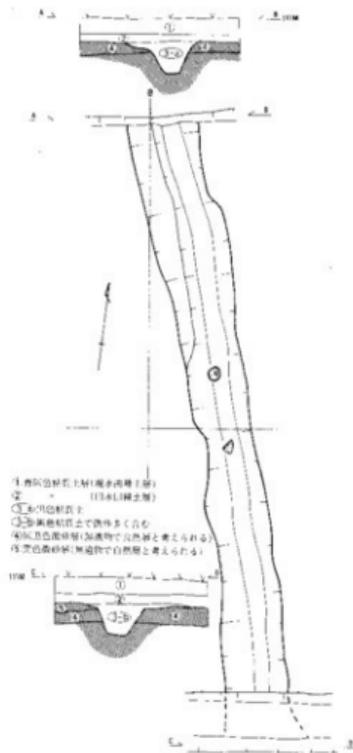


Fig. 11. SD7平面図、断面図(縮尺1:60)

SD 108に対応する住居としてSH37がある。SH37については、壁体溝、支柱の組み合い等不明で住居とする根拠に乏しいが、にもかかわらず竪穴住居としたのは、床面に火災痕跡があり、二点の丸形土器(Fig.30-16.17)及び石錘、扁平片刃石斧等が床推定域に残されており、作業台とみられる平石一点が壺発見位置に備わっていたからである。

これら諸状況は、SH37がSD 108と対になることを示しており、対象位置に小石を多数込めた柱穴状落ち込みのあることは、住居構造を考える上で注意される。この二点の土器は、いずれも大田3式に属するもので、この点SD 108に含まれていた少量の2式土器片は、混入であると考えられよう。

なお、SD 108に取り付くSD 110は、検出部の溝幅30~35cm、深度25cmのU字溝で、住居外

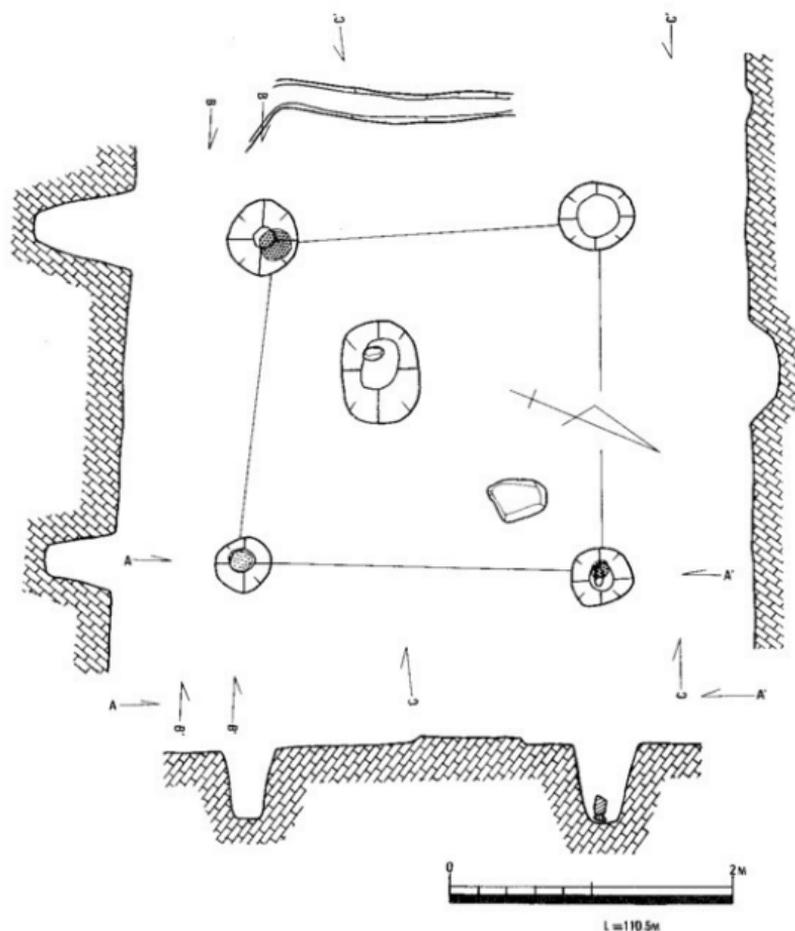


Fig. 12. 1区SH 2平面図・断面図(縮尺1:40)

周溝より壁の立ち上がりはいくぶん急である。SD 100と同様の排水溝とみられるが、遺物の発見はない。

SH 134を中心にした溝は、大まかには二群の住居外周溝群がオーバーラップしたものであるが、個々の切り合いについては不明な部分が多く、把握できたものは断面図 (Fig. 20) にゆずる。これら遺構群のうち、もっとも新しいと把握できたのは、SH 134で、貼床面と二条の壁体溝を検出した。4本の支柱で構成され、うち北二本には柱根痕跡が残されていたが、それ

* SD 134と遺構番号が重複しているが、現場でのミスで、番号の取り改めをせずそのまま使用する。



Fig. 13. Ⅰ区環壕SD 4平面図・断面図(縮尺1:60)

ぞれ、径45~50cmの円形掘方に対し、径20~25cmの円柱痕跡が残されていた。

径60cmの円形中央穴をもち、住居床面からのその深度は55cmを計る。

この貼床面を取り除き、その下から4本柱の竪穴住居支柱組み合い2組が(Fig.21)認められた。類似規模、形態のSD 111~116、SD 121、122、123等の一連の同心円をなす住居外周溝群は、SH 134及び下層の住居等とそれぞれ対応するものであろう。

これら遺構からの出土土器は、大概ね大田1~2式のものである。

* これら外周溝は、SD30等と較べ角ばっているようにみられるのは、SH134が隅丸方形プランであることと考えあわせ注意される。

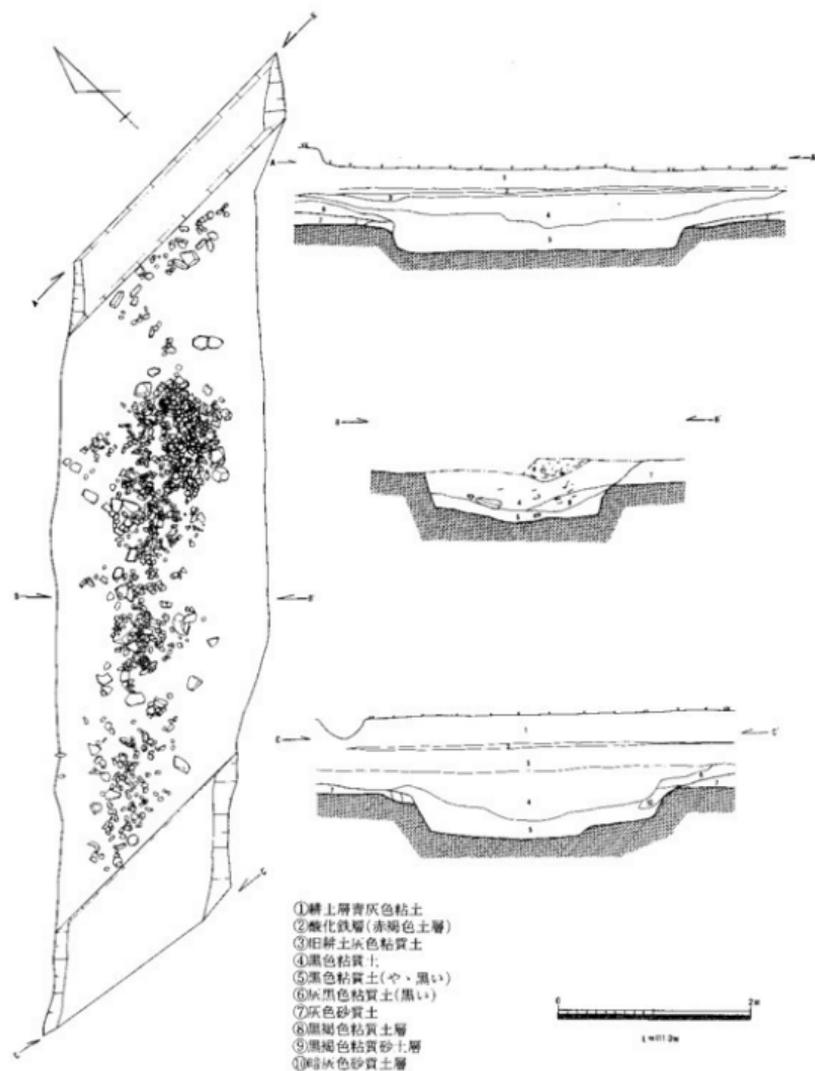


Fig. 14. 2区環濠SD 4 平面図、断面図 (縮尺 1 : 60)

SH 134 の粘床面を掘り下げて、SD 135、SD 137、SD 139 を検出したので、これらのものは、論理的には、SH 134 他に伴うとみられる一連の外周溝群より、SD 125、SD 126

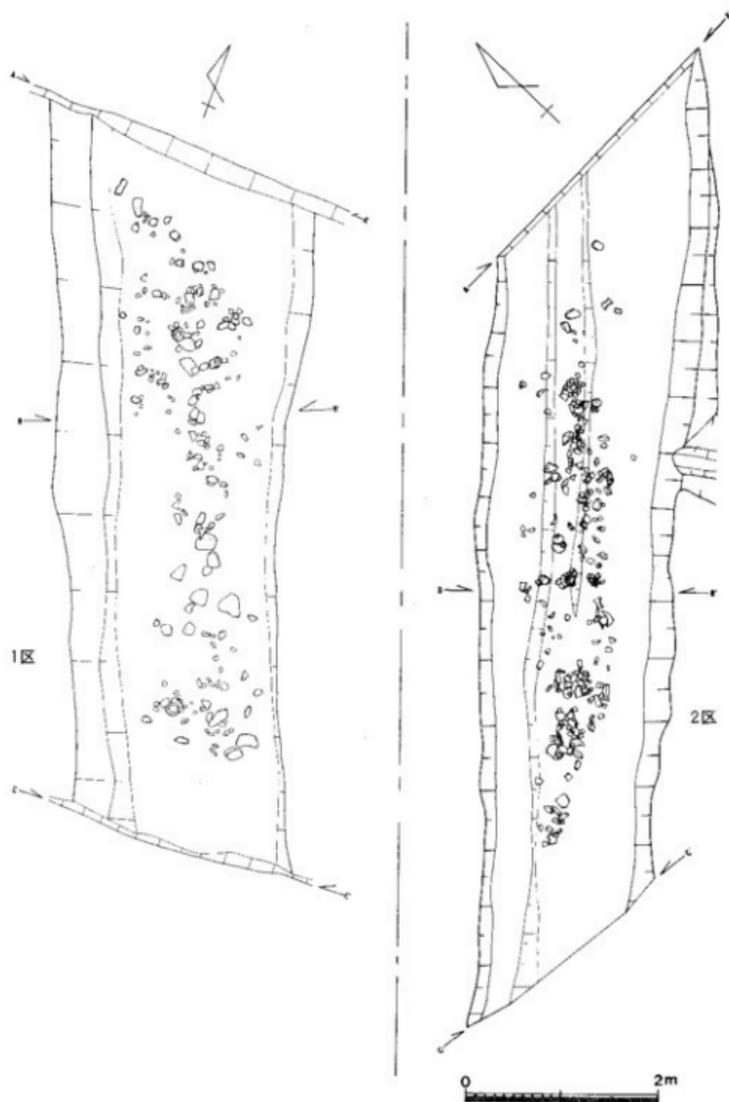


Fig. 15. 環濠SD4下層遺物出土状況 (縮尺1:60)

を含めて古いものと考えられる。

後者の外周溝群の溝底のレベルが、いずれも前者のそれらより深いことは注意しておいてよ

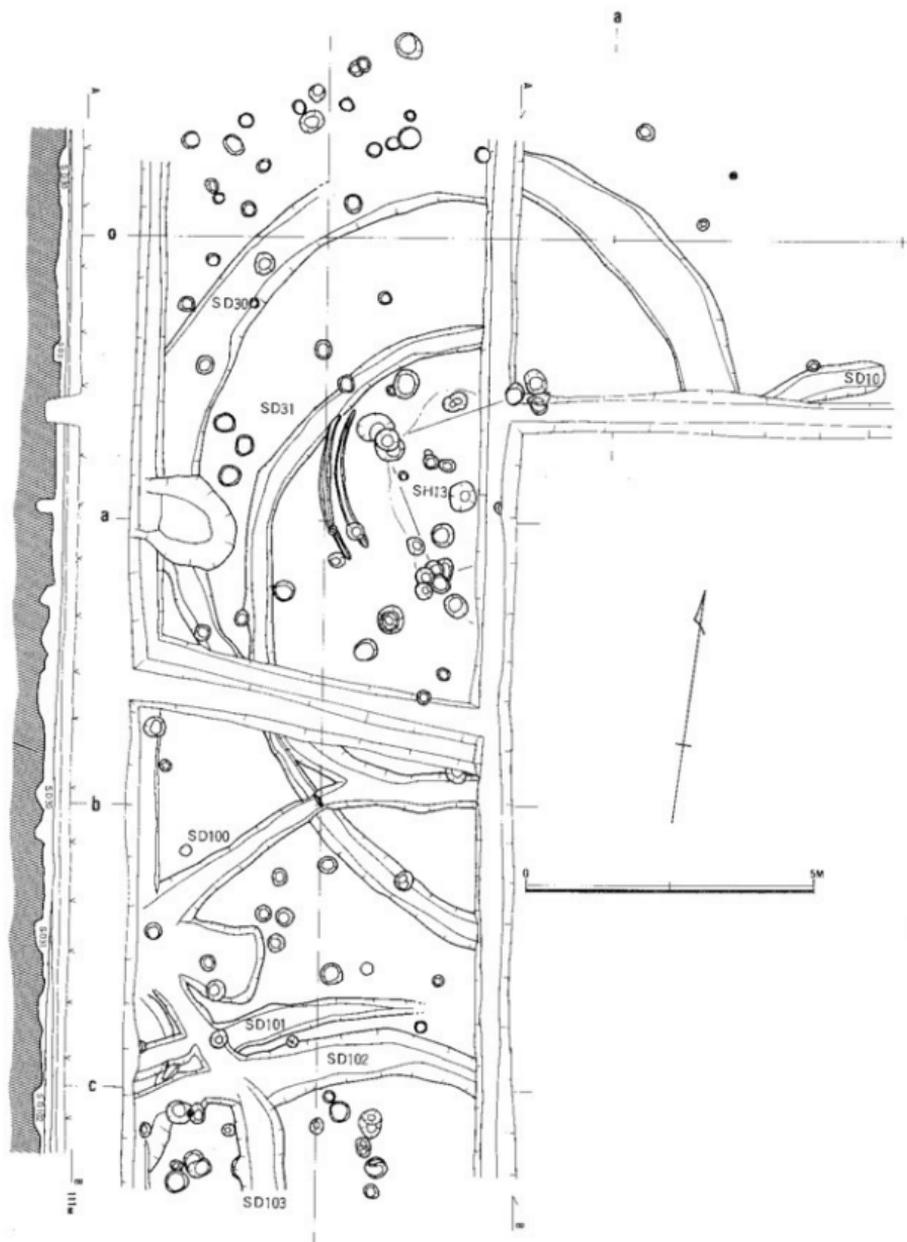


Fig. 16. 京兔遺跡3区平面圖 (縮尺1:100)

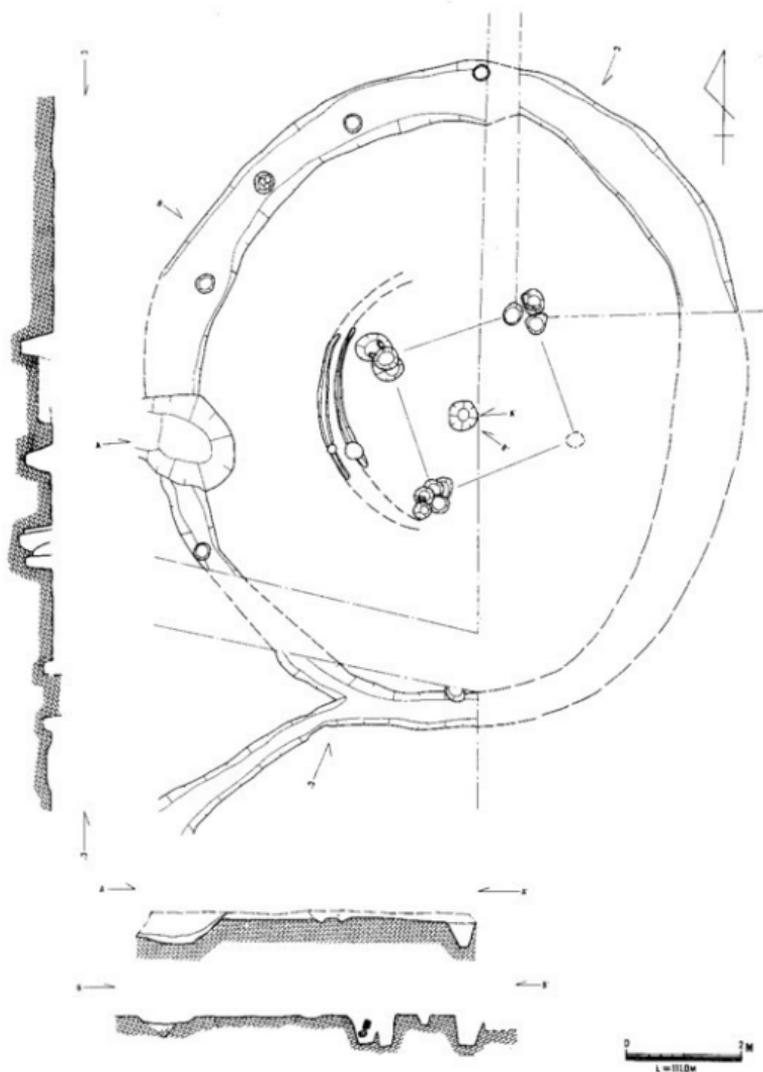


Fig. 17. SH13模式図 (縮尺 1 : 100)

いだろう。

というのも、切合関係からみて、奇妙に蛇行するSD 134は、溝幅40~50cmのものであるが

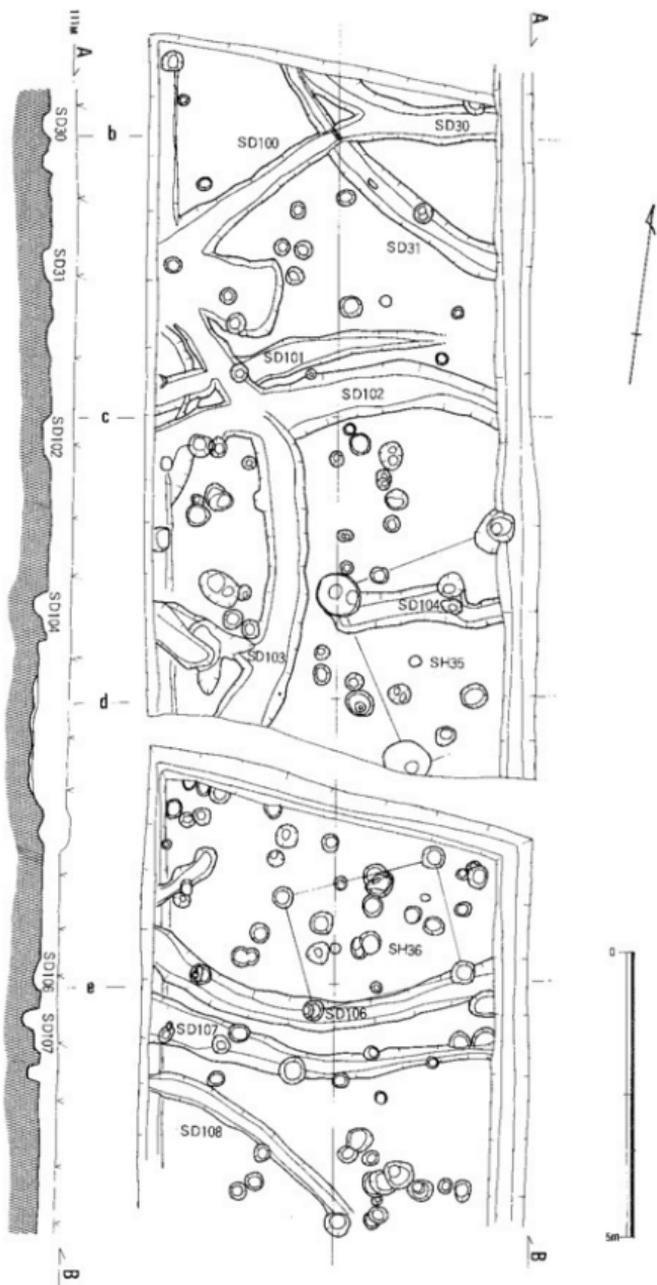


Fig. 18. 京免遺跡3区平面図(縮尺1:100)

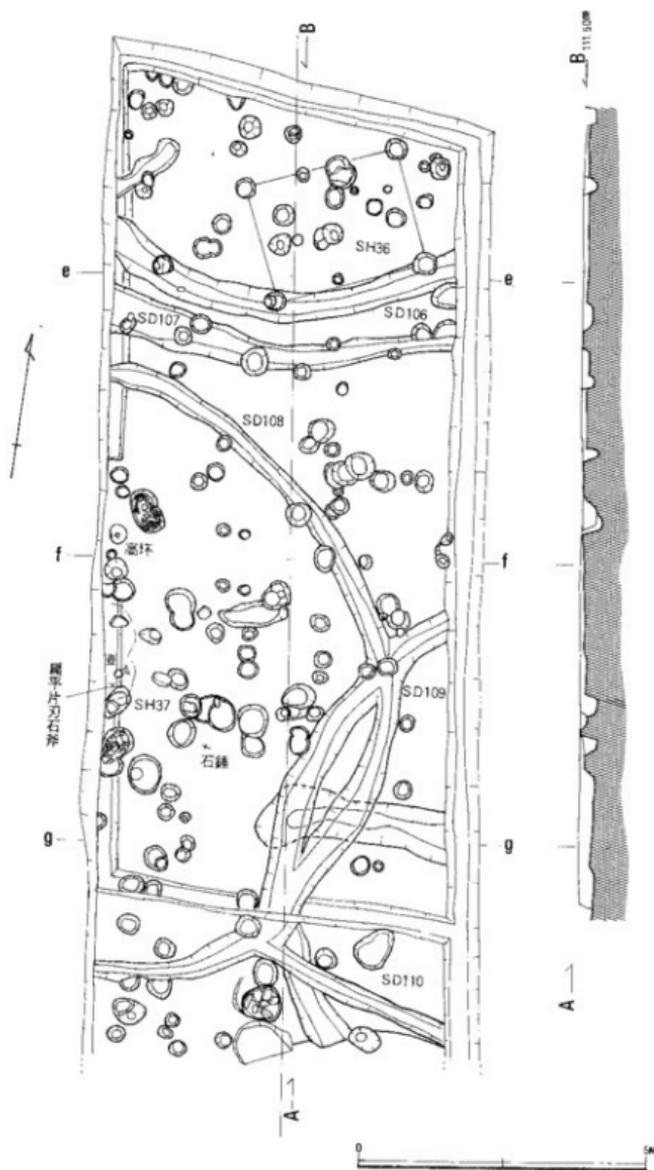


Fig. 19. 京免遺跡3区平面図(縮尺1:100)

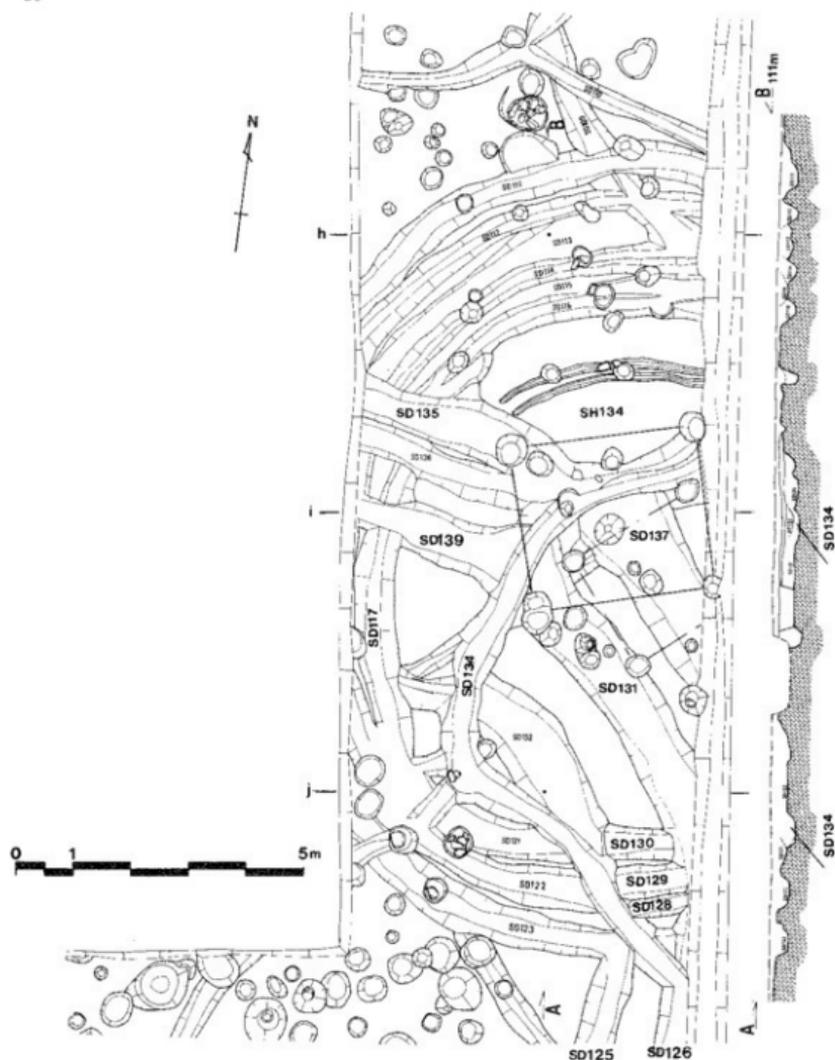


Fig. 20. 京免遺跡3区平面図 (縮尺1:100)

これらの遺構中最も古いものでしかも、SH 134の床面からの溝底深度は、37cm (ほぼ一様)と、その他外周溝群と比較してもっとも深いのである。

SD 134の埋土には、中期後葉の土器片が含まれており、後期に属するものはない。

従って、これら遺構群の年代的幅は、中期後葉から、後期前半(大田2式期)までにおさま

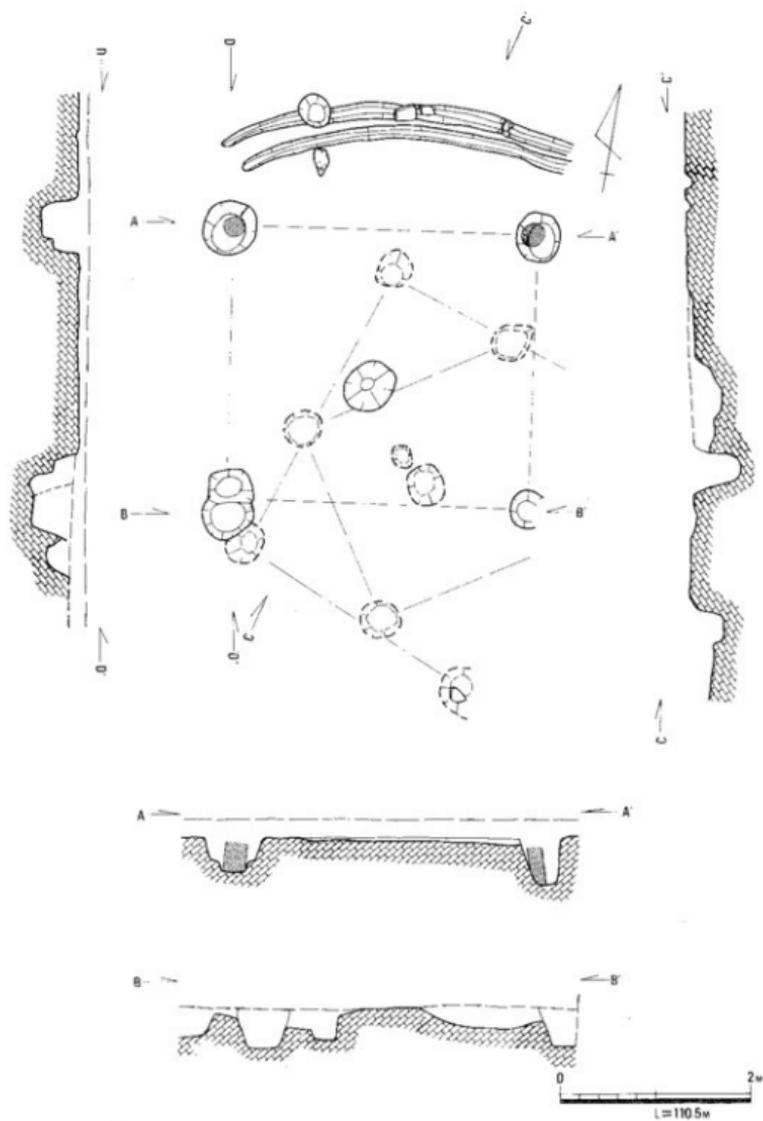


Fig. 21. SH 134平面图、断面图 (縮尺 1 : 60)

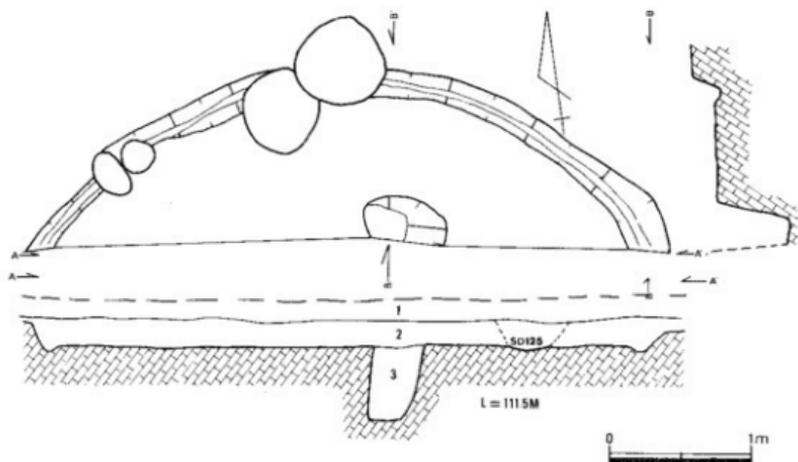


Fig. 22. SH133号住居址平面図・断面図(縮尺1:40)

るものであろう。

竪穴住居床面と住居外周溝底レベルとは、一定の相関関係があるとみられ、全体として住居床面及び外周溝底が上昇傾向にあることは、3区で遺構に伴わないで、あるいは遺構を確認できないままに発見された大田3式ないし4式土器を解釈する上で一つの手がかりを与えるものであろうか。

3区南端で発見されたSH 133は、竪穴住居址の壁面を高さ25cmにわたって遺残させていた希有な例で、京免遺跡では例外的な存在である。

直径5m程度の円形住居で、大部分は発掘区外に延びている。

幅15~20cmの壁体溝を一巡させていたとみられ、35×60cmの長楕円形の掘り方をもつ柱穴一つが検出された。

埋土中から、後期初頭、大田1式に属するとみられる土器が少量発見されており、住居肩部分で、径50~60cmの円形掘り方をもつ柱穴に切られ、また大田2式土器を包含するSD 125によっても切られている。後期初頭の竪穴住居の一例とみてよいだろう。

なお、個々の遺構の埋土の状況については、ふれてこなかったが、環濠SD 4を除いて、遺構を埋めている土は、大概概粘質味をもつ黒色土で、径60~80cmの掘り方をもつ大形の柱穴で深いものには、白褐色の地山ブロックを埋め土に含むものがあった。こういったものにはしばしば柱根痕跡が黒々と残されている。

いずれの遺構も、この黒色上下のやや白っぽい砂を含む黒色上に達しているもののみ検出できたので、そうでない場合は、私たちの土色及び土質識別力の範囲を多くは越えていた。

SD 4 出土の土器

SD 4 下層出土の土器 (Fig.23-1~8)

4、5は壺形土器、1~3は甕形土器、6は鼓形器台ないしは台付壺脚部片、7は高環形土器脚部、8は器台形土器口縁部片とみられる。

1は、口縁部に三条の凹線を巡らし、外面は刷毛仕上げ。内面はヘラ削り加わりススの付着顕著である。2は、口縁部内外ヨコナデ、胴外面にかすかに刷毛目を残す。胴内面はヘラ削り。3はヨコナデ仕上げ、4は剝離激しく調整不明。5は外面に一部刷毛目を残し内面ヘラ削り。6は、脚端面に棒状工具による平行沈線文を巡らす。内面ヨコナデ仕上げである。7は、端面に二条の凹線が巡っていたらしい。内面ヘラ削りのままであるが高環部部の可能性もある。8は、端部に二条の凹線を巡らし、内面はヨコナデ仕上げ。部分的に刷毛目を残す。

以上の土器は、それぞれ新古の様相を示すが、大概ね大田2式に併行するものと考えられる。

SD 4 中層出土の土器 (Fig.23-9~21, Fig.24-1~5, Fig.25-5)

Fig.23の10は壺形土器、9、11は甕形土器、13~21及びFig.25の5は高環形土器、Fig.24の1~5は鼓形器台である。

Fig.23の1は器壁の荒れ激しく調整不明、9は口縁部内外面ヨコナデ、胴外面にヘラ磨き状の条痕を残し、内面ヘラ削り。11は口縁部内外面ヨコナデで、胴部内面にヘラ削り加わる。ススの付着が認められる。12は、外面タテのヘラ磨き、内面は刷毛及びナデ仕上げ。13は立上がり部外面ヨコナデ、坏下段及び内面はヨコヘラ磨き。14は、内外面ヨコナデ仕上げ、15は器壁の荒はげしく調整不明。内外面ともかすかに丹彩痕跡を残す。16は、外面にタテのヘラ磨き及び丹彩痕跡をとどめる。端部はヨコナデで内面に絞り痕と刷毛目を残す。17も丹彩土器で、荒い刷毛目が残る。内面はヨコナデ仕上げ。18も丹彩土器、外面ヨコ方向のヘラ磨き加わる。内面に絞り痕を残し、荒い刷毛条痕が認められる。19は、外面に丹彩痕を残すが器壁のあれ激しく調整不明。20も丹彩土器。脚外面はタテ刷毛にヨコヘラ磨き加わる。内面に刷毛目を残す。21は、外面に刷毛目がみられ筒部にヨコヘラ磨き状の痕跡がある。筒部内面に絞り痕がある。Fig.25の5も丹彩土器、外面に細かなヨコ方向のヘラ磨き加わる。内面に刷毛目を残し、絞り痕が観察される。

Fig.24の1~5は4以外いずれも丹彩されている。4の丹彩の有無は不明。1、5は内外面ヨコ方向のヘラ磨き、2は内面にヨコヘラ磨きが認められるが外面は不明。4外面にはタテ方向の刷毛目が残され、内面にはヘラ削りの跡が顕著に残る。3は器壁の荒れ激しく不明。

以上のうち、Fig.23の15~21、Fig.24の1~5、Fig.25の5は中層の一箇所までまとめて発見されたもので一括廃棄された可能性が強い。大概ね大田4式に併行しよう。

上層出土の土器 (Fig.24-6~14, Fig.25-1~11)

Fig.24の7~10は壺形土器、6、11~14は甕形土器。Fig.25-1, 2, 5は、高環形土器、34は蓋形

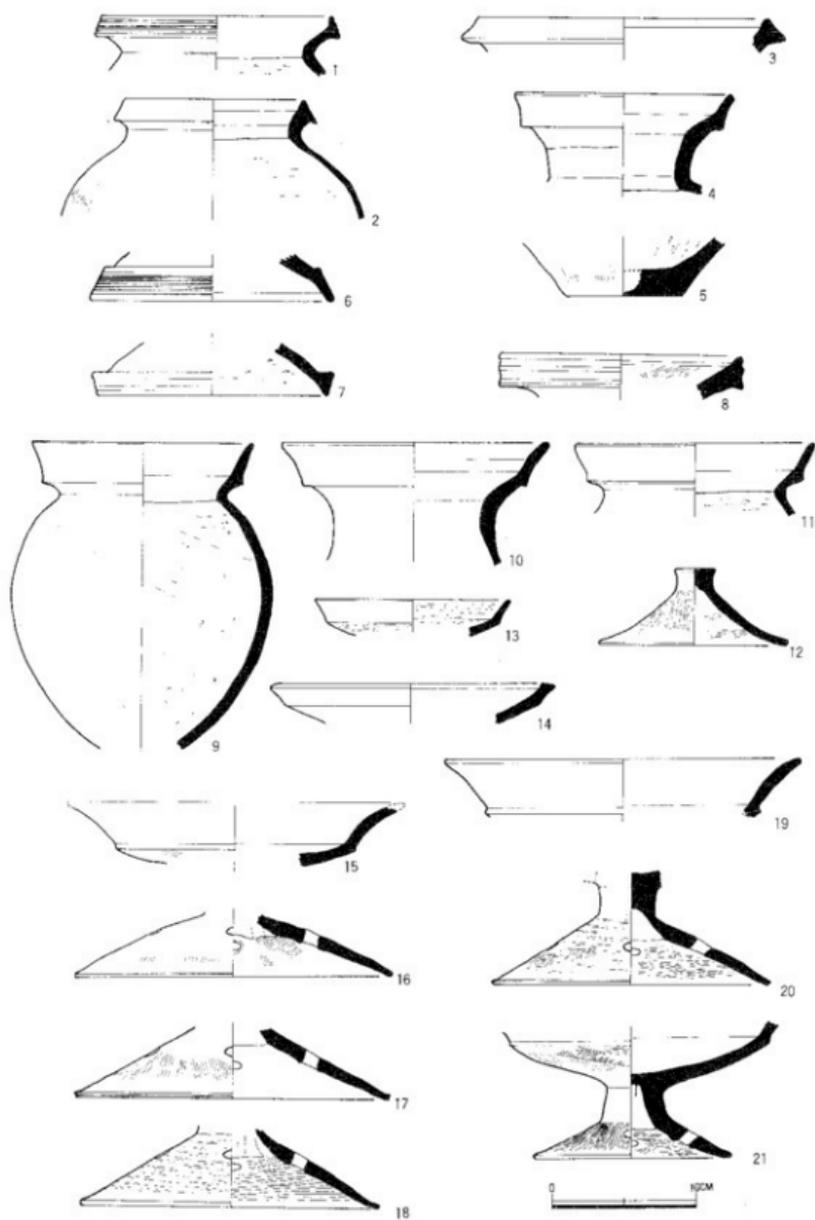


Fig. 23. 京免遺跡S D 4出土の土器1 (縮尺1:4)

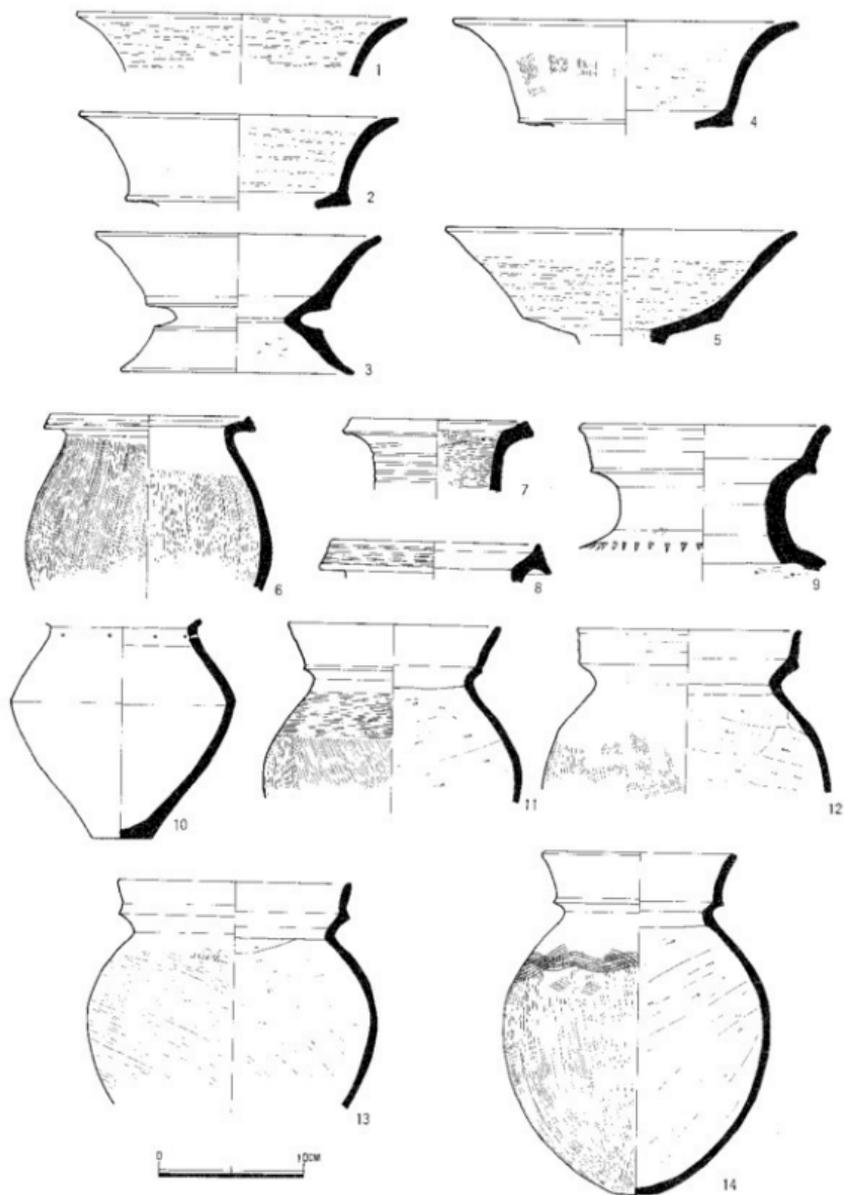


Fig. 24. 京免通跡S D 4出土の土器2 (縮尺1:4)

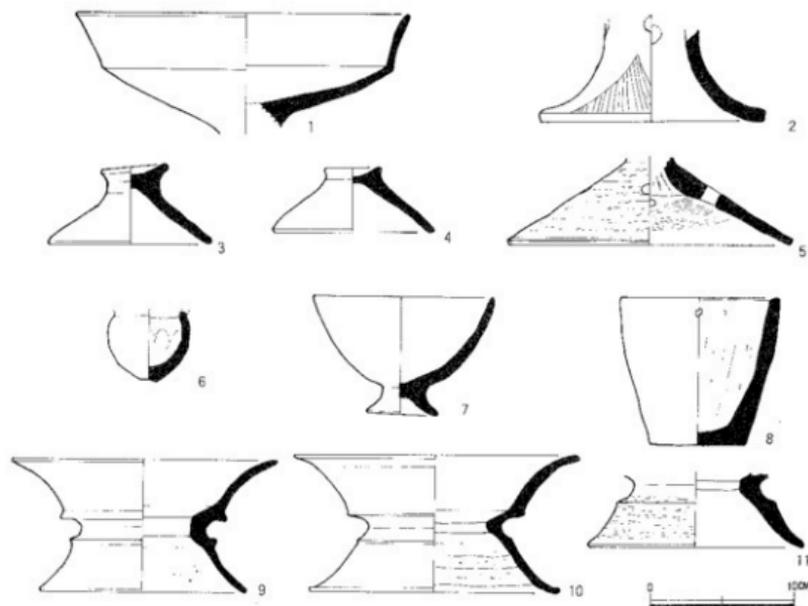


Fig. 25. 京免遺跡SD4出土の上器3 (縮尺1:4)

土器。6は手ずくね上器、7は碗形土器、8は鉢形土器、9～11は鼓形器台。

Fig.24-6は胴内外にタテの刷毛目を残し口縁端面に凹線の痕跡をとどめる。7は頸部にラセン状沈線を巡らす。8は、端面に4条の凹線を巡らす。9は、肩部に連続刺突文を巡らすが刺突は接線に直角に印されている。10は頭部の一部を欠くが3孔の穿孔が確認され、本来対象の位置に2孔づつ穿たれていたと思われる。11～14は、薄手の二重口縁形の甕で、いずれも口縁部内外面ヨコナデ仕上げ、胴部外面は刷毛仕上げで、11肩にはヨコ方向の平行沈線が巡る。14には同部分に雑な波状文を巡らしているが、その上にさらにタテ刷毛が加わっており、いずれも装飾効果は薄い。

Fig.25の1は、荒れ激しく調整不明。2は雑なヘラ掻き鋸歯文を巡らす。3は丹彩され、4は、内外面ヨコナデ仕上げ。6は指頭圧痕、指ナデ痕顕著。7も調整不明。8は内面ヘラ削りであるが、外面の仕上げは不明。口縁部対象位置にそれぞれ1小孔が穿れている。9～11はいずれも丹彩され、11外面にヘラ磨き痕を残す以外は調整不明。9.10は、胴内面にヘラ削り痕を残す。上層出土土器には、中期後葉のものから後期終末大田5式のものが含まれるが、大半は大田5式併行のものである。

1区、2区、3区出土の土器 (Fig.26~30)

S H 2 出土の土器 (Fig.26-1) 1は、くの字形口縁の薄手甕形土器で白褐色を呈す。外面及び口縁部内面はヨコナデ仕上げ、外面にかすかにヨコ方向の刷毛目痕が残る。胴内面はヘラ削りで口縁部外面にスガが付着している。共存遺物がなく所属時期を限定しかねるが、大田5式土器よりやや新しい傾向をもち、古式土師器と考えてよいだろう。

S D 7 出土の土器 (Fig.26-2~4) 2、3は甕形土器、4は高環形土器で、2は口縁部に3条の凹線文が巡る。胴外面に刷毛目を残し、内面はナデ仕上げで指頭圧痕が認められる。3外面にはヘラ磨き状の条線が残されている。内面はナデ仕上げで炭化物がこびりついている。底面は2次の火を受けたためか剝離激しい。4外面は、タテ方向のヘラ磨き、脚部下端に3条の凹線文が巡る。脚部中位に2孔の小孔が穿たれており、欠損した反対位置にも2孔穿孔されていたとみられる。内面は、ヘラ削りである。

S X 9 出土の土器 (Fig.26-5~9) 5、6、8、9は甕形土器、4は高環形土器で、7は壺形土器。5は、内外面とも同一原体によるとみられる荒い刷毛仕上げ、口縁部端面に2条の不明瞭な凹線を巡らす。外面には、スガが付着。6は、外面ヨコナデ仕上げ、内面はヘラ削りののちナデ及び刷毛目加わっている。7は、口縁端面に3条の凹線文を巡らし、列点文を一巡させている。8は、口縁部に5条の凹線文を一巡させる。内外面刷毛で調整したのちヨコナデを加えている。9は、口縁に4条の凹線文を巡らし、胴外面上半は刷毛仕上げ、下半はタテのヘラ磨きで、内面は上半刷毛仕上げ、下半はヘラ削りで部分的に刷毛目を残す。

S D 30 出土の土器 (Fig.26-10、11) 1は壺、2は甕形土器。1は、立上がり部外面に4条の凹線文を巡らし、さらにその上をヨコナデしている。胴内面はヘラ削りである。2は、口縁立上がり部に凹線風の条痕を残すが明瞭でない。外面肩部分に列点文を巡らし、下半はヨコ及びタテ方向の刷毛仕上げである。胴内面はヘラ削り。

S D 31 出土の土器 (Fig.26-12、13) いずれも壺形土器。12は、口縁部から頸部内外面ヨコナデ仕上げ、胴部外面はタテ方向の刷毛加わり、内面はヘラ削り。13は、立上がり部外面に櫛状工具による平行沈線文を巡らす。

S D 43 出土の土器 (Fig.27-1) 高環形土器で、立上がり部はヨコ方向のヘラ磨き、環部はタテ方向のヘラ磨き。

S D 100 出土の土器 (Fig.27-2、3) 2は壺形土器で器台の可能性もある口縁部片。3は甕形土器。2は立上がり端部を平におさめ、端面に5条の凹線文を巡らす。下道山遺跡に類別がある。3は、外面に凹線風の条線4条をめぐる。大概ねヨコナデで仕上げられており、胴部内面はヘラ削りである。

S D 102 出土の土器 (Fig.27-4~11) 4は甕形土器、5、6は器台脚部片、7~11は高環形土器。4は、口縁部に4条の凹線を巡らし、胴内面に刷毛目を残す。5は、外面に多条の凹

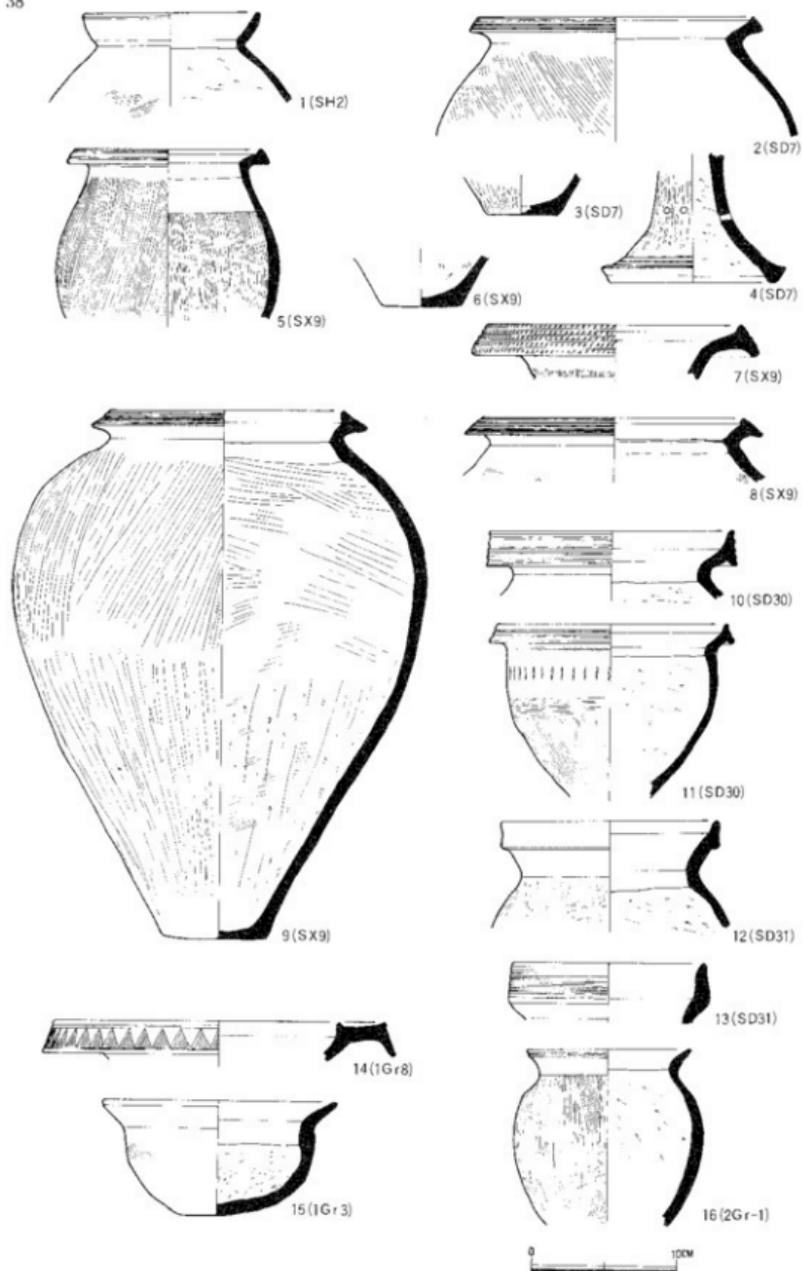


Fig. 26. 草免遺跡1～3区出土の土器1 (縮尺 1:4)

線文を巡らし、下半はタテのヘラ磨き仕上げ。6は上半に刷毛目を残す。内面は、5はヘラ削り、6はヨコナデである。5、6は同一個体と考えられよう。7~11は、いずれも連続成形手法の高坏で、7は外面刷毛目、内面ヘラ削りで絞り痕顕著。8は、立上がり部外面に5条の凹線文を巡らし、坏部内面に刷毛目を残す。丹彩痕跡がある。9は、内外面とも刷毛仕上げ、脚内面はヘラ削りで、脚外面に2条の凹線を巡らす。10は、外面ヨコナデ、脚端部に2条の凹線を巡らす。内面上半にはヘラ削り痕を残し、下半はヨコナデ仕上げ。11は、脚部外面下端に5条の凹線文をめぐる。外面は、タテ方向のヘラ磨き加わり、内面はヘラ削り。9、10には4孔の透し飾り穴、7には5孔の小穴があるがうち一つは貫通していない。

S D 104 出土の土器 (Fig.27-13~15) 13、14は壺形土器口縁部。15は高坏形土器坏部。13 14とも口縁端部に3条の凹線文を巡らし、内外面ともヨコナデで仕上げられている。15は、内外面ヘラ磨きで仕上げられていると思われるが明瞭でない。

S K 105 出土の土器 (Fig.27-16) 16は壺形土器頸部片で、口縁部に三条の浅く幅広い凹線文を巡らす。頸外面はタテ刷毛のあと斜めの列点文を一巡さす。内面上半はヨコナデ、下半は刷毛仕上げ。

S D 108 出土の土器 (Fig.27-18) 18は甕形土器で、口縁外面に櫛状工具による平行沈線文を巡らす。外面肩部に列点文がめぐることが一層していない。胴内面はヘラ削り。

S D 109 出土の土器 (Fig.27-17、19) 19は壺形土器口縁部、17は甕形土器。17立上がり部外面には3条の凹線風条痕が巡るが、沈線上を強くなでたものらしい。肩部に雑な刷毛のあとを残す。口縁部内面はヨコヘラ磨き、胴部内面はヘラ削りである。19の立上がり部外面には、3条の凹線風条痕が巡るが、その上に強いヨコナデが加えられている。口縁部内面にかすかにヨコ方向のヘラ磨き痕が認められる。頸部内面は剝離。

S D 111 出土の土器 (Fig.27-21~22) 20は高坏脚部、21、22は甕形土器。20外面は上半タテ方向のヘラ磨き、下半はヨコヘラ磨き。内面には上半にヘラ削り痕を残し、下半にはヨコ方向のヘラ磨き加わっている。21外面はヨコナデ仕上げで一部刷毛目を残す。胴部内面はヘラ削り。22は、立上がり部外面に3条のかすかな凹線が巡らされているが、上半は強くヨコナデされている。胴部内面はヘラ削りである。21、22ともススの付着が認められる。

S D 112 出土の土器 (Fig.28-1~3) 1、2は甕形土器、3は鉢形土器。1は、口縁端部に3条の凹線文を巡らしヨコナデが加わっている。肩部以下は刷毛調整のあとタテ方向のヘラ磨き加わっている。2は、口縁端面に浅い4条の凹線文を巡らし、胴部外面は刷毛仕上げである。胴内面はヘラ削り。3は、口縁部に凹線4条を巡らし、胴外面はタテのヘラ磨き、口縁部内面はヨコ方向のヘラ磨き仕上げ。胴内面には底部に至るまで不定方向のヘラ磨き加わっている。外面にススの付着していることが注意される。多様な土器群の併行関係を探ぐる上で一つの基準になる。

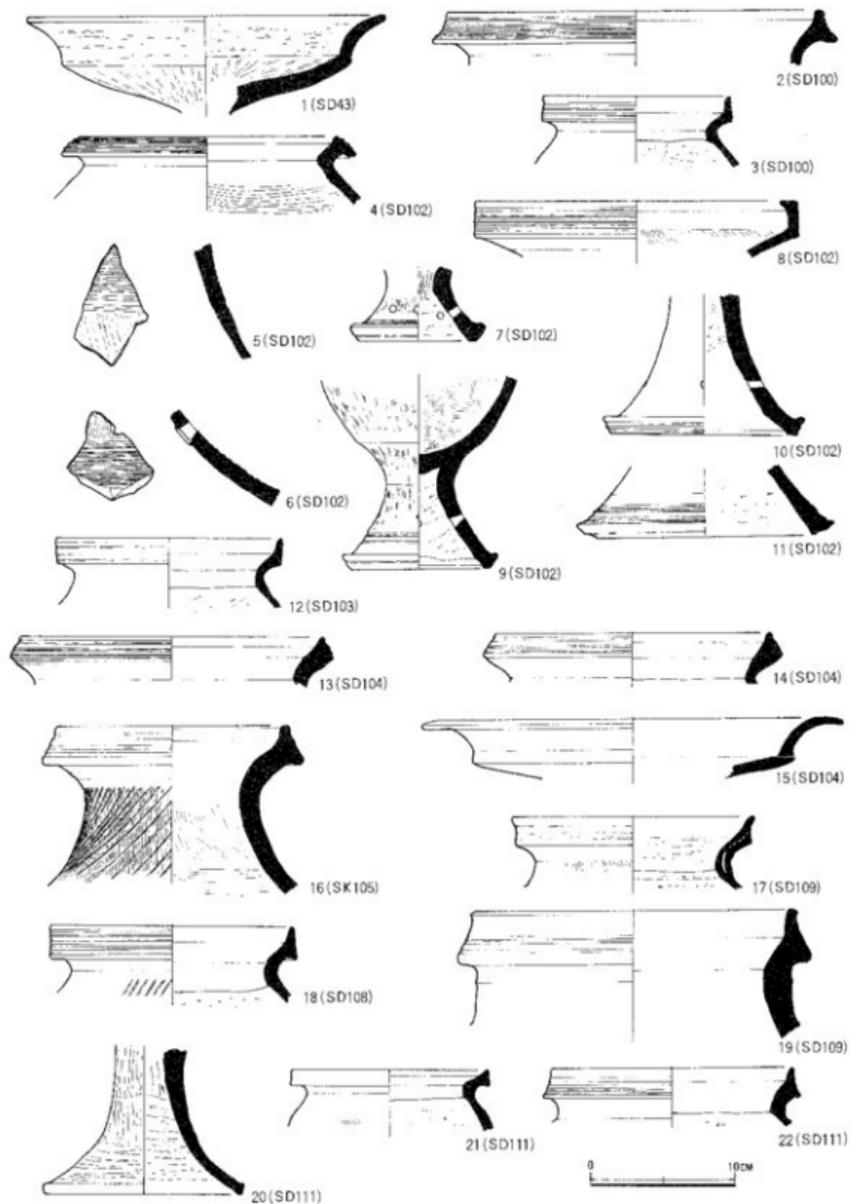


Fig. 27. 京免遺跡 1～3区出土の土器 2 (縮尺 1:4)

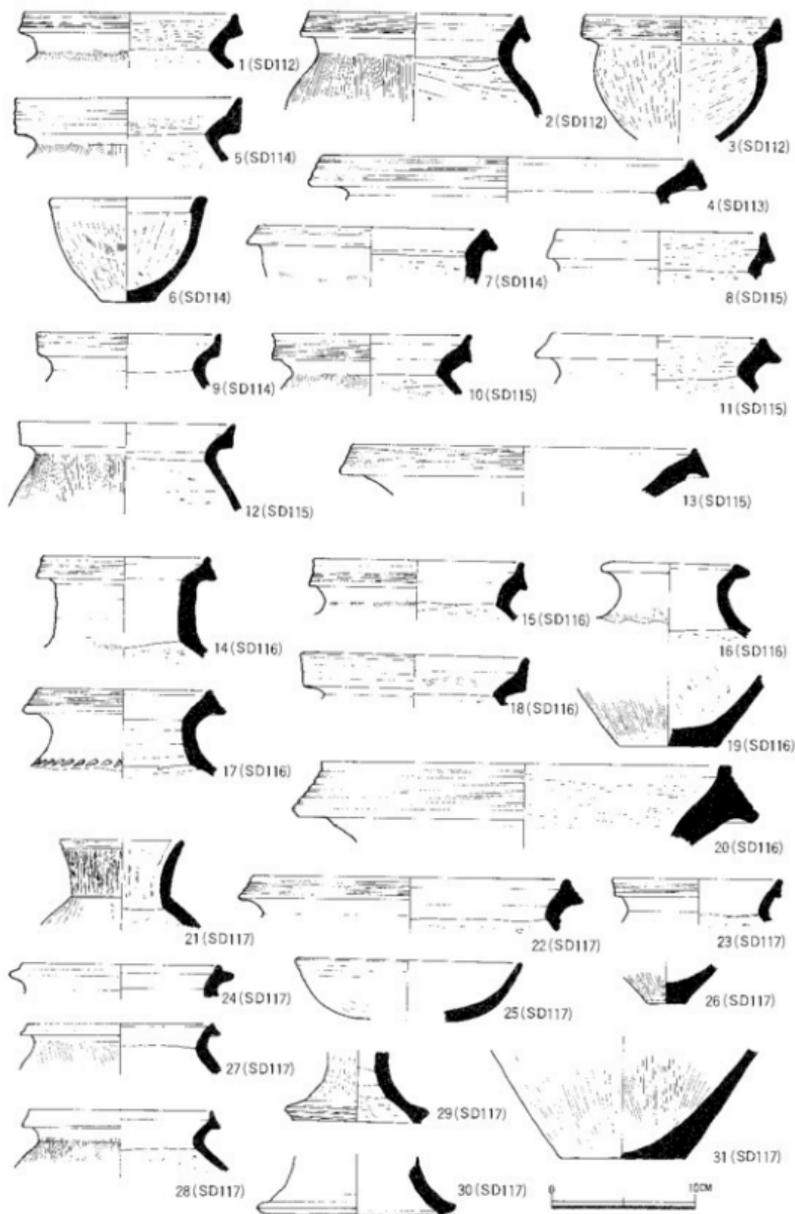


Fig. 28. 京免遺跡 1～3区出土の土器 3 (細尺 1 : 4)

SD 113 出土の土器 (Fig.28-4) 4は甕形土器。口縁部外面に3条の凹線を巡らし、胴部内面はヘラ削り。

SD 114 出土の土器 (Fig.28-5~7) 5は甕形土器、6、7は鉢形土器。5は、立ち上がり部外面に凹線風の凹凸をもつ。外面肩部と口縁部内面に刷毛目を残し、胴内面はヘラ削りである。6外面は、刷毛目の上にヨコ方向のヘラ磨きをして、部分的にヨコナデを加えタテ方向のヘラ磨きで仕上げている。内面はヘラ削りである。7は、口縁部端面に一条の凹線文を巡らし、大概ね外面はヨコナデ仕上げ、一部に刷毛目を残す。胴内面はヘラ削り。

SD 115 出土の土器 (Fig.28-8~13) 8、11が壺形土器、9、10、12が甕形土器、13は器台。8は外面ヨコナデ、内面はヨコ方向のヘラ磨きで仕上げている。内面頸部以下はヘラ削り。9は、立上がり部に凹線風条痕3条をめぐらし、ヨコナデが加えられる。内面はナデ仕上げ。外面にススがかすかに付着している。10は、立ち上がり部下端に3条の凹線を巡らし、上半は強くヨコナデされている。肩部以下は、荒いタテ刷毛仕上げ。胴内面はヘラ削り。11は、外面ヨコナデ、内面ヨコ方向のヘラ磨き、内面頸部下半はヘラ削り。12は、口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面はタテの刷毛仕上げ、胴内面はヘラ削り。13は、口縁端面に4条の凹線文を巡らし、内外面とも大概ねヨコナデ仕上げ、部分的に刷毛目を残す。

SD 116 出土の土器 (Fig.28-14~20) 14、16、17が壺形土器、15、18、19が甕形土器、20は器台形土器。14は口縁部端面に4条の不明瞭な凹線が巡る。内外面とも大概ねヨコナデ仕上げ、外面肩部に刷毛目を残す。内面の頸部以下はヘラ削り。15は、口縁部端面下半に3条の凹線を巡らし、上半は強くヨコナデされている。頸部に残されている刷毛目はヨコナデののちにつけられたもの。16は、内外面大概ねヨコナデ仕上げで、外面肩部分に刷毛目を残している。内面の頸部以下はヘラ削り。人意的に頸部下半を打ちかかれたとみられるもので、器台に転用されたものだろう。ススの付着はない。17は、口縁端面に3条の凹線を巡らせ、内外面ともヨコナデ仕上げ、肩部分に連続刺突文を一巡させる。この土器も頸部下半で破られ、器台に転用された可能性がある。18は、内外面ヨコナデ仕上げ、内面にヨコ方向の刷毛目を残している。19は、外面及び底面に刷毛目を残し、内面はヘラ削りである。20は、口縁部を平坦におさめ、端面には6条の沈線を巡らす。外面はヨコナデ、内面はヨコ方向の幅の広いヘラ磨き痕を残す。

SD 117 出土の土器 (Fig.28-21~31) 21、31が壺形土器、22~24、26~28が甕形土器、25、29、30が高坏形土器。21は直口壺で、口縁部と頸部屈曲部にそれぞれ一条の沈線を巡らす。この二条の沈線間にヨコナデの上暗文風のヘラ磨きを加えられている。口縁内面もタテ方向のヘラ磨きで仕上げられている。胴部内面はヘラ削り。22は、端面に3条の凹線を巡らす他ヨコナデ仕上げで、胴部内面はヘラ削りである。23は、端面に2条の凹線を巡らす。内外面ヨコナデ仕上げで、胴部内面はヘラ削りである。外面にススが付着している。24はヨコナデ仕上げ。25は外面にヘラ削り痕を残す。端面には凹線の変化した凹凸がみられる。内面は剝離激しいが

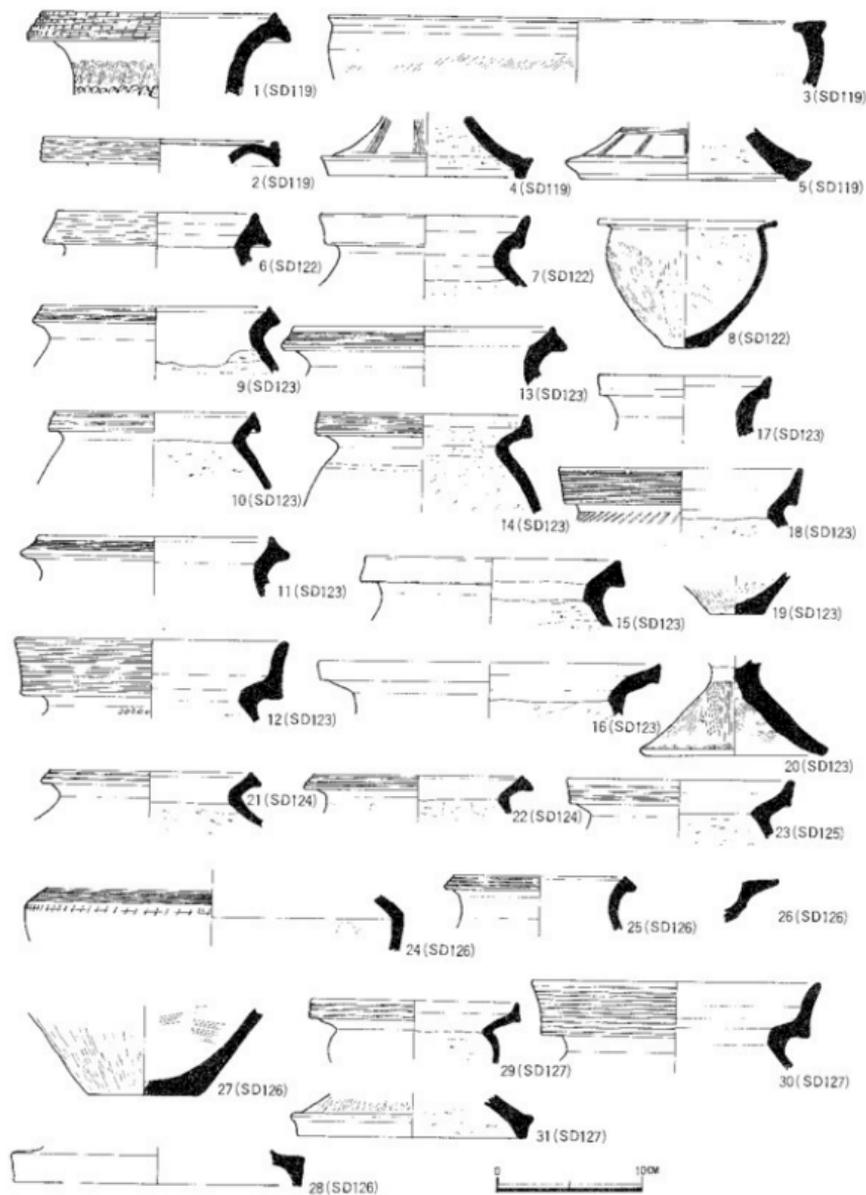


Fig. 29. 京免遺跡 1～3区出土の土器 4 (縮尺 1 : 4)

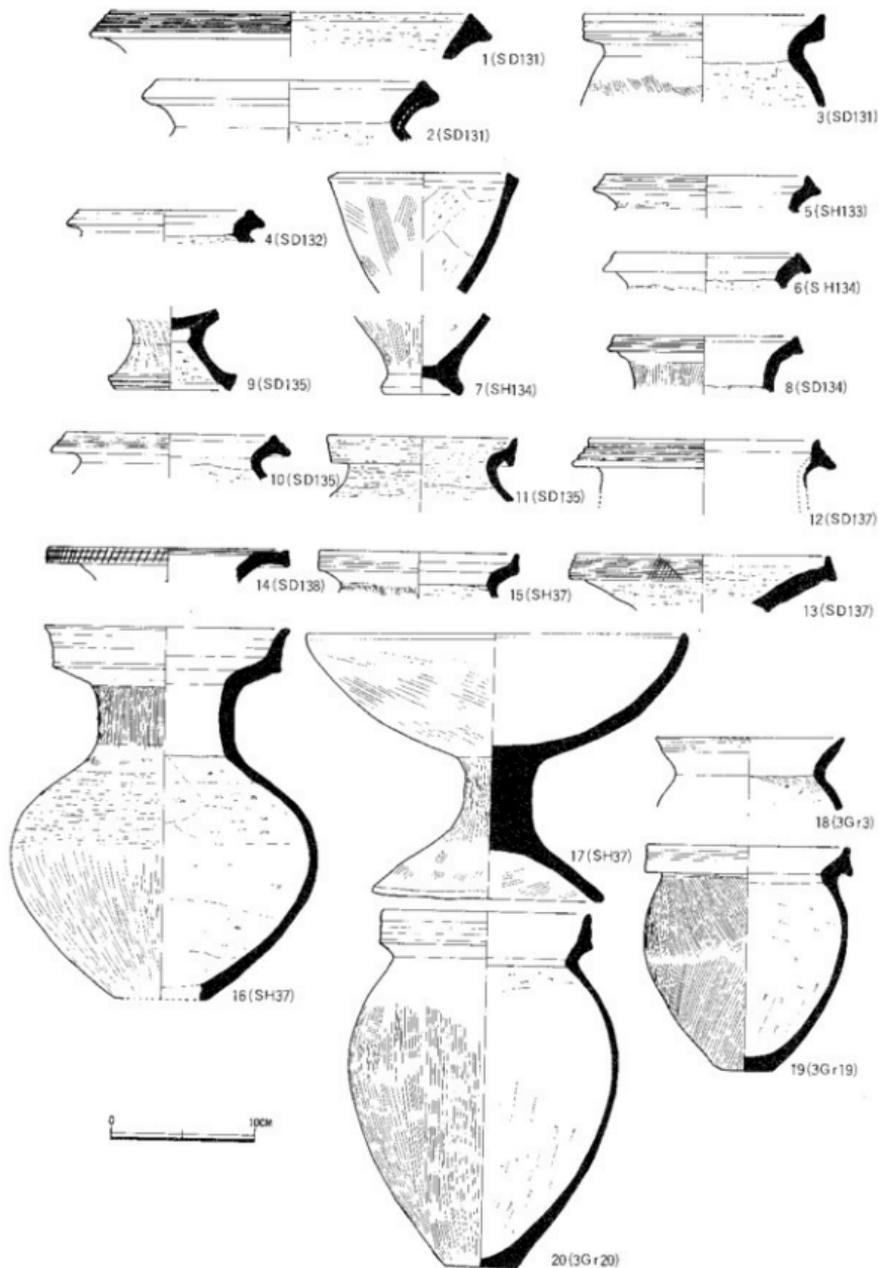


Fig. 30. 京免遺跡1～3区出土の土器5 (縮尺1:1)

ヨコナデ仕上げとみてよい。26は、外面及び底面は刷毛仕上げ、内面はナデ仕上げで小形甕底部であろう。27は、口縁部内外面ともヨコナデ、胴部外面にはタテ方向の刷毛目が残され、胴内面は不明。28は、口縁部内外面ヨコナデ仕上げ、外面肩部分にタテ方向の刷毛目を残す。胴内面はヘラ削り。29は、外面タテ方向のヘラ磨き、内面上半は指ナデ、下半ヘラ削り痕を残す。脚部端面には2条の凹線を巡らす。30は、外面ヨコナデ仕上げ、内面は刺雑激しく不明。31は、外面タテ方向のヘラ磨き、底面はナデで、内面は荒い刷毛仕上げである。

SD 119 (SD 134) 出土の土器 (Fig. 29-1~5) 1、2は壺形土器、3~5は高環形土器。1は、口縁端部を肥厚させ端面に4条の凹線を巡らす。さらにその上に斜めの列点文を巡らしている。頸部外面にはタテの刷毛目が残り、頸部下端に指頭圧痕文が巡る。2は大きく外反する甕形土器口縁部片で、端面に3条の凹線を巡らす。内面屈曲部に凹線を一条巡らす。この凹線から端部に至る面に櫛描波状文が巡らされている。3は、内外面ヨコナデ仕上げで、内外面とも斜めの刷毛目をとどめる。4、5は外面ヨコナデ仕上げ、外面に櫛状工具による装飾を施している。いずれも内面はヘラ削りである。

SD 122 出土の土器 (Fig. 29-6~8) 6、7は壺形土器、8は甕形土器。6は口縁端部を肥厚させ、端面に3条の浅い凹線を巡らす。内外面ともヨコナデ仕上げ。内面の頸部下半以下ヘラ削りである。8は、くの字形口縁で口縁端部をわずかに肥厚させる。外面はタテ方向の刷毛仕上げ、内面はヘラ削りである。

SD 123 出土の土器 (Fig. 29-9~20) 11~13、15、17が壺形土器、9、10、14、18、19は甕形土器で、20は蓋形土器、16は鉢形土器か。9は、口縁端面に3条の不明瞭な凹線をめぐらし、口縁部内外面はヨコナデ仕上げ、胴部内面はヘラ削りである。10は、口縁端面に3条の凹線を巡らす。うち2条は痕跡。内外面ヨコナデ仕上げ、胴部内面は不定方向のヘラ削りである。11は、端面に4条の凹線を巡らし、内外面はヨコナデ仕上げ。12は、立上がった口縁外面に櫛状工具による平行沈線文を巡らし、さらにヨコナデが加えられている。頸部に刺突文が残されているが、本来一巡しているかどうかは不明である。13は、肥厚した口縁部端面に4条の細かい凹線を巡らす。外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコ方向のヘラ磨き、頸部下半は不定方向のヘラ削りが加わっている。15は、内外面ヨコナデ仕上げ、内面の一部に刷毛目を残している。胴部内面はヘラ削り。16は、内外面ヨコナデ、胴内面はヘラ削りである。17は、内外面ともヨコナデ仕上げ。18は、やや外反して立上がる口縁部に櫛状工具による平行沈線文を巡らす。頸部下半に列点文を一巡らす。胴部内面はヘラ削り。ススの付着が認められる。19外面はヘラ磨き、内面はヘラ削り、底面はヘラ磨き。内外面に丹彩痕跡を示すとみられる部分がある。20は、内外面刷毛仕上げ、端面はヨコナデでつまみ部内面はナデられている。

SD 124 出土の土器 (Fig. 29-21、22) いずれも甕形土器。肥厚した端面に21は2条、22は3条の凹線を巡らす。内外面ヨコナデ仕上げで、胴部内面はヘラ削り、21にはススの付着が

認められる。

SD 125 出土の土器 (Fig.29-24~28) 24、25、27は壺形土器、26、28は高環形土器。24は、くの字形に屈曲するソロバン玉状の刷毛をもち、上半にいわゆる多条の凹線文を巡らす。刷毛屈曲部には刺突文を巡らし、内外面ヨコナデ仕上げである。25は、肥厚させた端面に3条の凹線を巡らす。内外面ヨコナデ仕上げ。26は、水平に拡張する立上がり部端面に5条の凹線をめぐらす。27は、外面ヘラ磨き、内面ナデ仕上げで、部分的に刷毛目を残す。28は、内外面ヨコナデ仕上げである。

SD 127 出土の土器 (Fig.29-29~31) 30が甕形土器、29は鉢形土器、31は高環形土器。29は、口縁部外面に3条の凹線文を巡らす。内外面ヨコナデ、胴内面はヘラ削り。30は、立ち上がった口縁部の外面に櫛状工具による平行沈線文を巡らす。内外面ヨコナデ仕上げ。31は外面タテヘラ磨き及びヨコナデ仕上げ、内面はヘラ削り。いずれも、SD 123 よりの混入。

SD 131 出土の土器 (Fig.30-1~3) 1、2は壺形土器、3は甕形土器。1は、肥厚させた口縁端面に5条の凹線を巡らす。外面ヨコナデで内面はヨコ方向のヘラ磨き。器台形土器の可能性もある。2は、内外面ヨコナデ、内面頸部下半はヘラ削りである。3は、やや立ちあがりをみせる口縁部外面に2条の凹線を巡らす。内外面ヨコナデで、外面に刷毛を残す。胴部内面はヘラ削りである。

SD 132 出土の土器 (Fig.30-4) 4は甕形土器で口縁端部を肥厚させ端部を上方に拡張している。内外面ヨコナデで外面にスガが付着、内面の頸部以下はヘラ削りである。

SH 133 出土の土器 (Fig.30-5) 5は甕形土器。口縁端部を肥厚させ上方にやや拡張をみせる。口縁部外面には、凹線文風の2条の凹凸がみられる。内外面ともヨコナデ。

SH 134 出土の土器 (Fig.30-6、7) 6は甕形土器、7は鉢形土器。6は、口縁部内外面ヨコナデ、外面頸部以下はタテの刷毛仕上げで内面はヘラ削りである。口縁部の一部にスガが付着している。7は外面タテ方向の刷毛仕上げ、内面はヘラ削りである。台部に2次の火を受けた痕跡がある。

SD 135 出土の土器 (Fig.30-9~11) 11は壺形土器、10は甕形土器、9は高環形土器。9は、連続成形手法による高環で、外面はタテ方向のヘラ磨き仕上げ、内面はヘラ削りで、脚端部に2条の凹線をめぐらしている。本来丹彩されていたとみられるが、痕跡は明瞭ではない。10は、口縁部外面に2条の凹線文をめぐらし、内外面ヨコナデ仕上げ、内面頸部下半はヘラ削り、外面にスガの付着がみられる。11は、赤褐色を呈する壺形土器で、口縁部外面に凹線文2条をめぐらし、内外面とも細かいヘラ磨きが全面に加えられている。内面頸部以下はヘラ削り。

SD 137 出土の土器 (Fig.30-12、13) 12は壺形土器。13は器台形土器。12は、上下に拡張する口縁部片で、外面に3条の凹線を巡らす。13は内外面ヨコ方向のヘラ磨き仕上げで、口縁部端面に5条の凹線文を巡らす。さらにヘラ描の縦線文を一巡。

S D 138 出土の土器 (Fig.30-14) 14は、壺形土器口縁部。外びらきのにびた口縁端部に2条の凹線文を巡らし、さらに列点文を一巡さす。内外面ヨコナデ仕上げで、内面に3条の凹線を巡らす。

S H 37出土の土器 (Fig.30-15~17) 16が壺形土器、15が甕形土器、17は高坏形土器。15は口縁部内外面ヨコナデ仕上げ、胴部外面はタテ方向の刷毛仕上げ。内面はヘラ削り。16は、口縁部内外面ヨコナデ仕上げ。頸部外面はタテ方向の刷毛仕上げ、内面はヨコナデ。胴部外面は上半ヨコ方向のヘラ磨きで下半はタテ方向のヘラ磨き、内面はヘラ削りである。底部は大半を欠くが平底の一部を残す。17は、坏部外面刷毛調整のあとヨコナデ及びヘラ磨きで仕上げている。内面はナデ仕上げと思われるが不明。筒部及び脚部外面はタテのヘラ磨き、脚内面は刷毛仕上げ。全般に淡黒色を呈す。

遺構外出土の土器 (Fig.30-18、19、20、Fig.31-1) 18~20は甕形土器、21は壺形土器。18は口縁端部にくせのある段をもつ。口縁部内外面はヨコナデ仕上げ。胴外面は刷毛仕上げで内面はヘラ削り。外面にススの付着がみられる。底面は2次的に火を受けた痕跡が顕著である。20は、口縁部内外面ヨコナデ仕上げ。胴部外面にはタテ方向の刷毛目が残る。胴内面はヘラ削りである。

1は、頸部外面にタテ方向の刷毛目調整を加えたのち6条以上の沈線を巡らす。肩部分にS字状のスタンプ文様が二列巡っていたとみられる。頸部内面はヨコナデ、胴部に刷毛目痕跡が残るが大部分剝離して不明である。



Fig.31. 京免遺跡1~3区出土の土器6 (縮尺1:4)

② 4区、5区の概要

3区に接続する4区は、東西道路予定地で、南半はすでに造成されており、発掘面積は約27㎡の三角形を呈する狭い調査区である。5区は、2・3区の南北道路予定地より約50m西による平行して走る道路予定地のうち遺跡範囲西端にかかる約85㎡の調査区で、西半はすでに水田造成により削平され、南はすでに造成されていた。

4区・5区で検出した遺構は、住居外周溝他の溝、土壌、大形の掘方をもつ柱穴等である。

SD 140は、幅40～50cm、検出面よりの深さ20～30cmの環状に廻るとみられる住居外周溝の一部で、3区のSD 120に接続するものとみられる。この円に囲まれた部分に多数の柱穴が見されたが、SD 140に対応する竪穴住居の柱の組み合わせ等は不明。

SD 141、SD 142も同様の住居外周溝と考えられ、SD 142はその西部分の一部、SD 141は東部分の一部とみられる。SD 141は、溝幅約70cm、深さは検出面で6～7cm、SD 142は幅80～90cm、深さ5cmといずれも浅い。両溝とも、柱根痕跡を残す掘方直径50cm前後の円形柱穴によって切られている。

SD 143は、住居外周溝の可能性はあるが、検出部が狭く明確ではない。溝幅約70cmで深さは15～20cmであるが、西部で溝に平行に段が走っており、2本の溝が切り合っている可能性がある。

SD 144は、溝幅70cm、深さ15cmの溝。外周溝かどうかは不明。

遺跡名	区画	遺構種別	時期	備 考
SD 140	4-1	住居外周溝	MⅡ	SD 120に接続
SD 141	4-2	*	MⅢ	
SD 142	4-2	*	?	
SD 143	4-2	溝	?	2本の溝が平行して走り合う
SD 144	4-3	*	?	住居外周溝の可能性はあるが不明
SD 145	4-4	*	?	
SD 51	5-1	*	LⅠ	小砂器影土器
SD 52	5-1	住居外周溝	MⅡ?	
SD 53	5-1	*	MⅢ	
SD 54	5-2	溝	LⅠ	
SD 55	5-2	*	LⅠ	
SK 56	5-2	土 版	MⅢ	直径65cm、深さ15cm程度の不整形土版、塗彩土器1点が土版で出土
SD 57	5-3	溝	?	
SD 58	5-3	住居外周溝	?	
SK 39	5-4	土 版	LⅠ	布目土版のある塗彩土器出土、SD 60、61、62を穿る
SD 60	5-4	住居外周溝	?	SD 61と重なった部分で中期後葉の土器片が出ている。
SD 61	5-4	*	LⅠ	
SD 62	5-4	*	MⅡ?	

表3 4区・5区遺構一覧表

* MⅡ：弥生時代中期後葉 LⅠ：弥生時代後期前葉（大田十二社1～2式期）

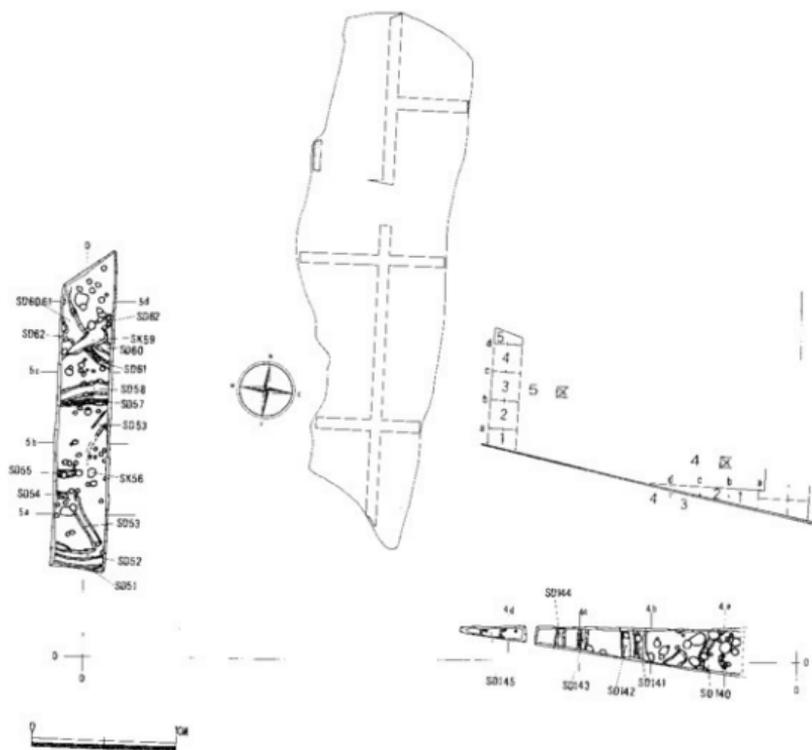


Fig. 32. 京免遺跡4、5区遺構配置図(縮尺1:400)

SD 145は、幅1.5m、深さ10~13cmで、切合による重なりがないとすれば、溝底幅が、通常の住居外周溝に較べ広すぎる。西辺の溝底部分で2本の柱穴を切っており、東肩部で2本の柱によって切られている。

4区の調査の際注意されたのは、竪穴住居ないしは掘立柱建物構成するとみられる柱の掘方が、他の地区に較べ大きく深い点である。多くの柱穴から弥生式土器片が出土しており、埋土の状況からも、弥生時代のもののみでまちがいはなく、時期による違いとは考えられない。

また、4区検出の柱穴のうち直径が50~80cmのものが13あるが、このうち4つの柱穴には、柱の痕跡が明瞭に残されていた。これによると、柱痕跡の直径は15cm~25cmで、それがただちに柱の太さを示すとはいえないがその値は他の弥生時代の柱穴の柱痕跡が示す値とほとんど差はない。京免遺跡の地盤は一般に軟弱で、この部分は特に柔らかく、そこで礎板の埋設によるものと考えたが、断面観察では必ずしも礎板の痕跡を確認することはできなかった。しかし、

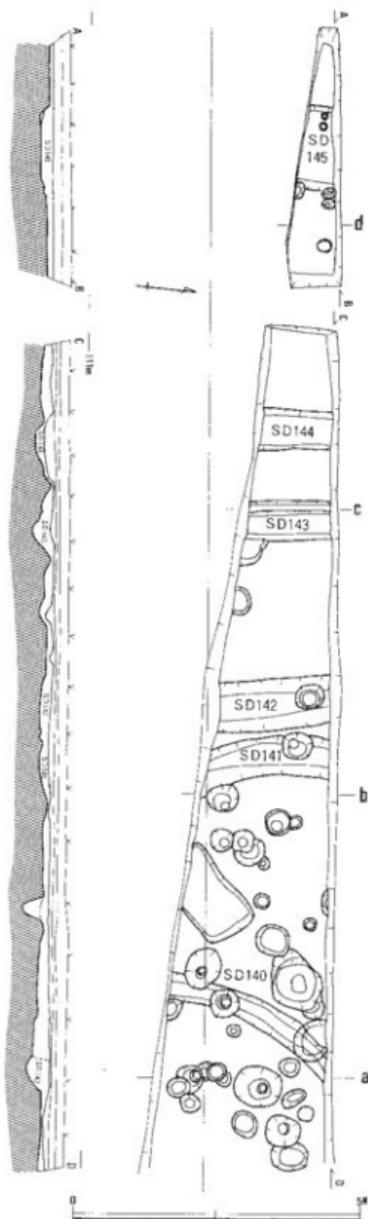


Fig. 33. 京免遺跡4区平面図(縮尺1:100)

柱の根固めに用いたとみられる大小の石が柱穴内に残されている例もしばしばあり、礎石に用いられたかと思われる平石が柱穴底に残されているものもあって、これら柱穴の掘方の大きさは、礎板等の施設を埋めるためのものと考えられよう。

5区は、後世の擾乱により検出面の凹凸が激しかった。

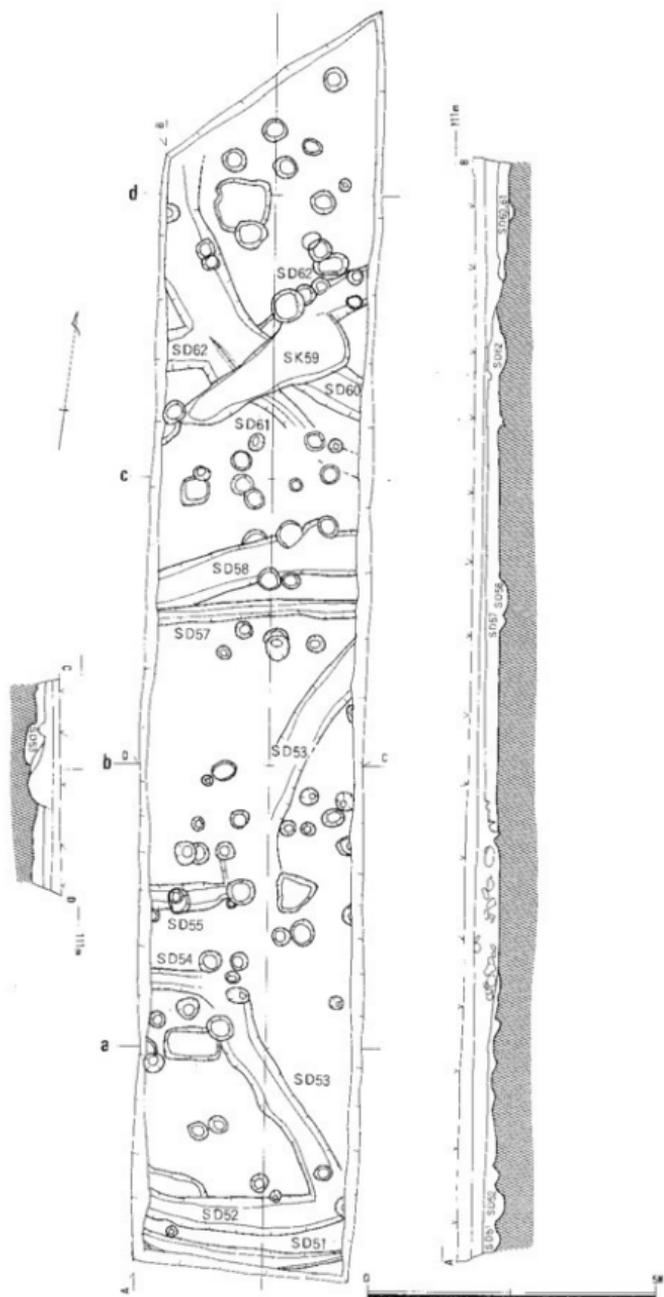
SD51は、幅20~30cmの溝で、検出面からの深度約7cmと浅い。住居外周溝と考えられるが、必ずしも明確ではない。埋土中に完形品の小形直口壺(Fig.36-3)が発見された。

SD52は、SD58に連なる住居外周溝とみられ、SD52とSD58で囲まれる周溝の直径は、11~12mであるとみられる。溝幅50~60cm、深さ約15cmである。東端でSD53と切り合うが、断面観察の結果も切合関係は明瞭とならなかった。

SD53は、東方に延びて環状に閉じる住居外周溝の一部とみられるが、検出部中ほどを後世の擾乱によって削り取られている。溝幅は、50~60cm、検出面よりの深度は10~30cmである。

SD57は、幅約30cm、深さ5~6cmの直線状にのびる溝で、SD58は溝幅75cm前後で深さ10cm、SD52に連なる住居外周溝の一部とみられる。

SD60は、溝幅約70cm、深さ6cm。



跡Fig. 34. 京免遺跡5区平面図(縮尺1:100)

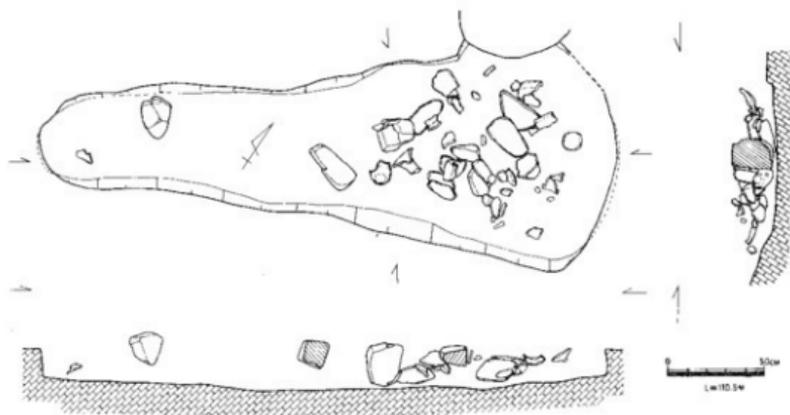


Fig. 35. 5区S K 59平面図、断面図（縮尺1:30）

SD 61は、溝幅40cm、深さ4～6cmで、両者は西部分で合流しているが、切合は不明。西部分の溝底の方が深い。東北へ伸びる住居外周溝と考えられる。

SD 62も、幅約90cm、深さ約10cmの住居外周溝で、北に延びて環状に閉じるものとみられる。

大田2式土器を包含していた土壌S K 59によって、SD 60、61、62は切られている。

S K 59は、東短辺1m、西短辺50cmで長辺約3mの機能不明の土壌であるが、埋土中には大小の礫とともに、比較的まとまって土器片が出土した。いずれも大田2式土器に属するものと判断されるが、大田2式の基準資料に比較して古い様相をもつことは確かである。一点完形の蓋形土器（Fig. 36-10）が出土しているが、これには布目圧痕が残されていた。

4区、5区出土の土器

SD 141出土の土器（Fig. 36-1）1は、台付壺と考えられる。くの字形に張り出す胴屈曲部に2条の凹線文を巡ぐらし、外面はタテ及びヨコ方向のヘラ磨きを加えられる。脚部外面は、ヨコナデ仕上げ、胴部内面はヘラ削りのあとナデ仕上げされているとみられるが、ヘラ削りの痕跡は不明瞭である。脚内面はヘラ削り、円盤充填法により杯部が閉じられているとみられ、この部分に剝離のあとが観察される。

SD 53出土の土器（Fig. 36-2）2は、高杯形土器口縁部で、外面に9条の凹線文を巡らしている。内面は、刷毛目調整のちヨコナデ仕上げ、端面に3条の凹線をめぐらす。

SD 51出土の土器（Fig. 36-3）3は、小形壺形土器。外面の口縁部下半は、タテ方向のヘラ磨き、胴部は大概ねヨコヘラ磨きで、胴部下半に接合痕がみられ、その部分より下は、タテのヘラ磨きを加えられている。内面は、指ナデによって仕上げられているとみられ、一部に指

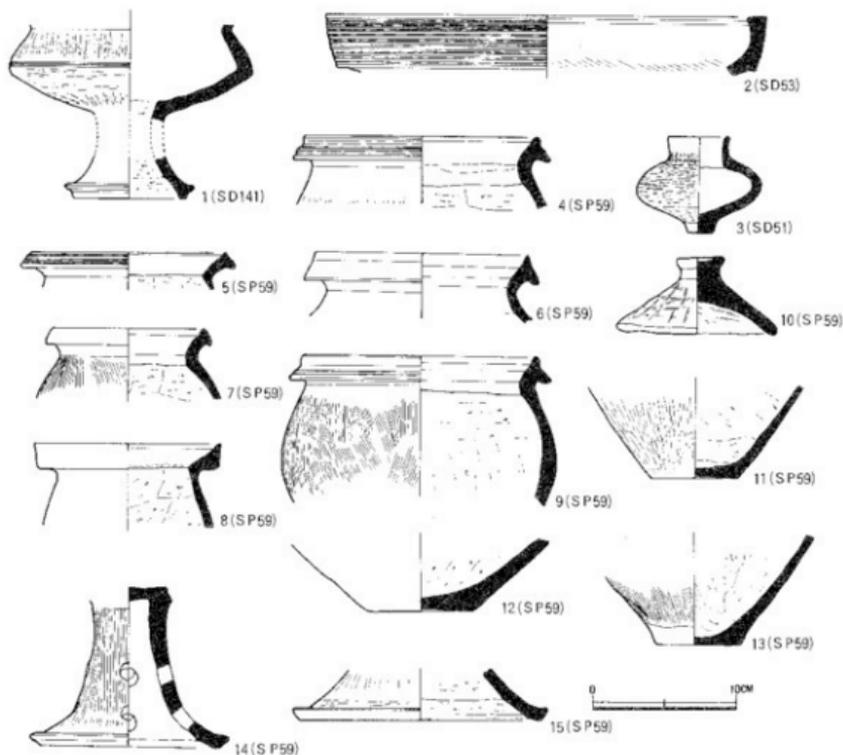


Fig. 36. 京免遺跡4、5区出土の土器(縮尺1:4)

の擦痕らしい条線が残っている。

SK59出土の土器(Fig. 36-4~15) 11, 12は壺形土器底部。4~9, 13は甕形土器、14, 15が高杯形土器で、10は蓋形土器、4~7, 9は、口縁部を上下に拡張し、4, 5, 9は端面に凹線文ないしは凹線文風の凹凸を残すが、6, 7はヨコナデによって口縁部を仕上っている。4, 7, 9, 13は、胴外面に刷毛目をとどめている。8は、直上に口縁をやや立上げらせ。ヨコナデ仕上げ、内面の一部に刷毛目を残す。いずれも、胴部内面はヘラ削りである。11は、外面ヘラ磨き12もその可能性があるが明瞭でなく、ともに内面はヘラ削りである。14は、外面タテ方向の刷毛仕上げ、内面ヘラ削りで、脚端部はヨコナデで仕上っている。15は、外面タテ方向の刷毛調整のあとタテ方向のヘラ磨きを加えられ、丹彩されている。内面はヘラ削りである。10は、外面、タテ及びヨコ方向のヘラ磨き仕上げ、内面も雑にヘラ磨をされている。端部に布目瓦痕が残されている。

③ 6区、7区の概要

6区及び7区は、水田の造成によって相当遺構面が削り取られている。6区はかろうじて第3層の黒色土層が残存していたが、7区南半は一段深く削りこまれており、遺構の遺存状況は悪く、特に西部はすでに黄褐色の地山面が水田耕土下に露呈しており、遺構内にはのみ黒色土が残存していた。6区、7区で発見された主な遺構は、住居外周溝、竪穴住居址、掘立柱建物、土器溜等で、6区南端、1～4グリッド部分で弥生時代前期の土器片がまとめて発見された。削り度及び柱穴は多数存在したことを考えると、本来3区のように遺構が密集していたことが考えられる。

SD16は、幅30～50cm、深さ13～17cmの住居外周溝と考えられる溝で、幅45～65cm、深さ5～10cmの溝SD17と切り合い両者はほぼ平行して北西部に延び環状に閉じていたものと思われる。両者の断面観察による切合関係は、必ずしも明確でない。SD16ないしはSD17の埋土には、大田十二社3式土器に近い様相をもった変形土器1点(Fig.40-3)が残されており、その遺存状況は本来完形品であったことを考えさせる。

SD18は、幅20～35cm、深さ15～17cmの直線上に掘られた溝で、溝底のレベからみて、SD16に取り付け排水溝とみられる。

SD19は、梁間2間、桁行1間以上の建物で、東半は用地外に広がっているとみられるが、柱穴の掘方はそれぞれ径50cmの円形で、柱そのものの痕跡はいずれの柱穴からも検出されなかった。各柱間心々距離は、P1～P2、2、60cm、P2～P3、1、80cm、P3～P4、2、00m、P4～P5、2、60mである。このうちP2とSD16、17の間には明瞭な切合関係があり、SD16、17の方がP2を切っていた。従って、SB19は全体の規格が不明なものの梁間二間以上の弥生時代後期中葉以前の掘立柱建物であることは確かなように思われる。

遺構名	位置	遺構種別	時期	備 考
SD 16	6-11・12	住居外周溝	LⅡ?	SD17と切り合う住居外周溝、対応する住家は明確とならず
SD 17	6-11・12	溝	LⅠ?	MⅢ～IⅠまでの土器を含む
SD 18	6-12	溝	LⅡ	SD16には取り付く排水溝、出土土器はすべて同種大田2～3式の中期の土器とみられる
SB 19	6-10	掘立柱建物	MⅢ～LⅠ	梁行2間の建物、東半は調査区外にのびる。中期～大田1式土器を含む
SX 149	6-5	土器溜	LⅠ	完形変形土器2点、なんらかの遺構に伴うものと思われるが不明
SD 155	6-3	溝	LⅠ	
SD 156	6-2	*	*	
SD 157	6-3	*	MⅢ	SX159下層で発見された溝
SX 159	6-3	土器溜	*	弥生時代中期後葉の大形土器片の1次堆積とみられる土器溜
SD 158	7-3	溝	MⅢ	
SD 20	7-4	*	?	
SB 71	7-8	掘立柱建物	LⅠ	1間×1間の長方形の掘立柱建物、大田2式土器を含む
SD 154	7-10	溝	LⅠ	環状の溝
SD 153	7-10	住居外周溝	MⅢ?	S1172に対応する住居外周溝とみられる
SD 152	7-11	竪穴住居址	*	S1172の壁体溝とみられる溝
SD 151	7-11	住居外周溝	?	小形扁平片刃石
SH 72	7-11	竪穴住居址	MⅢ?	S-6本で構成される竪穴住居、柱位置は明確でない

表4. 6区、7区遺構一覧表

* MⅢ:弥生時代中期後葉

LⅠ:弥生時代後期前葉(大田十二社1～2式期)

LⅡ:弥生時代後期中葉(大田十二社3式期)

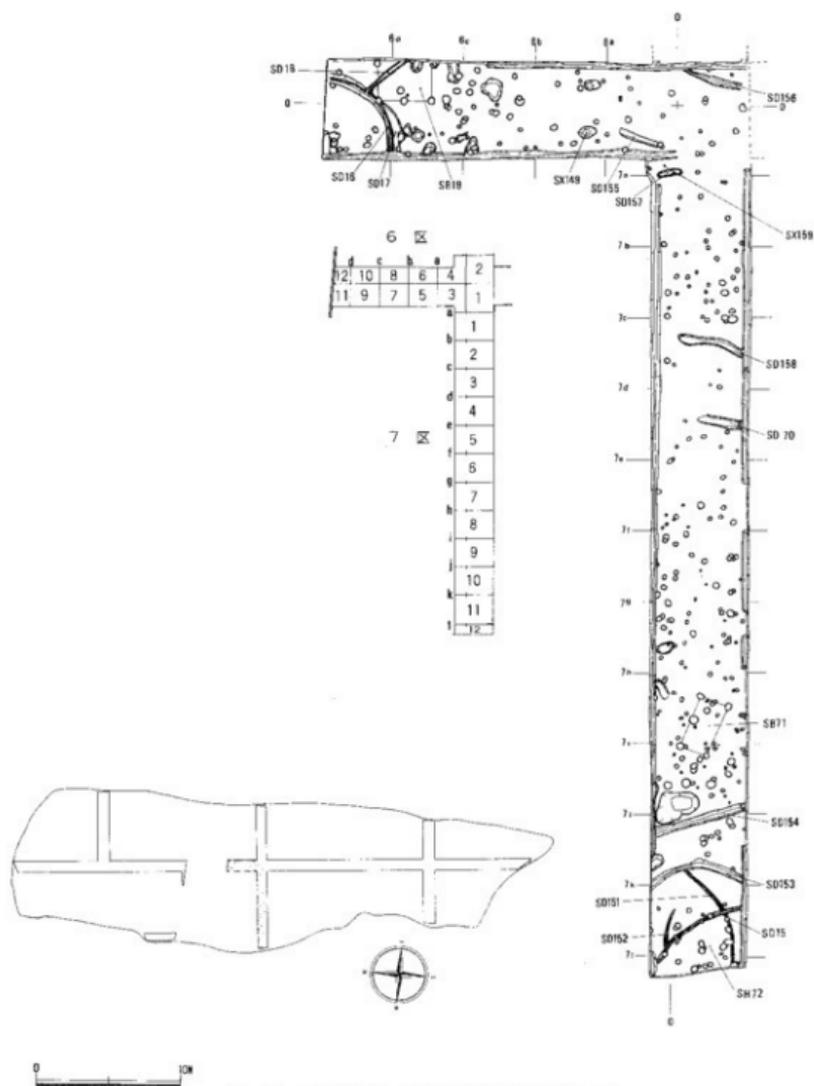


Fig. 37. 京免遺跡 6、7区遺構配置図 (縮尺 1 : 400)

なお、SD19の西南部に4本の径35cmの円柱柱穴が見られるが、これは鎌倉時代とみられる勝間田焼小皿が落ちこんでおり、埋土も弥生のものと異なり灰色粘土が埋まっていた、鎌倉時代頃の遺構と思われる。この時期の遺物は、京免遺跡では水田耕土層に含まれかなり多量に発

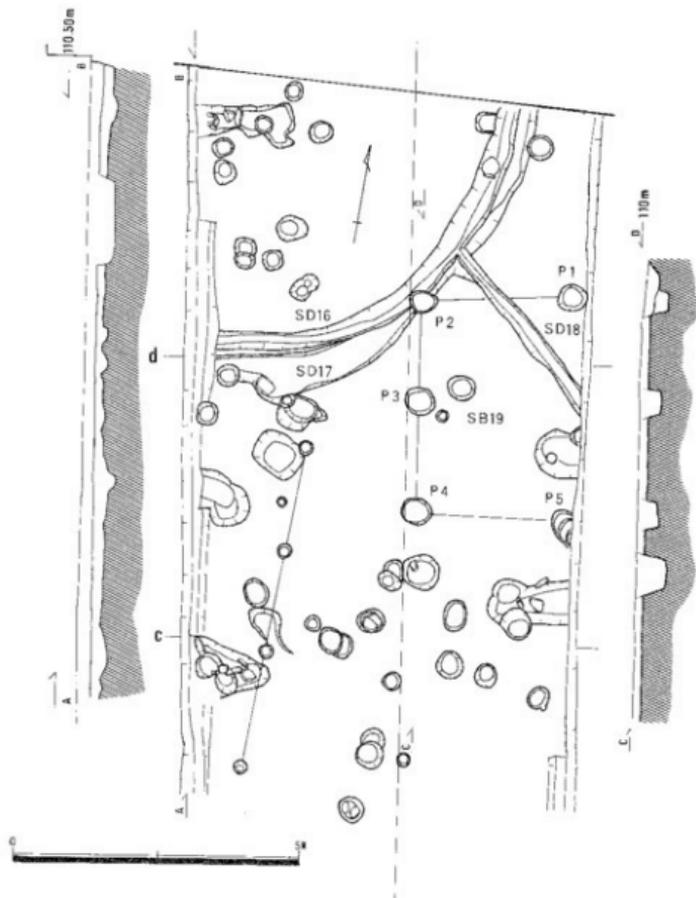


Fig. 38. 京免遺跡6区平面図(縮尺1:100)

見されているが、遺構として確認されたのはこの他完形の高盤2個を柱抜取穴に納めた一対の柱穴のみである。

SX 149は、完形で残されていたとみられる二個体の大田十二社2式の壺形土器及び河原石のまとまりとして把握されたもので、この石のうち一個は砥石として使用された可能性のあるものがあつた。なんらかの遺構に伴う土器の遺存状況を示しているとみられたため、周囲を丹念に検出したが、これに伴う遺構を検出することはできなかった。しかし、この土器を取り除き、削り出したところ、土器に対応するとみられる130cm×75cmの不整楕円形の浅い落ち込みが検出できた。この二個体の土器のうち一個は丹彩土器で、カゴ目痕跡が顕著に残されている。

SX 159は、いわゆる弥生時代中期後葉の土器溜で、新田耕土層を取り除きわずかに掘り下

げて、土器片がびっしり堆積しているのが確認された。調査区外北部分にさらに延び広がっていると考えられたので、外壁を若干切りこんでこれらの土器を取り上げた。出土土器はほぼ一時期のもののみ

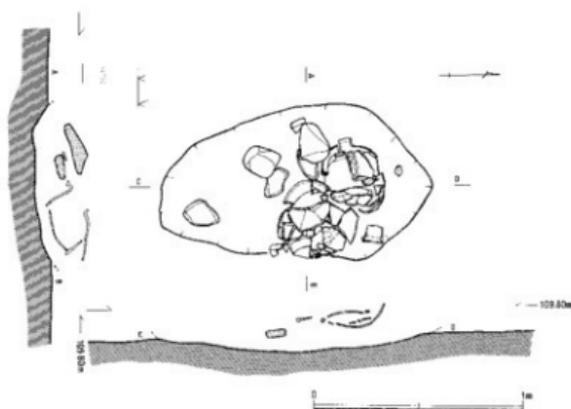


Fig. 39. 6区S X 149平面図・断面図 (縮尺 1 : 30)

れ、大形の破片が多いところから、単なる土器の捨て場とも思えなかったが、遺構自体の検出はできなかった。一層下でSD 157を検出し、SD 157が切り込んでいる灰黒色砂質土層からは、弥生前期の土器が出土しており、層位からみても、SX 159は、二次堆積したものではないことが考えられる。

SB71は、梁間1間、桁行1間の四本柱の建物で、長辺3.70m、短辺2.10mの規模をもつ。うち三柱に柱痕跡が残されているが、径30cmの円形柱痕で、掘方径に比べ大きすぎるようにみられる。あるいは、柱を抜き取った際に出来た穴の大きさを示しているのかもしれない。このうち二柱穴には、柱の根固めに用いられたとみられる10~35cm角の石がおちこんでいた。四本のうち二本から弥生後期の土器片が発見されており、弥生時代の建物である可能性は強い。

SD 154は、幅45~60cm、深さ10cm前後の直線状に延びる溝である。

SD 154 以来、SB71にかけて、多数の柱穴が検出され、そのうちには柱根痕跡を残すものも多く、それらは竪穴住居ないしは掘立柱建物の主柱と考えられるが、発掘区が狭く攪乱を受けた部分もあって、まとまりを見出すことは困難である。弥生式土器片を包含するものも多く、そのほとんどのものは弥生時代のものと考えられる。

SD 150、**SD 151**、**SD 153**は、ともに溝底のかすかな痕跡をとどめるばかりのものであるが、いずれも住居外周溝と考えられるもので、SD 150は、幅30cm、深さ1~2cm、SD 151は幅10~20cm、深さ1~2cmで、溝底に小形扁平片刃石斧を残していた。SD 153は、幅40~50cm、深さ5~8cmである。

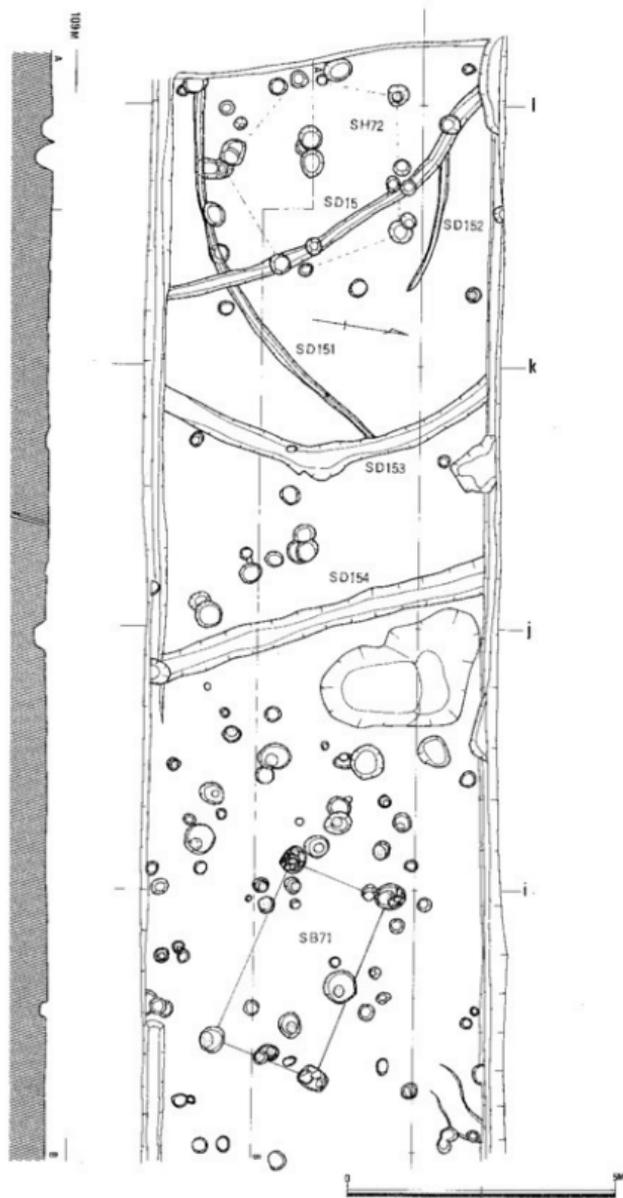


Fig. 40. 京免遺跡7区平面図・断面図（縮尺1:100）

S D 152 は、幅10~20cm、深さ1~2cmのS D 150に対応する円形住居の壁体溝と考えられるもので、中央穴をとりまく5~6本の柱で構成されるとみられるS H 72に対応するものであろう。

6区出土の土器

S X 149 出土の土器 (Fig.41-1, 2) 1, 2とも壺形土器で、2は丹形土器である。1は、口縁端部を上方へやや拡張し、端面に浅い凹線文4条を一巡させる。外面の頸部から肩部分にかけてタテ方向のヘラ磨き、胴部上半はヨコ方向のヘラ磨きで、胴下半はタテ方向のヘラ磨きで仕上げられており、肩部分に列点文が一巡する。内面は頸部以下ヘラ削りである。2は、口縁部外面ヨコナデ、内面は頸部にかけてヨコ方向のヘラ磨きを加えられている。胴外面はタテ方向のヘラ磨き、その条痕は頸から底まで連続しているものが多い。外面には、カゴの圧痕とみられる幅1cm程のたすきがけ状の条痕が残されている。内面は頸部以下ヘラ削りである。底は上げ底状で、底面はナデ仕上げされている。

S D 16 出土の土器 (Fig.41-3) 3は、2式土器にやや後出するとみられる変形土器で、口縁部内外面ヨコナデ、胴外面は不定方向に刷毛目に加えられている。内面は頸部以下ヘラ削りで、底部を欠くが明確な平底と判断される。外面の胴下半にススが付着している。

S D 156 出土の土器 (Fig.41-4) 4は高杯形土器で、外面はヨコナデ、脚端部に二条の凹線文を巡らす。内面はヘラ削りで4孔を有す。

S D 17 出土の土器 (Fig.41-5) 5は壺形土器口縁部。内面ヨコナデ仕上げ。

遺構外出土の土器 (Fig.41-6) 6は高杯脚部。外面は荒い刷毛、内面はヘラ削り。

S X 159 出土の土器 (Fig.43-1~4, Fig.4-1~12) Fig.43-1~4, Fig.44-1~6は壺形土器、Fig.44, 7~12は甕形土器。Fig.42, 1は、横びらきを開いた口縁部端部を拡張し、端面に3条の凹線文を巡らしさらにその上に列点文が巡らされている。口縁上面にも3条の凹線文が巡らされ、また円形浮文と小孔を交互に配置させている。上面端部には櫛描の波状文が一巡する。頸部外面は、タテ方向の刷手調整のあとラセン状に凹線文を巡らす。胴部外面上半は刷毛調整のあと二条の櫛描波状文と一条の平行沈線文が巡らされている。胴下半はタテ方向のヘラ磨き仕上げである。4は1と同器種とみられる甕であるが、口縁上面の円形浮文や小孔がなく、肩部の櫛描波状文や平行沈線文もそれぞれ一条づつ多い。4は、外面が比較的良好に残っていたので、仕上げ工程が推測できる。各工程の順序を記すと、①タテ刷毛（上方からみて逆時計まわり）、②頸部凹線文（ラセン）及びヨコナデ、③櫛描装飾、④胴下半ヘラ磨きで、③と④には直接の切合関係はない。口縁部の加飾も胴部の一連の手順に従っているとみられる。

2は、拡張した口縁の端面に三条の凹線文と列点文を巡らす。頸部も凹線文を巡らして、胴

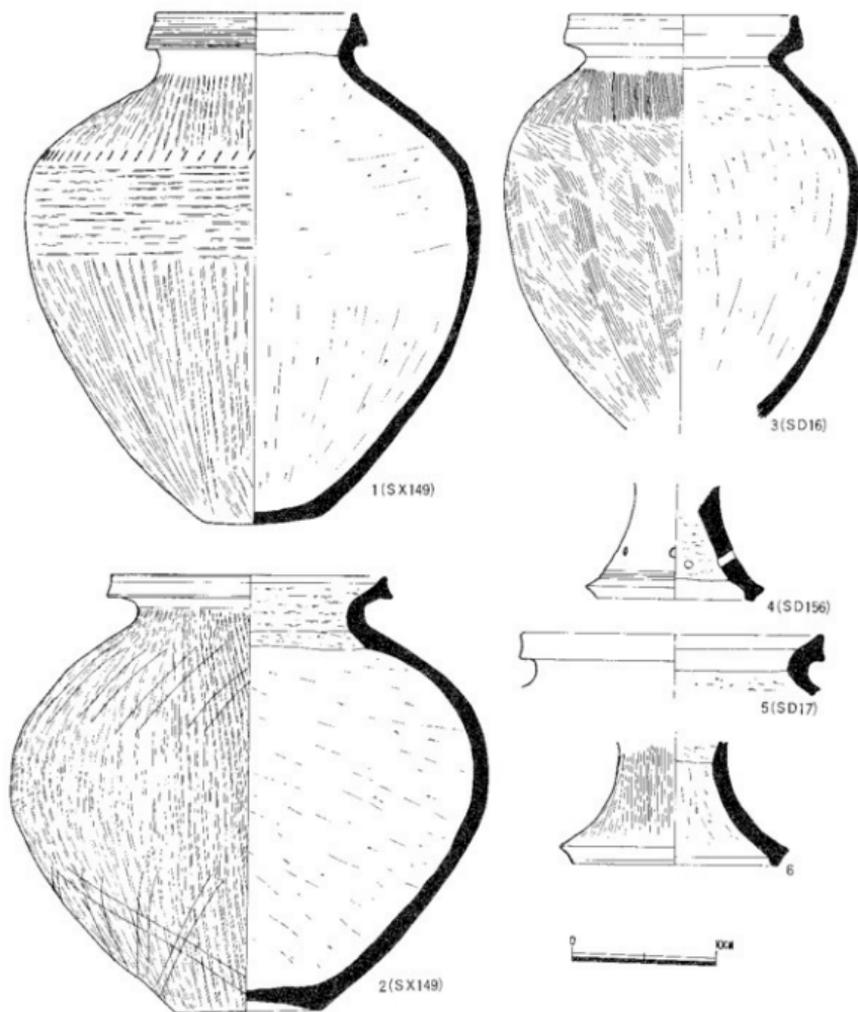


Fig. 41. 6区出土の土器 (縮尺1:4)

部上半はタテ方向の刷毛調整の上にヨコナデが加えられている。肩部に2列の列点文を巡らす、
 下段は全周していない。胴部下半は、タテ方向のヘラ磨きによって仕上げられている。内面は
 1・2に同じとみられるが遺存状況悪く明瞭でない。3は、口縁端部上半を欠くが、拡張した
 端面に3条ほどの凹線文が巡らされていたとみられる。1と同様、口縁部に小孔が穿たれてい

る。刷毛調整のあとにつけられた頸部の条線は、明瞭な深いヘラ描沈線である点に注意される。表面がタマネギ状に剝離し、一部にススの付着が認められる。内面は、1・2・3と同様の仕上げとみられる。Fig.41-2は、同一器種の壺形土器とみられるが、1は、口縁部上面端部に櫛描波状文を巡らし、2はヨコナデ仕上げである。また頸部のいわゆる凹線文は、両者にややちがいがみられ、2は沈線をめぐらしたのちヨコナデされたため凹線状を呈している可能性がある。5は、壺形土器口縁端部のたれさがり部分。6は、頸部下端に幅広の貼付凸帯によくみられる指頭による装飾が加えられているが、この部分

はいわゆる貼付凸帯ではなく、あらかじめ粘土をやや厚くしておいて加圧したものとみられる。こういった手法の指頭圧痕による壺形土器頸部の加飾例が京免遺跡では散見され、貼付凸帯からの変遷を考えるいくつかのバリエーションがある。

図示した壺形土器のいずれの内面にもヘラ削りの痕跡を明瞭な形で確認できないが、SX159出土の壺底部片にはヘラ削りが加えられたとみられるものがある。

7～12の壺形土器は、いずれも口縁端面を上方にやや拡張させ、7がヨコナデ仕上げの他端面に2～3条の凸線文を一巡させている。外面は、大概ねタテ方向の刷毛仕上げ、内面は刷毛及びナデによって仕上げられている。このうち、6・7・9・10の外面にススが付着していた。

なお、これら土器の胴部内面には、指頭圧痕によるとみられる凹凸のあるものが多い。

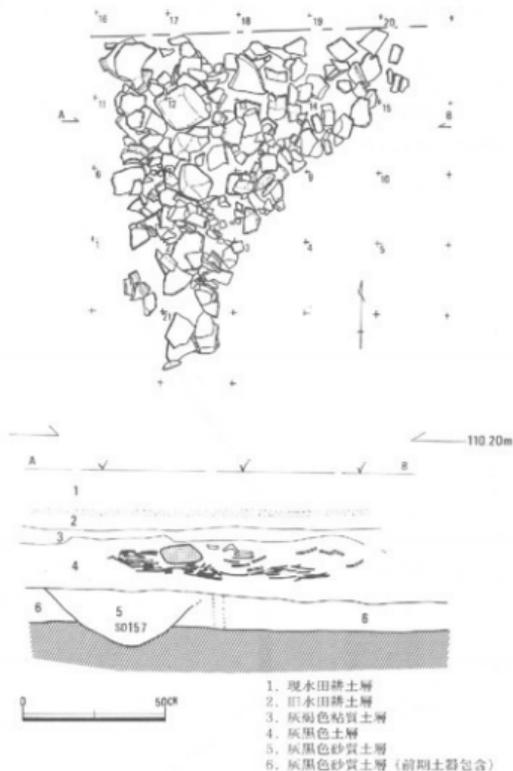


Fig. 42. 6区SX159平面図・断面図(縮尺1:20)

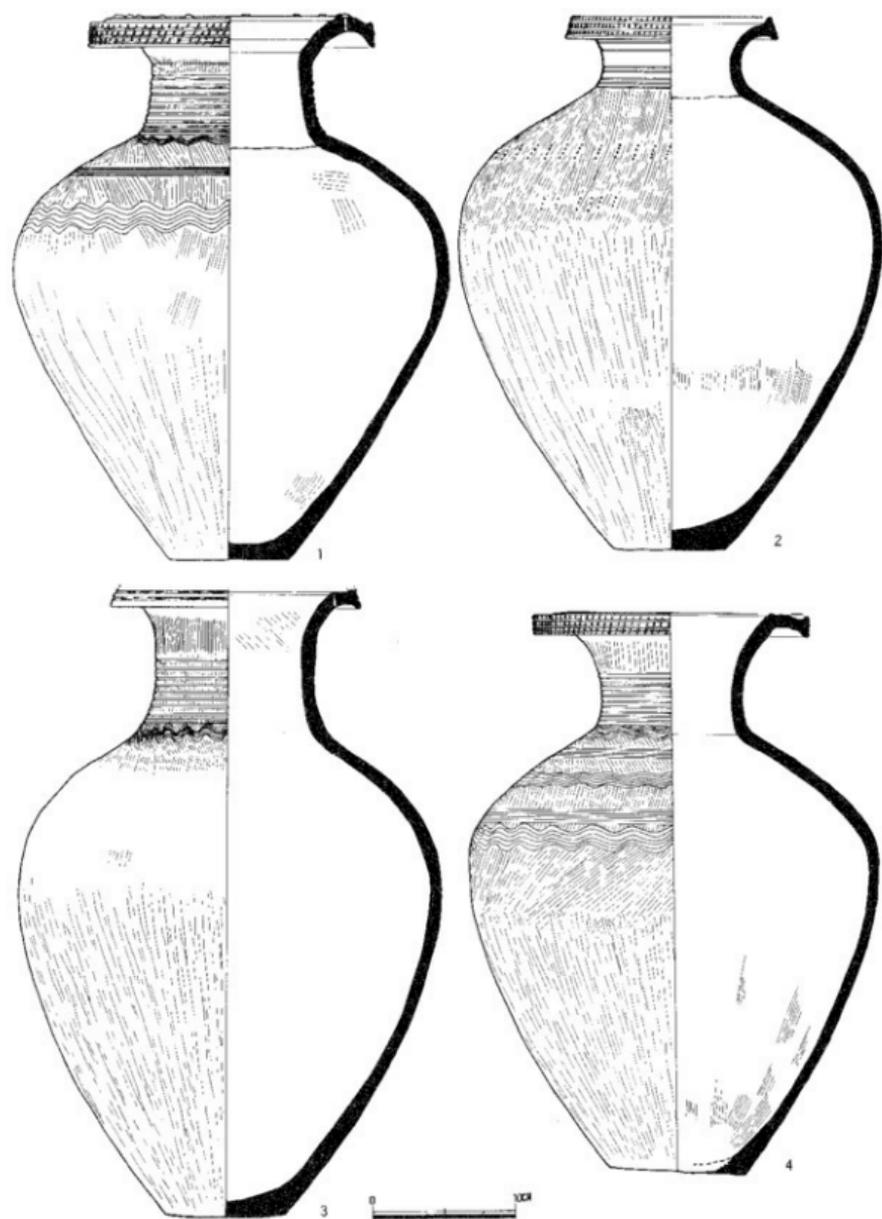


Fig. 43. 6尺土器溜出土の土器1 (縮尺1:4)

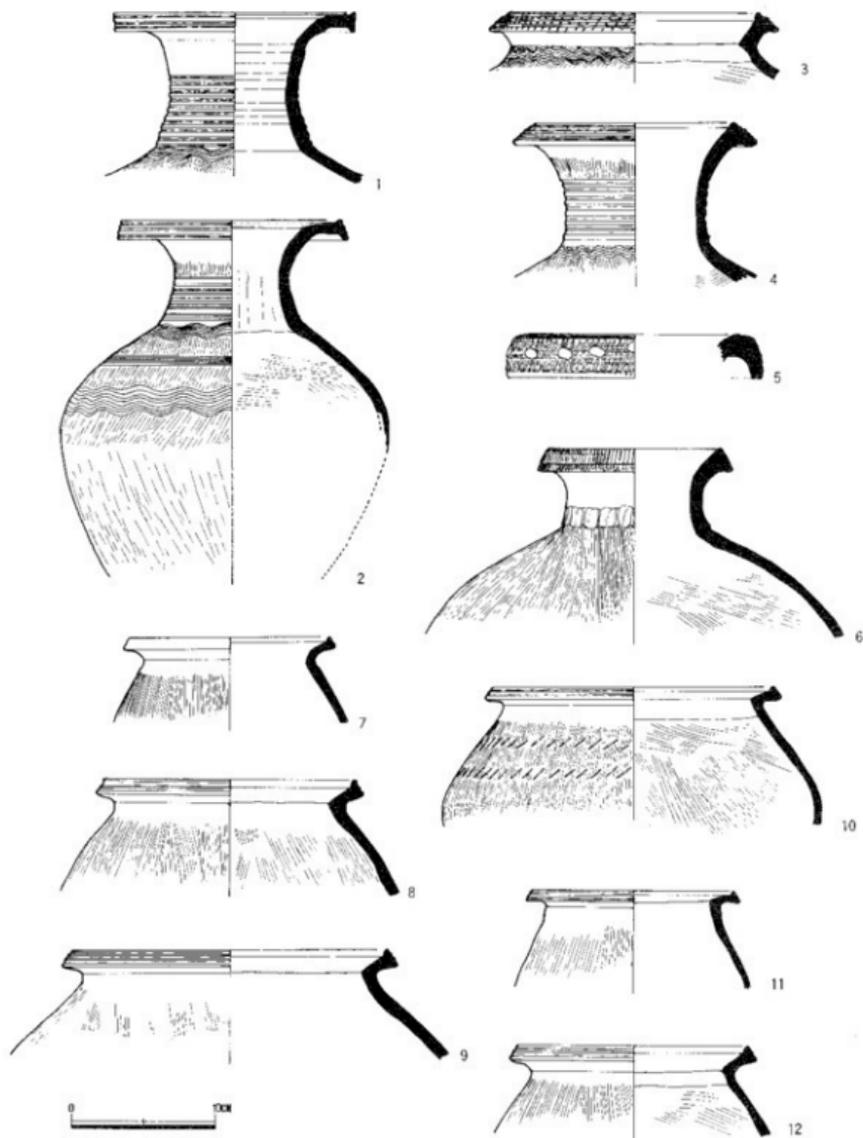


Fig. 44. 6区土器溜出土の上器2 (縮尺1:4)

④ 8区、9区の概要

8区及び9区で確認された遺構は、環濠、竪穴住居址、住居外周溝その他の溝及び近世墓等である。9区については、調査区延長が130mに及ぶためSD 170以南は次節で記述する。

8区は、前述の7区と同様調査区南半は水田造成により一段掘り下げられており、全搬に遺構の遺存状況が悪く、特に南半は近世以降の墓以外遺構はほとんど残っていないかった。

9区は、京免遺跡の中では3区と並び遺構の遺存状況が良い方で、SD 170以北はすべて第3層の黒色土を残していた。

環濠とみられる幅2～3mの溝は、8区の東端と9区の南の方で発見されており、その形態及び埋土の状況、その出土土器のあり方も同様である上に、確認調査の際に両者の間をつなぐ位置で、同様の溝のプランを検出しており、この両者が一連の溝であることはほぼ確実であった。さらに、この溝は1区及び2区で発見された環濠とみられるSD 4とも諸点において共通の特色をもっており、方向からみても一連のものと考えられたが、2区と8区の間に相当の距離があり、その間の状況については不明であったので8区・9区発見の環濠とみられる溝には、SD 170と命名した。

8区発見のSD 170 (Fig.46)は、上面をかなり削平されており、北部分を野ツボによって

遺構名	位置	遺構種別	時期	備	考
SD 170	9-7 9-34.31	環濠	L I ~ L II		
SD 171	8 - 6	住居外周溝	?		遺物出土なし
SK 169	8 - 6	不明土壌	?		遺物出土なし、浅い不明瞭な落ち込み
SK 167	8 - 3	長方形土壇	L I ?		土壇墓の可能性あり
SD 166	8 - 3	溝	?		
SD 161	8 - 1.2	住居外周溝	L I		角をもつ住居外周溝?
SX 160	6 - 2	土器窯	M III		
SD 185	9 - 4.6	溝	M II		
SD 186	9 - 10	溝	L II ?		
SD 187	9 - 9, 12	住居外周溝?	L I		
SX 186b	9	長方形土壇	M III		
SD 189	9 - 14	溝	?		
SD 190	9-18, 19, 21	住居外周溝	M ?		前期土器微塵含む、土器少量を含むのみ
SH 80	9 - 20	竪穴住居址	?		SD 190に対応する住居とみられる
SD 191	9 - 21	住居外周溝	M		
SH 199	9 - 26	竪穴住居址	L I		火災、床面で遺物が多量に落ちた
§1197埋藏	9 - 26	溝	M II		
SD 195b	9 - 25	*	M ?		不明瞭な溝状落ち込み
SD 195a	9 - 27	*	M II ?		中期中葉の土器を含む、破片数点のみ
SD 193	9-27, 28	住居外周溝	L I		SH 199に対応する外周溝とみられる
SX 198	9 - 27	土器窯	M II ~ M III		
SD 194	9 - 28	溝	L I ?		中期後葉の土器を含む
SK 199a	9 - 28	土壇	E		前期の變形土器大形破片を含む
SD 195c	9-29, 30	住居外周溝	M III		§1196を切る
SD 196	9 - 29	溝	M III		前期土器片を含む
SD 197	9-31, 32	*			中世以降
SD 81	9 - 32	*	?		

表5. 8区・9区遺構一覧表

※ E:弥生前期 M II:弥生中期中葉 M III:弥生中期後葉 L I:弥生後期前葉 L II:弥生後期中葉
L III:弥生後期後葉

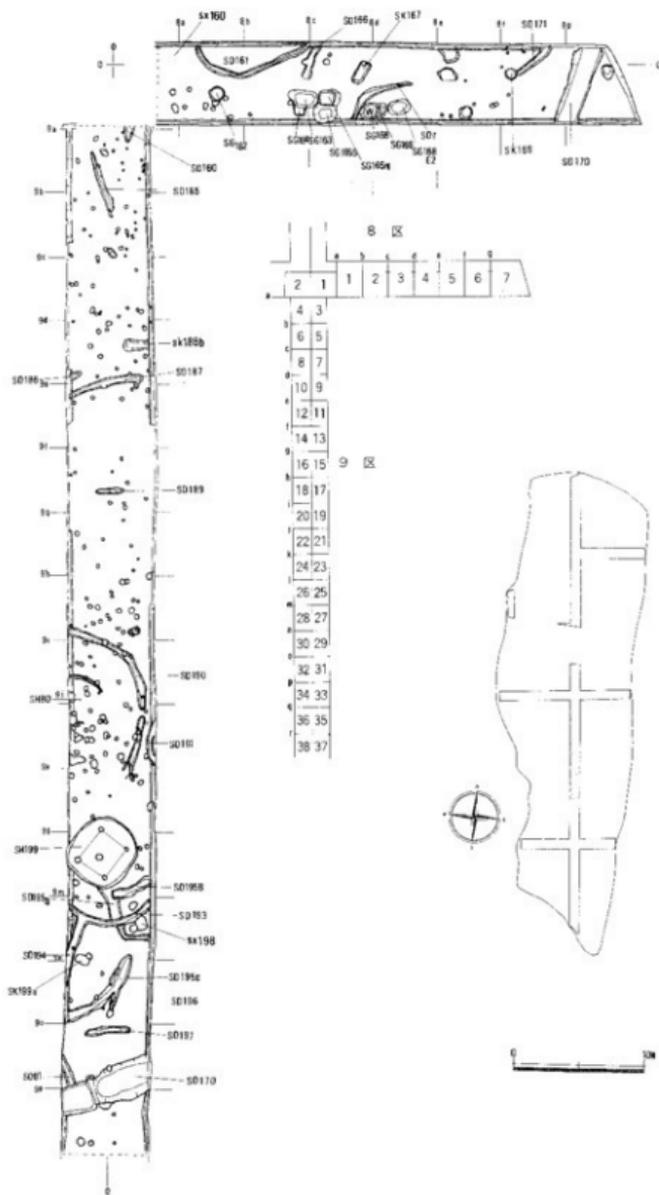


Fig. 45. 京免遺跡 8・9区通構配置図 (縮尺 1:400)

攪乱されていたが、溝幅1.6m～1.8mで深さ約50cmを残し、南北に走っている。埋土は大まかに上中下層に分かれ、下層に2式土器が多く上層に4～5式土器を多く含む点、SD4と同様であるが、上層の削平度が激しかったためか上層の遺物量はSD4と較べ多くはない。溝底幅は1.3～1.4

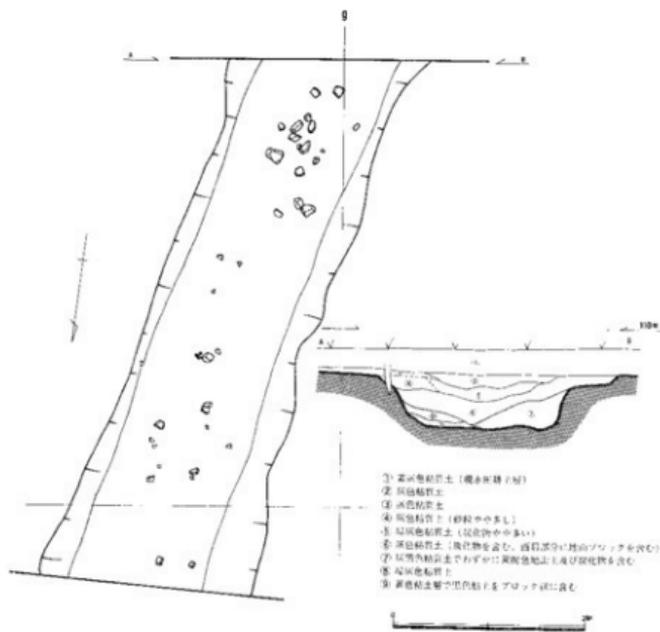


Fig. 46. 8区SD170平面図、断面図(縮尺1:60)

mでほぼ平坦である。底の絶対高は109m前後で、1区のSD4底が109.9m前後であるので90cm前後8区の溝底の方が底い。ちなみに、1区のSD4と8区のSD170の間の直線距離は、約110mである。また9区のSD170東部分の溝底のレベル高は108.15mで8区のものとの間に約85cmの高低差があり、この間の距離は約90mである。これらがすべて一連の溝であるとすると、溝はゆるやかに北から南へ傾斜しており水を南へ送っていたことがわかる。

SD171は、住居外周溝とみられるが、削平によりその一部しか残していない。確認できた部分の溝幅は、25～35cmで深さ10cm程度。円形の浅い落ち込みSK169にあたって途切れている。

SK167 (Fig.47)は、長辺190短辺90cmの長方形土壇で、底面は浅い舟底形を呈する。北短辺部分で径約40cmの円形柱穴によって切られている。埋土中には、弥生時代後期前半の土器が含まれていた。土壇墓の可能性もあるが明確でない。

SD166は、住居外周溝の一部分であると思われるが、大半が消失しており不明。残存部の溝幅は50～60cm、深さ約10cmである。

SD161も、住居外周溝とみられるが、その他の外周溝がほぼ円形に巡っているのに較べ、

やや角をもつ点特異である。外周溝内の住居プランが不明であるが、おそらく方形ないしは長方形に近い住居址に対応する形の外周溝であろうと考えられる。検出面での溝幅40~60cmで、深さ5~15cmである。溝埋土中には点々と弥生式土器が残されていたが、いずれも大田十二社2式土器に併行するものと考えられる。

その他8区に散在する柱穴の多くも弥生時代のものと考え

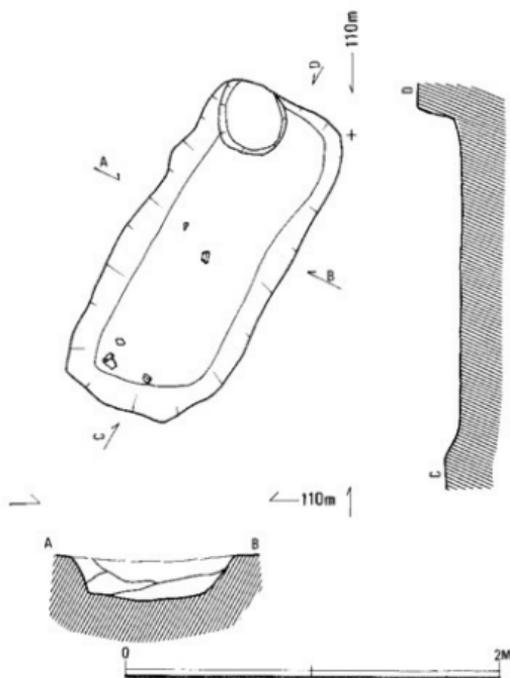


Fig. 47. SK 167平面図・断面図 (縮尺 1 : 30)

られるが、まとまるものは検出できなかった。またSG 162・163・164・165・168は、いずれも近世土城墓で、丸棺に納められていたものが多く、SG 162には底部に60cm×60cm、厚さ25cmの大石の他、10~20cm角の河原石多数が落ち込んでいた。

近世幕付近の溝SD rは、現耕上層より掘り込まれた溝である。

SD 185は、直線状に約5mにわたって検出された溝で、北端は削平により消失した可能性が強いが、南端は本来途切れていた可能性がある。溝幅は約50cmで、最大深度約20cmである。

SK 186 b (Fig. 53)は、長辺2m、西短辺1m、東短辺70cmの長方形の土城で、検出面よりの深さは、約15cm前後である。埋土下層は、灰黒色土に黄褐色の地山を含み、この層には遺物が含まれていなかったが、上層の黒色土中には3点の弥生中期後葉とみられる変形土器破片が含まれていた。

SD 187 (Fig. 51)は、住居外周溝の可能性の強い溝であるが、カーブは急ではなく、対応する溝は南部分の削平が進んでいたため確認できなかった。溝幅は、40~60cmで、深さは浅い部分で10cm、深い部分で20cm程度である。東端で溝が途切れているようにみえる。中央部で、80×70cm程度の浅い落ち込みを、また東部分の北肩で径35cmの柱穴と切り合っているが、SD

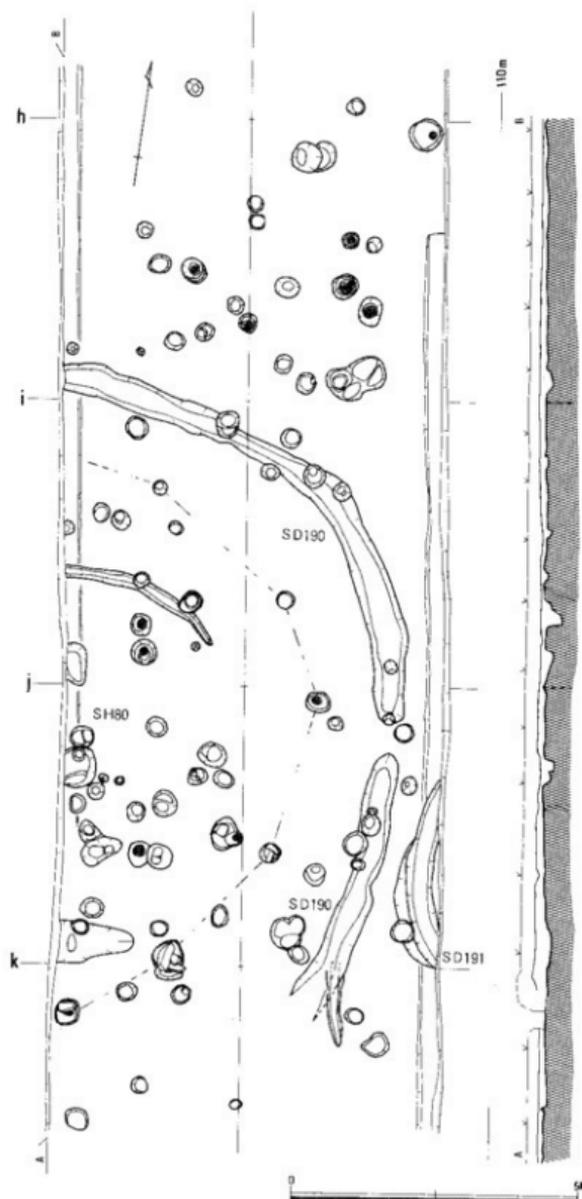


Fig. 48. 京免居跡9区平面図(縮尺1:100)

187は両者を切っている。上層部に大形の破片を含む多量の土器片が廃棄されていた。これらの土器片は、いずれも同一時期のものともみられ、大概ね大田十二社2式に併行するとみられるが、2式土器の中では古い様相を示すものとみられる。

SD 190は、住居外周溝とみられ、SH80に対応する可能性が強い。溝幅は、50~60cmで、深さは5~10cm、全般に残りは悪く浅い。東部分で50cmにわたって途切れているのは、本来のあり方であることを思わせる。南端で途切れているのは、この部分の擾乱が激しく、削平を受けたためと考えられよう。

SH80は、SD 190に対応する住居とみられるが、壁体溝の一部を確認したのみで柱等の組み合わせは不明。壁体溝幅は20~25cm、深さ8cm前後である。壁体溝のあり方及び外周溝の輪郭から推定すると径約5m前後の円形ないしは楕円形の住

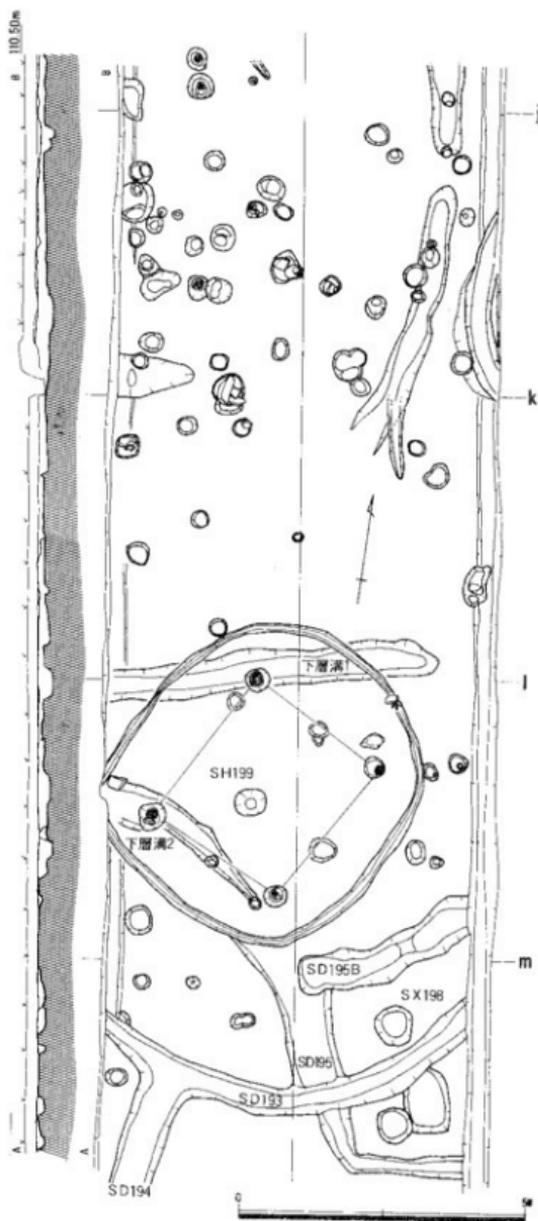


Fig. 49. 京免遺跡9区平面図 (縮尺 1:100)



Fig. 50. 9区SK199a平面図、断面図（縮尺1:30）

居址であったことが考えられる。

SD 191は、住居外周溝の西端の一部であるとみられる。溝幅約50cmで深さは約15~20cmである。

SD 195Bは、幅60~70cmで深さは10~25cmの溝で、底部にはやや凹凸がみられ、西部分で途切れている。性格不明の溝で、SD 195によって切られている。

SD 195aは、SH 199から南に出てSD 195Bを切り、SD 193と切り合せて東に折れる。溝幅は、広い部分で約1m、狭い部分で30cmで、深さ3~7cmである。SD 195aは、北部分で途切れるが、SH199号下層に、対応する溝2があって、この溝に連続していた可能性がある。

SD 193は、SH 199に対応する住居外

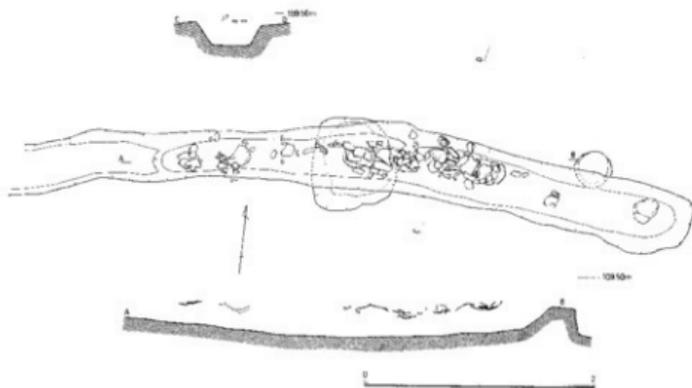


Fig. 51. SD187平面図、断面図（縮尺1:40）

周溝とみられるが、北まわりの溝は確認することが出来なかった。おそらく、その部分はSD 190の南部分と同様の理由によって削平を受けたため検出できなかったものと判断される。SD 193は、本来SH 199の外方約2mの位置を環状に取りまいたものであろう。

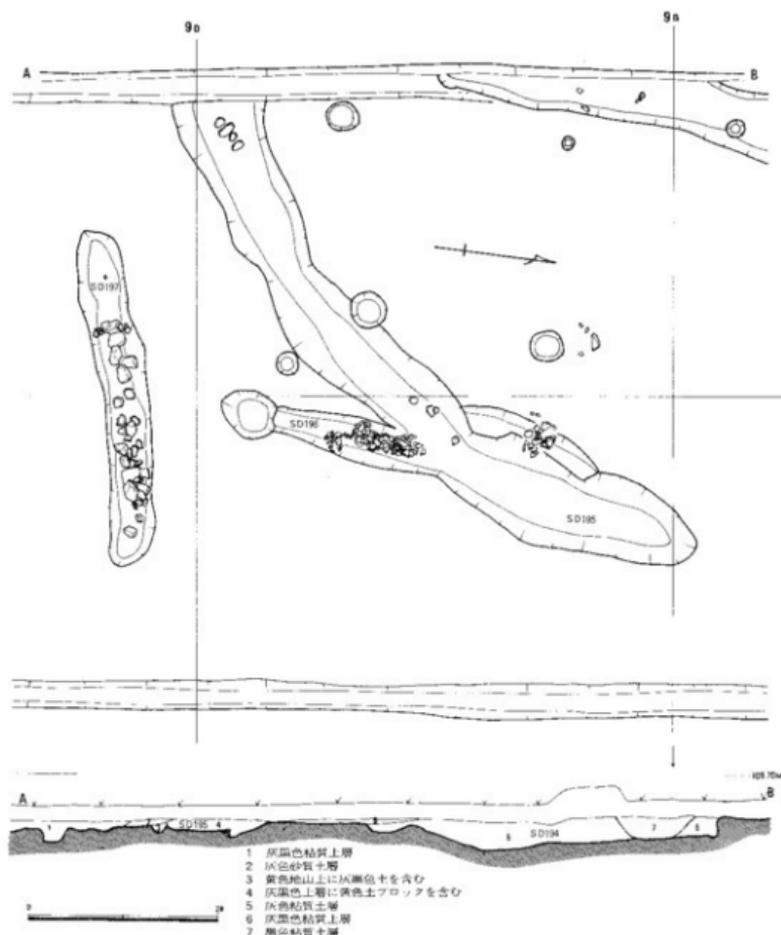


Fig. 52. 9区平面図(縮尺1:60)

SD 194 は、SD 193 に接続する排水溝とみられ、ほぼ直線上に6mにわたって延びていることが確認された。溝幅75cm、深さ13~15cmで、環濠SD 170へ排水するための溝とみられる。

SD 195 C は、住居外周溝とみられる溝であるが、詳細不明である。途中幅50cm、深さ約10cmで、弥生中期後葉の土器片を多く埋積していたSD 196 を切っている。

SD 195 C は、さらに北のSD 195 a につづきSH 199 下層溝底2につづき可能性があるが下層溝2にはまったく遺物が含まれず、同時に存在したのかどうか明確ではない。

SK 199 a は、1.2m×60cm程度の不整長方形の土壌で北東角を柱穴によって切られている。

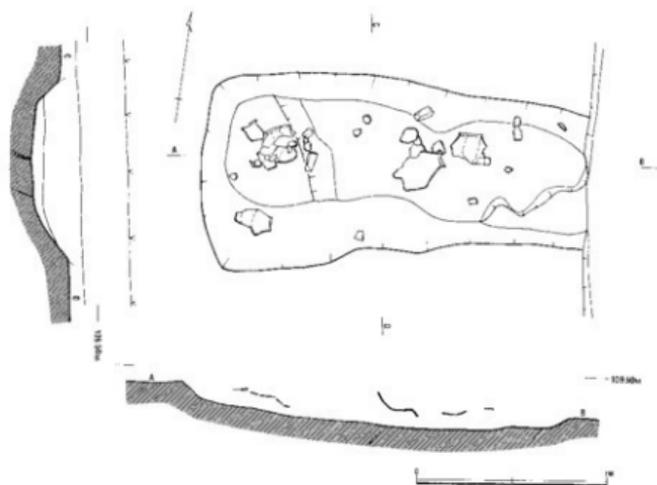


Fig. 53. 9区SK185b平面図、断面図(縮尺1:30)

埋土は、暗褐色に黄色土ブロックがわずかに含まれていたが、底面よりわずかに浮いた状態で弥生前期の変形土器 (Fig.81-1) 1点と別個体の前期土器細片数点が出土した。土壌埋土には若干の木炭が含まれていたが、土壌自体には火を受けた痕跡は確認できなかった。

SD 197は、幅50cm、深さ10cmの溝状遺構で、両端が途だえる。3.5mにわたって延びている。埋土中に、10~20cm角の礫を多く含み、その石の中には、13×7cmの扁平石材の両長辺を打ち欠いた打製石器一点がまぎれこんでいた。弥生式土器片数点も含んでいたが、勝間田焼とみられる糸切り底の杯破片等が伴っており、中世以降の遺構と思われる。機能は不明であるが田の排水施設に関するものであろうか。京免遺跡では、中世以降の遺構を埋めている土は、弥生時代の遺構を埋めている土と一見して識別可能なものが多いが、SD 197は例外で、弥生の遺構を埋めている土とほぼ類似した暗褐色土で埋められていた。

SD 81は、幅約50cmで、深さ10~20cmの溝であるが、溝底はSD 170へと徐々に傾斜している。遺物を含まず、時期決定は困難であるが、SD 194に連続する可能性もある。いずれにしても、住居外周溝にたまった水をSD 170へと導く溝の末端である可能性が高い。

SD 193東端の南側で、多量の弥生中期とみられる土器片が出土した。土器溜SX 198としたが、SD 193に切られSD 193の北側にもこの土器溜りの連続とみられる土器片少量が広がっていた。土器溜出土の土器にはやや時期差が認められるようであり、1次堆積によるものか

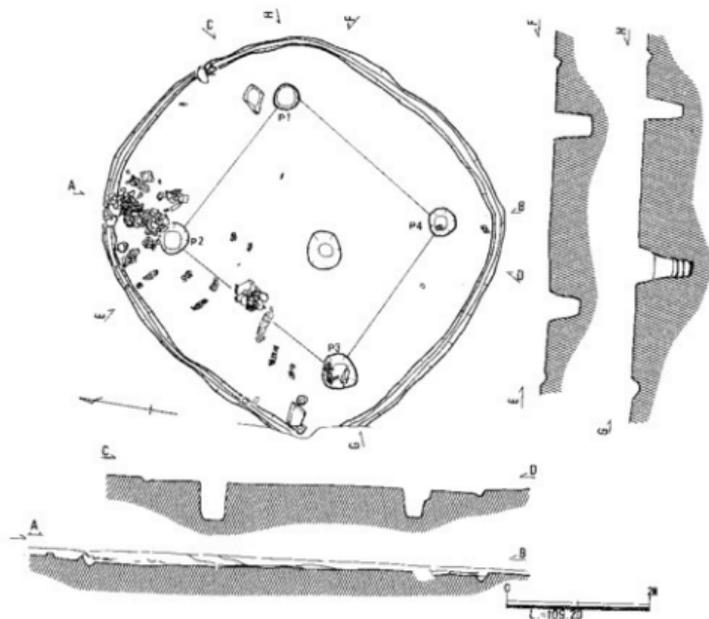


Fig. 54. SH199平面図、断面図 (縮尺 1:60)

どうか不明である。これらの土器の中には、中期中葉に遡るものもあって、遺構自体は明確でないが、京免遺跡は中期中葉以降定着した可能性を知る手がかりにはなる。

SH 199 は、一辺約 5m の隅丸方形 4 本柱の竪穴住居址で、中央部やや南西よりに中央穴をもつ。中央穴には土提はなく、下部に黄色粘土と木炭の互層が認められた。これは、中央穴の防湿を目的とした施設である。防湿部より上の中央穴埋土も二層に区分でき、上層により多く炭が含まれていたが、これは本住居が火災にあったためで中央穴内が土圧で圧縮され落ちこんだために形成されたためとみられる。中央穴口部壁面は火を受けて薄く赤化しているが、中央穴で火を焚いたためか、火災によるものかは明確でない。各主柱とも、柱痕跡を残していたがこの径は 15~25cm で各柱間距離は、P1~P2、2.6m、P2~P3、3.3m、P3~P4、2.5m、P4~P1、2.85m で、北東から南西方向に棟が通っていたことが推測できる。火災発生に際しては、ほとんど家材道具を持ち出す間もなかったとみえて、腐朽からまぬがれた遺物が床面に多数残されていた。Fig. 56・57 にあげた土器は確実に本住居で同時使用されたもので、器種としては大形の壺形土器 2 点 (1、2)、小形の壺形土器 4 点 (3~6)、鉢形土器 1 点、椀形土器 1 点、高杯 1 点、胴部以下を失った小形丹彩高杯 1 点、甕形土器 2 点がある。

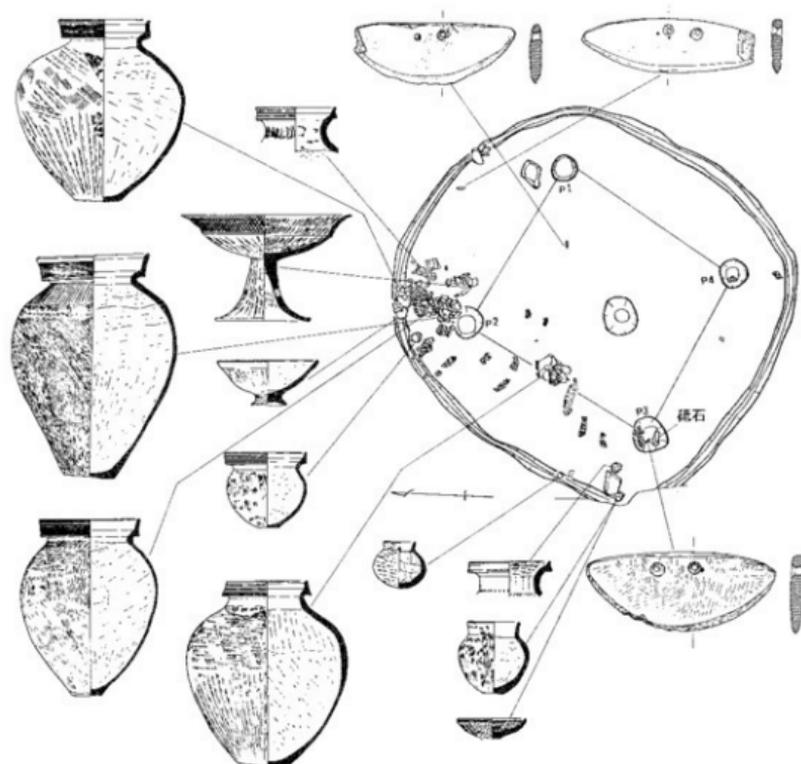


Fig. 55. SH 199 遺物出土地点位置図

このうち壺4と高杯8は、2次転用されたものである。土器以外の遺物として、粘板岩製の搬入品とみられる同一型式の石庖丁3点がそれぞれ分散して発見され、そのうちの一点と23×8×6cmの砥石がP3に接して発見された。住居東角と西角で作業台とみられる平石が発見されたが、西部分の平石周辺には小形の土器が集中する。中央穴の位置及び柱配置から考えて、妻入形の入口が想定されるが、そうすると本例は入口右手に日常土器が集中して配備された例と考えられる。甕形土器のうち11は火にかけられた痕跡がはっきりしないが、12は煮沸痕跡が明瞭である。高杯形土器10は、正位で床面に置かれていたとみられ、脚部はそのまま残され、杯部は直下に落下していた。日常土器の一群中で発見されており、通常の食器と考えてよい。発見された土器の器種は、当時日常用いられていたと想定される器種すべてを含んでおり、土器の法量は5～6人の生活をまかなうのに十分なものと思われる。その他の遺物の配備状況からみても、SH 199号住居は一家族の生活機能を十分に示しているとみてよいだろう。なお、先

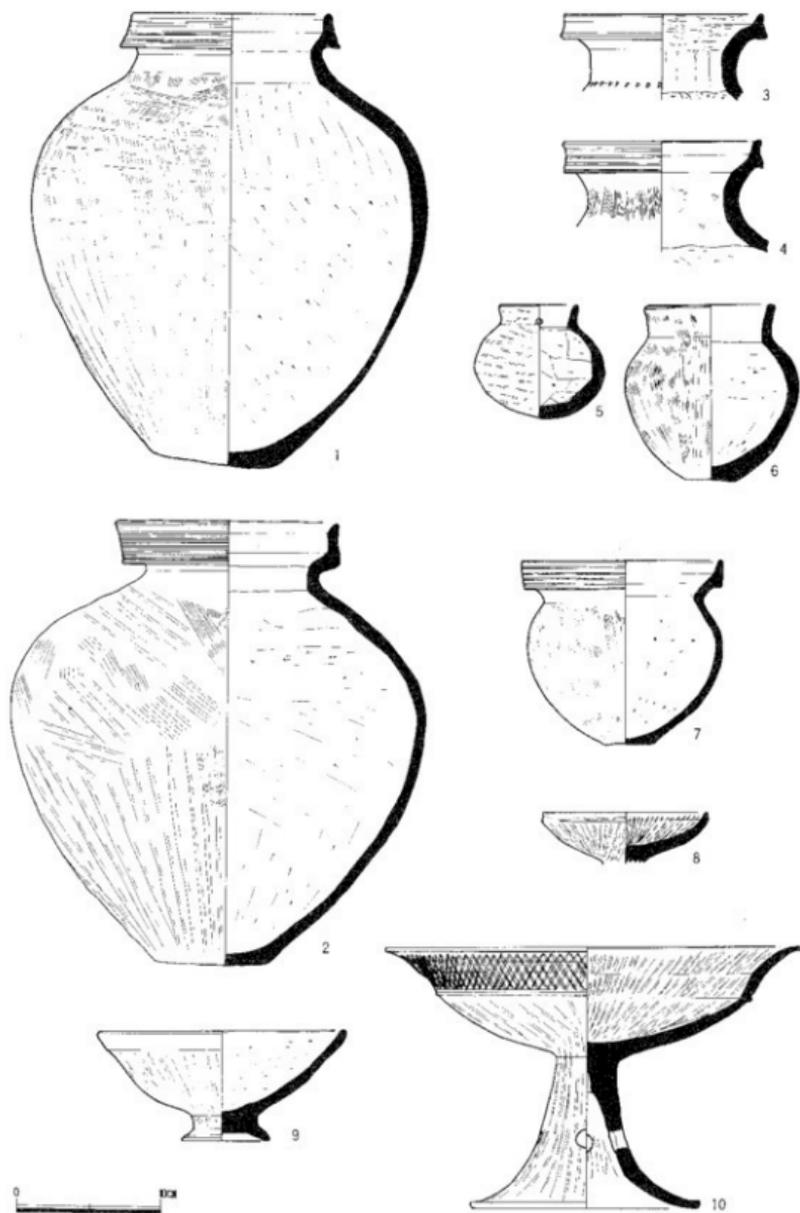


Fig. 56. SH199床面出土の土器1 (縮尺 1:4)

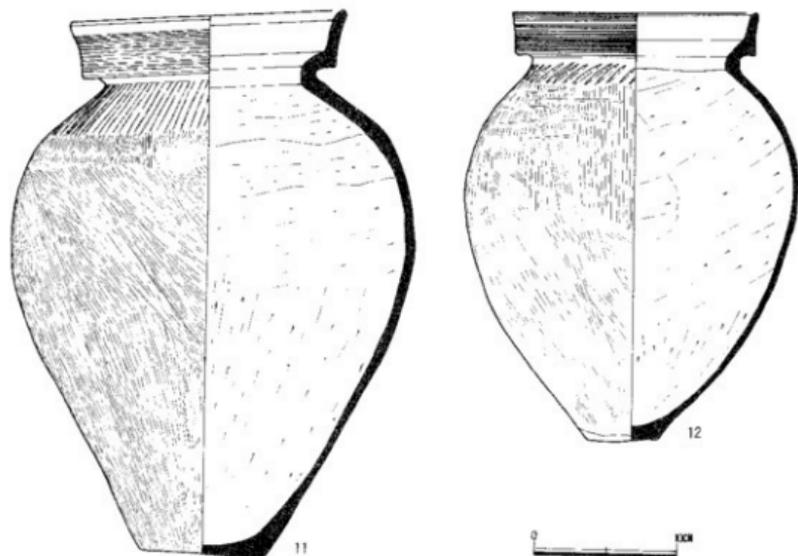


Fig. 57. SH199床面出土土器2 (縮尺1:4)

にもふれたが、SD 193はSH 199を円形にとりまく住居外周溝と考えられる。

SH 199 出土の土器 (Fig.56、1~10、Fig.57-11、12) 1~6は壺形土器、7は鉢形土器、8、10は高杯形土器、9は碗形土器で蓋の可能性もある。11~12は甕形土器。1、2は短頸壺で、1は上方に拡張した口縁部端面に3条の凹線文を巡らす。2は、直立きみに立ち上がった口縁部外面に櫛状工具による平行沈線文を施文している。いずれも、口縁部内面はヨコナデ仕上げで、胴外面上半は刷毛目調整後ヘラ磨きが加えられている。胴外面下半はタテのヘラ磨き仕上げである。胴部内面はいずれもヘラ削りによって仕上げられているが、1は、肩部分のヘラ削り痕跡を認めない。ヘラ削りのあとナデ消されている可能性がある。いずれにも、火災によるとみられる赤化部分及びススの付着が認められるが、火にかけられたためのものではない。3は、外面ヨコナデ、内面ヘラ磨きで仕上げられ、絞り痕が残されている。4は、口縁端面に4条の凹線文風条痕を巡らし、頸部外面はタテ方向の刷毛仕上げ、内面にもヨコ方向の刷毛目を残す。5は、外面及び口縁部内面にヘラ磨きが加わり、胴内面はヘラ削りである。頸部に2孔の穿孔がある。6は、外面刷毛仕上げ、口縁部内面はヨコナデ仕上げで、胴部内面はヘラ削りである。8は、口縁端部にクセのある屈曲をもち、外面に凹線文一条を巡らす。内外面ともヘラ磨きの丹影高杯である。9は、外面タテ方向の刷毛調整のあとヨコ方向のヘラ磨きが

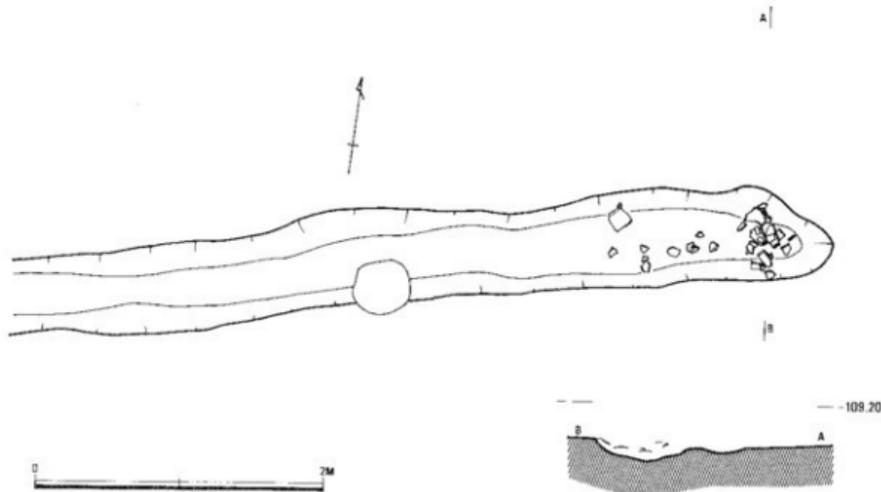


Fig. 58. SH 199住居下層溝1 (縮尺1:40)

加わる。内面はヘラ削りのままで、台部はヨコナデ仕上げである。内面の仕上げが荒いので蓋形土器の可能性も考えられる。10は、外面ヘラ磨きで杯部立上がり部外面に斜格子状の暗文風ヘラ磨き痕をとどめる。杯内面もヘラ磨き仕上げで、脚部内面はヨコナデで仕上げられている。分割成形技法による高杯で脚端にクセのある段をとどめている。11、12は、直立した口縁部外面に櫛状工具による平行沈線文を巡らしている。いずれも胴部外面は刷毛仕上げで、頸部下半に列点文を巡らす。口縁部内面はヨコナデ仕上げで胴部内面はヘラ削りである。12にはススの付着が著しく煮沸痕跡顕著である。

SH 199 下層の溝1 (Fig. 58) SH 199 と切り合う直線状の溝で、東西方向に延び東端で途切れる。この部分で、弥生中期の土器片が比較的まとまって発見された。溝幅は、60~70cmで、深さ15~6cmである。

SD 170 (9区) は、SD 4、SD 170 (8区) につづく集落を取り囲む溝とみられるもので、検出部東部分の溝幅約3m、西部分の溝幅約2.2mである。埋土上層にはやはり大田十二社5式土器を含み、下層に2式土器を含むありかたは、SD 4及び8区のSD 170と同様のあり方を示す。上層の最終廃絶時とみられる土器の堆積状況は、やや東部分に多いけれどもぼ一様のあり方を示す。しかし、Fig. 58は中層以下の遺物の出土状況を示しているが、中層以下の遺物の出土状況には大きな違いがみられ、そのほとんどは東部分に集中している。溝底のレベルにおいても、東部分と西部分には差がみられ、東端の溝底と西端の溝底では、西端の方が約20cm高い。この溝の高低差は、環濠全体の想定される水の流れとは逆である。しかも、発掘区中

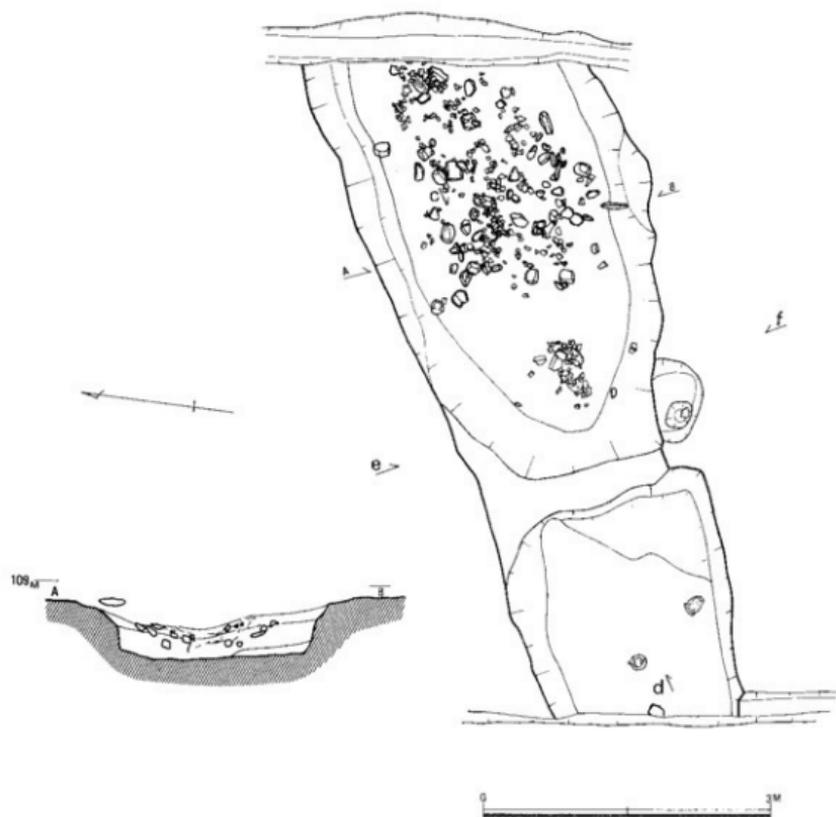


Fig. 59. 9区S D 170平面图、断面图(縮尺1:60)

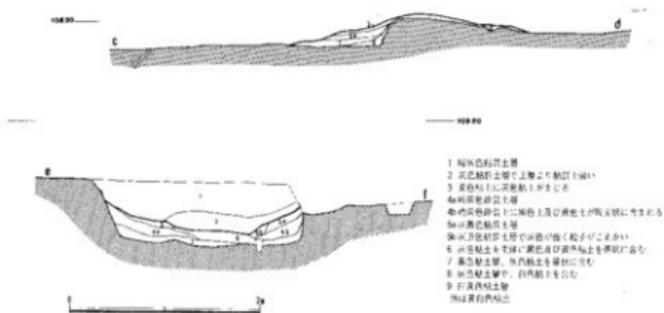


Fig. 60. 9区S D 170土提状遺構断面图(縮尺1:60)

- 1 褐色粘質土層
 - 2 灰色粘質土層(上部より粘質が減少)
 - 3 灰色粘土(下部粘土が減少)
 - 4 粘質土層(上部)
 - 5 粘質土層(下部)
 - 6 粘質土層(上部)
 - 7 粘質土層(下部)
 - 8 粘質土層(上部)
 - 9 粘質土層(下部)
- 断面は西側を向く

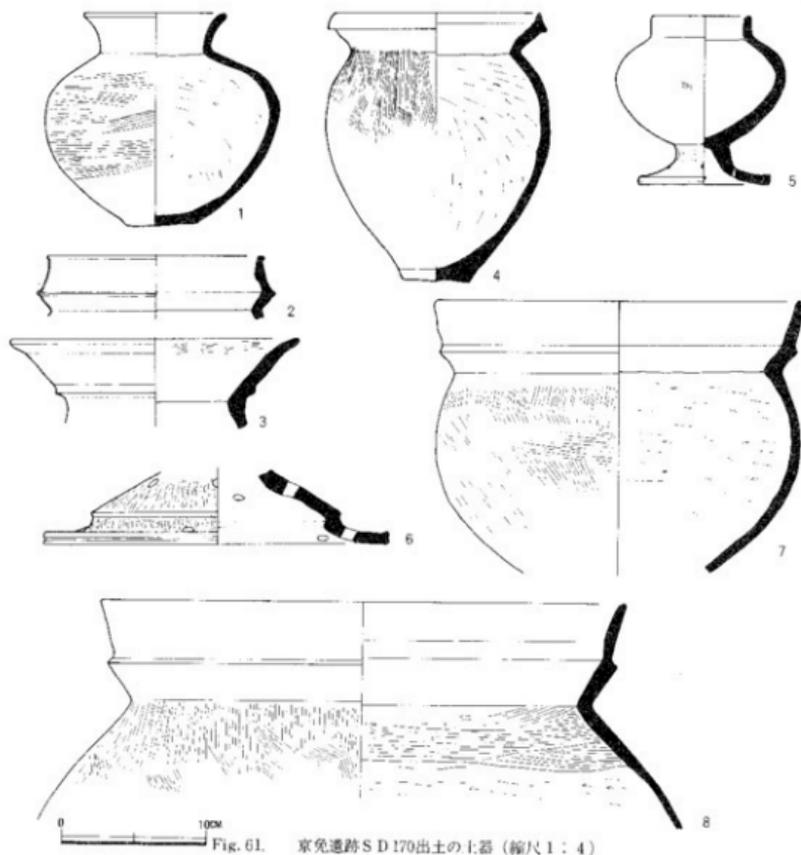


Fig. 61. 草免遺跡SD170出土の土器(縮尺1:4)

中央には人工的な土盛りによる土堤状の高まりが築かれており、東西の溝底の高低差を分かつ位置にあることから、それは、環濠切削当初から築かれていたものと思われる。

また中層以下の遺物出土状況は、東部分に多くなりつたようにみえる。この土堤の配備と、水の流れと逆の溝底の高低差は、この部分が井堰であったことを考えさせる。このことは環濠が単なる排水のため、ないしは集落防塞用のためというのではなく、水の利用をもその目的にもっていたことを考えさせるものである。

SD 170 (9区) 出土の土器 (Fig. 61) 1～3は壺形土器、4は甕形土器、5は台付壺、6は高杯脚部、7、8は鉢形土器で、2、3、5、7、8は上層出土。1、4、6は中位から出土した。1は器壁の荒激しく仕上げ不明瞭であるが、外面の胴部にヨコ方向の刷毛目を残す。胴内面はヘラ削りである。外面にかすかに丹彩痕が残る。2は内外面ヨコナデ仕上げで、薄手

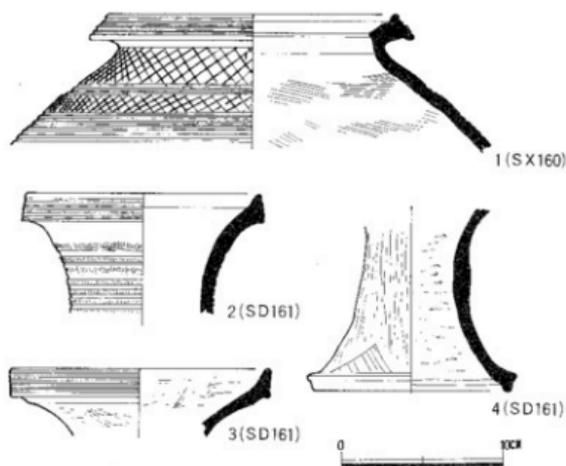


Fig. 62. 京免遺跡8区出土の土器(縮尺1:4)

ナデ消していると思われる。胴中に帯状にスガが付着している。内面はヘラ削りである。5は、内外面ヨコナデ仕上げ。6は外面タテ方向のヘラ磨きで仕上げられており、脚端部に一条の凹線文を巡らしている。内面はヨコナデ仕上げの丹彩土器である。7、8は口縁部内外面ヨコナデ仕上げで、胴部外面は刷毛仕上げ。胴内面はヘラ削りで、8は頸部下半にヨコ方向の刷毛が加わる。

8区出土の土器 (Fig.62)

SD 160 出土の土器 (1) 1は壺形土器で、上下に肥厚させた口縁端面に4条の凹線文を巡らし、外面の肩部から胴部にかけて凹線文とヘラ揃の斜格子文で飾る。口縁部内面はヨコナデで胴内面は刷毛仕上げである。

SD 161 出土の土器 (2~4) 2は壺形土器。3、4は器台形土器とみられる。2は、口縁端面に4条の凹線文を巡らし、頸部外面はタテ方向の刷毛調整のちラセン状に沈線文を巡らしている。内面はヨコナデ仕上げ。3は、口縁立上がり部外面に櫛状工具による平行沈線文を巡らし、内外面ヘラ磨き仕上げである。4外面は、タテ方向のヘラ磨き。脚端部に鋸歯文を巡らし、胴内面はヘラ削りである。

9区出土の土器 (Fig.63-64)

SD 195 出土の土器 (Fig.63-1) 1は壺形土器。上下に肥厚させた口縁端面に3条の凹線文を巡らす。屈曲した胴部上半は刷毛仕上げで二列の列点文を巡らし、下半はヘラ磨きである。胴内面下部にはヘラ削り痕があり、上部は大概ね刷毛仕上げである。

SH 199 下層溝1出土土器 (Fig.63-2、4) 2は壺形土器、4は壺形土器。2は、くの

のシャープなつくりの土器。大田十二社5式土器で、併行関係を探る一つの手がかりとなる器形。3も丹彩土器とみられる。内面の一部に刷毛目が残リヨコナデされているのがわかるが、全般に器壁の荒激しく調整不明。4は、口縁部内外面ヨコナデ仕上げ、胴部外面上半は刷毛仕上げで下半はそれを

字形の口縁部端を軽く肥厚させ、ヨコナデ仕上げ。胴外面はナナメ方向の刷毛調整の上をタテ方向のヘラ磨きが加わっている。内面は刷毛及びナデで仕上げている。4は、肥厚した口縁部端面に3条の凹線文を巡らし、円形浮文を一巡させる。胴部外面上半はナナメの刷毛仕上げ、下半はタテ方向の刷毛調整の上をヨコ方向に雑なヘラ磨きが加わる。胴中に二列の列点文をめぐらす。胴内面は刷毛仕上げ、頸部下半に指頭圧痕が残る。

SX 198 出土の土器 (Fig.63-3) 3は壺形土器。ラッパ状に開く口縁部を折り返し、上方へ拡張させ端面に4条の凹線文を巡らす。頸部外面はタテ方向の刷毛で仕上げ、内面はヨコナデ仕上げで、絞り痕を残す。胴部外面上半は、ヨコ方向のヘラ磨き、下半はタテ方向のヘラ磨きで、胴中に二列の列点文を巡らす。胴内面は大概ねナデ仕上げ、底部にヘラ削り痕を残す。

SD 193 出土の土器 (Fig.63-5、6) 5は高杯形土器、6は把手付壺形土器。5は分割成形技法による高杯で、杯中央の接合部分が剥落している。杯部内外面、脚部外面はヘラ磨き仕上げで、杯部立上がり部内外面に斜格子状の暗文風ヘラ磨きが加わる。脚部内面はヘラ削りで、脚端部に凹線風の条痕が一条巡る。6は、把手部の割れた壺形土器で外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り仕上げである。

遺構外出土の土器 (Fig.63-7、8) 7区H抗付近でまとまって発見された土器で、いずれも壺形土器。7は肥厚してやや上方に立上がる口縁端面に4条の凹線文を巡らし、外面の頸部から胴部にかけてヘラ磨き加わっている。頸部にはラセン状に沈線文が巡らせられ、下端に連続刺突文を巡らす。8は、口縁端を肥厚させ上方へ立上がらせた外面に櫛状工具によるとみられる平行沈線文を巡らす。胴部外面はタテ方向のヘラ磨きで内面はヘラ削りである。

SD 155、156 出土の土器 (Fig.64-1、2) 1、2とも壺形土器。口縁部端部に二条の凹線文を巡らす。外面ヨコナデ、内面ナデ及び刷毛仕上げ。

SD 186 出土の土器 (Fig.64-3、8) 3、8いずれも壺形土器。口縁部端部に二条の凹線を巡らす。胴部外面は、斜めに刷毛で成形しタテ方向の刷毛調整で仕上げている。内面はナデ仕上げで、8底部にはヘラ削りが加えられている。

SD 187 出土の土器 (Fig.64-4~7、9~13) 4、5、6、10~11、13は壺形土器。7、12は鉢形土器。9は器台形土器。4~6、10~13には口縁部端面に3~5条の凹線文を巡らす。4~6、9、12の外面には刷毛目が残る、11、13はヘラ磨き仕上げ。9の口縁端面には櫛状工具により波状文を巡らしている。9、12の内面に刷毛目が残るが、内面は大概ねヘラ削り仕上げである。5は頸部下端に刺突文を巡らし、10も同位置に刺突文が巡っていたらしいが明瞭でない。13は、胴出曲部に列点文が巡る。6、7の外面にはススが付着している。いずれも一括廃棄された遺物で、大田十二社2式土器併行のものとみられるが、大田2式に較べいずれも古い様相をもっており、将来大田1式と2式の間を生める資料となるかもしれない。

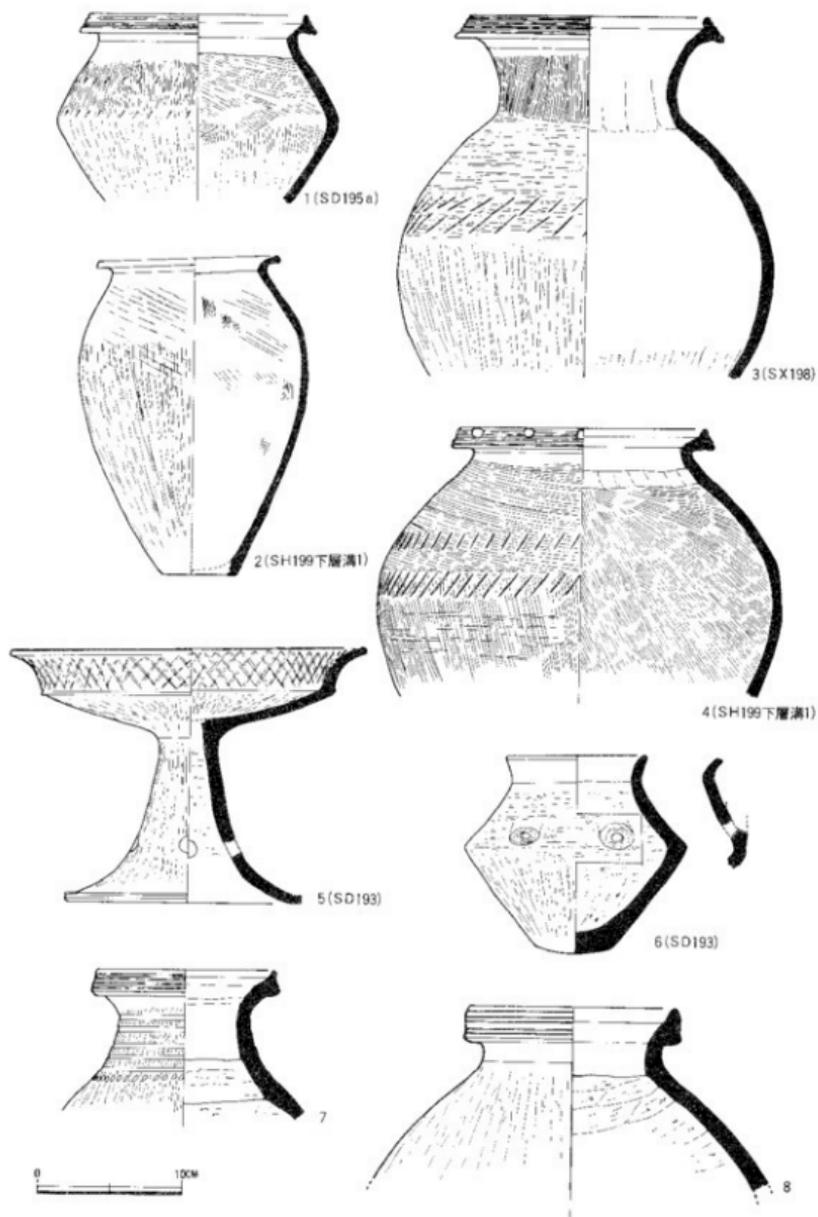


Fig. 63. 京免遺跡9区出土の土器1 (縮尺1:4)

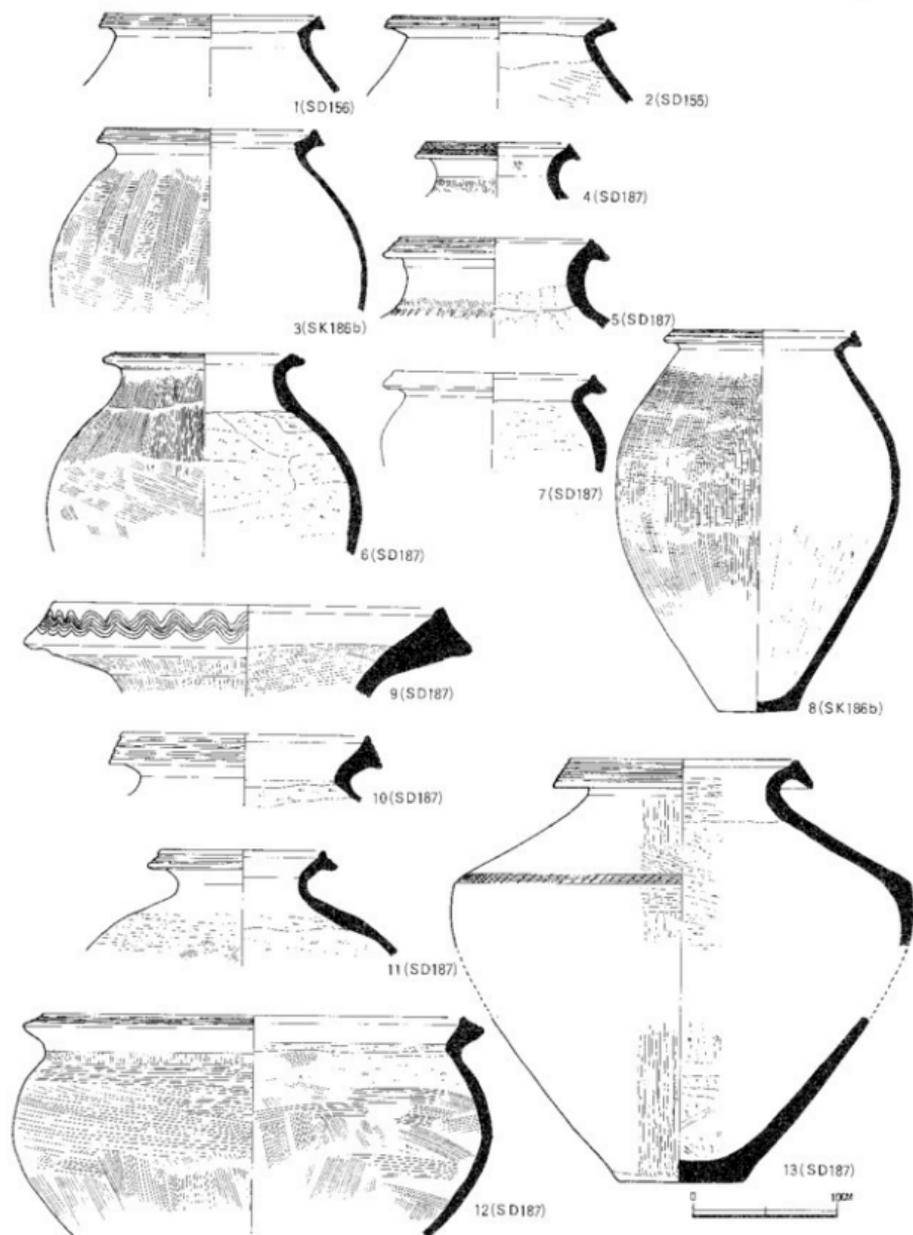


Fig. 64. 京免遺跡9区出土の土器2 (縮尺1:4)

⑤ 9区、10区の概要

ここでは、9区のSD 170以南と10区についてその遺構の概要を記述する。

両地区とも全搬に遺構の遺存状況は良くなく、9区ではかろうじて竪穴住居の壁体溝を痕跡的にとどめるものがあるが、10区に至っては検出遺構の大半は柱穴のみでしかも、そのほとんどは深さが10~30cm程度のものばかりで、遺構の種類すら正確に判別できない。

従い、遺構の所属年代もそのほとんどが不明であるが、水田耕土層も含め、この地区で発見された遺物の多くは、判別可能なものは弥生時代中期に属しており、この時期の遺構が多いことは察せられよう。

SD 251は、検出面での幅3.5~4m弱の法面がゆるやかに傾斜する溝で、中央部の最も深い部分で深さ約50cm程度である。埋積土は、暗褐色粘質土(上層)と明褐色粘質土(下層)に大別され、いずれにも黄色の地山土がブロック状に含まれる。堆積状況からみても、人意的に埋められた可能性が高い。埋土中には、少量の弥生式土器片を含むが遺物はほとんど含まれておらず、溝底部分で勝間田焼が発見された。中世以降の溝と考えられるが、地形からみて用排水溝とは考えにくい。

SD 250は、幅60cm、深さ30cm前後の溝で住居外周溝の可能性もあるが、SD 251によって切られ手がかりは薄い。SD 251南東端で、同規模の溝が一部発見されており、この溝につづいていた可能性がある。

SD 252は、幅15~30cm、深さ2~3cmの直線状につづく溝で、SD 253に類似する。

SD 253は、幅10~40cmの溝で、深さは3~10cm。溝底は、東へとやや深さを増す。SH254の壁体溝部分で途切れている。接する部分の両溝の底レベルは同一である。

SH 254は、竪穴住居の壁体溝とみられる溝のみ検出したもので、その溝幅は、15~20cm、深さは3~4cmである。南西部でかくばり、隅丸方形住居の壁体溝とみられるが、これに伴う

遺構名	位置	遺構種別	時期	備考
SD 250	9-35・36	住居外周溝?	M III?	弥生中期土器片少量を含む
SD 251	9-35・36	溝	中世以降	勝間田焼を溝底に含む
SD 252	9-37・39	*	M III?	弥生中期後葉土器片を含む
SD 253	9-39・40	*	?	
SH 254	9-39・41	竪穴住居址	?	隅丸方形住居?
SH 82	9-40	*	M?	
SB 81	9-43・44	竪立柱建物	M III?	1間×1間、1柱穴に中期後葉の石台片を含む
SB 85	10-1	*	M?	1間×2間、1間×1間の可能性強い、柱穴にササカイトチップ
SB 255	10-1	住居外周溝?		SH 86に対応するか
SH 86	10-2	竪穴住居址?	?	
SH 86B	10-2	*		柱穴に弥生式土器片2片を含む
SG 87	10-3	近世築	近世以降	
SK 301	10-3	土塊	縄文後期	
SB 88	10-6	竪立柱建物	?	1間×1間
SB 88B	10-6	*	?	1間×1間
SB 300	10-7	*	?	1間×2間 (or 2間以上)

表6. 9区、10区遺構一覧表

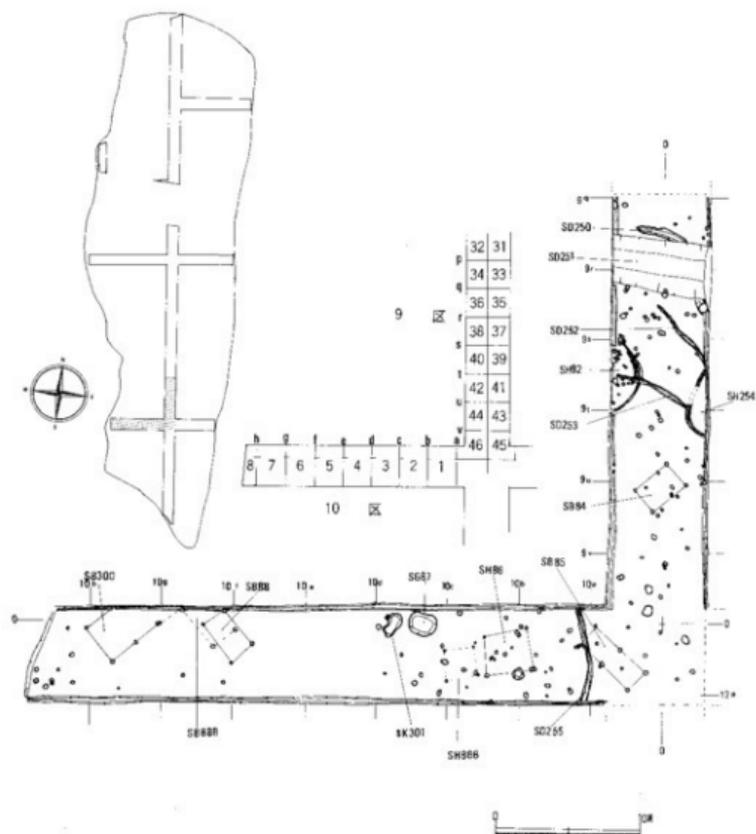


Fig. 65. 京免遺跡9区、10区遺構配置図(縮尺1:400)

柱は検出できなかった。

SH82は、痕跡的に検出された壁体溝3条と柱穴から想定される円形竪穴住居址である。本来の形の約東側3分の1程度が発掘区にかかったもので、柱の組み合わせは不明。壁体溝の痕跡からみて、3回程度の拡張をおこなったとみられる。

SB84は、1間×1間の掘立柱建物とみられ、柱穴心々間距離は、長辺2.9m及び3.0m、短辺2.1m及び2mで、各柱掘方径は28~30cmである。このうち一柱には径約10cmの円形柱痕跡が残されていた。各柱の検出面よりの深さは、15~30cmであるが、柱穴底のレベルは一定である。

SB85 (Fig.67) は、1間×2間の掘立柱建物と考えられるが、P13、P14は柱掘方径も他4穴に較べ小さく浅いので、P10~P12、P15の4本柱で構成される1間1間の建物を想定の方がよいかもれない。ほぼ平坦な検出面からの各柱柱穴深度は、P10~P12、P15で29~31cm、P14が24cm、P13、19cmである。各柱間距離は、P13~P14、1.7m、P14~P15、2.05m、P15~P10、2.20m、P10~P11、1.8m、P11~P12、2.45m、P12~P13、2.2mである。なおP17の検出面からの深度は13cm、P16は32cmである。

SD 255 は、幅25~40cm、深さ4~6cmの溝で、中央でややカーブする。SH86を取り囲む可能性もあるが、西部部分の遺存状況悪く機能不明の溝である。

SH86 (Fig.67) は、4本柱の竪穴住居を想定したものであるが、そうとしても床面は完全に削平されており、P9も中央穴とする確証はない。柱穴間距離は、P5~P6が3.4mもあり、竪穴住居の柱間としてはやや広すぎるかもしれない。

SH86B も、4本柱の竪穴住居の柱穴のみ残存した例とみられるが、確実ではない。

SB88は、P9~P12で構成される1間1間の掘立柱建物とみられ、検出面からの柱穴深度



Fig. 66. 京免遺跡9区平面図 (縮尺1:80)



Fig. 67. 京免10区平面图 (縮尺1:100)

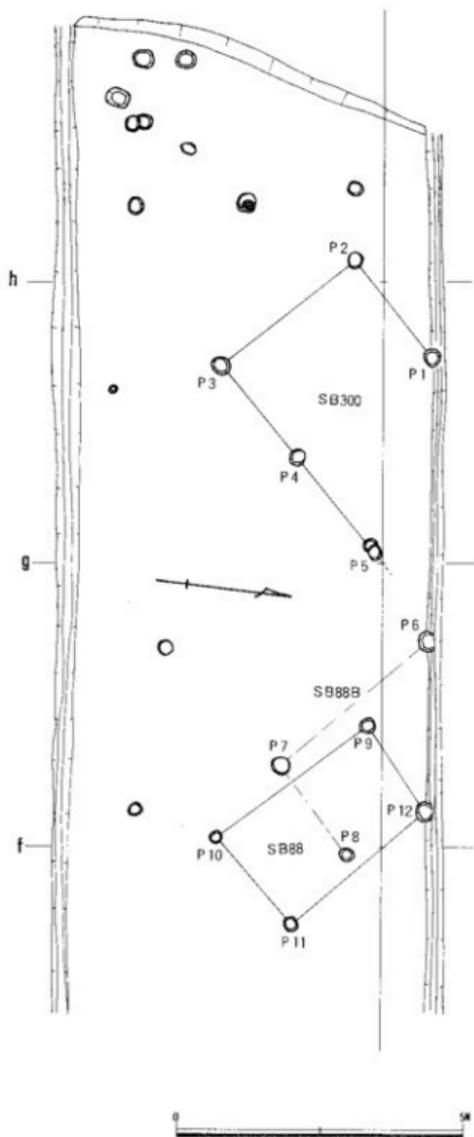


Fig. 68. 京免通跡10区平面図 (縮尺 1 : 100)

はほぼ20cm前後で一様である。柱間心々間距離は、P9～P10、3.3m、P10～P11、2m、P11～P12、3.1m、P12～P9、1.8mである。

SD88Bも、同様の掘立柱建物とみられ、1柱は発掘区外に存在するとみられる。柱穴心々間距離は、P6～P7、3.35m、P7～P8、1.95mである。

SB300は、1間×2間ないしは2間以上の掘立柱建物とみられる。いずれの柱掘方径も30cm前後で、検出面からの深度10～15cmで一定である。P6が、SB300に伴う可能性もあるが、やや心をずらせる。各柱間距離は、P1～P2、2.2m、P2～P3、3.0m、P3～P4、2.1m、P4～P5、2.15mである。

SK301 (Fig.69)は、長径1.7m、短径0.8mの不整長方形の土城で、縄文時代後期とみられる土器片2片が、1及び3層に包含されていた。床面には凹凸があり、壁面も整ったものではないが、人意的に掘られた穴である可能性はきわめて高い。南東部分で、いわゆるドーナツ状遺構と切り合っており確実にこのドーナツ状遺構を切っている。西部分に接して、弥生式土器片を含む二柱穴が存在するが、いずれも検出面より柱穴底部まで10cm前後を残すのみでこの部分の後世の削平が相当進んでいることを示している。

京免遺跡ではこの他1区で縄文時代のもともみられるサヌカイト製スクレーパー1点が発見されている以外明確な遺物はないが、大田十二社遺跡でも同様なスクレーパー、高橋谷遺跡、総社山崎遺跡で縄文時代とみられる石鏃が発見されており、東蔵坊B地区では、押型土器、後期の磨消縄文土器片、石鏃等が発見されている。

いずれの遺跡においても、縄文時代の遺物は、明確な遺構に伴

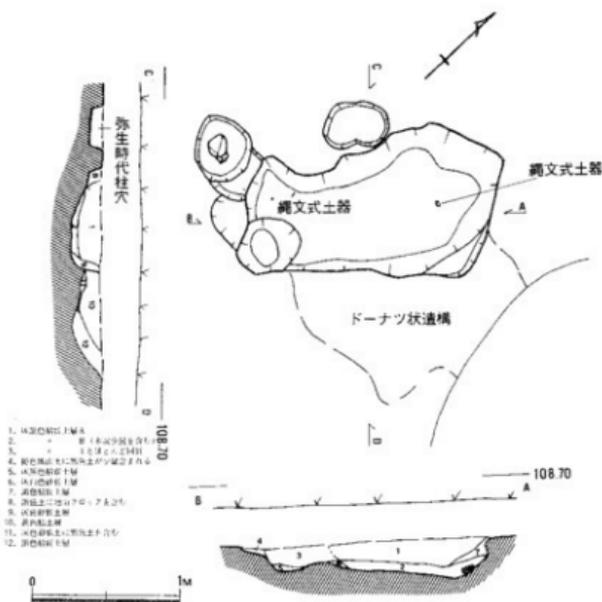


Fig. 69. SK平面図、断面図(縮尺1:40)

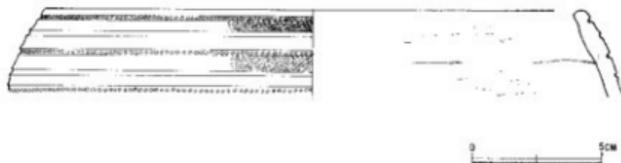


Fig. 70. SK 301出土の土器(縮尺1:3)

って発見されるのではなく、多くは、表面採集という形でたまたま発見されるもので、縄文時代の遺構のあり方については現状ではまったく不明といわざるえない。

SK 301出土の土器(Fig.70) 4×6cm角の磨消し縄文土器破片で、浅鉢形土器口縁部片とみられる。外面には5条の沈線文がめぐり、上から1、3、5番目の沈線には刺突文が巡らされている。沈線間の面には、交互に縄文が施文されており、内面は、ヘラ磨きを加えられている。内面には、粘土帯の接合痕が、観察される。遺存状況は良好で、暗褐色を呈し、1~2mmの砂粒を含んでいる。

⑥ 11区、12区の概要

11区、12区は、京免遺跡の位置する河岸段丘面の最南端部で、東は紫保井川へと徐々に傾斜しつつ下降し、西はほぼ平坦なまま突端で宮川の形成した崖に至る。旧地形もほぼ同様な状況にあったとみられるが、西部分の遺構の方がより削り込まれており、西部分は現況よりさらに高かったことが考えられる。12区南端も、今は段状に水田化されている宮川の攻撃斜面でおわり、この下段の水田では、深掘りすると宮川の氾濫によって運ばれたとみられる河原石がみつかるという。従って、京免遺跡の西端及び南端が本来どの程度まであったのかは想像できないが、南端の一段下段には京免古墳があって、そのことから考えると南端部は、弥生時代の状況も今と大幅に異なることはないと考えられよう。

11区で検出された遺構は、竪穴住居址、住居外周溝、溝及び近世墓等で、傾斜のある東端部分ほど弥生時代の遺構は良く残っていた。

12区は、北半の削平の度合いが強かったと見え、一本の溝、近世墓、弥生時代とみられる浅い柱穴のみが発見された。南半では、竪穴住居址及び6基の木棺墓群が発見された。この木棺墓群の主軸方向は4群に大別でき、とても特定の方向性をもつとはいいがたいが、それぞれの示す特徴は、同時期の所産であることを示している。このうちの一基では、木棺材がわずかに残っており、それ以外のものもすべて、木棺自体が粘土化してその痕跡を明瞭に残していた。伴う遺物は、管土1点と掘方埋め土に残されていた中期とみられる土器細片のみで、切合も中期土器包含層を切っていると考えられる点、柱穴との切り合いが認められた以外所属時期を決める決定的証拠はない。諸般の状況からみて、中期後葉～後期初頭のものと考えられよう。

SH 200 (Fig.72) は、一辺5m程度の隅丸方形竪穴住居址とみられ、2本の主柱穴と壁体溝の一部が確認された。西辺部に残されていた壁体溝幅は、10～15cmで深さは4cm前後であった。床面は大平すでに削りとられていると考えられる。主柱とみられるP1は、掘方径約40cm P2は50cmで深さはそれぞれ、24cm、26cmとやや浅い。直接SH 200に伴う遺物が発見されなかったが、弥生中期のものである可能性は強い。

遺構名	位置	遺構種別	時期	備	考
SH 200	11-2	竪穴住居址	M?	一辺5m前後の隅丸方形住居、主柱穴から中期土器片	
SH 201	11-3,4	住居外周溝	MⅡ		
SD 201	11-4	溝	M?		
SD 205	11-4	*	MⅡ		
SD 206	11-12-2,3	*	MⅡ	直径5m程度の円形住居	
SH 230	12-9	竪穴住居址	M?		
SG 91	12-10	木棺墓	MⅡ-L1?	棺材の一部が遺存	
SG 92	12-10	木棺墓	MⅡ-L1		
SG 93	12-10	木棺墓	MⅡ-L1		
SG 94	12-10	木棺墓	MⅡ-L1		
SG 95	12-11	木棺墓	MⅡ-L1	管土一点出土	
SG 96	12-11	木棺墓	MⅡ-L1	弥生中期とみられる柱穴を切る	

表7. 11区、12区遺構一覧表

※ M-中期 L-後期 I-前葉 II-中葉 III-後葉

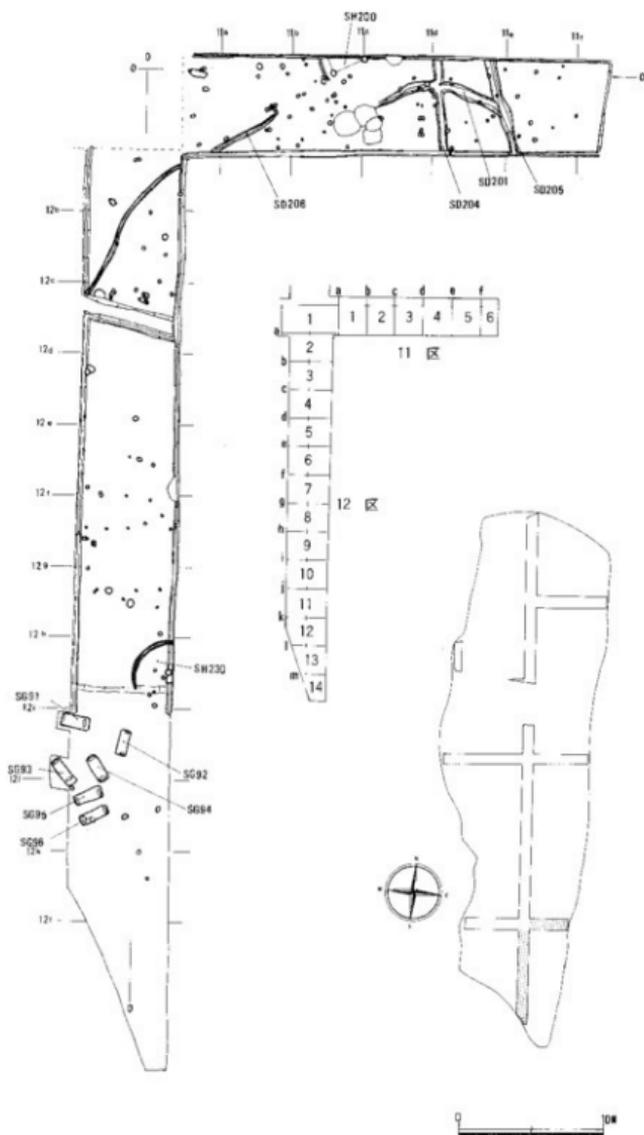


Fig. 71. 11区、12区遺構配置図 (縮尺 1 : 400)

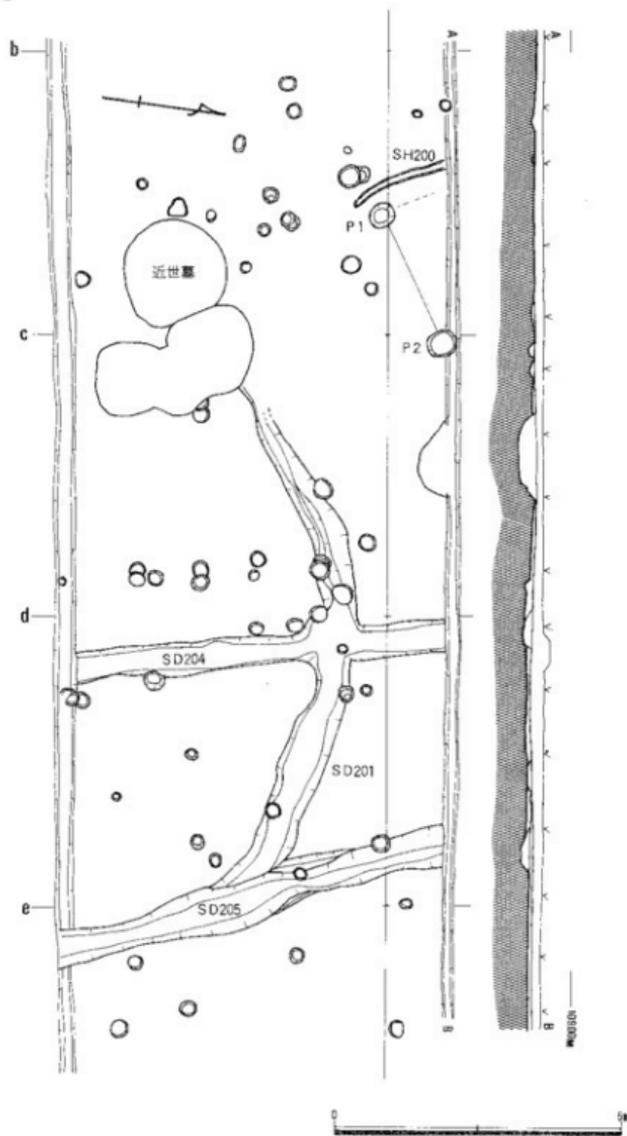


Fig. 72. 京免遺跡11区平面図 (縮尺1:100)

ける高低差を認めえない。

SD 205 も、南北に直線状に走る溝である。幅は、50~70cmで、深さは7~13cm程度である。

SD 201 は、幅80cm前後の溝で、彎曲状況からみて住居外周溝と考えられよう。西半は、消失しており、東半は深さ5~7cmを残してSD 205 に合している。溝底は東部分ほど低くなっている。SD205 との切り合い関係は不明である。両者が共存した可能性も考えられよう。埋土に若干の土器片を含んでいたが、遺物量は多くない。

SD 204 は、南北に走る幅50cm程度の溝で、深さは北部分で8cm、南部分で6cm程度であるが、溝底のレベル高はほぼ同一で発掘区内にお

溝底のレベルは、北端と南端で6~7 cmの差があり、溝底は南へと徐々に下降している。溝内には、比較的多くの遺物が残されていたが、弥生中期に属する土器片が多数を占める中で、前期に属するとみられる破片もあった。その他、掌大の河原石が比較的多く認められた。また、溝埋土中には、炭化物の細片が多く含まれており、ワラないしはカヤの炭化物ではないかと思われるものもあった。

SD 201、204、205 周辺には弥生時代のもつとみられる多数の柱穴が発見されたが、構築物を推定復元することはできなかった。

この他11区では、5基の、また12区では1基の丸棺で葬むつたとみられる直径1m~1.5mの円形土壙墓が発見された。いずれも埋土は、青灰色の粘質土及び褐色土等で、数基のものから

近世末期と考えられる陶磁器類が発見された。1基からは骨片と考えられる、小さな白いかたまりが発見された他まったく骨の遺存はなかった。

SD 206 は、11区西端部から12区北端部に抜ける溝で、やや蛇行しながら12区西壁へと逃げている。検出部の全長は約20mで、幅25~35cm、深さはほぼ平坦な検出面より約10cm内外である。SD 206 がどういった性格の溝か手がかりが少く不明といわざるえないが、あるいは、住居群を区画するような溝であったことも考えられよう。

SD 206 ~ SH 230 にかけての部分に点々と柱穴が発見されたが、建物としてまとまらない。柱の中には、弥生中期の土器を含むものがあり、多くはこの頃のものであろう。

SH 230 は、直径約5m程度の円形竪穴住居址で、壁体溝約1/4と中央穴(P2)とみられる穴を検出した。P1が、住居主柱の1本と考えられるが、他は検出できなかった。SH 230の床面は必ずしも柱検出の困難な状況ではない。P2から弥生中期とみられる土器片が発見されたが、時期を決定するにたるものではない。

SG91、長辺2m、短辺80~90cmの長方形土壙で、検出面に木棺痕跡が明瞭にあらわれてい

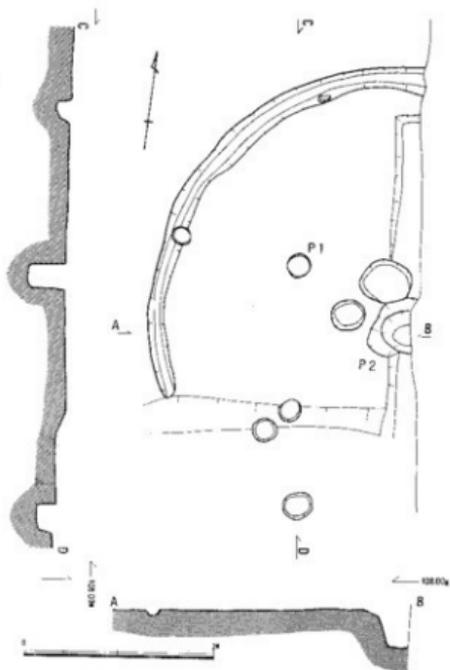


Fig. 73. SH 230平面図、断面図(縮尺1:60)

た。木棺痕跡から想定される木棺規模は、平面で棺内測長辺1.50m、短辺40cmで、小口板外方に側板端が両外開きに延びていることが観察された。棺内に埋没した土と、掘方に込められた土とは大概ね同質で、それは墓壇を掘り上げた際の土に若干の有機土が加わったものとみられた。このうち、北東部の掘方を埋めている土は、弥生式土器包含層ないしは弥生時代の遺構内埋土とみられる黒色土であって、弥生式土器細片が数片含まれていた。

同質の埋土ではあるが、棺内埋積土の方が灰色粘土を多く混じえており、若干の色調の変化もあって、さらに棺界線には棺材が化して粘土となった灰黒色帯が延びており、棺内外の掘り分けは、ほぼ正確におこなうことができた。

棺は、底板、小口板2枚、側板2枚、蓋板一枚からなっており、両小口板は墓底からさらに15cm内外の深さの穴を掘って埋めこまれていた。また側板も、底板側縁に浅い溝を掘って据えられている。蓋板の形状は明瞭でないが、長軸断面東部分中に中央部へ折れ込んだ蓋板痕跡が確認された。

粘土化した棺材痕跡の示す棺材の厚さは底板3～6cmで、小口板約1cm、側板1.5～3cmで両側板とも内側に全体として倒れ込んでいた。

棺底には、20×5cm、22×8cm、厚さ2cm内外の二片の棺材及び数片の木質が遺存しており、この材質の同定を東京大学理学部の松谷暁子に依頼した。同定結果は、高野楨である。(巻首図版2)なお、この同定に際しては、東京大学農学部の鈴木三男に切片の一部を作成していただいた他、京都大学の島地謙の教示を受けた。

SG92は、墓壇底から検出面まで7～8cmほどを残すのみで、上部のほとんどが削りとられていた。墓壇規模は、長辺1.7～1.8m、短辺75cm前後とみられるが四周の土の状況が悪く、墓壇界は正確ではない。北小口板が外方へ倒れ込んでいるが、棺の復元規模は、平面内測長辺1.40m、短辺33cm前後の値が得られる。底板痕跡の厚さは、3～4cmで、南小口板部分は上方へ彎曲している。小口板痕跡の厚さは、南2～3cm、北3～4cmである。棺内埋積土は、黄褐色土に灰色粘土が混じり、他の墓壇とほぼ同じく棺上に埋められた土が陥没したことを示している。

SG93は、墓壇長辺2～2.05m、短辺70cmで、検出面に木棺痕跡がもっとも鮮明に顕われた例である。棺内測は平面長辺1.44m、短辺35cm前後の値が考えられる。側板及び小口板は全体に内傾して遺存し、特に北東部の側板は土圧により大幅に内彎し、折れ曲っていた。底板の痕跡は、1～2cm、小口板の痕跡は北西辺のもので2cm弱、南東辺で1cm弱の厚さを測る。側板痕跡からは2～2.5cmの値が得られた。

墓壇底には、8個あまりの掌大よりやや大きめの河原石が、棺底両小口より長軸に直交しそれぞれ配備され、一見枕石とされる外観をとっているが、これらの石はすべて棺の底板の粘土化した層と切り合いがあり、河原石が下から粘土帯をつきやぶっている。このことは、これ

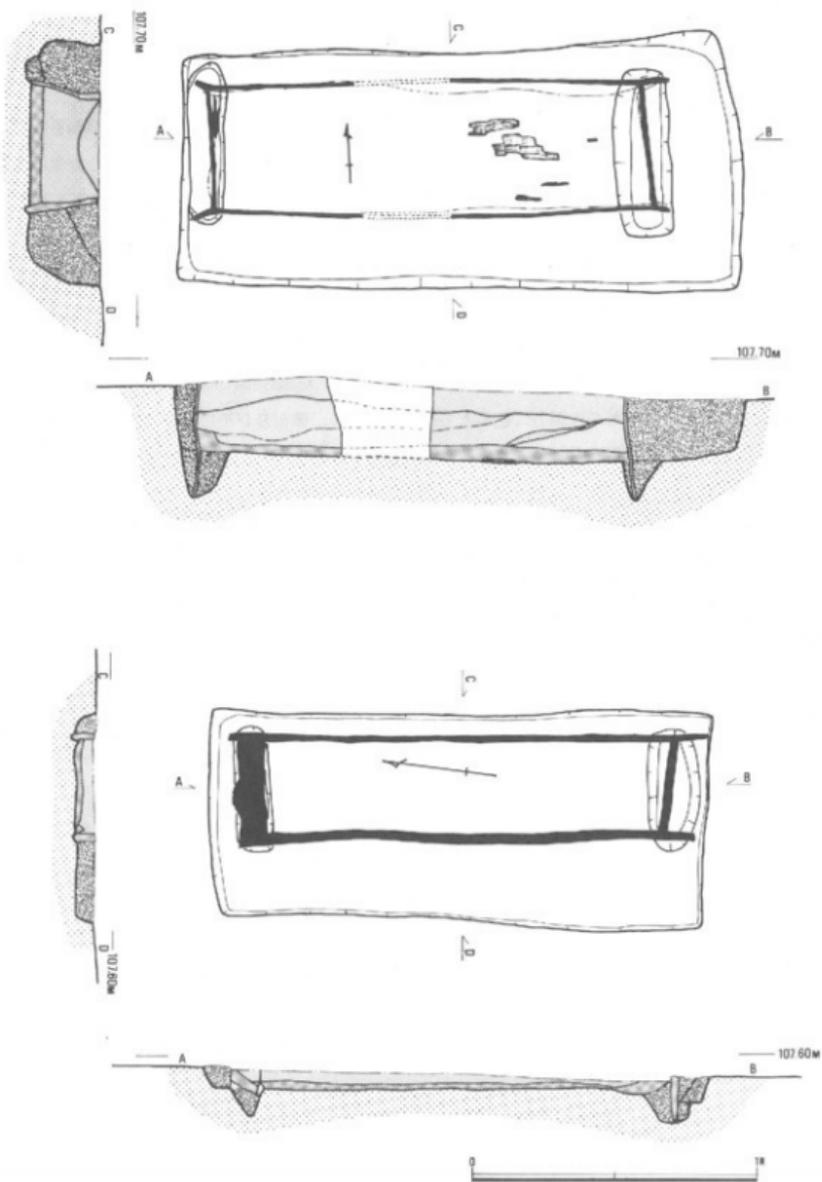


Fig. 74. 木棺墓 S G 91, S G 92 平面図、断面図 (縮尺 1 : 20)

らの石が底板の安定のために配備されたことを示している。なお、断面図ではこれら河原石下半が墓底下に沈んでいるが、これは被葬者の重量によって底板が沈下し、その結果軟弱な基盤層ないしは、墓底を整えた土層に沈み込んだものと考えられる。

SG94は、墓底掘方長辺1.8~1.9mで、短辺75~80cm、検出面から墓底まで約15cmを残す。側板及び小口板痕跡はいずれも内傾して残り、底板は長軸平行にやや彎曲している。棺復元形内測寸法は、長辺1.55m、短辺37cm前後の値が考えられる。棺底及び掘方部に数個の石が発見されたが、それらが機能していたものかどうかは不明である。

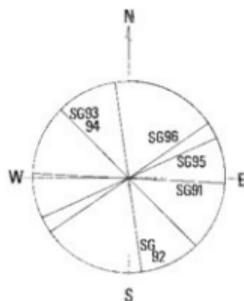
木棺痕がしめす棺材の厚さは、底板1~1.5cm、側板1及び1.5cm、小口板1cmである。いずれも小口穴内側に密着している。

SG95は、墓底掘方長辺1.95~2mで、短辺75~83cmで検出面から墓底までの深さは15~17cmである。棺内測は平面長辺1.55m、短辺48cmである。棺掘片部に角礫がまじっているのは、地山に含まれていたものを掘方に込めたものと思われる。側板及び小口板も土圧により内傾していることが顕著に認められる。長軸断面東小口部分上方から内部に蓋板が落ち込んだためにできたと思われる灰色粘土帯がある。各棺材痕跡の示す棺材の厚さは、底板2cm強、側板2cm強、小口板2cm前後、蓋板痕跡は、最大幅5cmである。棺内埋土中位下半から碧玉製の直径2mmの管玉一点が出土した。

SG96は、SG94に平行して遺存した木棺墓である。土壌規模は、長辺2.05m、短辺70~75cmで、検出面から墓底までの深さは、10~15cmである。木棺痕跡から復元される木棺規模は、平面形長辺1.58~59cm、短辺44~45cmである。西側小口板と接する部分の底板痕跡が厚く二重になっているのは上方が蓋板痕跡であると考えられよう。各棺痕跡が示す棺材の厚さは、底板2cm、側板2cm、小口板2cmで、底板は長軸平行にそりかえていた。SG96はまた、弥生時代中期と考えられる柱穴との切合があり、この柱穴を切っていた。

これらの墓群に確実に伴う遺物は、SG95で発見された管玉一点のみで、その他の遺物としてはSG91掘方埋土に入っていた数片の土器のみである。これらの土器片は中期に属するものと考えられるが、剝離激しく正確には時期を決しえない。以上の如くこれら墓群の正確な所属時期は決めないが、大概ね弥生時代中期後葉から後期初

頭のもので
あるとみる
ことができ
よう。



木棺長軸方向



Fig. 75. SG95出土の管玉 (縮尺1:1)

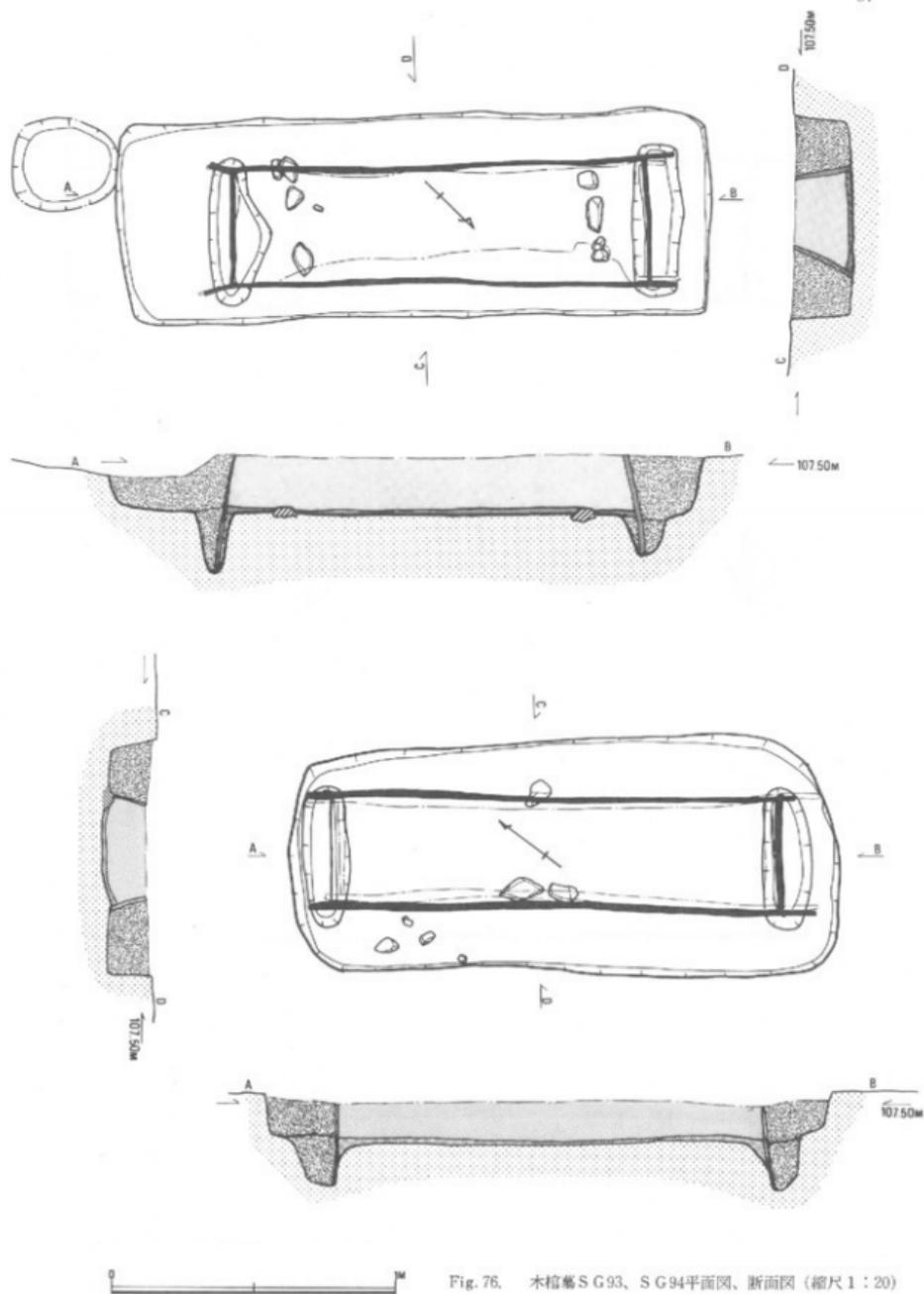


Fig. 76. 木棺墓SG93、SG94平面図、断面図（縮尺1：20）

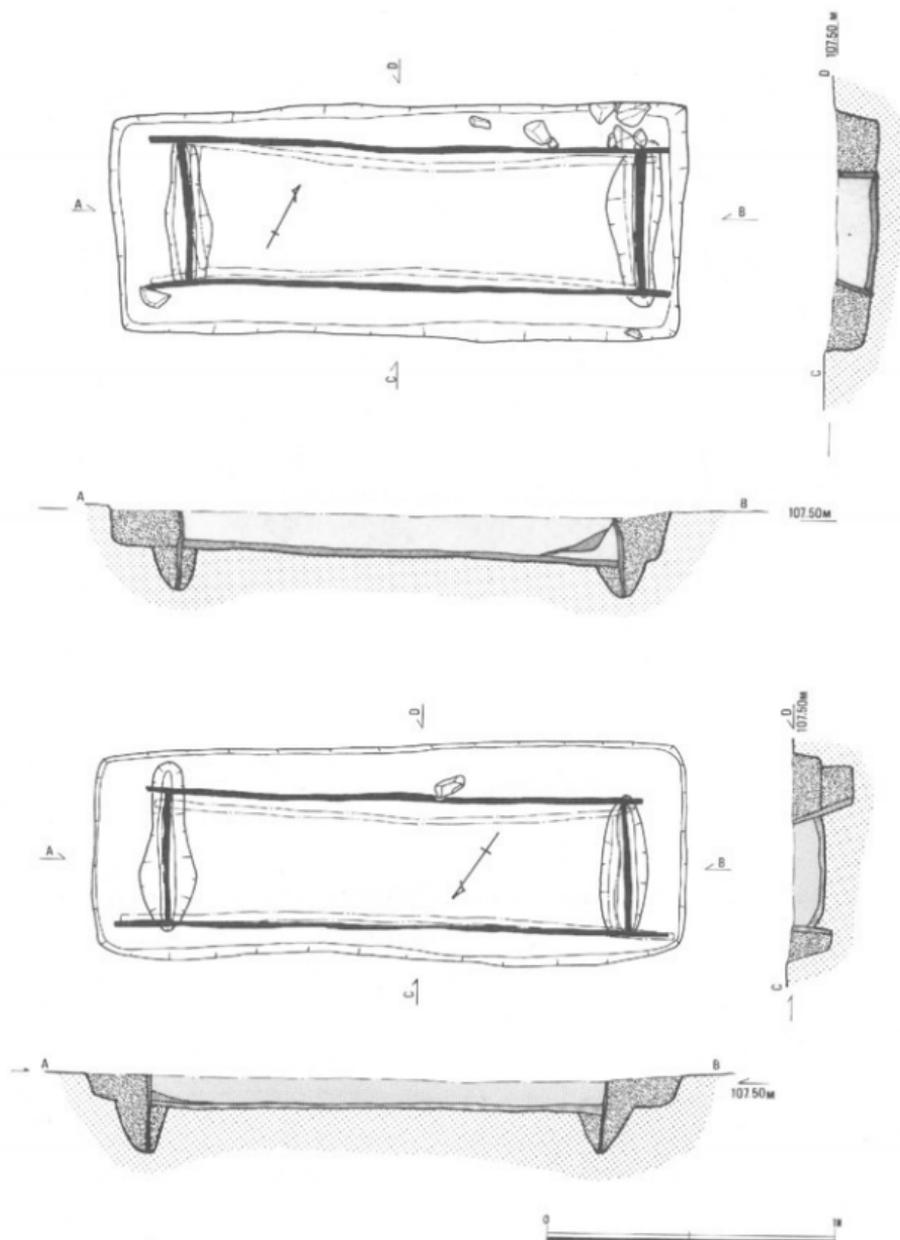


Fig. 77. 木棺墓 S G 95、S G 96 平面図、断面図 (縮尺 1 : 20)

2 京免古墳の調査

京免遺跡南端に存在した古墳で、後世の削平により異様な形に変形を受けていた。外観は、長楕円形の積石塚状で、積石の中に中世土器等が混入していた。かつては、付近にこの種の塚が点々とあって、内部から五輪石が出たとかいう言い伝えもあり、当初は中世の塚ではないかと考えて発掘にかかったものである。

墳丘の遺存部は、径 5×3 mの長楕円形を呈し、墳丘上層には70~90cmの厚さで小児等大の石が積みあげられていた。発掘調査の結果、これらの石のほとんどは、後世開墾に伴い二次的に積み上げられたものであると判断された。

北側の一部を除いて、周囲は水田造成により当時の地表を大幅に地下げしているとみられ、墳端は確認できず、北側にも小トレンチを入れたが周溝等の施設を確認できなかった。従って本来の古墳規模は不明である。

埋葬施設は、並んで二つ確認され、いずれも黄褐色の地山面をわずかに切り込み石室を設置していたが、東石室(1)はほぼ旧状を保っていたものの西石室(2)は東壁のみ残すものであった。

いずれも竪穴形の石室で、大小の河原石を用いて構築している。

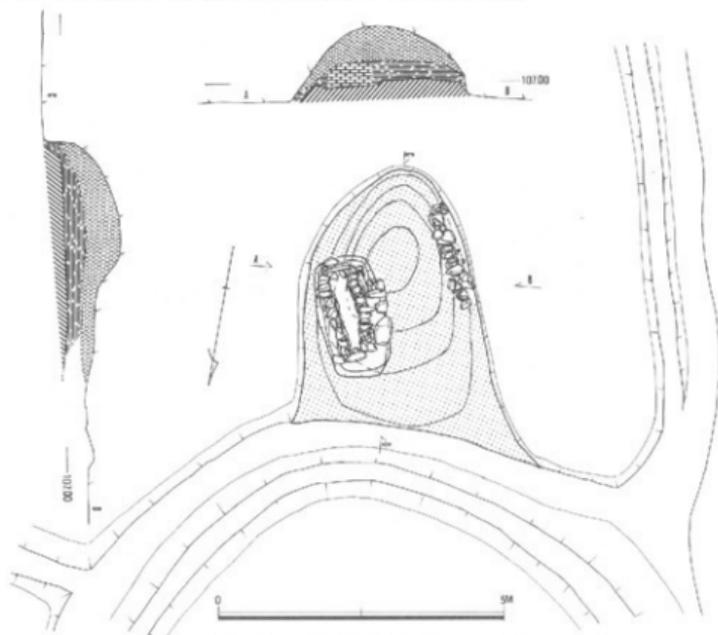


Fig. 78. 京免古墳外形図(縮尺1:100)

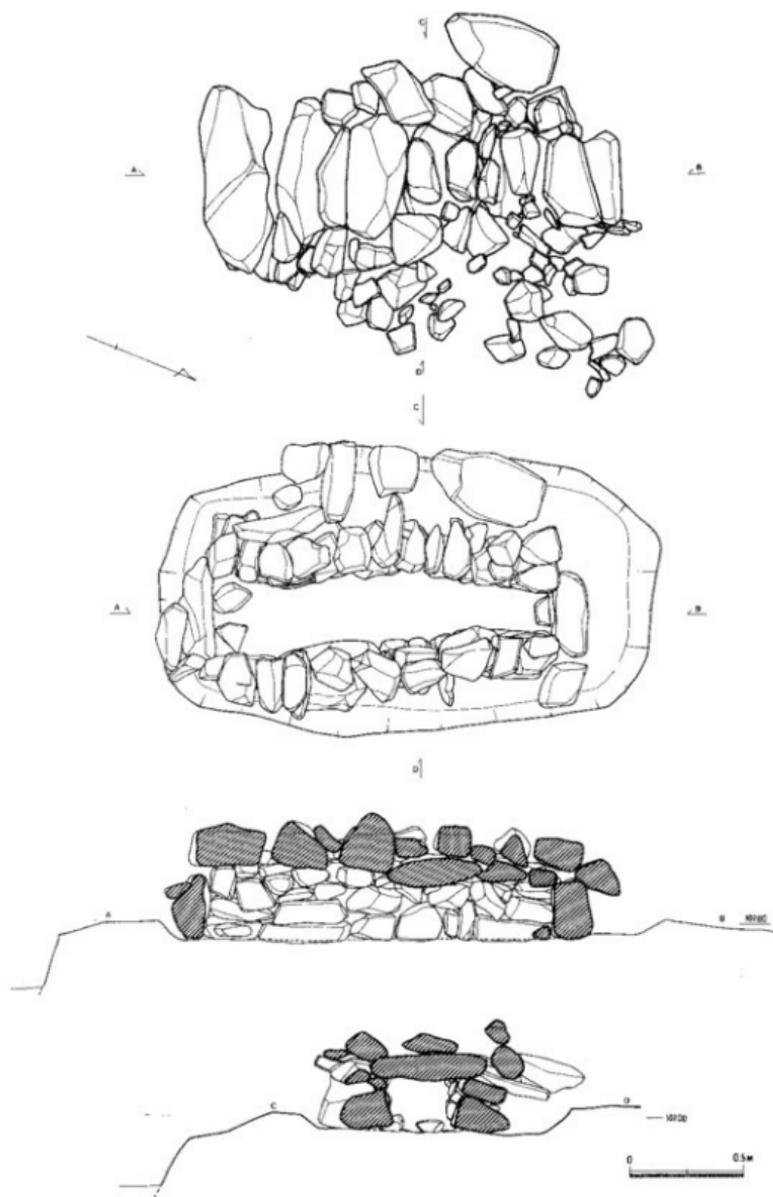


Fig. 79. 卓兔古墳石室1平面図、断面図（縮尺1：25）

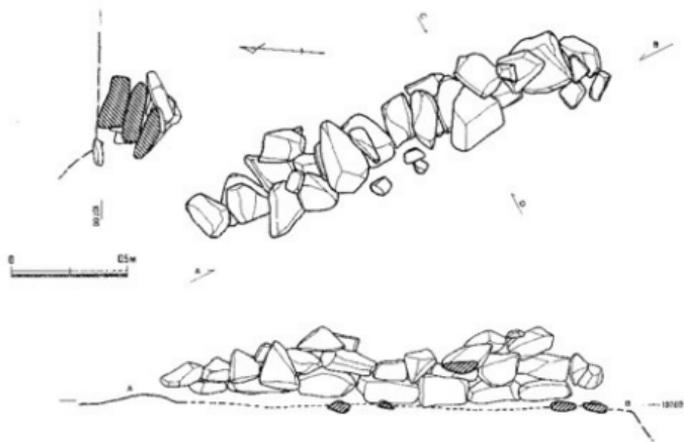


Fig. 80. 京免古墳石室2平面図、断面図(縮尺1:25)

石室1は、天井を横長の石材8枚で渡し、両短辺は鏡石各二枚で受けている。側壁は両側とも下段一ないし二段をやや大形の石材で横積みにし、上段を小口積みして天井石を受けている。この側壁の積み方は、横穴式石室の構築法に共通する特徴を備えている。

やや屈曲した石室内測は、床面で長辺1.5m、南短辺35cm、北短辺18cmで、棺を用いて埋葬したにしては幅が狭すぎるようにもみられる。しかし、石室床面両端部に2ないし1個の棺安定に置かれたとみられる平石が残されている。棺内には一際遺物はなかった。

石室2は、1の両側に平行に設置され、両方から開壁されてきて西半を消失し、東壁を残すのみである。したがって、石室端はいずれも明瞭でないが、掘り方の一部が存在しており、それからみると、1とほぼ同規模の石室であったと考えられる。

石積み法は、やはり下段をやや大形の石材を用いて一ないし二段横積みにし、上段の石材は小口積みしている。

前述したように古墳の墳丘内からは中世の陶器片が数片発見されているが、これ以外この古墳に本来伴っていたと考えられる遺物は一際なく、古墳の築成年代を明確にすることができないが、石室の構築法等から考えて終末期のいわゆる群集墳盛行期以降点々と残された古墳の一例と考えられよう。

同様の竪穴形の石室は、大田十二社遺跡でも発見されており、形態、規模とも類似しているが、これにもこの石室に伴う遺物はまったく発見されていない。

* 河本清・中山俊紀、安川豊史、行田裕美「大田十二社遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集 津山市教育委員会1981

3 弥生前期の土器及び石器

① 弥生前期の土器

京免遺跡出土の弥生前期土器片は、確認できたもので総数30片前後である。出土地点はほぼ集中しており、7区東端及び9区中央部でその大半は出土している。その他第1区及び第11区等にも数片散布していた。遺構との関係が判明したのは、SK 199 a 出土のものだけで、その他はいわゆる包含層中のものである。器種は大半が甕形土器で、壺形土器、鉢形土器とみられるものも数点ある。

Fig. 81は、1～6まで甕形土器、7は鉢形土器。1は逆L字形の口縁端部に指頭によるとみられる刺突を巡らす。頸部に12条のヘラ描沈線を巡らし、外面はタテのヘラ磨きのあとナデ仕上げされている。胴内面もヘラ磨き仕上げ。底部に焼成前の穿孔があり、甕と考えられる。

5に刺突がみられない他2、4、5も1と同様の特徴をもち、2には4条以上、4には8条以上、5には5条以上のヘラ描沈線を頸部に巡らす。いずれも内外面ヨコナデ仕上げ。

3、6はくの字形口縁で、端部に刺突を巡らし、3は2条、6は10条のヘラ箱沈線を頸部に巡らす。6の内外面はヘラ磨きで仕上げられている。7は、壺の可能性もあるが、胴部に5条以上のヘラ描沈線を巡らし外面ヘラ磨き、内面は刷毛仕上げ。1、4、7外面にスス付着。

これらのうち、3はやや古い傾向を示すが、いずれも大概ね同時期資料とみられ、弥生前期後葉の所産と考えられる。

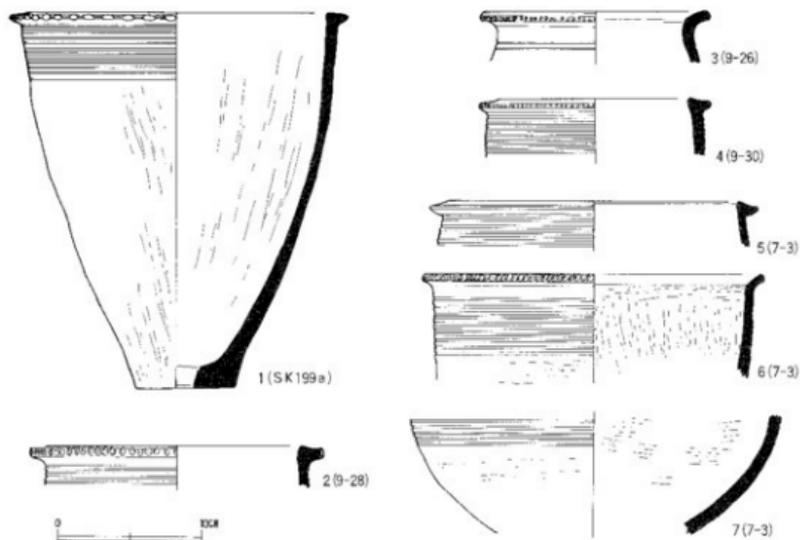


Fig. 81. 京免遺跡出土の前期の土器 (縮尺1:4)

② 京免遺跡出土の石器

石庖丁、京免遺跡ではFig. 82、83にあげた13点の他未製品ないしは、原材用扁平礫とみられるもの数点が発見された。素材の種類によって、これら石庖丁は粘板岩製のA類、その他緑色片岩等で作られたB類に大別することができ、未製品はいずれもB類に属する。これら石庖丁のうち所属時期の推定できるものは、SD 4出土の1、8、9（LⅠ～LⅢ）、SH 199出土の2～4（LⅠ）SD 109出土の7（LⅠ）で、他はすべて第3層弥生式土器包含層中より発見されたもの。

A類（Fig. 82-1～7）、原材の相違のみでなく、B類と形態及び製作上の違いが推測される。もともと、石庖丁の特性として、研磨を加え再使用してゆくうちに本来の形と大幅に異なるということもあり、必ずしも形態上はB類と区別できないものも多いが、この中で3、4、6などが本来の形態をよく残しているとみられ、ゆるく外彎する背部と大きく外彎する刃部が鋭い角をなして張り出すという特徴がある。また、成形痕を残さぬほどよく研磨されているものが多い。穿孔法もB類とは異り、敲打による両面からの穿孔部の薄化痕を認めるものはない。穿孔痕は、全面研磨したあと回転運動を利用した用具によって能率よくあけられており、1、2、4には、貫通した孔以外に用具があたってできた小孔を表面に残している。ただし、7はこのうちでも例外的で、形態及び穿孔法の点でもB類に近い。

B類（Fig. 82-8～12、Fig. 83-1）緑色片岩、石英片岩等片岩系の石材を素材とする石庖丁で、石庖丁製作のため持ち込まれたとみられる扁平石材、及び未製品がある。B類には、ねじまがったもの、荒削りによる打撃痕を表裏に残すものがある。穿孔は、打ち欠き整形後、穿孔部に表裏から敲打を加え薄くし、最終的にA類と同様の方法で貫通されたとみられるが、A類の6とB類の12の断面を比較するとこのことは明瞭になる。

大田十二社遺跡では、13点の石庖丁が発見されたがA類はそのうちの7点を占める。また京免遺跡と同様、A類の未製品はなく、B類の未製品一点が出土している。両遺跡とその他中期の遺跡の石庖丁のあり方を比較すると、A類は弥生後期に盛行したものとみられるが、高橋谷遺跡では中期に属する粘板岩製の類似した特徴をもつ石庖丁も出土しており、この二者の区別は中期に逆のぼる可能性を示している。また高橋谷遺跡ではB類の未製品が多数発見されたが、A類とみられるものはすべて完成品破片である。

A類、B類二系統の石庖丁の共存関係は中期に逆のぼる可能性が強いが、現在まで分かっている事実からみて、A類は製品による搬入品、B類は在地系石庖丁と考えることができよう。

石錘（Fig. 83-2、3）2、3とも火崗岩の円礫を利用したいわゆる石錘で、敲打により幅広い紐かけ用の溝を一周させている。しばしば集落遺跡で発見されるが用途は不明。多くは火崗岩を用いている。

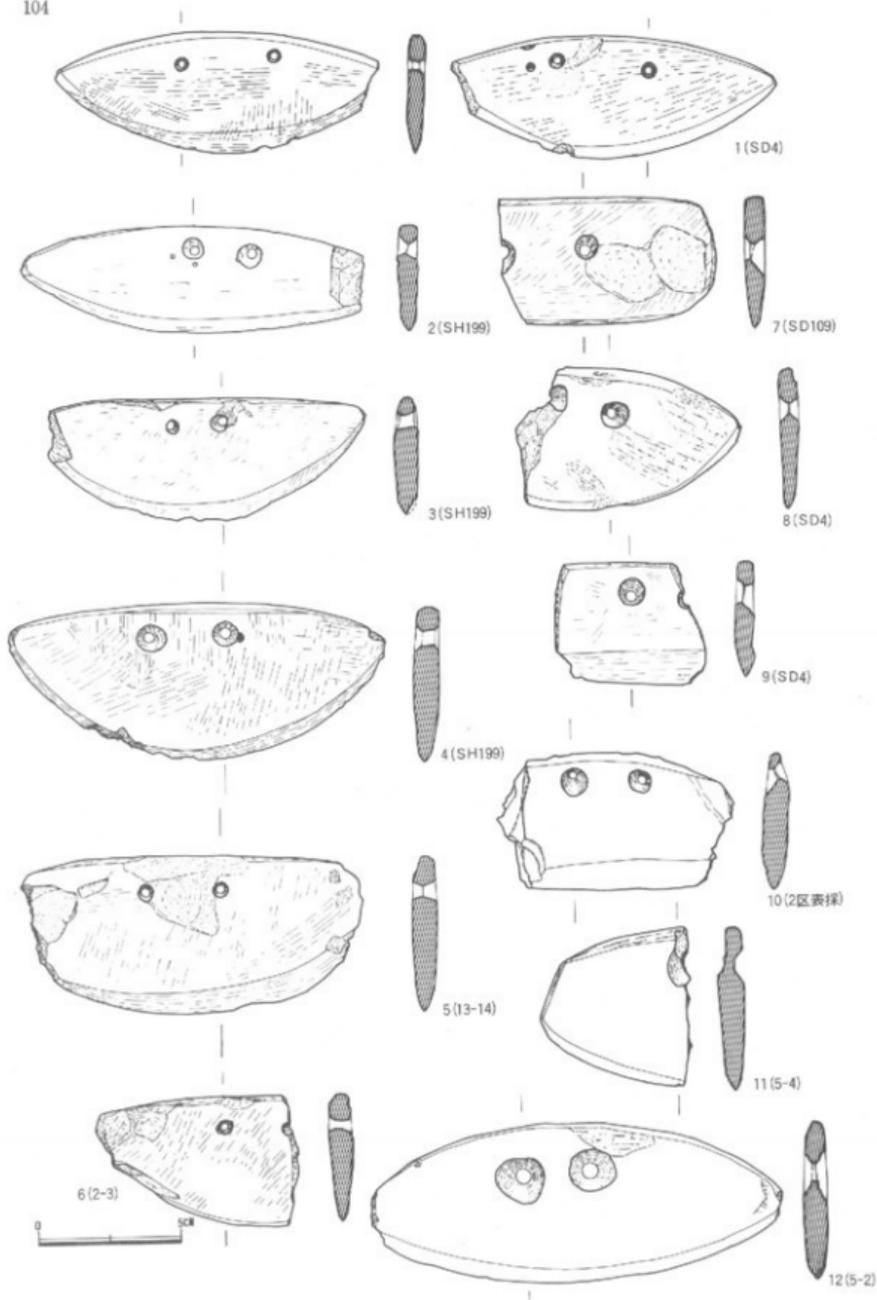


Fig. 82. 京免遺跡出土の石器 1 (縮尺 1 : 2)

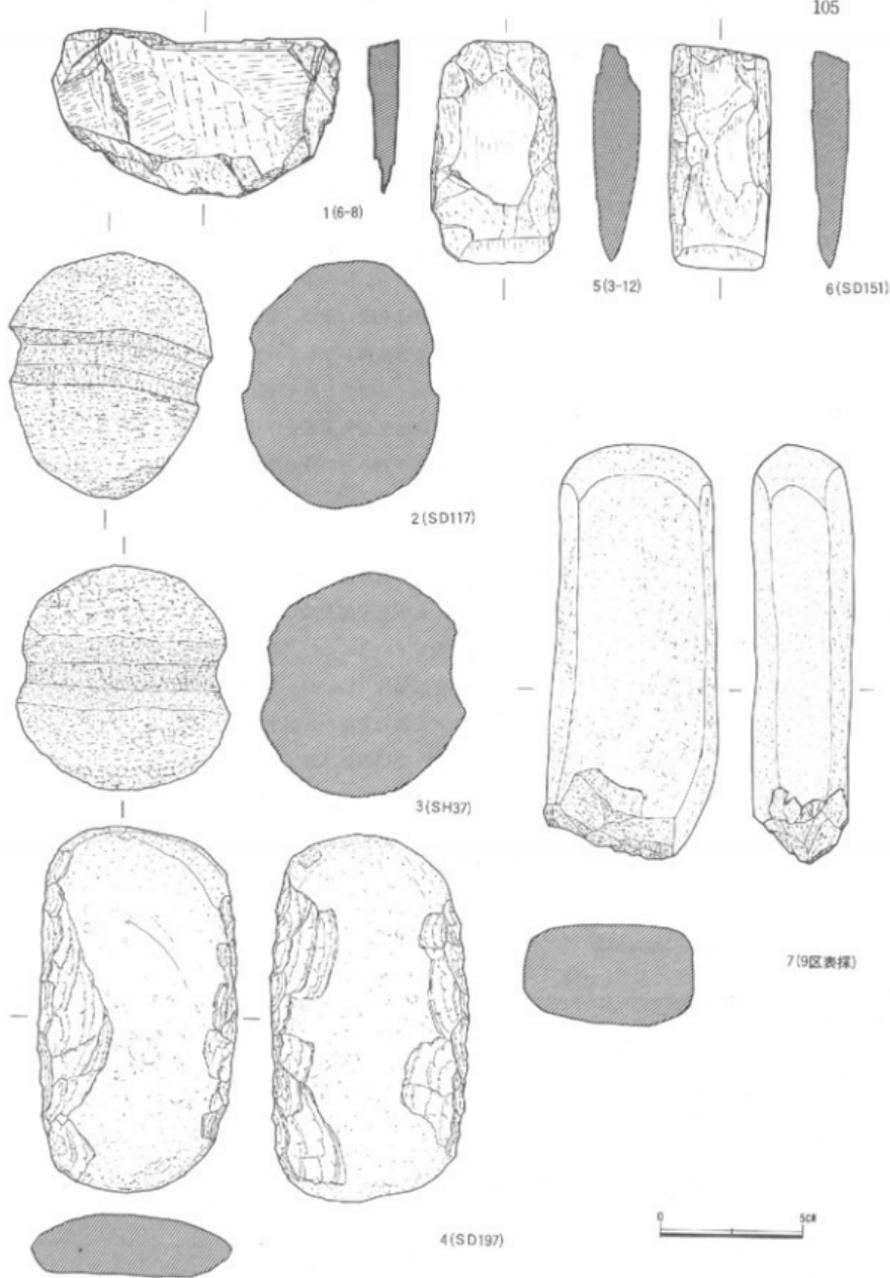


Fig. 83. 京免遺跡出土の石器2 (縮尺1:2)



Fig. 84. 京免遺跡出土の石器3(縮尺1:1.5)

ある可能性が強い。

石鏃以下の所属時期は、Fig. 83-2、3、5は弥生時代後期前葉、6及びFig. 84-1は、中期後葉と考えられるが、その他は不明である。

扁平片刃石斧 (Fig. 83-5、6、Fig. 84-1) 5は、SH 37床面出土の石斧で、火災にあったためか表面の風化が激しい。このため表裏の研磨の状況はつかみがないが、敲打整形痕を多く残す粗製の扁平片刃石斧とみられる。ほぼ直線をなす刃部は、ゆるく両面から磨き出されている。6は、SD 151出土のもので、基部端を欠いている。長側辺には、敲打による凹凸痕を残すが、研磨は全周に及び、なめらかに磨き上げられた刃部は正確な直線をなしている。

Fig. 84-1は、SD 134出土の小形石斧で、扁平礫一端に研磨を加え刃部を作り出したもので、表面の一部に研磨が加わる以外自然礫のままである。

叩き石 (Fig. 83-7) 角柱状の礫の一端を打ち欠き、粗雑な刃部をつくりだし、敲打に用いるとみられる石器で、刃部以外は自然礫のまま手が加わっていない。曲りくねった刃部先端はつぶれ、打撃に使用された痕跡を残している。

不定形剥片 (Fig. 84-2) チャートの剥片で、11区弥生式土器包含層から出土した。人意的なものともみられるが、使用痕跡はない。

石鏃 (Fig. 84-3、4) 3、4はいずれもサスカイト製打製石鏃で、12区で発見されたものである。

その他Fig. 83-4は器種、用途不明の石器であるが、扁平な河原石を素材に、長辺両側縁を打ちかき、にぶい刃部を作り出したもので、刃部には打撃痕がある。勝間田焼を出土した9区のSD 197より出土したもので、類例もなく時期不明であるが、弥生時代の石器で

第4章 竹ノ下遺跡の調査

1 遺構の概要

竹ノ下遺跡では、北部分の区画街路予定地を幅6m、長さ25mにわたって発掘調査した竹ノ下1区と、幅16mの幹線道路予定地を70mにわたって調査した南部分の2区の二ヶ所の調査区がある。

1区は、水田造成に伴うとみられる削平の度合いが強く、幅約1.8m、深さ1.5mの南北に延びたV字形の溝を検出したのみで、その他の遺構は発見されなかった。このV字溝には、大形の甕形土器が据えられており、この土器は弥生中期中葉のものとみられる。

2区の遺構の遺存状況は良好で、上層に中世以降とみられる厚い堆積層があった。しかし、遺物特に土器の遺存状況は悪く、大多数は表面の剝離現象をおこしており、遺構の所属時期を推定する上で少からぬ障害となっている。

遺構面はほぼ平坦で、南半は東部分が下降し落ち込んでいる。

発見された遺構は、弥生時代中期及び後期の竪穴住居12棟、長方形土壇4、袋状貯蔵穴2、木棺墓14、土壇墓状遺構2などである。

所属時期の推定できる住居のうち、中期後半に属するものは、4A・B、5、7、8A・B、9号住居の計7棟、後期に属するものは、1、2、3号住居の3棟である。一般的にみて、後期の遺構は北部分に、中期の遺構は南部分にかたよったあり方を示している。

この他、住居状のものとして、7号住居北東部に竪穴住居の壁体溝状の溝の一部がかすかに遺存し、南東部にも長方形を示す壁体溝状の溝が発見されたが、後者は長方形竪穴住居遺構の可能性をうかがわせるものの、ともに遺存状況が悪く不明である。

住居番号	遺構規模	主柱本数	中央穴 (口形径)	焼土面	時期	備考
1号住居址	円形 直径7m	7本	40×45m	無	LⅡ	主柱2穴が外向きに掘られている。
2号住居址	円形 直径6m	4本	60cm	+	IⅢ	ベッド状遺構をもつ。
3号住居址	隅丸方形及び円形 直径ないしは一辺4.5~7.5m	?	?	+	L	礎石。
4号住居址A	隅丸方形 一辺4m	4	30cm	+	MⅢ-LⅠ	
+ B	隅丸方形 一辺4m	4	35×30cm	+	MⅢ	
5号住居址	隅丸方形 一辺4m?	4?	?	?	MⅢ	約2/3単体のみ発掘。
7号住居址A	隅丸方形 3.5×4m	4	30×50cm	無	MⅢ?	Bに拡張する。壁体痕跡あり。
+ B	隅丸方形 4.5×3m	4	40×50cm	+	MⅢ	壁体痕跡あり。
8号住居址A	隅丸方形 一辺3.5m	4	50×60cm	+	MⅢ	中央穴北面に拡張。
+ B	隅丸方形 一辺3.3m	4	55×70cm	+	MⅢ?	中央穴北面に拡張。
9号住居址	隅丸方形 一辺5m?	6?	40×65cm	+	MⅢ	各柱径取穴に石を詰める。
10号住居址	隅丸方形 一辺3m及び 4.7×5.5m	4?	30×70m 45cm	+	?	2種類の壁体溝?
11号住居址	隅丸方形及び円形規模不明	?	?	?	?	3棟分の壁体溝のみ

表8. 竹ノ下遺跡住居址一覧表

■ MⅢ: 中期後葉 LⅠ: 後期前葉 (大田十二社1~2式) LⅡ: 後期中葉 (大田十二社3式)
LⅢ: 後期 (大田十二社4~5式)

京免遺跡とは異り、各竖穴住居は当時の地表面をそうとう深く掘り下げ住居床面を形成している。このことは、同時期、同様な立地を示す遺跡として好対象である。両者の差は、土地の水はけの差に起因していると考えられるのであろうか。

2基発見された袋状貯蔵穴はいずれも後期に属す。

木棺を使用したとみられる墓は計14基あり、このうち13基には小口穴がある。4号墓は木棺を用いたとみられるのに小口穴がない。7号墓は60×40cmの小形の墓でこれにも小口穴があるのは注意される。

木棺墓のうち、23号墓にはやや大型の破片が伴い、その他、3、9、11、12号墓でも土器細片がみつかった。このうち時期判定可能なものはすべて中期に属し、中期の墓群であることは確であろう。

7号、9号住居址の位置から考えて、必ずしも住居群と墓群の共存は考えられず、墓の営まれた時期を限定するだけの資料もないが、中期～後期への住居群の全般的な継続傾向から考えて、これらの墓群は、中期住居群に近接して営まれた小規模な墓群の一例と考えられよう。

京免遺跡の墓群は時期を限定できないので必ずしも明確でないが、沼E遺跡の墓群のあり方などと共通した傾向を持つ墓群と考えられよう。

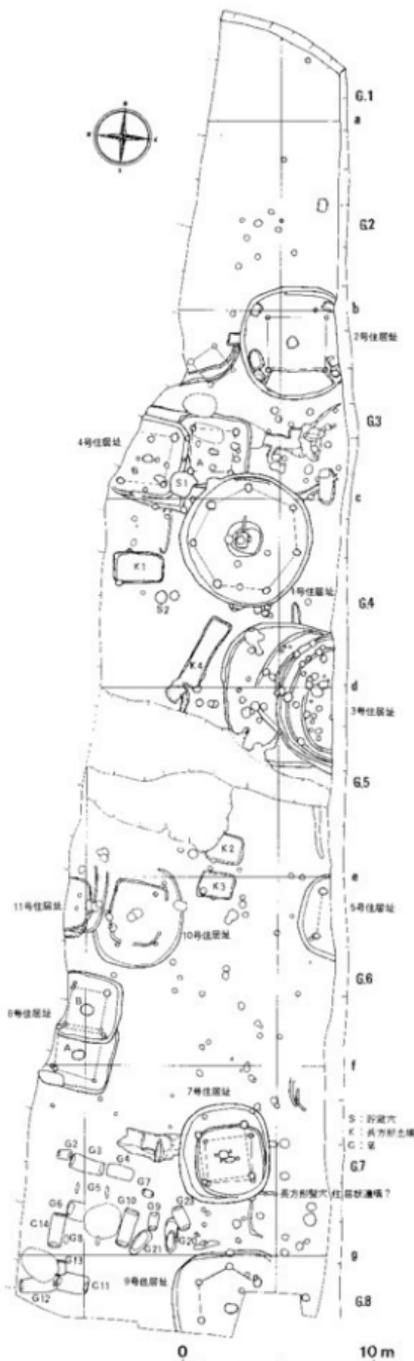


Fig. 85. 竹ノ下遺跡2区遺構全体図 (縮尺 1:300)

① 1区検出の溝

溝1は、竹ノ下1区で唯一検出された遺構で、幅1.8m、深さ1.5mのV字形に掘り込まれたものである。東西に走り、道路幅約7mを発掘調査した。確認調査の際約20m南方で同様の溝を検出しており、その溝につづく可能性が高い。溝内堆積土は、大きくみて下層の青灰色の粘土及び礫を多く含む層と、上層の灰黒色粘土層に分かれ、上層断面もV字形であることから、溝が埋積したのちさらにもう一度V字形に掘りこまれたことがうかがわれる。溝の下層部分の地山は、本来砂礫層で、水が流れれば簡単に崩壊する性質のもので、下層の埋積土はこの砂礫層に灰色粘土等を含んでおり、溝の埋積は、短期間におこったものと思われる。

上層の溝底部分には、大形の変形土器1点が南方へ倒れ込んだ状態でおしつぶれて発見されたが、この土器は、本来正位に据えられていたものとみられ、底部は原位置を保ち二個の挙大の河原石が甕底内部に置かれていた。この変形土器以外、出土土器片は数片を数えるのみで、4層で数片出土しているが、いずれも剝離が激しい。特に下層からは遺物は一際発見されていない。

溝の肩部分はいずれもシャープに残っており、本来はさらに深く、幅の広い溝であったことが推定できる。

岡山大学の笠原安夫によって、遺残種子分析のため東壁の5層部分の採土分析をしていただいたが、酸性土壌で種子は分解したためか検出できず、炭化した玄米一粒を検出したという報告を受けている。

溝1出土の土器 (Fig.86)

くの字状の口縁部を有する大形平底の変形土器で、口縁部端を上方にやや肥厚させている。口縁部内外面は、ヨコナデ仕上げで、胴部外面はごく目の細かい刷毛でタテ方向に調整を加え、胴下半にはその上にさらにタテ方向のヘラ磨きを加えている。内面はナデ仕上げで、指頭正痕とみられる凹凸がみられるが、全面きわめて丁寧なナデ仕上げされており、顕著でない。底面は、仕上げ調整が加えられていない。

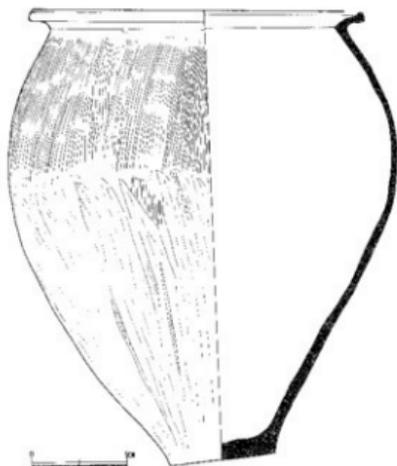


Fig. 86. 竹ノ下遺跡溝1出土の土器 (縮尺1:6)

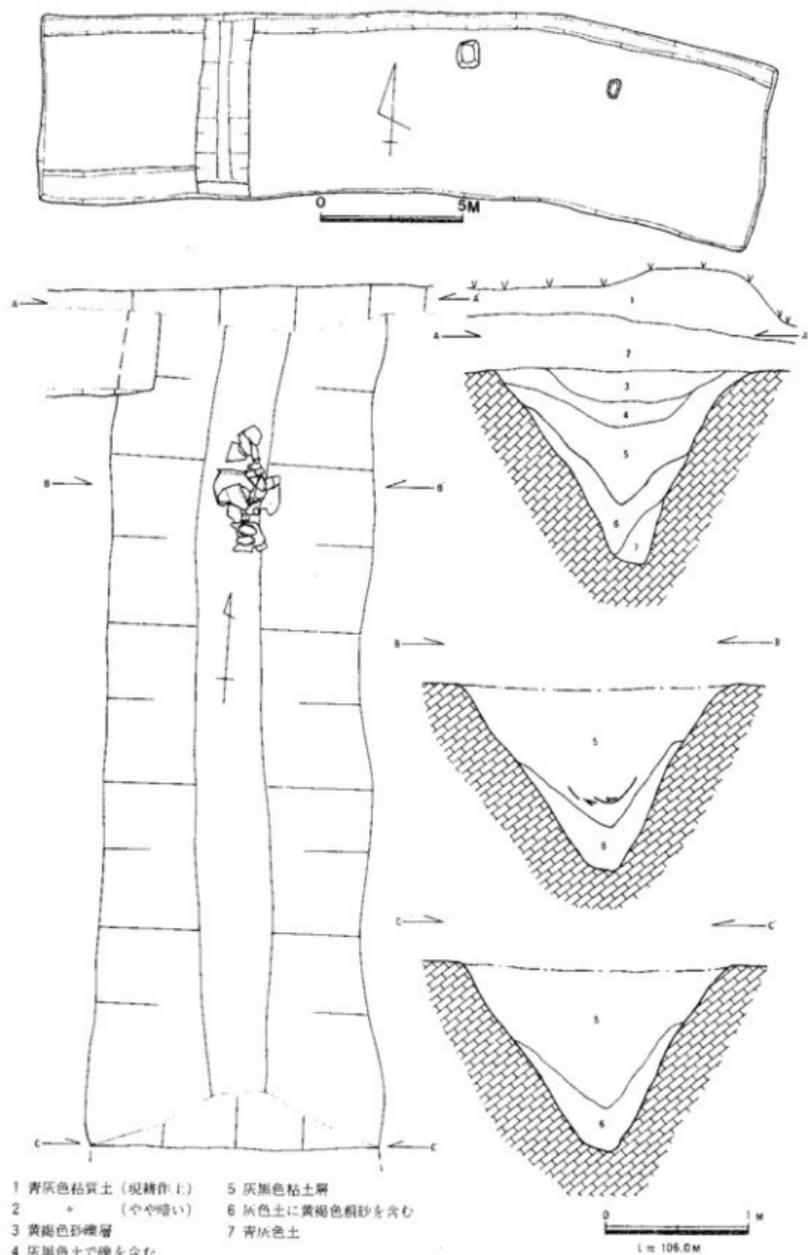


Fig. 87. 竹ノ下遺跡1区溝1平面図、断面図(縮尺上1:200、下1:40)

② 住居址

1号住居址 (Fig.88) 直径約7mの円形住居址で、支柱はP1～P7の7本で構成される。このうちP1、P3、P5には柱痕跡が残されていた。それぞれの痕跡の示す柱の太さは径20～25cmである。P6、P7の支柱穴は形態が特異で口部が外を向くようになり斜めに掘り込まれ、直すぐに柱を立てるのは困難なようにみられた。また、このことに関し、P7、P8間

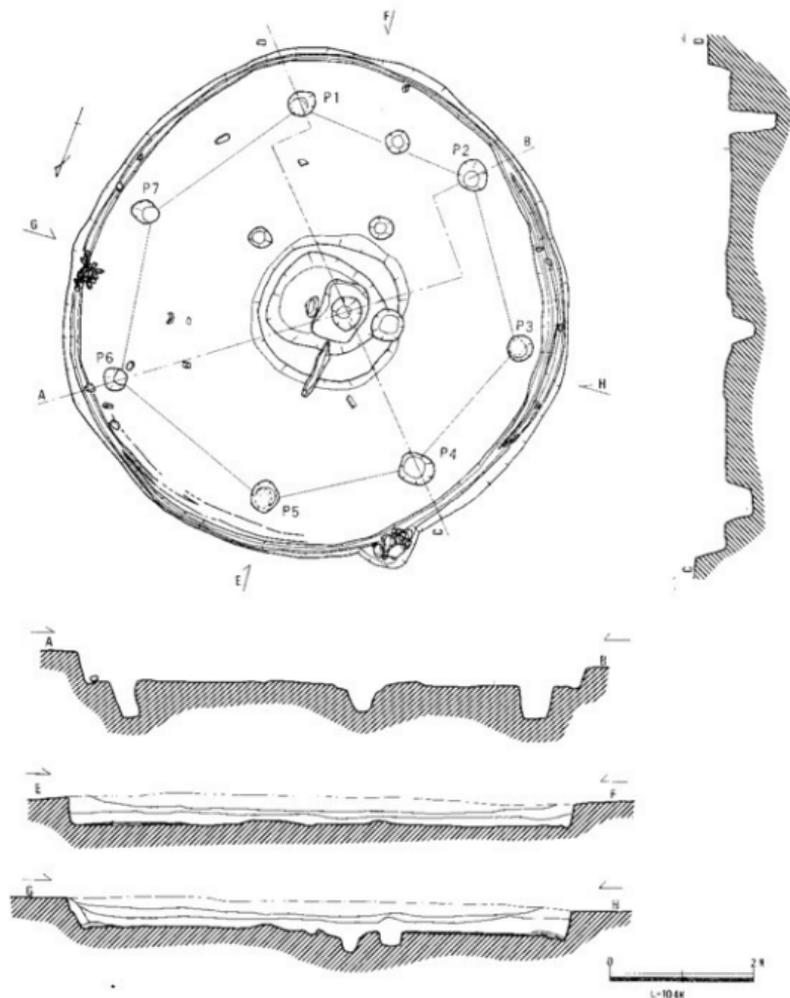


Fig. 88. 竹ノ下遺跡1号住居址平面図、断面図(縮尺1:80)

の住居周壁下、床面よりやや浮いて50×30cmの範囲に挙大の河原石が敷き並べられており、石敷上面は平坦となっていた。各柱柱間距離は、P 1～P 2、2.55m、P 2～P 3、2.30m、P 3～P 4、2.60m、P 4～P 5、2.15m、P 5～P 6、2.20m、P 6～P 7、2.50m、P 7～P 1、2.60mである。幅15cm前後の壁体溝が床面外周を一巡するが、北及び南部分では内側に1～2条の壁体溝痕跡があり、壁の修復ないしは住居の拡張のあったことを示している。中央穴には、幅40～50cm、床面からの比高2～5cmの土塼が巡り、上段に長方形の浅い落ち込みをもつ円形中央穴は、床面からの深さ約45cmで、口部径は40～45cmである。

周壁北部分で大小の河原石を込めたピットによって切られているが、このピットの性格不明。火災を受けた痕跡はなく、本来この住居に伴う遺物はない。埋土上層には、中期後半から後期前半の土器片等が発見されているが、いずれも遺存状況は悪い。床面及び中央穴埋土にも数片の土器が含まれていたが必ずしも住居の廃絶期を示すものではない。一般的な状況からみて、下層出土の遺物のうちFig.89の5及び6などは、本住居廃絶の時期に近いものとみられる。また住居南部分に存在する土塼4は、1号住居にかかわる遺構とみられるが、これには大田4式土器がまともって包含されていた。

1号住居址出土の土器 (Fig.89) いずれも1号住居址下層出土の土器であるが、遺存状況悪く、細部不明のものばかりである。1～3は甕形土器、4は台付鉢形土器、5、6は高杯形土器である。1は、口縁部内外面ヨコナデ仕上げとみられるが、外面頸部以外は調整不明、胴部内面はヘラ削りによって仕上げている。2は、内外面ヨコナデ仕上げ。3は、中央穴埋土中より出土した土器片で、小片からの復元で細部は不明。内外面はヨコナデで、外面にススの付着がみられる。4は、淡褐色を呈し鉢形土器脚台部片とみられるが必ずしも明らかでない。内外面ナデ仕上げ。5は、内外面の剝離激しく各端部は磨滅しており、本来はもっとシャープなもの。調整、丹彩の有無とも不明。6は、短い筒部をもつ高杯形土器で、脚部に4孔の飾穴を巡らす。これも剝離激しく仕上げはほとんど不明である。ただし、外面にはかすかに丹彩痕跡を

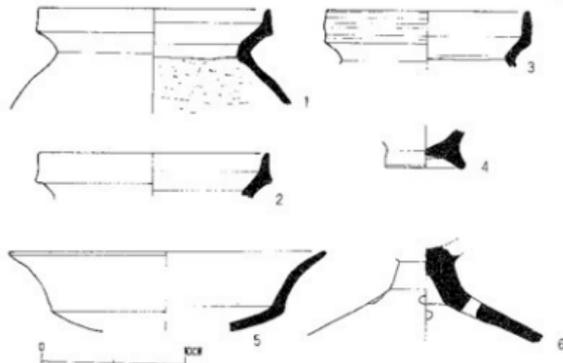


Fig.89. 竹ノ下遺跡1号住居址出土の土器 (縮尺1:4)

残しており、丹彩高杯とみられる。

これらの土器は、大田十二社3式及び4式に属するもので、1号住居の廃絶された時期は後期後葉(LⅢ期)と考えられるが、中期後葉の土器も埋土に多く含まれていた。

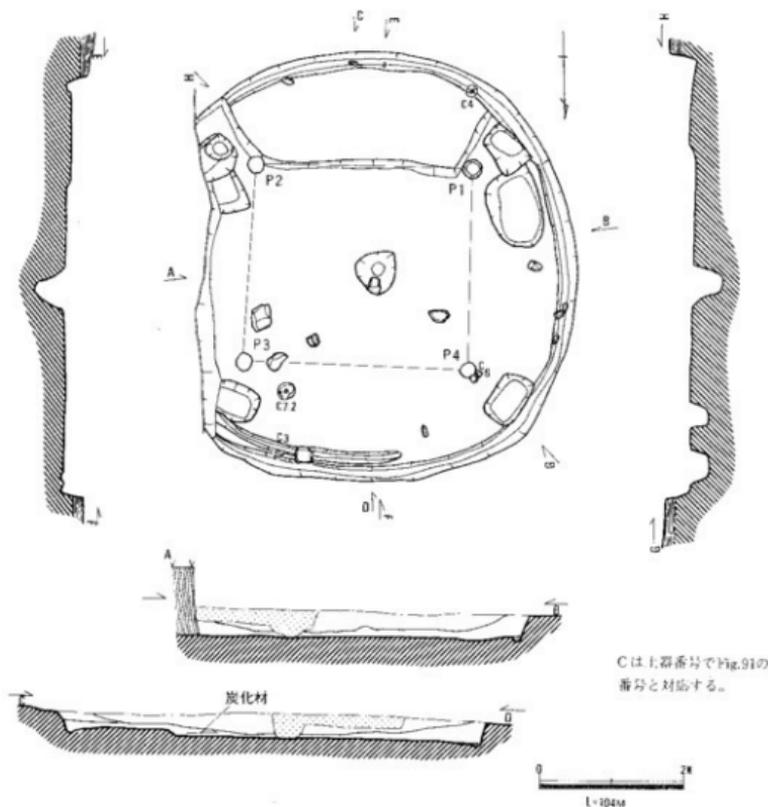


Fig. 90. 竹ノ下遺跡2号住居址平面図、断面図（縮尺1：8）

2号住居址 (Fig.90) 直径約6m、4本柱の円形住居址で、柱位置の外壁がやや角ばっている。南壁にそって、幅1～1.2m、床面からの比高約6cmのベット状遺構がP1～P2の間に造り出されている。各支柱掘方は、20～25cmで、通常のものより小さく柱痕跡に相当するが、これを柱痕とした掘方の輪郭は検出できなかった。幅約20cmの壁体溝が周壁下をほぼ全周するが、北部分の内側にもう一本壁体溝痕跡がありこれが埋められているので、住居の拡張ないしは壁面の修復をしていることがわかる。特異なのは、各柱外方にいずれも、70×50cmで床面よりの深さ30～40cmの長方形の土塊をもつ点で、このうちP1の外側のものは、壁体溝との切合いがあって、壁体溝を切っていた。この長方形土塊からは、特に遺物は出土していない。

中央穴は、径60cm前後の不整形円形で、床面からの深さ約42cm程度である。土塊は伴わず、

肩部分に人頭大の石一個が落ち込んでいた。床面及び床面よりやや浮いて、完形に近い形の土器4点が出土した(Fig.91-3、4、6、7)。床面よりやや浮いて、炭化材がわずかに残存していることからみて、2号住居は火災を受けて廃絶された可能性もあるが、廃絶の状況は必ずしも明確ではない。各支柱穴間の距離は、P1～P2、3.00m、P2～P3、2.80m、P3～P4、3.15m、P4～P1、2.80mである。壁体溝中で鉄器片、石砲丁片が発見されている他、埋土中には若干数の土器片が発見されており、これらはほぼ大田4式土器に属するもので、2号住居廃絶時期は後期後葉LⅢ期とみられる。

2号住居址出土の土器(Fig.91) 1、2は甕形土器。3は椀形土器。4～7は高杯形土器である。1は、やや外反して大きく立上がる甕口縁部片で、内外面ともヨコナデ仕上げ、胴部内面はヘラ削り加わっている。2は、内外面ともヨコナデ仕上げとみられるが、器壁の荒が激しく仕上げ不明。3は、杯部内面をヨコ方向のヘラ磨きで仕上げ内外面ともに丹彩痕跡をもつ。口縁端部を内傾さすクセをもつ。脚部内面はナデによって仕上げられている。4は、ゆるく内彎して立上がる杯部をもち中実の筒部を有する高杯形土器で、内外面ともかなり激しく剝離しており杯部は本来の厚さより相当薄くなっている。口縁端部は、3と同じく、やや内傾させる傾向をもつ、5は、逆ハの字形に大きく開く高杯形土器杯部片で、かすかに内外面に円彩痕跡を残す。筒部との接合部には、分割成形技法でつくられたための脚部との剝離痕が残されている。6は、ゆるく内彎して立上がる杯部をもつ丹彩高杯形土器で、杯部内外面は細い不定方向のヘラ磨きによって仕上げられている。脚内面に紋り痕がみられ、分割成形技法によって作ら

れている。

いずれも大田十二社遺跡4式土器に属するもので、3の椀形土器は、大田十二社遺跡袋状貯蔵穴P E55に、また6の高杯形土器は同P E29に類品があって、これらの土器は逆にかなり様相の異なるP E29、P E55の同時性を裏づけ、また県南部や畿内との関係を知る手がかりとなるものである。

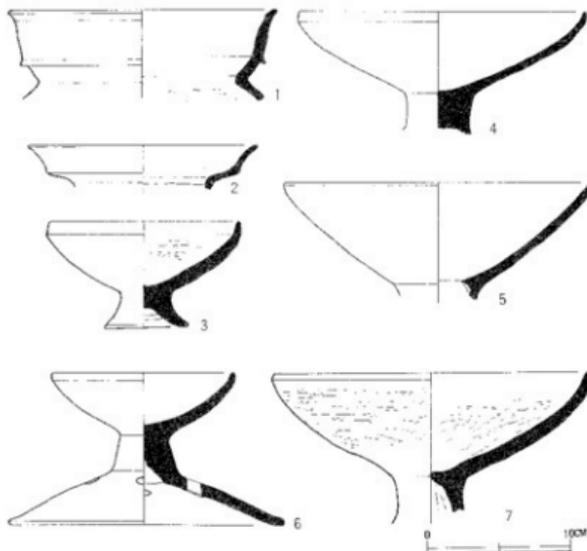


Fig.91. 竹ノ下遺跡2号住居址出土の土器(縮尺1:4)

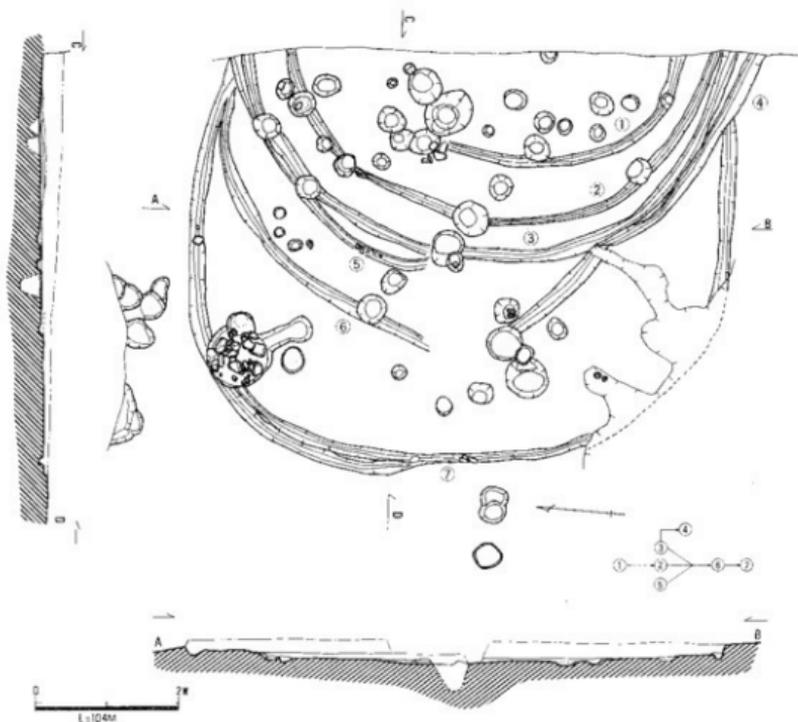


Fig. 92. 竹ノ下遺跡3号住居址平面図、断面図（縮尺1：80）

3号住居址 同心円形に拡張したとみられる住居壁体溝群①→⑤と、心をずらした⑥、⑦で構成される住居址群で、上層断面から推測される各住居の切合は図中に示してある。各住居規模は直径ないし一辺4.5m～7.5m程度のものであったと推測される。いずれも、最終住居を除いてほぼ平面的に検出されたもので、各住居と組み合わさる柱及び中央穴等は明らかでない。埋土及び壁体溝中からは、MⅢからLⅢ期にかけての上器がばらばら出ており、住居が営まれた時期もほぼこれに対応するとみられる。

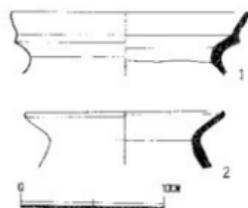


Fig. 93. 3号住居址出土のし器
（縮尺1：4）

出土土器 1は、壁体溝⑦から出土した甍形土器で、口縁部内外面ヨコナデ仕上げ。胴部内面は剝離激しく不明瞭であるがヘラ削りによって仕上げられたものと思われる。2は、壁体溝①から出土したもので、内外面ヨコナデ仕上げと思われるが剝離激しく原形を保っていない。後期後半のもので混入品か。この他9×5×4cmのきめの細かい磨石1点が出土している。

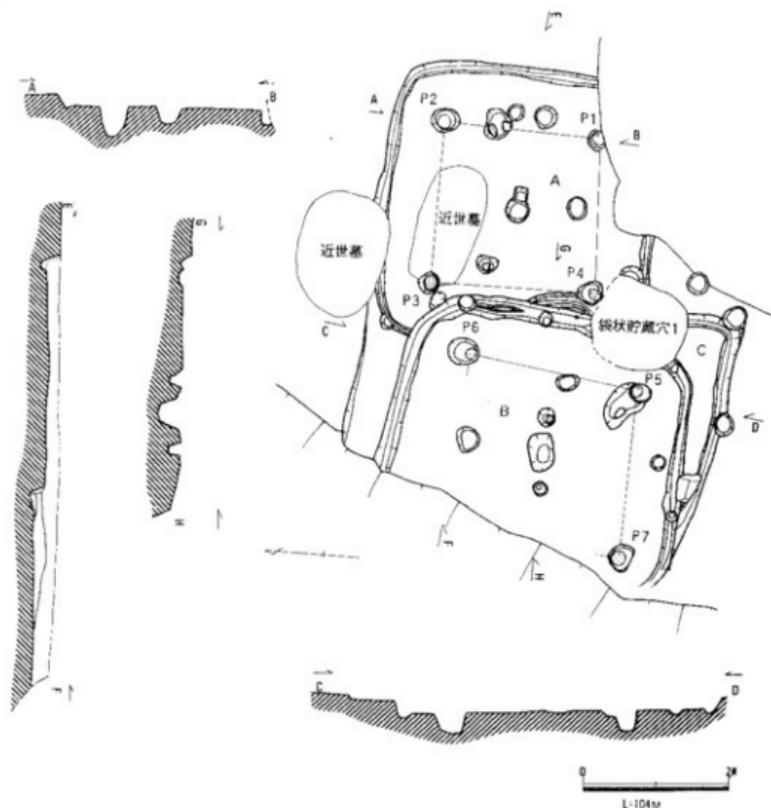


Fig. 94. 竹ノ下遺跡4号住居址平面図、断面図(縮尺1:80)

4号住居址 一辺約4mの隅丸方形住居2棟(A、B)と部分的にもう一棟分の壁体溝と考えられる遺構を検出したので、これらを総称して4号住居址と呼んでいる。AとBの切合関係は必ずしも明確でないが、層位からみてBを埋めてAがつくられているとみられる。またCもBを切っている。袋状貯蔵穴1はこれらすべての遺構を切ってつくられており、1号住居址もAを切っているとみられる。

A・Bとも4本柱で、Aは口部径30cm前後で床面からの深さ35cmの円形中央穴をもっている。4本柱のすべてに円形柱痕跡が残されており、各痕跡の示す柱の太さは20cm前後の値を示している。各柱穴間の距離は、P1～P2、2.2m、P2～P3、2.25m、P3～P4、2.3m、P4～P1、2.2mである。床面出土の土器はないが、埋土中からは中期後葉とみられる土器と後期初頭の土器が出土しており、大概わ中期後葉ないし後期初頭に廃絶された住居址とみられる。

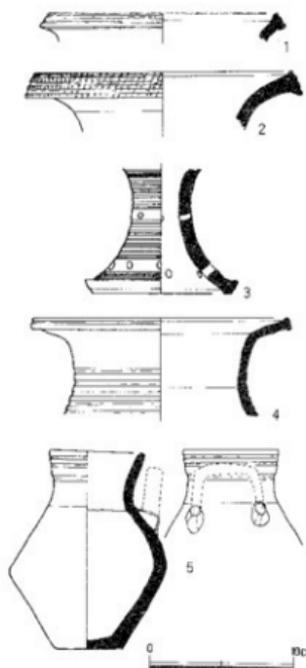


Fig. 95. 竹ノ下遺跡、4号住居址
出土の土器 (縮尺1:4)

1は、甕形土器で口縁部を肥厚させ、端面に三条の凹線文を一巡させている。内外面ともヨコナデ仕上げとみられるが剥離激しく不明である。大田十二社1式に属するものであろう。2は、壺形土器で、頸部から口縁部にかけて朝顔形に大きく開き、端部を上下に拡張している。端面には、三条の凹線文を巡らし、その上に斜めの列点文を一巡させている。内外面ともヨコナデで仕上げられており中期後葉の土器とみられる。3、4、5は、Bの床面出土土器で、3は、高杯形土器、4は、壺形土器で、5は、把手付水差形土器とみられるが把手部は欠損している。1は、筒部に沈線を多条に巡らし、脚端部には3条の凹線を巡らしている。二段に透孔をめぐるすが、上段は計6孔、下段は計9孔ありすべて貫通している。内面はヨコナデによって仕上げられている。4は、器壁の荒激しく調整はほとんど不明であるが、頸部外面に5条以上の凹線文を巡らしている。5は、平底の直口壺形で、胴中位でくの字形の屈曲をみせる。口縁部には、3条の凹線文が認められるが器壁の荒れが激しく、本来はもうすこし本数は多かったかもしれない。胴部外面はへら磨きとみられるが明瞭でない。内面はヨコナデで仕上げられている。肩部に、把手と体部を接合したとみられる貼付の瘤2ヶ所があり、端部は把手の折損痕をもっている。3～5は、いずれも同時期資料とみられ、大概ね中期後葉のものであろう。

Bも、規模、形態の点でAに類似し、両者の連続性をうかがわせる。Bも、四本柱の住居址であったとみられるが、1本の位置は崖法面にあっており、遺存していなかった。各柱穴とも柱痕跡を残しているが、その値は15cm～20cmをしめている。各柱穴間距離は、P5～P6、2.35m、P5～P7、2.35mである。中央部には、35×50cmの長楕円形の中央穴をもち、その深度は床面から30cmである。両長辺側に小柱穴各1があり、いずれにも、径10cm前後の柱状痕跡がみとめられた。また東の部分の柱穴上にはきわめて良質の4×6×1cmの使い古された砾石1点が出土した。なお、北壁には、幅50cmのテラス状の遺構が発見されているがBに伴うものかどうかは不明である。床面よりFig.95-3～5の三点の土器が出土しており、いずれも中期後葉に属するものであるので、本住居の廃絶時期は、中期後葉であると考えられよう。

4号住居址出土の土器 1及び2は、Aの埋土より出土したものである。ともに遺存状況は悪く、小片からの復元である。1は、甕形土器で口縁部を肥厚させ、端面に三条の凹線文を一巡させている。内外面ともヨコナデ仕上げとみられるが剥離激しく不明である。大田十二社1式に属

5号住居址 一辺4m前後の隅丸方形四本柱の住居址とみられるが、約3分の1は道路用地外に延びており未調査、床面からの壁高約20cmを残し、住居としての遺存状況は良好であった。周壁下には、幅15cm前後の壁体溝が一巡する。主柱を示す柱穴2穴を検出したがいずれにも柱痕跡は確認されなかった。

各柱穴掘方径は、30~40cmで、柱穴間距離は、2.40mである。埋土は、黒色土に灰白色土をブロック状に含んでいたが、遺物はほとんどなく、床面よりやや浮いて、三片の上器片が出土した。いずれも弥生中期後半に属するものとみられ、本住居廃絶時期は、弥生中期後半と考えられよう。

5号住居出土の土器 Fig.97は、器台形土器口縁部片とみられるが遺存状況悪く調整不明である。口縁端部にかすかに凹線状の痕跡がある。

7号住居東ピット 7号住居の東側で、3個の人頭大の河原石と丹彩の台付壺 (Fig.114-9) が柱穴状ピットに入りこんでいるのが発見された。検出時には明瞭でなかったが、この土器は大田4式土器に属し、上層に中期の包含層が厚く推積していたので本来は深いピットであったとみられる。こういった土器の廃棄状況は、中期の建物柱穴にみられる土器の廃棄状況に共通する可能性があり興味深い。

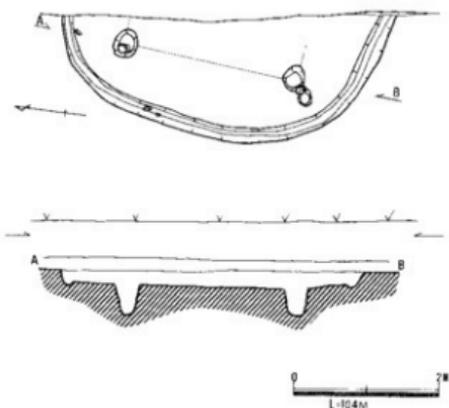


Fig. 96. 竹ノ下遺跡5号住居址平面図、断面図 (縮尺 1:80)



Fig. 97. 竹ノ下遺跡5号住居址出土の土器 (縮尺 1:4)

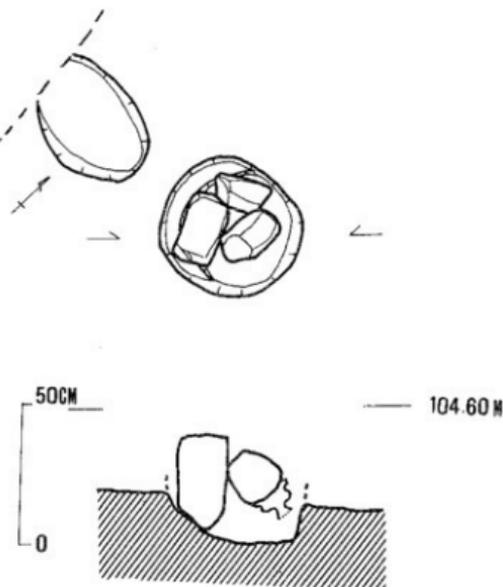


Fig. 98. 7号住居址東ピット土器出土状況 (縮尺 1:20)

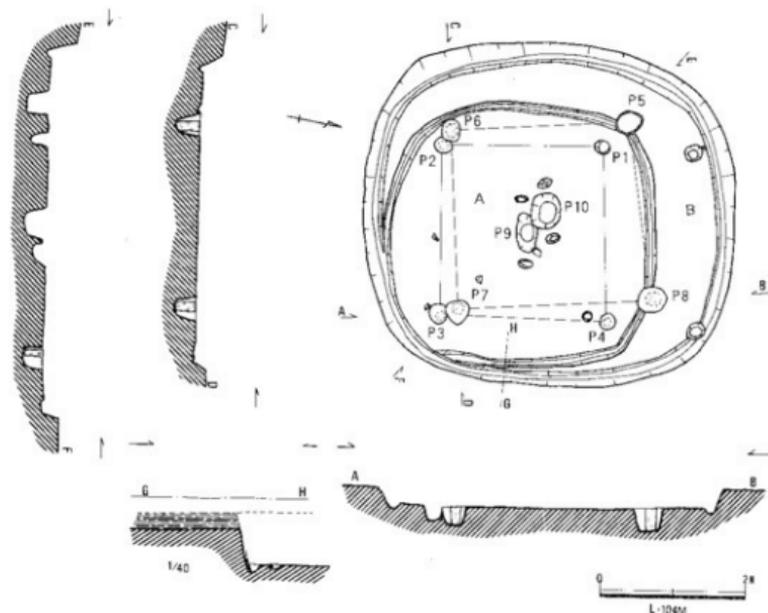


Fig. 99. 竹ノ下遺跡7号住居址平面図、断面図(縮尺 1:80)

7号住居址 一辺3.5～4mの隅丸方形4本柱の住居(A)が、4.5～5mの隅丸方形4本柱の住居(B)に拡張した例で、中央穴、柱穴、壁体溝とも新旧の切合関係は明確であった。A住居は、P1～P4の4本柱で構成されうち3本の柱に柱痕跡があった。各柱痕跡の示す値は、径13～14cmである。P9がAの中央穴で、P10によって切られ、P10からかき出されたと思われる厚さ1cmの灰ないしは炭の層がP9上面をおおっていた。P9は、50×30cmの長楕円形の中央穴で深さ20cmと浅く、短辺外側に各1小穴が存在した。

B住居は、P5～P8の4本柱で構成され、うち三柱穴に柱痕跡が残されていたが、その痕跡の示す値は、径18～20cmである。P10がBの中央穴で、口部は40×50cmの楕円形でP9と同様両端に各1小穴を有する。深さは、34cmである。

この住居で特に注意されたのは、A、B相方の壁体溝ともに、幅1～2cmの黒色粘土帯が壁体溝外肩に接してとぎれながらも帯状にほぼ全周していたことである。壁体溝を埋めている土は、褐色の地山土にわずかに灰黒色土をまじえた土で、住居埋土とは明らかに異質のものであって人意的に埋められたものであることは確かで、また黒色粘土帯は、腐朽性のものが腐粘土と化したものと考えられるので、壁体を示す明らかな証拠と考えられた。また、黒色帯は、壁体溝の底でとまっており、壁ささえの用材が打ち込まれたものとはみえない。

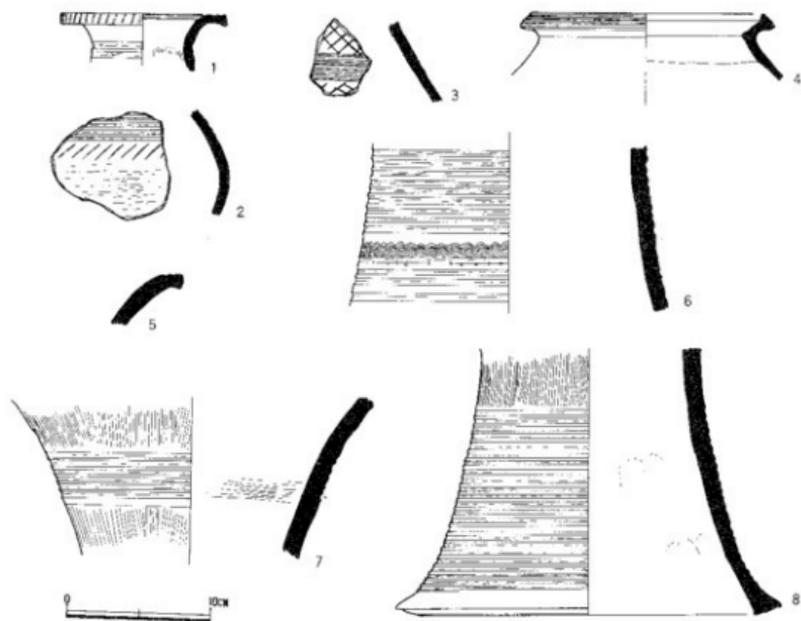


Fig. 100. 竹ノ下遺跡7号住居址出土の土器 (縮尺1:4)

7 B床面及び埋土から中期後葉の土器及び砥石一点が出土し、廃絶時期は中期後葉とみれる。

7号住居出土の土器 1～4は埋土上層、5～8は床面出土土器である。1～3は壺形土器、4は甕形土器、5～8は器台形土器である。1は、頸部に不明瞭な凹線3条以上をもち、拡張した口縁部端面に列点文を巡らす。2は球状の胴部上半に凹線文を巡らしその下に列点文を一巡させる。胴下半はヨコ方向のヘラ磨きで仕上げ、内面はヨコナデ仕上げである。3は、凹線とヘラ描の斜格子で器面を飾っている。内面はヨコナデ仕上げである。4は、肥厚させた口縁端部をつまみ上げ、端面に三条の凹線文をめぐらしている。内外面ともヨコナデによって仕上げられている。5～8は、類似した特徴をもつ器台形土器で、7と8は同一個体とみられる。7は、口縁部片とみられるが剥離激しく細い点は不明。6は、外面を凹線文と間帯を櫛描の波状文で飾り、内面はヨコナデで仕上げられている。7、8と同一個体である可能性もあるが、調整、色調、厚さの点で微妙な差があり別個体とみたい。7は、外面タテ方向の刷毛調整を加えたのち凹線文を巡らしている。内面は外面の凹線文部分にヨコ方向の刷毛目を残し、全面にヨコナデが加えられている。8は、胴部にタテの刷毛目を残し、脚部に23条の凹線を巡らす。内面はヨコナデで仕上げられ、指頭圧痕を顕著に残している。

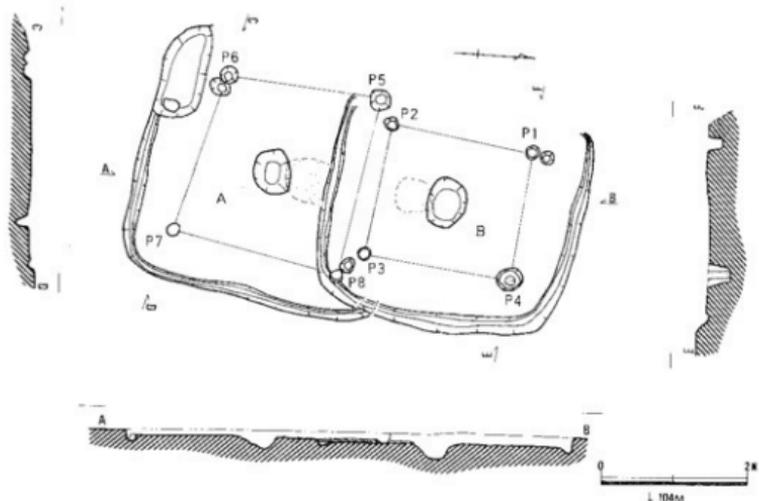


Fig. 101. 竹ノ下遺跡 8号住居址平面図、断面図（縮尺1：80）

8号住居址 一辺3.3mの隅丸方形四本柱住居址（B）と、3.5mの隅丸方形住居址（A）が心をずらせて建てられた例で、AはBを埋め切合部分に貼床をして建てられている。Bの主柱は、P1～P4の4柱で構成されるとみられるが、P1については北に1穴あり同規模同形態でいずれとも判然としない。P4には、径15cmの柱痕跡があった。各柱間距離は、P1～P2、2.0m、P2～P3、1.85m、P3～P4、2.05m、P4～P1、1.85m。70×55cm、深さ21cmの楕円形中央穴があり、南部分に灰ないしは木炭層が広がっていた。

Aの主柱は、P5～P8の4本と考えられ、各柱穴間の距離は、P5～P6、2.15m、P6～P7、2.30m、P7～P8、2.35m、P8～P5、2.6mである。60×50cmで深さ18cmの楕円形中央穴には、北側にやはり、木炭及び灰の層が広がっており、Bの中央穴に伴う灰ないし木炭層と同じくこの層は、中央穴内部の肩部分に密着した位置から床面へと延びており、中央穴から床面へとかき出された可能性を推測させた。とはいえ、中央穴自体には火を受けたような明瞭な痕跡のない点は、他の中央穴とかわらない。また、A住居に伴う貼床は、Bの床面からAの床面レベルまで、暗灰色土と黄色土を層状につきかためたもので、両住居の連続性をうかがわせる。なお、Aの南西角の落ち込みは、A住居埋没後に掘り込まれたものとみられる。B住居に伴う遺物はまったく発見されなかったが、A住居床面では弥生中期後葉とみられる土器細片が数点出土している。必ずしも正確な時期を把みえるものではないが、A、B両住居とも大概ね弥生中期後葉に廃絶されたとみられる。

9号住居址 一辺5m 前後の隅丸方形竪穴住居址で、隅丸方形住居としては異例の大きさである。南辺は道路及び側溝で、東南部は貯水槽によって破壊されている。隅丸方形住居はそのほとんどが4本柱造りであるが、この住居の場合P1～P5+1柱の6本柱で主柱が構成されていたとみられる。このことを証明するように各主柱にはすべて人頭大の石が込められており、この石は床面よりかなり上部までのぞいていて、柱の抜取りがおこなわれたことを示している。また、P3

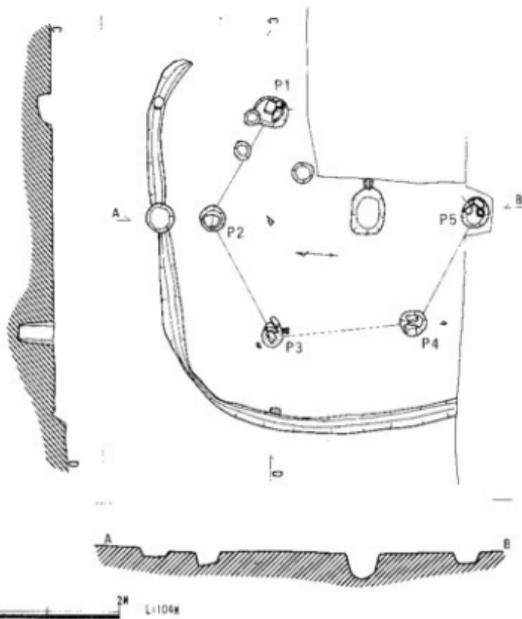


Fig. 102. 竹ノ下通跡9号住居址平面図、断面図(縮尺1:80)

では、この石を取り除くと、直径25cmのいわゆる柱痕が確認されたが、このことはそれが柱を抜きとったあとの痕跡であることを示している。いわゆる柱痕と称するもの多くは、柱が腐朽したのちに埋積したとみられないものが多く、この住居でみられる現象は、柱材の2次転用がたびたびおこなわれていたことを考える材料となるとともに、抜き取り、立ち腐れの区別の要を痛感させるものである。各柱間距離は、P1～P2、1.7m、P2～P3、1.8m、P3～P4、2.0m、P4～P5、1.8mで、東西に棟が通っていたことが考えられる。65×40cmで深さ35cmの長楕円形の中央穴東辺には、わずかな部分であるが溝が接続しており、この部分は地形が東部分で低くなっているので、中央穴から出る溝が住居外へと伸びていたことが推測できる。P3の部分で、床面よりやや浮いて、Fig. 103-2、3、P4部分で1の上器が出土している。いずれも中期後葉に属する土器とみられ、本住居廃絶の時期は弥生中期後葉と考えられる。

9号住居址出土の土器 (Fig. 103) 1、2は壺形土器。3は高杯形土器。1は、口縁端部を外方に水平に開き、端部を上下に拡張している。端面には二条の凹線文を巡らし、口縁端部の上面には、櫛櫛の波状文を一巡させている。内外面ともヨコナア仕上げである。2は、頸部片で、タテ方向の刷毛目調整ののち頸部下半に6～7条の凹線文を巡らしている。内面はヨコナ

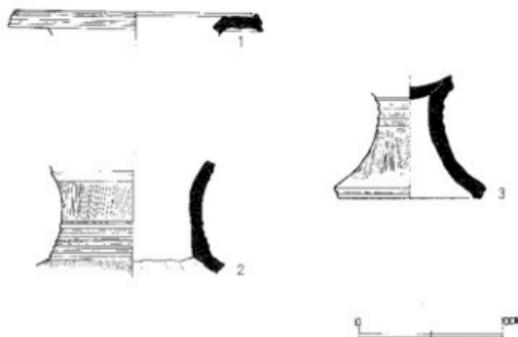


Fig. 103. 竹ノ下遺跡9号住居址出土の土器(縮尺1:4)

脚端部はヨコナデ仕上げで、一条の凹線を巡らす。筒部内面にヘラ刮り状の痕跡を残し、以下ヨコナデで仕上げられている。

デ仕上げで、部分的にヨコ方向の刷毛目を残す。頸部下端から肩部分にかけて、指頭圧痕を顕著に残している。3は、連続成形手法による高杯で、頸部外面に4条の凹線を巡らす。脚部外面は、タテ方向の刷毛調整を加えたのち、タテ方向のヘラ磨きが加わっている。

長方形竪穴住居状遺構? 1 7号住居址南東部で発見された長方形の建物を示すとみられる壁体溝状の遺構で、床面はすでに消失しているとみられ、建物の性格を決める手がかりは薄い。東西に長軸をとるもので、本来竪穴を呈していたと考えられる。短辺は、約2.5mで、長辺は、1.5mまで確認できるがあとは流出している。P1は、伴う柱穴と考えられなくもないが、通常の柱穴に較べ浅すぎ、底の形状も柱にはふさわしくない。床面に柱穴を残さない小形の長方形竪穴住居状遺構に分類される可能性が高いが、炉の存在を確認できず、また明確に伴う遺物もないので、所属時期すら不明で、可能性を推測するのみである。

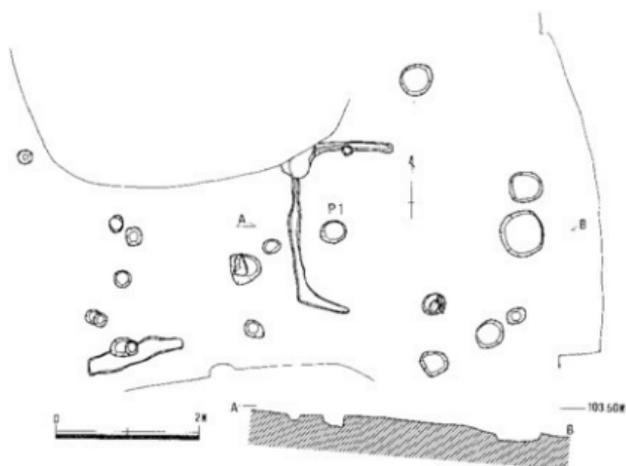


Fig. 104. 長方形竪穴住居状遺構? 1、平面図、断面図(縮尺1:80)

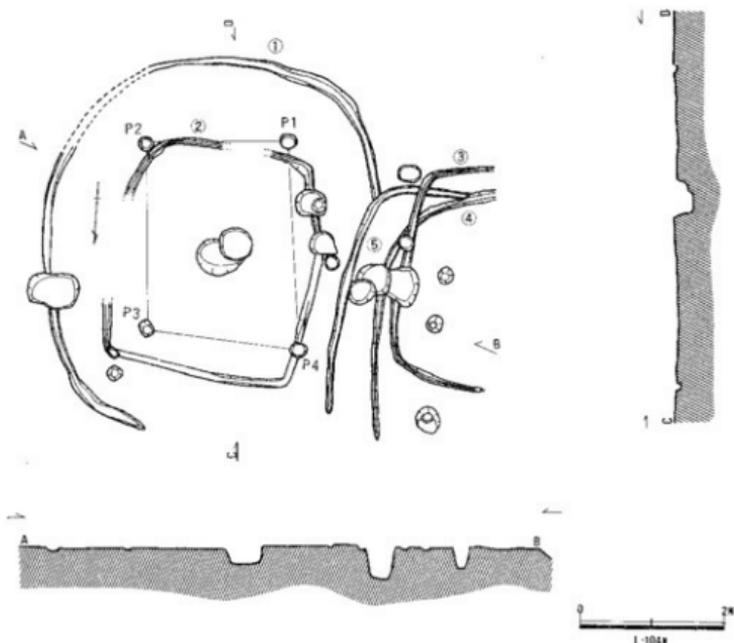


Fig. 105. 竹ノ下遺跡10号、11号住居址平面図、断面図(縮尺1:80)

10号、11号住居址 10号、11号住居址はいずれも壁体溝のみを遺存さすもので、残存状況も悪く、住居そのものを把握できないものが多い。10号住居址には、二棟分の壁体溝痕跡が認められ、②は一辺3m前後の隅丸方形形状を呈するがこれに伴う柱は検出されなかった。①は、短径4.7m、長径5.5m程度の楕円形状を呈し、これには、P1～P4の柱が伴うとみられる。各柱穴間距離は、P1～P2、2m、P2～P3、2.65m、P3～P4、2.15m、P4～P1、2.95mで間隔の変異が大きく別に二柱を考慮すべきかもしれないが、床の状態が悪く不明である。中央穴として、径45cmで深さ22cmの円形のもの、50×70cm前後で深さ13cmの長楕円形状のものがあり。両者を取りまくように3～5cmの高さをもつ土堤状の隆起がみられたが、人意的に形成されたものかどうか不明である。

11号住居址は、計3本の壁体溝が重なったもので、③は一辺3～3.5m程の隅丸方形住居を示すものとみられる。切合からみて③は④、⑤を切っている。いずれも、それぞれの壁体溝に伴う主柱組合せは不明である。各住居に伴うとみられる遺物はなく、P2埋土に土器細片が1片落ち込んでいたのみである。この細片は剝離激しく、確認困難であるが、中期に属する破片のようにみられる。その他の4柱穴ないしは、ピット中から土器細片が出土しているが、磨滅が激しく時期を判別できるものはない。

③ 貯蔵穴及び長方形土城

貯蔵穴 (Fig. 106) 1号住居址の西北及び西南で各1基袋状貯蔵穴が発見された。袋状貯蔵穴1は、下底径1.2m前後で、通常規模のものであるが、2は約80cmと小形のものである。1は、口部が攪乱されており、袋状を呈さないが、本来はもっと径の小さなものであったと判断される。4号住居Bと切合っているが、4号住居検出の際すでにその輪郭の一部が確認されており、深さは少なくとも95cmはあったことがわかる。埋土中に数片の土器片を含むのみで、正確な所属時期は不明であるが、後期のものと考えられる。2は、検出部の口部直径約60cmで検出部からの深さは、30cm、形状からみても本来小さな貯蔵穴であったことがわかる。埋土中よりFig. 114の5、8の鉢形土器及び甕形土器片を出土しており、それぞれ大田十二社3~4式土器と考えられるので2はL II~III期のものと考えられるだろう。

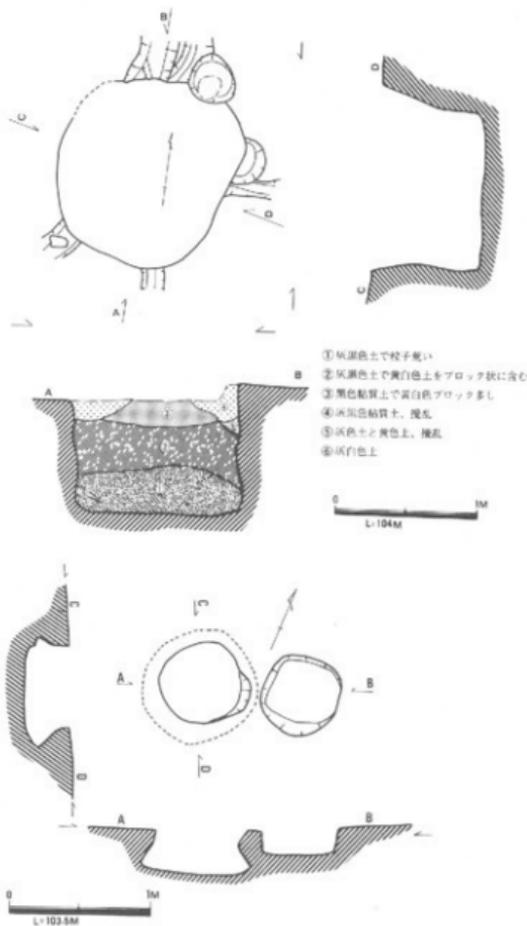


Fig. 106. 竹ノ下遺跡袋状貯蔵穴平面図、断面図 (縮尺 1:80)

※太田十二社遺跡の発掘調査報告書で、袋状貯蔵穴の用途を取り上げた際、Hidatsa 族をプエブロインディアンととりちがえ、その Store house と対比して問題にしたが、これは筆者の記憶違いによる誤りでこの機会に訂正させていただきたい。

なお、Hidatsa 族が袋状貯蔵穴を掘るのは、冬期の狩猟シーズン中集落をあけることに備えてのことであるとされている。

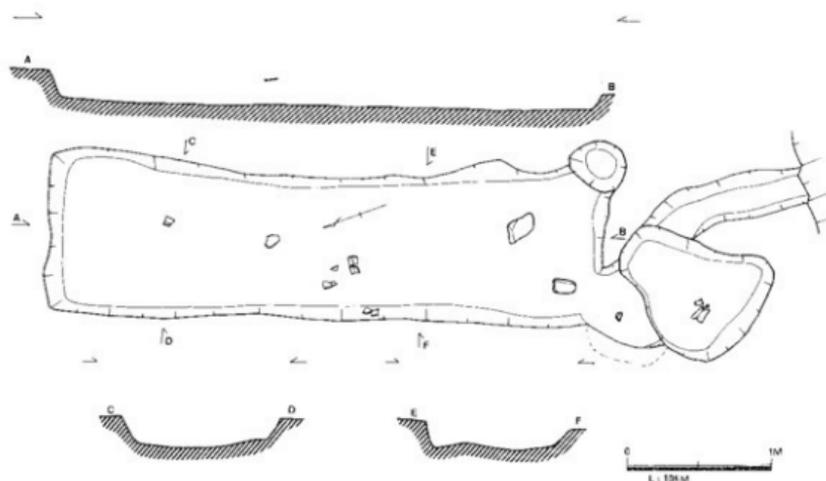


Fig. 107. 長方形土壇4、平面図、断面図(縮尺1:40)

長方形土壇 (Fig. 107, 108) ここでは便儀上、機能の異と考えられる長方形土壇1~4を一括して概述する。このうち、2と3は平行してつくられ、同規模、同形態で、つくられた時期も同じとみられるところから、同じ性格の土壇とみられるが、4号土壇については、まったく異質で、確証はないが1号住居址の付属施設と考えられる。

土壇1は、長辺2.5m、短辺1.6mで、検出面からの深さ約30cmである。埋土は、上、中、下3層に区分でき、上層及び下層に弥生式土器片が含まれていた。いずれも廃絶後の流入品とみられるが、中期後葉から後期初頭の土器片とみられるものが多い。火を受けた痕跡はみられず、埋土中にも炭ないし灰を多く含んでいるわけではない。

2は、長辺1.8m、短辺1.5mで、検出面よりの深さ15cmである。北西部を自然流路により削られている。堆積土は黒色土で、黄色土が層状に薄く含まれていた。埋土中には、中期後葉から後期初頭とみられる土器片が含まれていた。3は、長辺1.8m、短辺1.35mで、深さ約20cm。やはり埋土中に中期後葉から後期初頭とみられる土器が含まれていた。

4は、短辺1.2m、長辺3.8m、深さ20cmの土壇で底面はほぼ平である。南西部短辺は土がいまいで、不明瞭。埋土中には、大田十二社4式土器とみられる破片が数点あって南西短辺外側の落ち込みにも、大田4式とみられる破片がおちこんでいた。すでにふれたように、土壇4は、1号住居より約1m離れて始まっており、1号住居廃絶の時期もこの土壇の所属年代にあい前後する頃とみられ、この土壇が1号住居に対しどのような役割をになっていたかは不明なもの、その付属設備であった可能性が高いといえよう。

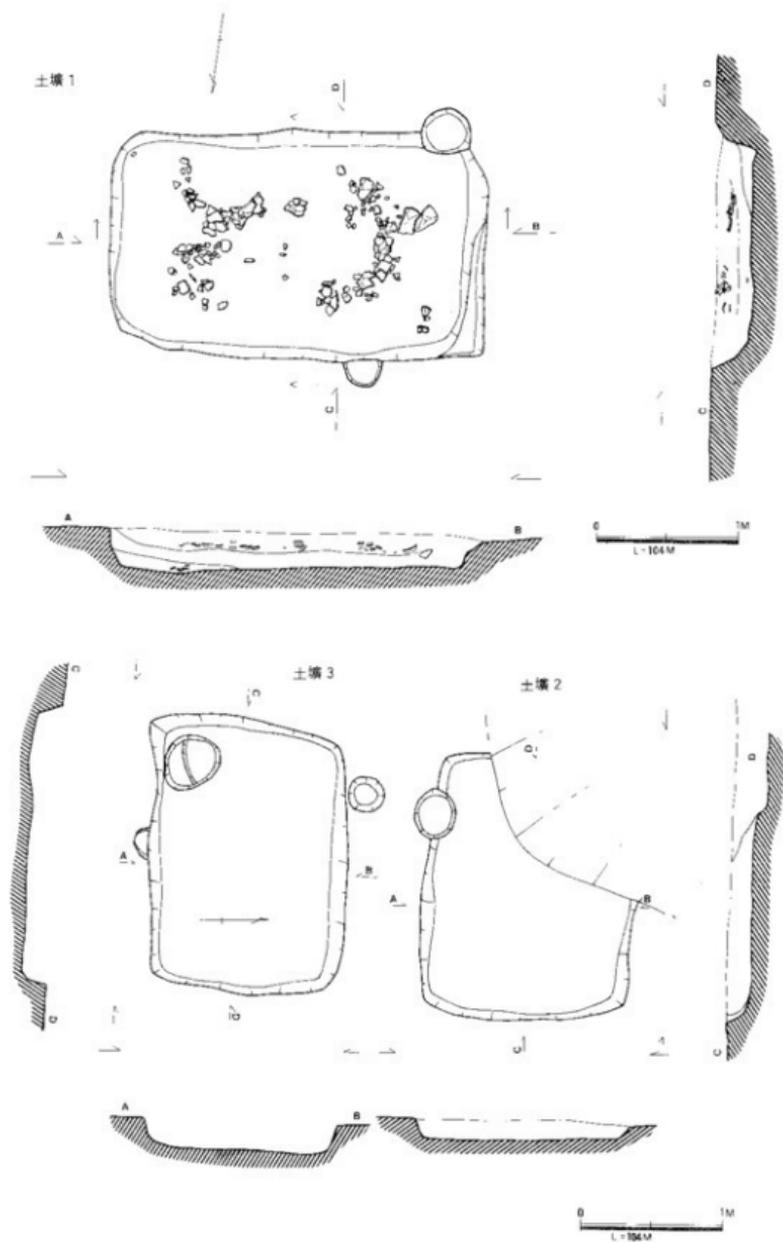


Fig. 108. 竹ノ下遺跡長方形土坑 1、2、3、平面図、断面図（縮尺 1:40）

④ 墓 址

2号墓 (SG 2) 長辺75cm、短辺50cmの小形長方形木棺墓である。両短辺に小口穴を備え、小口穴間の距離は、55cmである。

3号墓 (SG 3) 長辺1.80m、短辺70~80cmの長方形木棺墓で両短辺に小口穴を備え、側掘方々に各1個扁平な河原石を込めている。小口間距離は1.60mである。

4号墓 (SG 4) 長辺1.35m、短辺60~65cmの長方形土塚で、小口穴はない。やはり木棺を用い埋葬しているとみられるが、断面観察によっても木棺痕跡は明確にならなかった。

5号墓 (SG 5) 大半をすでに削平されており、小口穴痕跡のみが遺存していた。小口穴間の距離は、1.55mである。

6号墓 (SG 6) 東半を後世の擾乱により失っており、西半のみを遺存さす。短辺は90cm、長辺は1mまで確認できる。小口穴を備え、長方形の木棺墓である。

7号墓 (SG 7) 長径60cm、短径40cmの長楕円形の小形土塚であるが、両短辺に小口穴を備え木棺を使用したことがわかる。小口間距離は、40cmである。

8号墓 (SG 8) 5号墓と同じく大半をすでに削平されており、小口穴のみを残すものである。小口穴間距離は1.65mである。

9号墓 (SG 9) 長辺1m、短辺50cmの長方形木棺墓で、両小口穴及び側板うめこみのための溝とみられるものが一部で検出された。小口穴間距離は、68cmである。

10号墓 (SG 10) 長辺2m、短辺60~75cmの長方形木棺墓で、北小口部分で厚さ1.5~5cmの小口板の痕跡が検出された。両短辺には小口穴、両側辺には側板埋め込みの溝が発見された。小口穴及び小口板痕の距離は、1.65mである。土塚底はととのえられたらしい痕跡を示す。

11号墓 (SG 11) 長辺1.65m、短辺1mの長方形木棺墓で、両短辺に小口穴をもち、西小口には厚さ2cmの小口板の痕跡が残されていた。SG 12、13を切っている。小口板及び小口穴間距離は、1.4mである。

12号墓 (SG 12) 長辺1.9m、短辺70cmの長方形木棺墓で、両短辺に小口穴を備える。北辺を後世の擾乱によって失っている。小口穴間距離は、1.7mである。

13号墓 (SG 13) 長辺90cm、短辺60cm前後の小形長方形木棺墓で、両小口穴を備える。各小口穴間距離は、73cmである。

14号墓 (SG 14) 長辺1.8m、短辺70cmの木棺墓で、両短辺に小口穴を備え、両側辺に側板埋設のための溝が掘られていた。各小口穴には、小口板痕が残されており、北辺のものは厚さ4cm、対辺のものは2cm程度の値を示していた。小口間距離は1.57m。

23号墓 (SG 23) 長辺1.3m、短辺65cmの木棺墓で、木棺痕跡が検出面で確認された。両

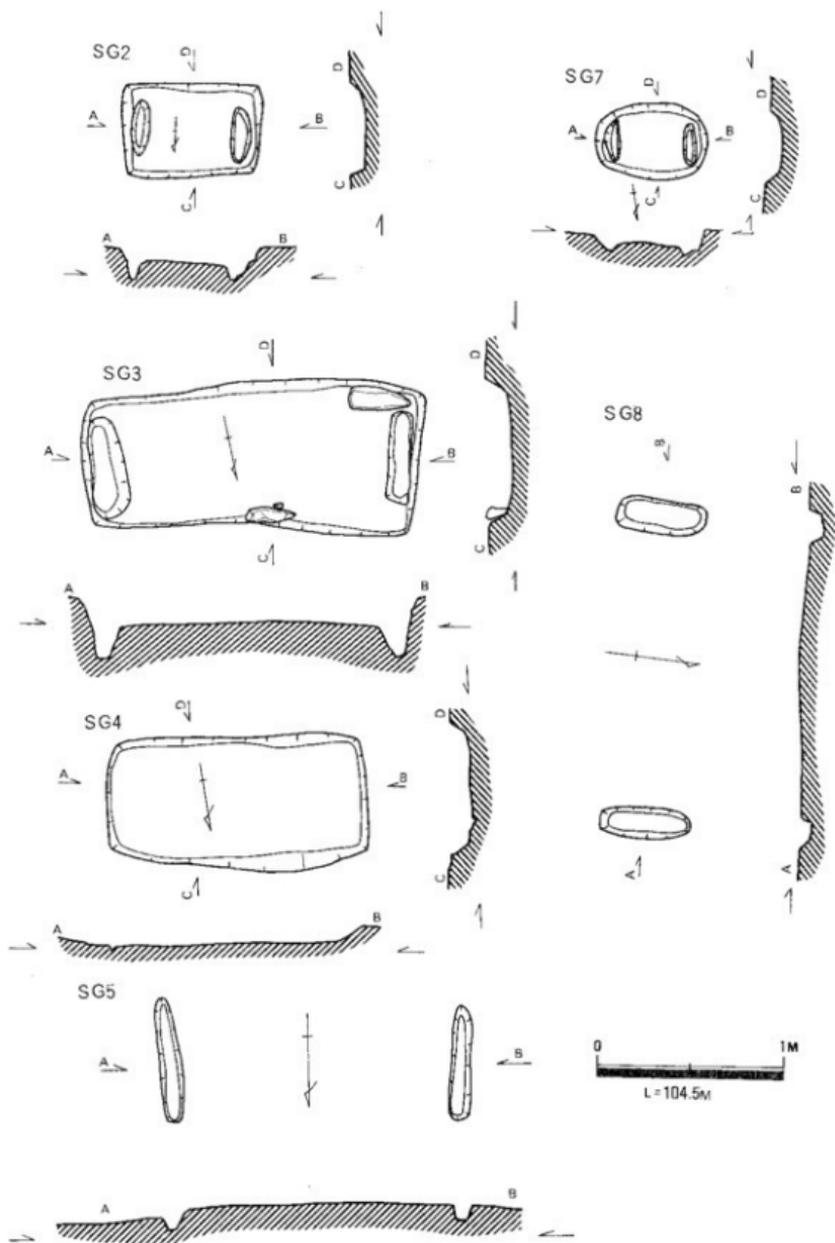


Fig. 109. 竹ノ下遺跡木棺墓、平面図、断面図（縮尺 1:30）

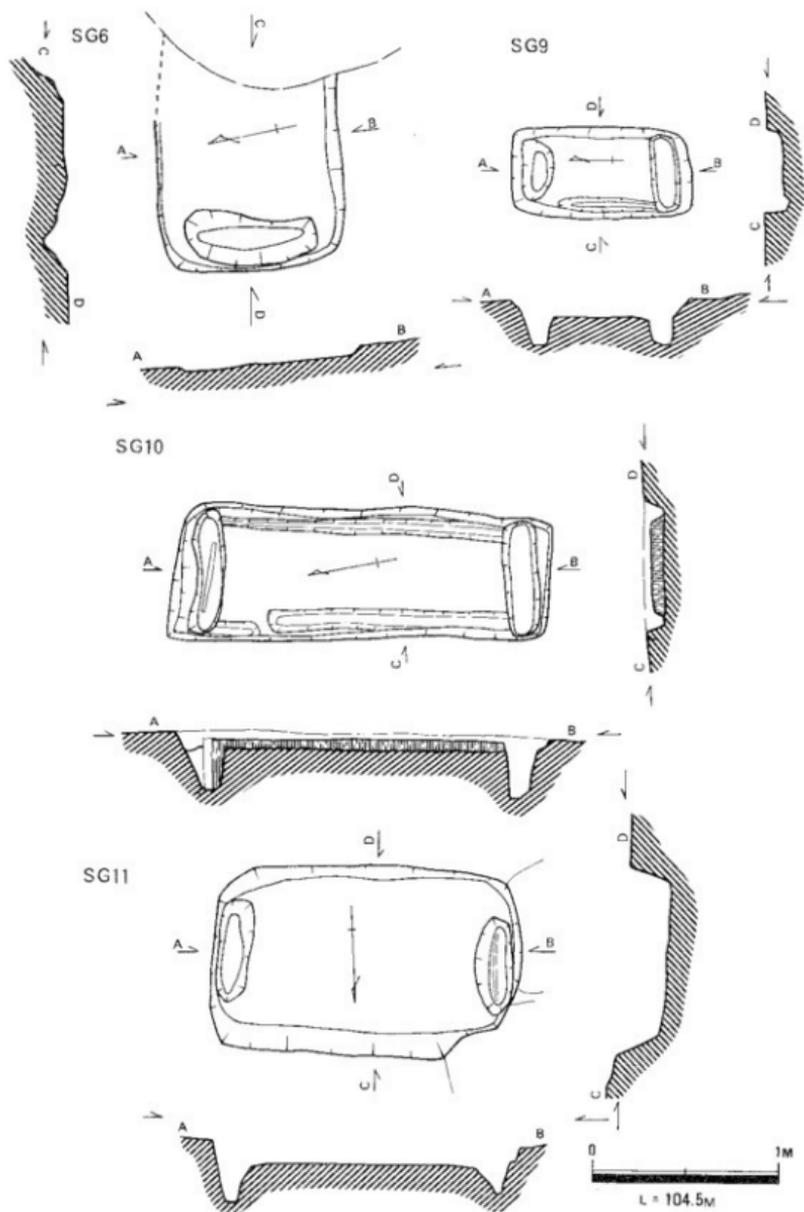


Fig. 110. 竹ノ下遺跡木棺墓、平面図、断面図(縮尺 1:30)

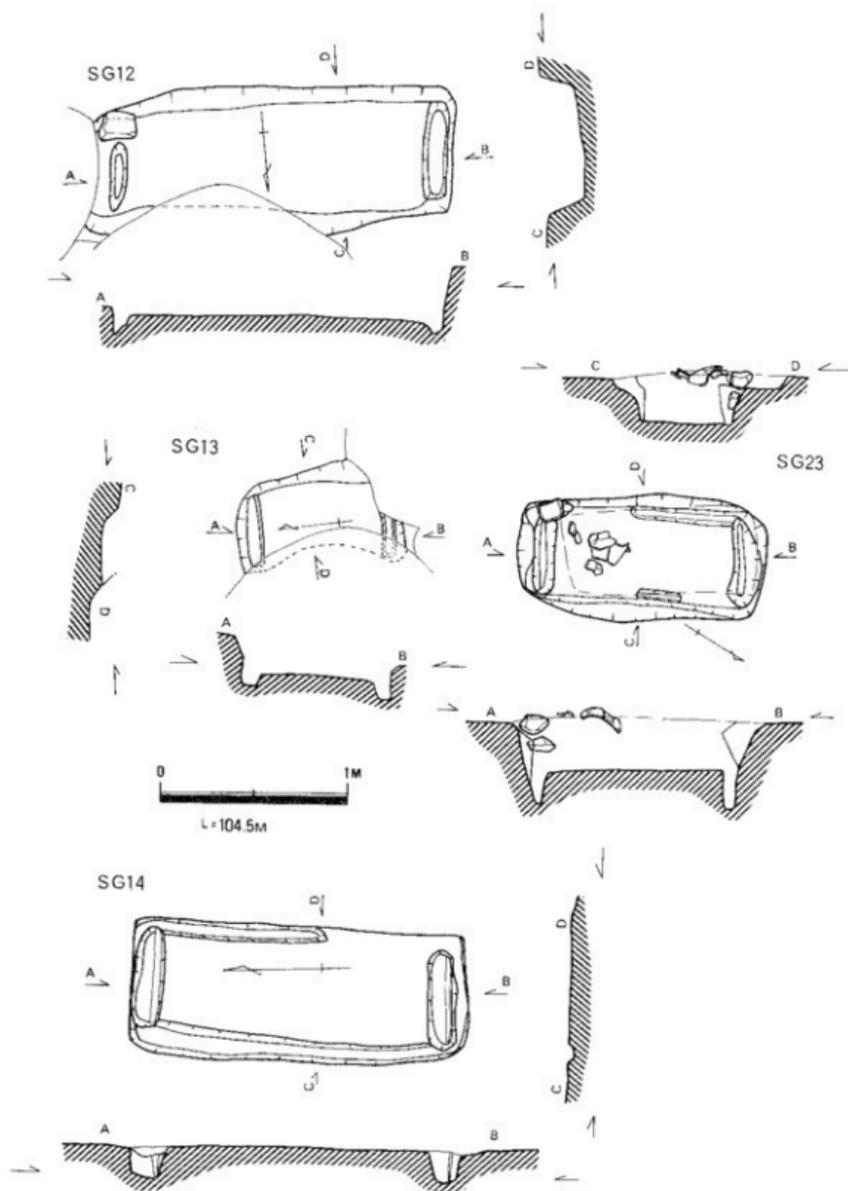


Fig. 111. 竹ノ下遺跡木棺葬、平面図、断面図 (縮尺 1:30)

短辺に小口穴が備わり、小口穴間距離は1.05mである。棺内埋土に甕形土器片が落ち込んでおり、棺腐朽後におちこんだ盛土に含まれていると判断されるので、墓のつくられた時期は、この土器の示す時期に近いとみられる。

20号墓？（SG20） 舟底形を呈する長楕円形の土塚で長径1.85m、短径70cmである。必ずしも墓とはできないが土塚墓の可能性が高い。

21号墓？（SG21） SG20と同形態の長楕円形の舟底形の土塚で、やはり土塚墓の可能性の高いものである。

このうち、SG3、9、10、12、20、21、23の埋土には土器片が含まれており、その特徴をよく残す破片は少ないが、すべて中期に属すると考えられる破片で後期とみられるものは、1片もない。これら墓群のあり方からみて、墓それぞれの営まれた時期に隔絶があるとみられず、いずれも大概ね弥生中期後半に営まれたものとみられるだろう。

23号墓出土の土器 1、2とも甕形土器破片。1は、くの字状の口縁部端をやや上方へ肥厚させている。淡褐色の土器で、内外の剝離激しく仕上げ調整不明であるが、ヨコナデにより仕上げられたものとみられる。5×3cmの破片である。2は、外面上半の器壁の荒激しく調整不明であるが、下半はタテ方向のヘラ磨きによって仕上げられているとみられる。内面は、上半タテ方向の刷毛仕上げで、指頭圧痕が顕著にみられる。下半はヨコ方向の刷毛ないしはヨコナデによるとみられる細かい擦痕が底部までみられ、ヘラ削りかたとみられる砂粒の動きがかすかに認められる。内面にはこげつきとみられる炭化物の付着がある。

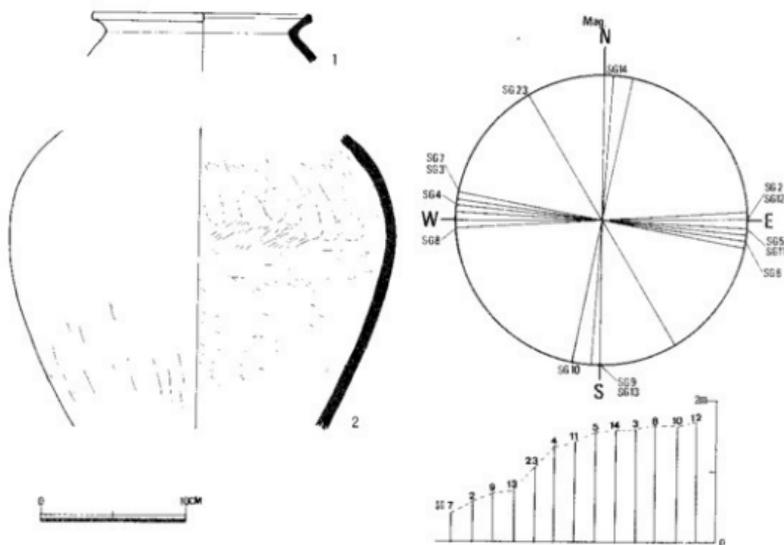


Fig. 112. 竹ノ下遺跡木棺墓出土の土器（細尺1：4）

表9. 木棺軸方位及び長辺規模

木棺墓の主軸方位と

棺規模 木棺の主軸方位は、驚くべきことにほぼ正確に東西、南北を指し示している。東西方向9基で、偏差角 14° 、南北4基で偏差角 11° 。例外はSG23 1基のみである。主軸認定上の誤差を見込んだとしても、この数値は埋葬にあたって方位が重要な要素であったことを思わせる。

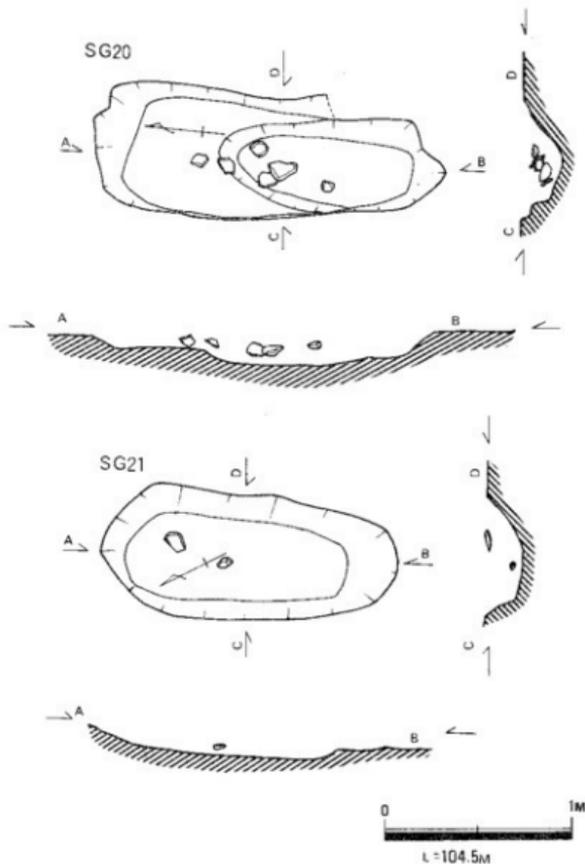
ただ、この墓地は方形ないしは長方形に区画されたものであったとみられる点で、たまたま墓地区画に規制されて主軸方位が東西南北に一致したとも考えられる。しかし、最近調査された津山市一宮

のアモウラ遺跡の弥生 Fig. 113. 竹ノ下遺跡土壌墓SG20、21、平面図、断面図（縮尺 1:30）

中期と考えられる木棺墓群も、丘陵傾斜部分にかかる位置に存在したにもかかわらず、やはり同様の傾向が見てとれたことから考えて、当時の人々には方位観が生活規範上重要な役割を果たしていたことをこの墓群のあり方は反映していると考えた方がよいだろう。

棺規模からみた特徴は、推定木棺長辺規模の変異差が大きい点である。50cm未満のもの1基、 $\sim 1\text{m}$ 、3基、 $\sim 1.5\text{m}$ 、3基、1.5m以上6基である。木棺規模が必ずしも被葬者の体軀の差を表わすとは限らぬにしろ、特殊な葬法を考慮外におくとすれば、相対的にはその体格の差を反映するとみてよく、各棺規模の度数分布から考えて、家族墓地としての特徴をよく示していると考えられる。既述の通り本来の墓群規模不明とはいえ、住居群に隣接する小規模な墓地とみられ、弥生後期の墓群と内容を比較検討する上で良好なモデルとなろう。

※ アモウラ遺跡調査委員会調査、未整理で筆者の主観的な判断であることをこたわっておきたい。



2 竹ノ下遺跡2区出土の弥生式土器と石器

① 2区出土の弥生式土器 (Fig.114)

3は壺形土器、1、4、6、7、8、10は甕形土器、2は椀形土器、5は鉢形土器、9は台付壺形土器。1は内外面ヨコナデ仕上げ、胴内面はヘラ削り、2は剝離激しく調整不明。3は口縁端面に4条の凹線文を巡らし、列点文を一巡させる。その他調整不明。4は口縁端面に2条の凹線文を巡らし、胴内面には指頭圧痕及びヘラ削痕とみられる凹凸があるが不明瞭。5は片口付の鉢で、外面に丹彩痕跡を残す。6も器壁荒激しく調整不明であるが、底部に強い火をうけたあとがある。7は、口縁端面に2条の凹線文を巡らす、その他調整不明。8は、くの字形の甕形土器とみられる口縁部の細片で、内外面ヨコナデ仕上げとみられるが不明瞭。9は、丹彩土器で、外面及び口縁部内面に丹彩がある。口縁部の内外面はヨコナデで仕上げられており、胴部外面はヨコ方向のヘラ磨き仕上げ、胴部内面はヨコナデ仕上げである。胴部内面は、ヘラ削りのち仕上げされているとみられるが、ヘラ削りの痕はほとんど残していない。脚部に4孔の穿孔がある。10は、口縁端面に3条の凹線文を巡らし、肩部外面はヨコ刷毛をヨコナデで消しているとみられる。胴部外面には、ヨコ方向の刷毛目がそのまま残る。内面は、ヨコナデ仕上げで、指頭圧痕を残す。

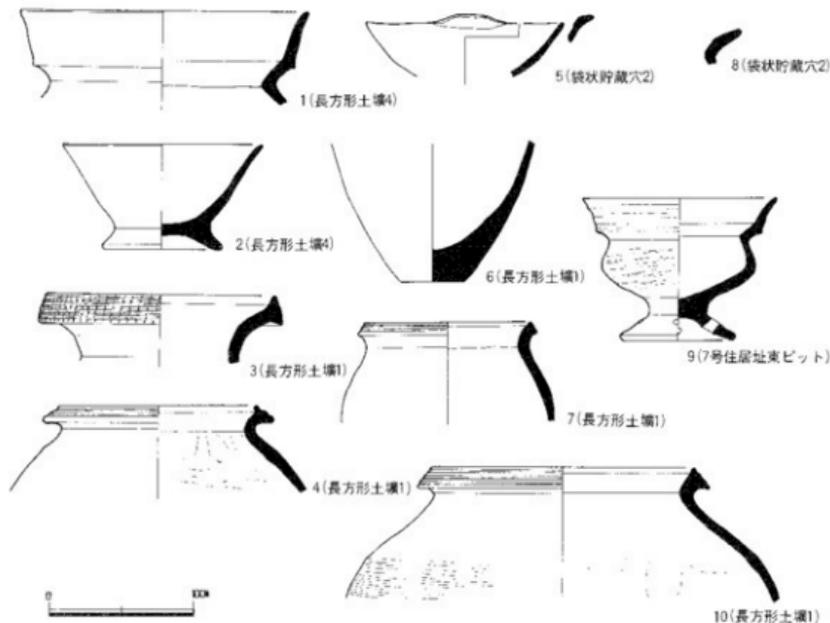


Fig. 114. 竹ノ下遺跡2区出土の土器 (縮尺1:4)

② 2区出土の石器

石庖丁 (Fig.116-1~4) 1は1号住居南壁のピット出土、2は7号住居埋土上層出土、3は、グリッド6の黒色土中、4は2号住居址床面。いずれもB類に属する。1は結晶片岩の未製品で、表裏両面とも研磨され刃部もすできり出されている。穿孔の2次段階で廃棄されたもの。2は、砂岩製とみられるもので、表裏ともよく研磨されていたとみられるが、大半は、欠損。3は、緑色片岩製の完形品。表裏両面ともよく研磨され、使用痕とみられる刃こぼれが一部にみられるが、刃部は全般ににぶくなっている。4は、石英片岩製の未製品。打ち欠き成形で石庖丁の形をととのえ、すでに穿孔されているが研磨は加っていない。

砥石 (Fig.116-5~8) 5は、3号住居址埋土出土。6は、表採資料。7は、4号住居址B床面出土。8は7号住居址床面出土である。5は頁岩製で、表裏及び両側面とも研磨に使用されている。6も頁岩製で、表裏、側面5面が研磨に使用されている。表裏とも研磨にたびかきなり用いられており、いずれも大きく内彎している。7は、小形品で、きめの細い非常に良質の砥石である。材質は頁岩とみられる。表裏両面及び両側面も研磨に用いられている。8は、砂岩とみられる石材を利用したもので、他三者に比べ粒子は荒い。火を受けたためか表面が黒っぽくなっている。研磨に用いられたのは表面の一面だけである。以上のうち5、6、7は現在の仕上げに用いられる砥石に類似し、それに残る鉄製品の擦痕に類似した条痕が認められる。おそらく鉄製品の研磨に用いられたものであろう。

打製石槍? (Fig.116-9) 9は、表採資料であるが、サヌカイト製の打製石槍で、先端部及び基部を欠いたものとみられる。両側縁に刃部を作り出しているが、基部よりの刃部はいずれも敲打によりつぶされており、刃部自体も石槍としての緻密な仕上げでない。裏面の大きな剝離も、刃部に敲打を加えた際のものともみられ、あるいは楔形石器の可能性もある。

以上の石器のうち、所属時期の推定できるのは、2、4、5、7、8で、2、7は弥生時代中期後葉、4、8は弥生時代後期終末、5は、後期に属するとみられるが限定できない。

(石器補) 京免遺跡の石器の項に入るべきものであったがもれているのでここで補う。

スクレーパー形石器 (Fig.115) 京免遺跡1区永田耕土層出土のカヌカイト製スクレーパー形石器で、両面から細かく敲打を加え刃部をつくり出している。表面の風化激しく縄文時代のもものとみられるが、打製石庖丁半分が欠損したものの可能性もある。

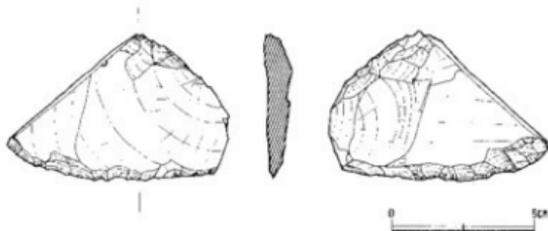


Fig.115. 京免遺跡第1区出土のスクレーパー形石器 (縮尺1:2)

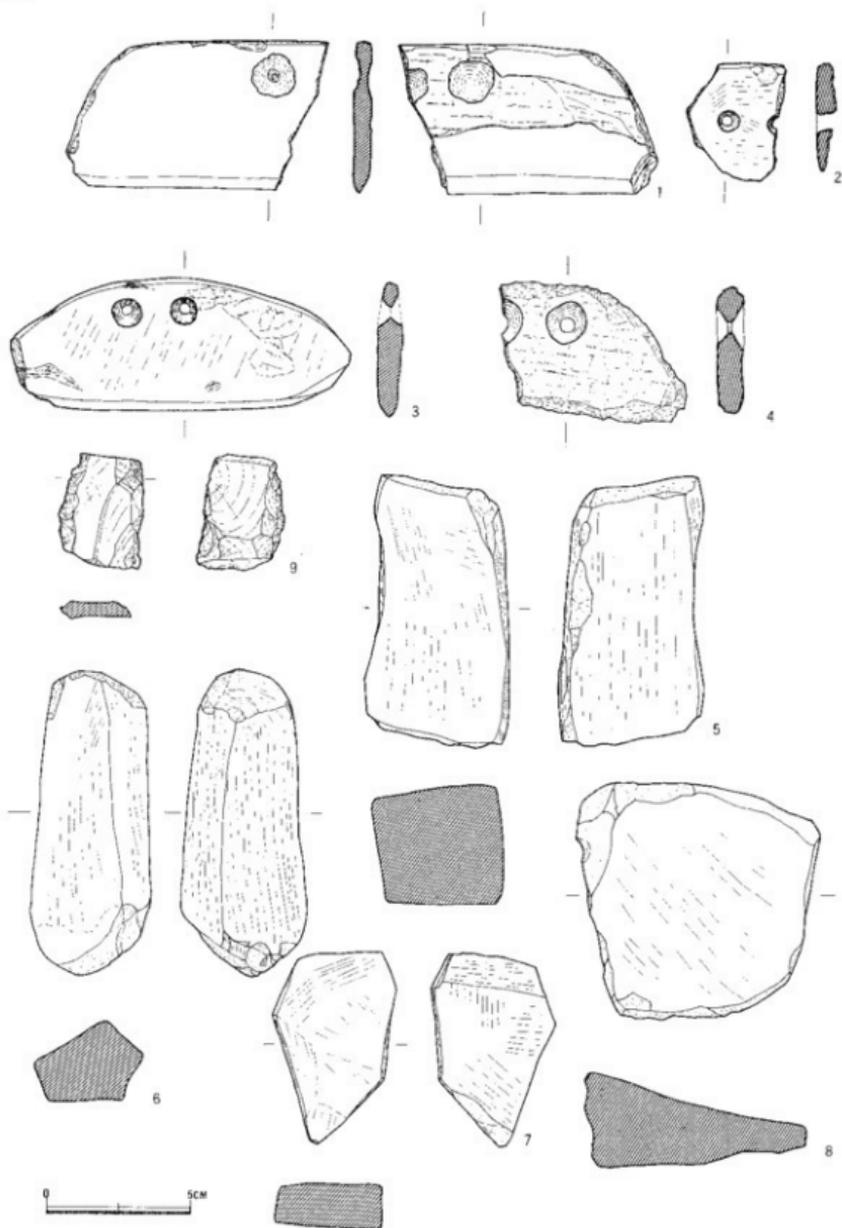


Fig. 116. 竹ノ下遺跡出土の石器 (縮尺1:2)

第5章 概括と問題点

① 弥生式土器

1、前期 京免遺跡では、可能性の強いものを含めると少くとも数十片の弥生前期の土器片が発見された。いずれも、細いシャープな沈線を用いる点で天神原遺跡出土のものよりも大抵後出的傾向を示し、一丁田遺跡（高橋谷遺跡）出土のものに多くの類例がある^①。津山での前期土器出土量は限られ、これらは周辺地域の様相と対比する上で基準資料となるだろう。

2、中期 6区SX 159出土の土器は、中期後葉の基準資料となるものである。京免遺跡出土の土器には、これより先行するとみられる土器群1～2があり、後出するとみられるもの一群がある。沼E遺跡1号住居7号住居状遺構出土土器を中葉の基準とすれば、沼E→1～2型式→SX 159→1型式という、編年上の区分が推測される^②。既に津山市の発掘資料の中に間を埋める良好な資料が存在しているとみられ、今後の整理の中でそれは明らかにされよう。

3、後期 後期の土器の様相の推移については、大田十二社遺跡の5区分を基本的に変更させる事実は確認されていない。しかし、京免遺跡では大田十二社2式併行期の土器が豊富に出土しており、2式を再検討する材料が呈示された。京免遺跡SH 199号住居一括遺物を援用した2式の設定にあたっては、先行する一型式、後出する一型式を推定することによって各型式間の時間的変異差の解消をめざしていたが、その際、前者に5区SK 59、9区SD 187の資料を念頭においていた。しかし、整理が進んだ今も1式～2式間に1型式を設定することにより悩むを感じる。現状ではむしろ2式設定の契機及び津山の弥生後期の土器の多采なあり方からみて、これらのものは2式の中に含める方に妥当性をみだしている。とはいえ、SH 199出土土器群より古い様相をもつ土器群が大田十二社遺跡に比較してかなり大量に存在すること、3区南端の外周溝群の切合に伴う土器の様相の違いは、両者が一遺構でしばしば共存して発見されるにかかわらず、将来分離される可能性を示唆している。確実な一括遺物の出土をまちたい。2式～3式間のものについては散発的にしか目につかず一型式を設定するだけの資料に恵まれていない。

② 溝の分類と機能

京免遺跡では多数の溝が発見されたが、その種別は、環濠A、住居外周溝B、排水溝C、その他Dと4大別することができる。Aは溝幅2～3mで検出面よりの深さはいずれの地点でも50cm前後である。文字通り、対応する集落を取り巻き、集落への水の侵入を食い止め、これがまた集落の排水の末端に位置することは確かである。9区では、井堰状の遺構が発見されてお

り、環濠は用水の役割も果たしていたことが推定される。Bは住居周壁外方約2.5m前後に溝底をおき、住居プランに対応してこれを取り囲む溝で、住居の屋根から

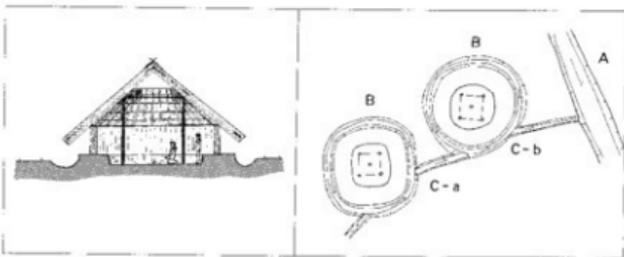


Fig. 117. 住居復元図及び溝模式図

流れ落ちる雨水を受ける排水溝とみられる。見すごされる場合が多かったのであろうが報告例は少ないが、丘陵上の沼E遺跡の住居でも確認され、久米町の鞍山遺跡の住居に隣接する溝も④こういった溝と考えれば合理的な説明がつく。京免遺跡では、住居床面レベルより外周溝底の方がわずかに低いとみられる例が多い。C-aは、外周溝間を結ぶ排水溝、C-bは外周溝と環濠を結ぶ溝で、いずれも直線を基本としている。溝の形状は外周溝と同様なものが多いが、幅が狭く法面がより強く立上がるものがある。(Fig. 117は以上の関係を示す模式図)

③ 住居の復元

京免遺跡のSH13を参考に復元図を描いたものがFig. 117である。上部構造の復元にあたっては、さしたる客観的根拠はない。通説のように、屋根垂木を周堤に下ろし、茅ないしはワラを末端にうず高く葺けば、住居壁面と外周溝の位置関係にも不自然さを残さない。しかし、その際には相当高い周堤を巡らすことを考えなければ、屋根勾配を急なものとしなくてはならないだろう。壁の存在を考えることもあながち不可能なことではないし、しいて考えれば、その位置に柱穴の存在するとみられる遺構も京免遺跡にはある。今後、いわゆる「住居外」の遺構のあり方がはっきりすることを期待したい。

④ 集落の変遷 (京免遺跡)

前期の土器片は、少数の例外を除いて、前期土壇SK 199 aを南限とする9区北半、6区南半、7区東端部分に集中して発見される。このことからみて、前期の居住域自体はごく限られた範囲に限定されていたことが考えられる。

中期の遺構は、京免遺跡ほぼ全域に存在する。勿論これらは数カ所にまとまる傾向があり、また同時存在とは考えられないが、居住遺構が微高地のほぼ全域に残されていることが特徴である。

後期の遺構は、環濠内に限定され、環濠外の微高地には後期の可能性のある木棺墓群以外の明確な後期の遺構がなく、後期に属するとみられる遺物もほとんどない。

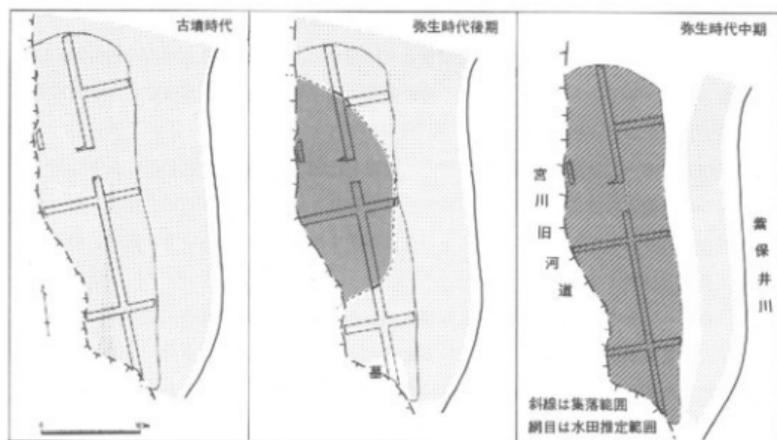


Fig. 118. 集落及び水田推定範囲模式図 (縮尺 1:6,000)

これらの事実と推定水田範囲との関係を模式化したものがFig. 118である。前・中期の水田を想定する場合、雲保井川と居住区域間の湿地帯を考えるよりなく、中期の集落範囲から考えて微高地は水田化されていないと判断される。後期には環濠外に明確な遺構はなく、環濠のあり方から考えてこの部分がすでに水田化されていた可能性が強い。古墳時代の確実な居住遺構は発見されず、環濠の埋積土の状況等から考えて古墳時代には、微高地上の大部分が水田化されていた可能性がある。

大田十二社4～5式を境として、集落は現象的に途絶える傾向が津山では顕著に認められる。集落立地を移動したか、集住形態を放棄したかの二つの原因が考えられるが、京免遺跡の廃絶状況、短期間に多くの集落が一致して途絶えることからみて、居住景観に大幅な変更のあったこと。水田経営形態に大幅な変化がみられたことが推測される。

⑤ 概 括

京免遺跡の弥生後期の集落を特徴づけるものは、大規模な環濠の形成である。この環濠自体は、既知の環濠集落の溝に較べ必ずしも広く深いものではない。しかし、京免遺跡の環濠形成の主要因は、通説の通り集落防禦にあったと考えなければならないだろう。その点でいえば、二条の川で狭まれた三角地帯に位置する京免遺跡は、本来集落防禦上有利な位置に存在するといえる。

先に、環濠に用排水路としての機能が備わっていたことを推定したが、しかしそういった機能が認められたとしても、そのことは必ずしも環濠の掘られた原因を十分説明するものではない。④で想定した通りに、環濠外の微高地の大部分が水田化されていたとしても、そこにはと

うてこれほどの用水溝を必要とするだけの水田面積は考えられないのである。

環濠内では、大田2式を相前後する遺構が多く確認され、それが京免遺跡の後期各期の様相を必ずしも代表するものとはできないが、その時期に限って言えば、集落規模としては相当大きなものであったことが推測できる。

京免遺跡と大田十二社遺跡の推定同時併存住居数を比較した場合、比較の幅を大きく見ついてもなおかつ両者には集落規模という点で大きなひらきがある。いずれも、後期を通じて継続的に居住されていたことは、少なくとも土器型式が示す単位からは明らかで、断絶、相互の移動を考えることはできない。

このことからいうと、後期にいたり大規模な集落と小規模な集落が接近して存在していたこと、少なくとも集落規模に不均等が生じていると考えることができよう。さらにいえば、後期の遺跡範囲のうち部分的にしか発掘が及んでいないが、竹ノ下遺跡についても、出土土器からみて、京免遺跡との共存関係を考えなければならず、それは周囲の環境からみてあまり大規模な集落とは考えられないのである。

そこで、この不均等の発生を両者の対比によって探ってみたいが、両者がまったく異なる集落レベルを表わしている、といった危惧もおこるかもしれない。しかし類似した文化要素をもつ両集落が相接して共存すること、京免遺跡の環濠形成の主要因が集落防禦にあったとみられる点からして、少なくとも水田経営の単位としての比較は許されるであろう。

両者の集落規模の相違は、一に背影となる水田面積にあるとみられるし、逆にいえば、京免遺跡の想定される多くの人口は、広大な水田面積を背影として存立するもので、その点でいえば大田十二社遺跡や竹ノ下遺跡の立地に較べ京免遺跡の立地は、微高地をも水田化していったことを考えれば、一般的にみて大いに有利な場所にあるといえる。宮川流域では後期に至り外部世界からの顕著な影響をとどめる土器が多数出土しており、京免遺跡もその例外ではない。というよりも、現状ではかなり主観的な見解であることをこたわっておくが、京免遺跡の後期の土器の様相には、他に先んじてそういった新しい特徴を表出するものが特に大田2式期に顕著に認められるのである。その点から解釈すれば、京免遺跡の後期環濠集落は、広範な経済的ネットワークの中心的位置を占めていたことも考えられる。

中期の水田経営の主体が、傾斜地形を利用した場所にあったと考えられるので、中期末にはまだ水田可耕地は平地部に多く残されていたとみられ、こういった部分をいち早く多くの労働力と新しい水田開拓技術を駆使し開墾していったところに、京免遺跡の環濠集落形成の主要因があったと考えられるのではなからうか。

しかし、そういった傾向の強まりがやがて土地不足を生みだすことは時間の問題である。

先に、大田十二社遺跡の報告書の中で、中期の水田経営主体の最少単位として家族を考えることができ、水田と経営単位との個別的な結びつきは家族形態の拡大を志向させ、後期にはそ

れが直系継承化してゆく可能性があるという見通しを述べたが、竹ノ下遺跡の中期住居群と墓群の対応関係は前者のあり方を、京免遺跡の環濠内の後期住居群の均質化傾向、及びS H 199に代表される住居内遺物のあり方は後者の方向をさし示しているとみても矛盾はない。

こうした家族構造の変化の背景に、弥生時代後期の可耕地の不足及びそれに基づく土地分与上の問題点を想定すれば、その変化のメカニズムはスムーズに説明できるかもしれない。

一般的な土地不足、人口圧の中で容易に階層分化は起こりうるし、集落間の不均等のあらわれはまたそういった階層分化の方向性を示しているとみられる。階層の形成は、やがて大きく社会構造を変換させる主要因となり、宮川流域の生活環境を一変させるものとなってゆく。

① 河本清、橋本悠司、下沢公明、梅瀬昭彦「天神原遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告7』

岡山県教育委員会 1975年

② 近藤義郎、植月社介「津山市山北一丁目遺跡」『津山弥生住居址群の研究』

津山市 1957年

隣接する高橋谷遺跡については、昭和50年～51年に津山市教育委員会が学校建設に伴い調査。

報告書作成中である。

③ 中山俊紀、行田裕美「清江遺跡Ⅱ」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集』

津山市教育委員会 1981年

④ 村上幸雄、橋本悠司「榎山遺跡群Ⅰ」久米開発事業に伴う文化財調査委員会

1979年

⑤ 河本清、中山俊紀「宮川流域における弥生社会の展開過程と大田十二社遺跡の位置」

『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集

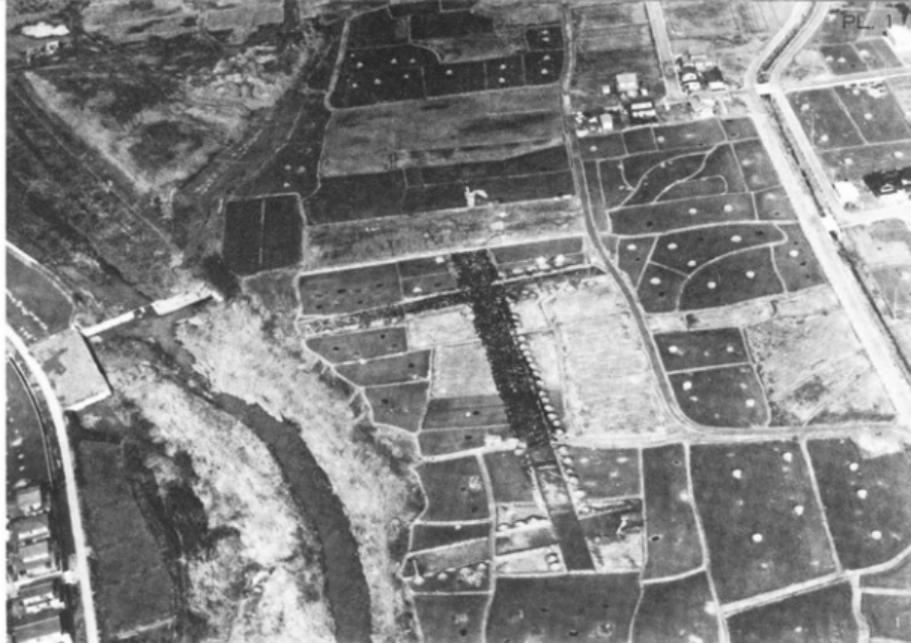
津山市教育委員会 1981年

P L 25	1. 縄文土器 京免9区SK301	Fig.70		12. 大田2式土器口縁部仕上げ	
	2. 弥生前期土器	Fig.81-2~7			Fig.29-12
	3. * 京免9区SK199a	Fig.81-1			Fig.30-11
	4. 弥生中期土器京免9区SH199下層溝1	Fig.63-2			Fig.28-11
	5. * 竹ノ下1区溝1	Fig.85		13. 大田2式土器外面仕上げ	Fig.57-2
	6. * 京免1区SX9	Fig.26-9		14. 中期土器内面仕上げ	Fig.63-1
P L 26	1. 弥生中期土器京免6区SX159	Fig.43-1		15. 大田2式高杯形土器外面暗文風装飾	Fig.56-10
	2. *	Fig.43-4		16. 大田2式土器内面ヘラ削り	Fig.64-6
	3. *	Fig.43-1	P L 30上	1. Fig.84-4	
	4. *	Fig.44-2		2. Fig.84-1	
	5. *	Fig.43-3		3. Fig.116-9	
	6. *	Fig.43-2		4. Fig.115	
P L 27	1. 弥生後期土器 京免9区SH199	Fig.56-1		5. Fig.83-4	
	2. *	Fig.57-11		6. 竹ノ下2区1号住居南ピット	
	3. *	Fig.56-2		7. Fig.83-6	
	4. *	Fig.57-12		8. Fig.84-1	
	5. *	Fig.56-5		9. 竹ノ下2区2号住居土	
	6. *	Fig.56-3		10. Fig.83-2	
	7. *	Fig.56-8		11. Fig.83-3	
	8. *	Fig.56-7		12. Fig.116-5	
	9. *	Fig.56-6		13. Fig.116-6	
	10. *	Fig.56-9		14. Fig.83-7	
	11. *	Fig.56-10		15. 9区SH199	Fig.55
P L 28	1. 弥生後期土器 京免3区SH37	Fig.30-16	下	1. Fig.82-2	
	2. *	Fig.30-17		2. Fig.82-3	
	3. 弥生後期土器 京免6区SD16	Fig.41-3		3. Fig.82-4	
	4. * 京免9区SD193	Fig.63-5		4. Fig.82-5	
	5. * 京免6区SX149	Fig.41-1		5. Fig.82-1	
	6. * 京免6区SX149	Fig.41-2		6. Fig.82-6	
P L 29	1. 弥生後期土器 京免1区SD4	Fig.24-3		7. Fig.82-7	
	2. *	Fig.25-10		8. Fig.82-10	
	3. *	Fig.25-19		9. Fig.83-1	
	4. 弥生後期土器 京免9区SD170	Fig.61-1		10. Fig.82-11	
	5. * 京免1区SD4	Fig.23-21		11. Fig.116-4	
	6. * 京免5区SD51	Fig.36-3		12. Fig.82-12	
	7. * 京免3区16第3層			13. Fig.82-8	
	8. スタンプ文土器 京免3区10第3層	Fig.31		14. Fig.116-4	
	9. * 9区SD170			15. Fig.116-2	
	10. 加藤土器片 9区SD170			16. Fig.82-9	
	11. 弥生中期土器 京免8区SD160	Fig.62-1		17. Fig.116-1	

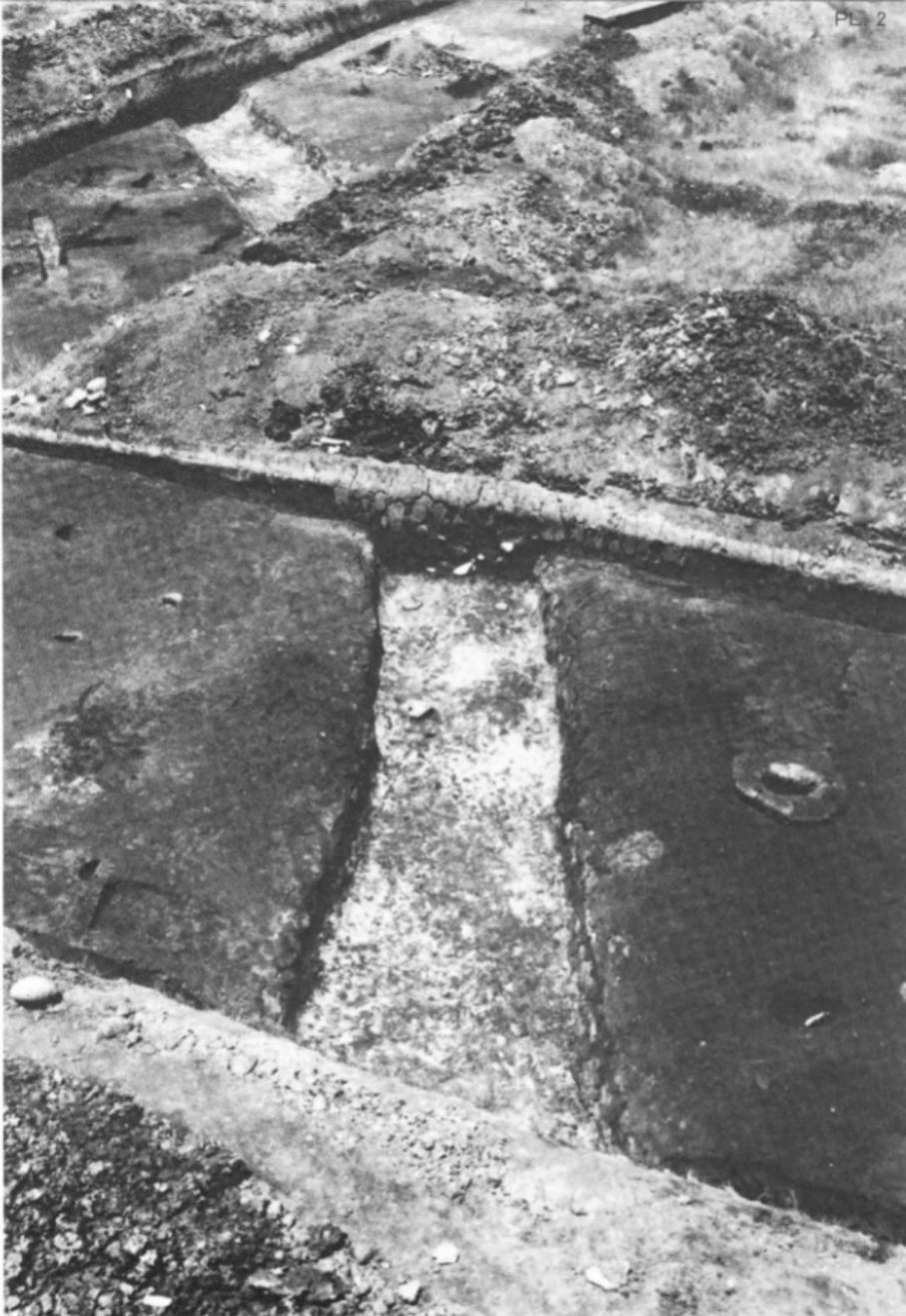
表10 写真図版種別対象表

图 版





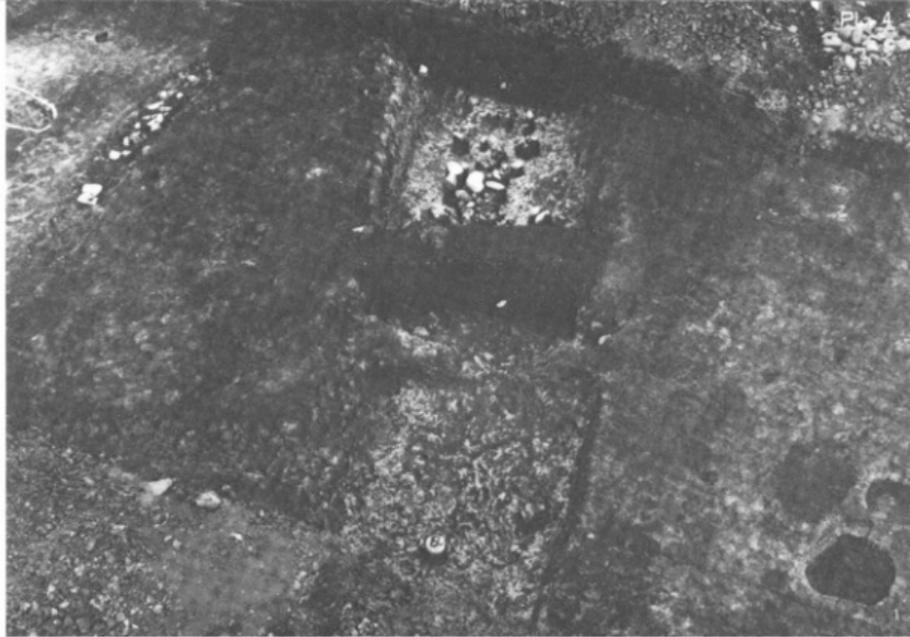
1.2. 京免遺跡（南から）



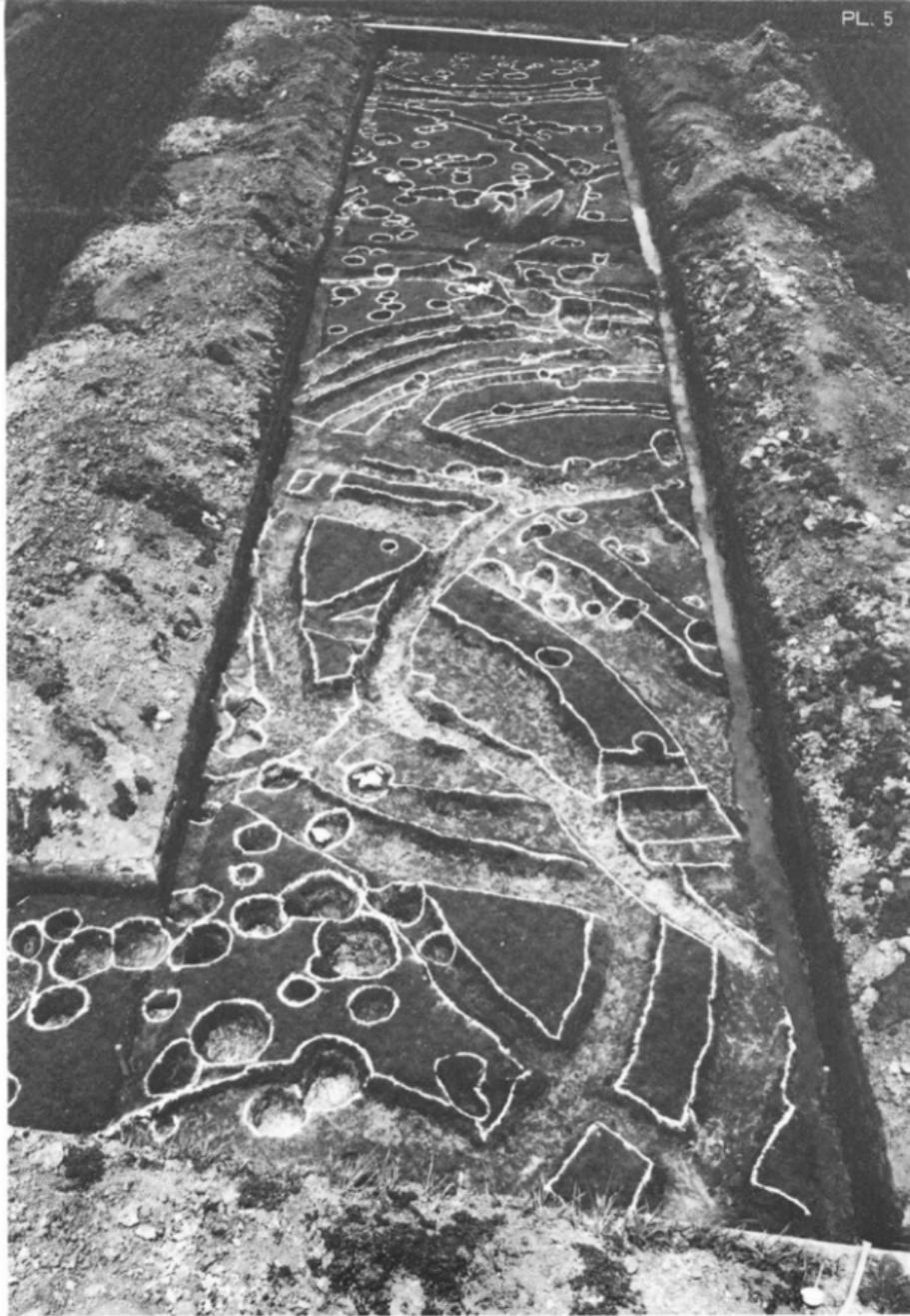
京免遺跡 1・2区SD4 (南から)



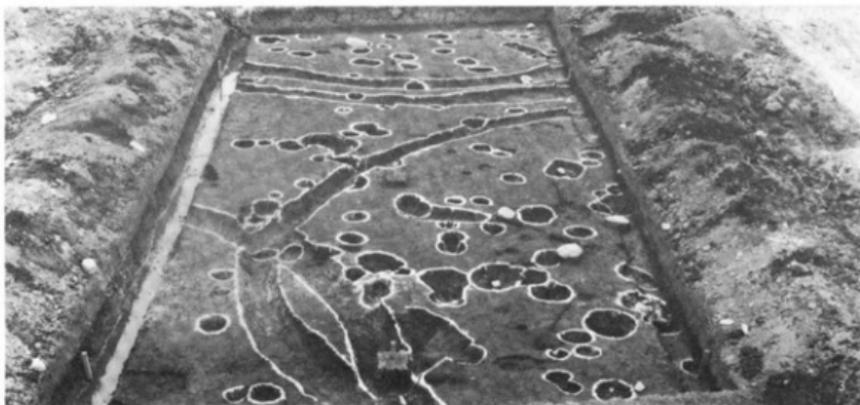
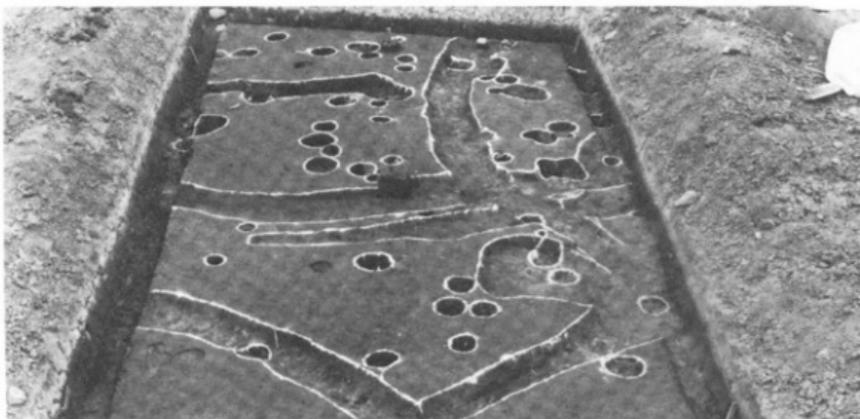
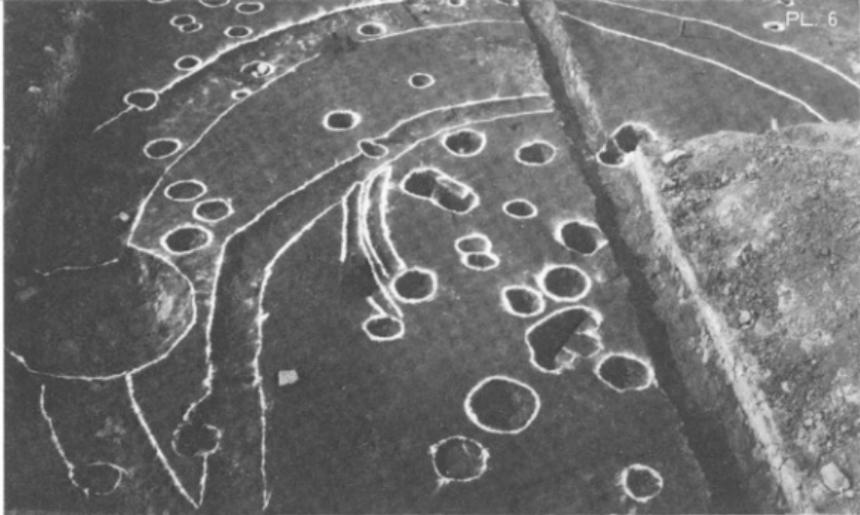
1. 京免遺跡2区SD4上層土器廃棄状況(東から) 2. 2区SD4(西から) 3. 1区SD4上層(北から)



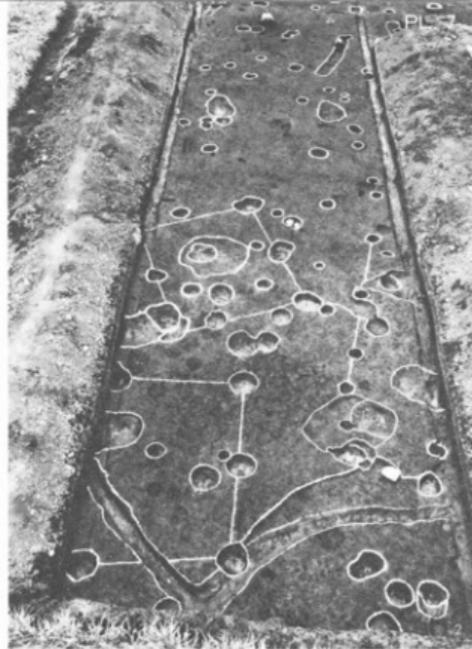
1. 京免遺跡9区SD170(西から) 2. 9区SD170堤状造構断面(北から)



京免遺跡3区(南から)

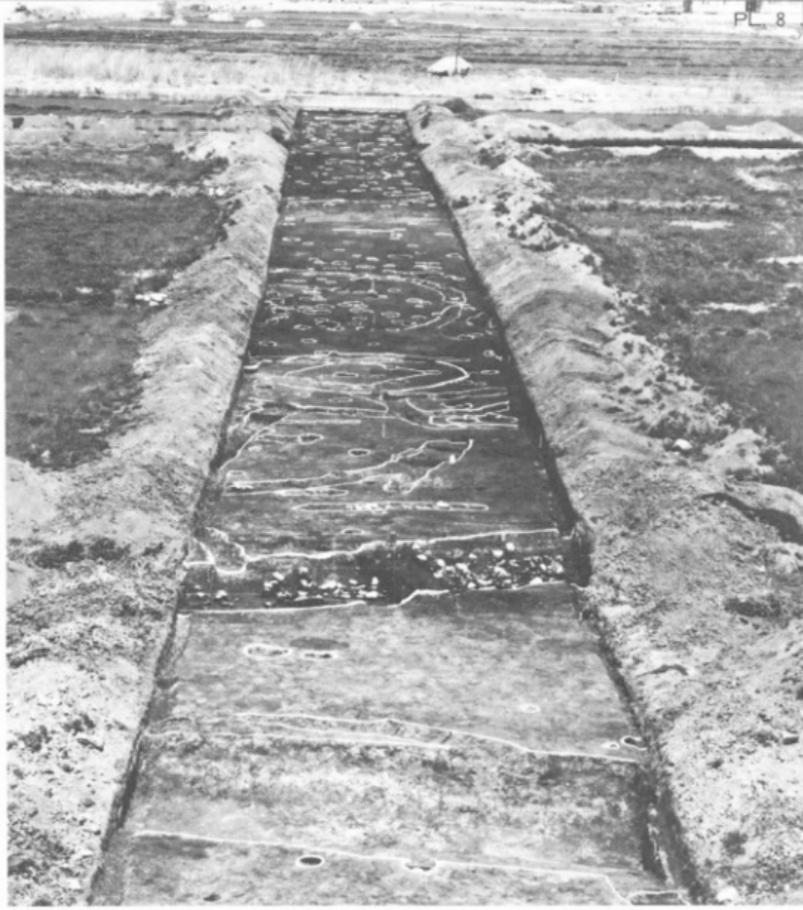


1. 京免遺跡3区SH13, SD30, 31(南から) 2. 3区SD100, 101, 102, 103, 104(北から)
 3. 3区SH37, SD108, 109(北から)



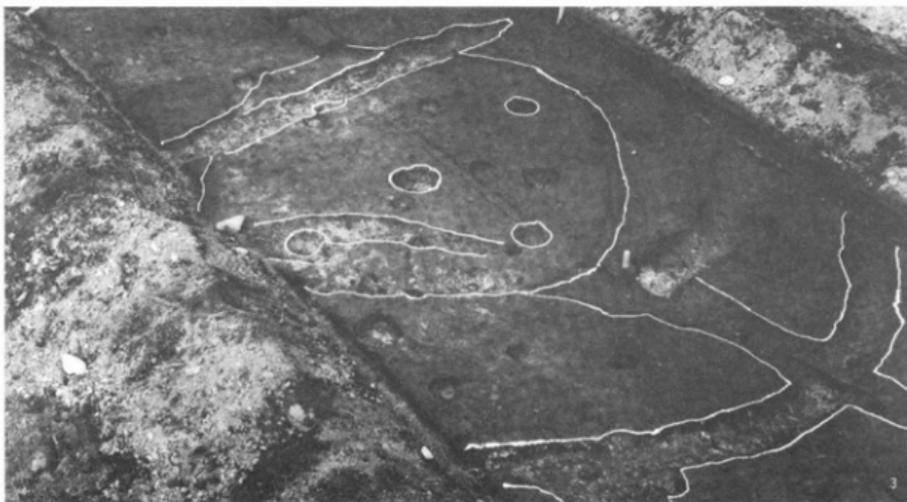
1. 京免遺跡引区(南から) 2. 引区(北から) 3. 引区(西から) 4. 引区(西から)

京免遺跡9区
(南から)▶



京免遺跡9区南端
(北から)▼

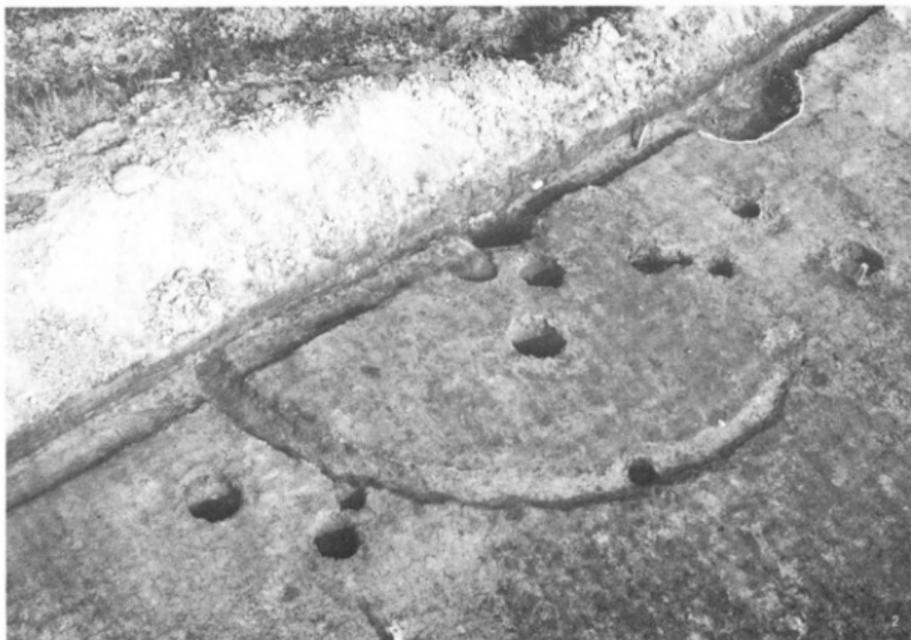




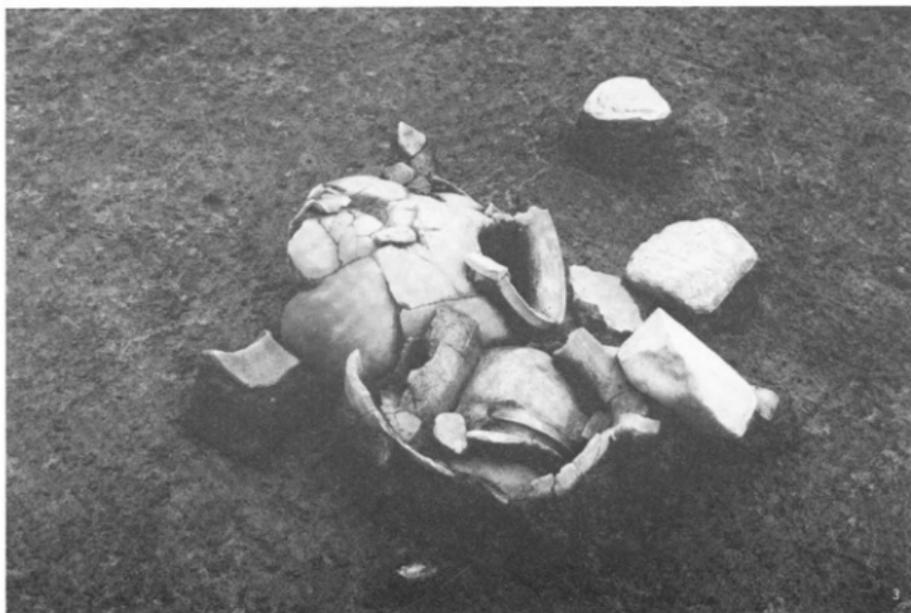
1. 京免遺跡9区(北から) 2, 3. 9区SH199(南から)



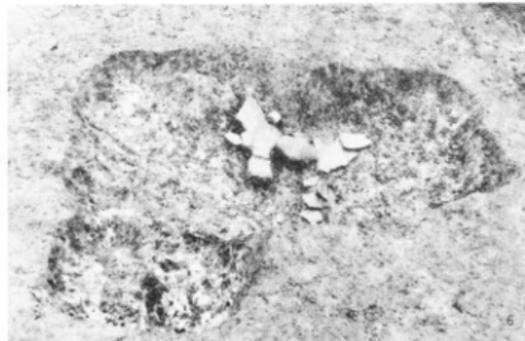
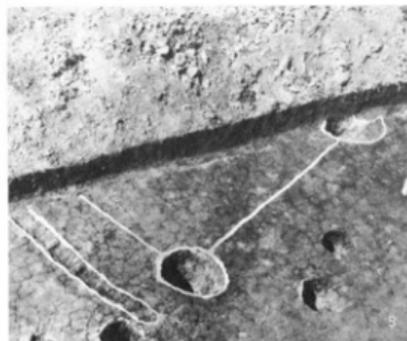
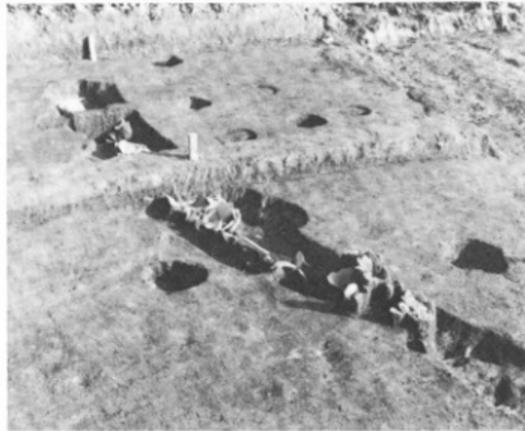
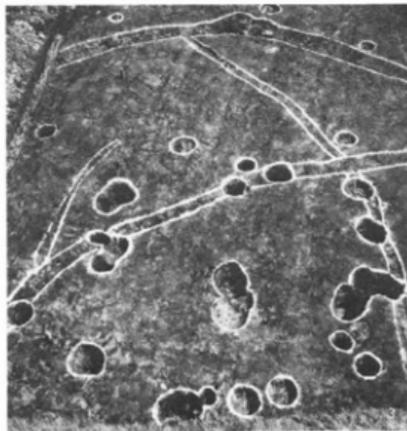
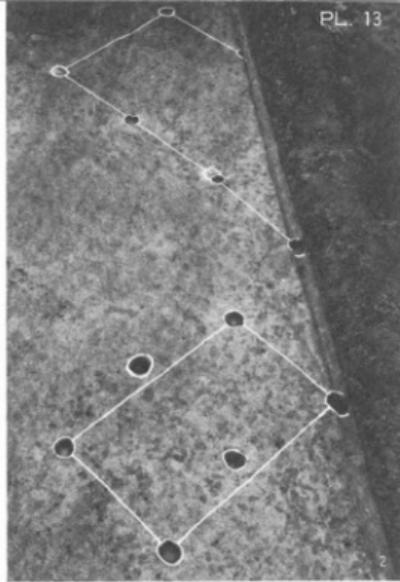
京免遺跡9区SH199土器出土状況



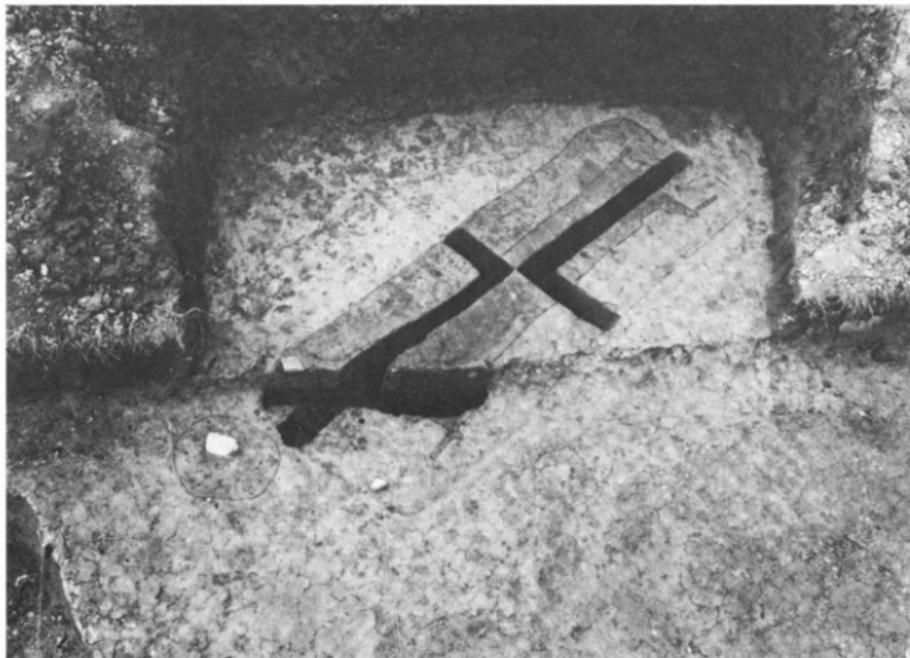
1. 京免遺跡11区(西から) 2. 12区SH230(北西から)



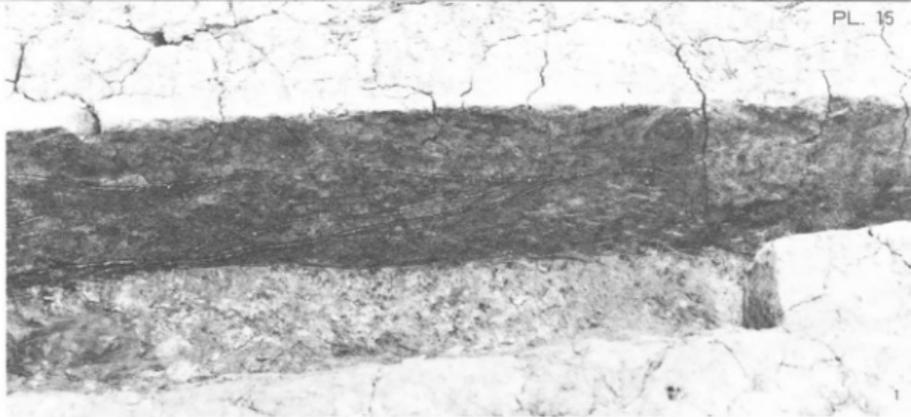
1. 京免遺跡5区SK59(西から) 2. 京免遺跡6区SX159(南から) 3. 京免遺跡6区SX149(西から)



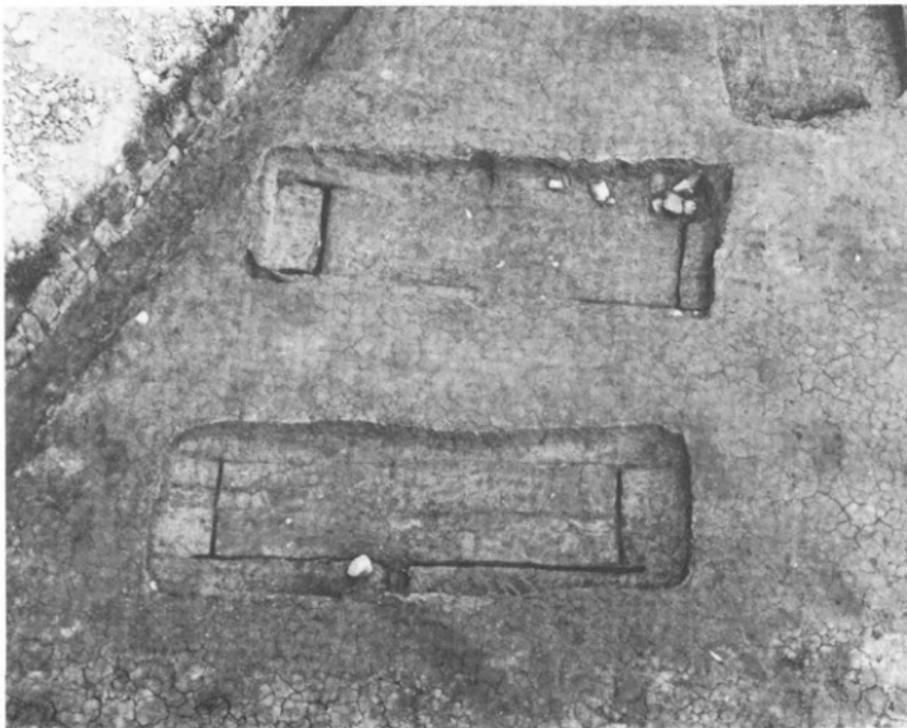
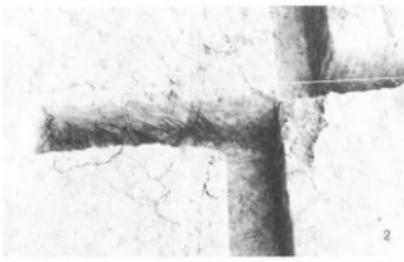
1. 京免遺跡3区SH134と外周溝群(南から) 2. 10区SB88, SB300(東から) 3. 7区SH72(西から)
4. 9区SD187(西から) 5. 11区SH200(南から) 6. 9区前期ピット



1. 京免遺跡12区木棺墓群(南から) 2. 12区SG93(東から)



1. 京免遺跡12区SG91縦断面(南から) 2. SG91縦断面(北から) 3. SG91横断面(西から)



1. 京免遺跡12区SG92縦断面、小口板及び底板痕跡 2. 12区SG94横断面、側板及び底板痕跡
 3. 12区SG93(東南から) 4. 12区SG95、96(南から)



京免古墳